江戸へ百七十里

山手樹一郎長編時代小説全集＝57

春陽堂

作品案内

――文芸評論家　石井富士弥

どんな悪人でも、赤ん坊が笑えば一瞬弱くなる。泣いたりすればたじたじとなる。無垢だから世故にまみれた大人の心を一直線にうつのだ。――世の荒波にさらされず、そのまま育ったお城のお姫さまがちょうどそれだ。彼女の行くところ天衣無縫、ためらいがない。好きな男ができれば、重役どもが後生大事に奉っている家柄だってけとばすほど一途！……で、山手文学を支えるヒロイン・スターの大物として、じゃじゃ馬姫君がいつも読者にリクエストされるゆえんだ。

小森家十万石の血をひきながら、自ら悟って一介の浪人暮らしを選ぶ長谷部平馬は、異母兄弟亀之助のため替え玉となり、お家騒動にまきこまれるが、本編の読みどころはなんといっても、彼を慕う福姫の、まさに赤ん坊のようなのびのびとした恋情の行状記にあろう。題名のとおり、百七十里の作州津山（岡山県津山市）の国元までの替え玉道中のスリルは、マクリーンの冒険小説の味を知るヤングの諸君にも、日本の国土の上で、それと似た面白さを発見するかもしれない。

山手樹一郎長編時代小説全集＝57

江戸へ百七十里

春陽堂

江戸へ百七十里

山手樹一郎長編時代小説全集＝57

春陽堂

春陽堂●490円
0193－200457－3066

江戸へ百七十里

山手樹一郎長編時代小説全集

57

江戸へ百七十里

山手樹一郎長編時代小説全集

57

春陽堂

春陽堂

江戸へ百七十里

山手樹一郎長編時代小説全集

57

春陽堂

●編集／解説

尾崎秀樹

●巻末付録執筆者

井口朝生
一条明
伊藤文八郎
風巻絃一
木屋進
郡順史
多勢尚一郎
竹村篤
*中村豊秀
永岡慶之助
松永義弘
水野泰治

*本巻執筆者

江戸へ百七十里

藤四郎吉光

江戸家老中橋茂右衛門はこれから御用部屋へ出仕しようと身支度をしているところへ、御来客でございますと若党の米次郎が取り次いできた。

「家中の者か、客は」

茂右衛門は手あぶりの前へ座って、一服つけながら聞いた。もう五十を半ば越した老人の部だが、がんじょうな体つきで、いかめしい顔のいろつやも脂ぎって、頭も気力もまだ働き盛りといった精力家である。

「いいえ、御家中の方ではございません。まだお若い方で、浪人長谷部平馬とお名乗りになり、ぜひ御家老さまにお目にかかりたいと申しています」

座敷の片すみで茂右衛門のぬぎすてた衣類をたたみつけていたお牧が、ふっと手を休めて米次郎のほうを見ていた。

「若い浪人者な、――旅の者か」

国もとの刺客、ちょっとそんなことを考えて、茂右衛門は聞いた。

「いいえ、江戸の方だそうで、身なりもきちんとしていますし、怪しい者ではないようです」

「はじめてたずねてきた者だな」

「はい、自分でもそう申しています」

「会ってみよう。座敷へ通しておきなさい」

「かしこまりました」

米次郎はおじぎをして去っていった。

「だんなさま、よろしいんですか」

お牧が火ばちの前へきて心配そうにいう。五年前に妻を失ってから、つい手をつけてしまった女中で、年も親子ほどに違い、まだ三十を出たばかりだが、口数のすくないしっかり者で、いまでは中橋家にはなくてはならない主婦の座

にすわっている。茂右衛門がいちばんうれしいのは、お牧は前からこの老人のものになることをひそかに待ち望んでいたということである。それだけに、茂右衛門のこのごろの立場をいちばん気にしているのもお牧だった。

「いや、米次郎がな、怪しい者ではないと折り紙をつけるくらいだから、まあ大丈夫だろう」

「それはそうですけれど、だんなさまは敵の多いお体なんですから」

「なあに、わしはまだ力ずくでも若い者などに負けてはいないよ。そう心配しなくてもよい」

茂右衛門はわらいながら立ちあがった。

――おかしなものだ。男と女には年というものはないらしい。

お牧が情熱をたぎらせて燃え狂ってくると、自分もまた年を忘れて若々しい男心になりきってくる。そこに少しも不自然さは感じない。

それから見れば、おない年の主君高久が十年前に城下町の薬屋の若女房を強奪して、いまだに溺愛している気持ちがわからないことはない。

ただ困るのは、正室との間にちゃんとした嫡子があるのに、その若女房お加世の方に産ませた子供を跡目にしたいという欲の出たことである。

わしも、お牧に子ができたら、そんな気になるだろうか。茂右衛門は時々反省してみながら、絶対にそんなことはないといいきれないものをたしかに感じることがある。しかし、それだけは、たとえお牧に子ができても、そうしてはならないことなのだ。

家名というものを、自分のものだと考えることが、そもそもの間違いなのである。武家の家名というものは、その家に嫡子が生まれれば、それが不具や白痴でないかぎり、もうその嫡子のものになると、きめられているものなのだ。大体、一藩というものはその藩主だけのものではなく、藩主と家来が協力してまもりながら、

代々これを子孫にうけついでいくものなのである。もしその当主に不都合があった場合は、家来たちはその当主を隠居させて家名をまもるだけの権利を持っているはずなのだ。

——こんなことをうっかり口にすると、命がいくらあっても足りなくなりそうだな。

茂右衛門は内心苦わらいをしながら、客の待っている書院へ入っていった。

梅が散って、やがて花を待つ季節で、今日も野うぐいすが庭へ遊びにきて鳴いている。

「お待たせいたしました。わしがおたずねにあずかった中橋茂右衛門です」

座についてあいさつをした茂右衛門は、あっとひそかに目をみはった。

客はなるほど二十四、五歳とも見える若さで、縫いかえしものらしいが紬の紋服を折り目正しく着て、小倉の袴をつけている。見るからにのびのびと育ったようなたくましい体つきで、造作の大まかな白皙の顔はなんの邪念もないように明るい。しかも、この顔はたしかにどこかで見たことがあるのだ。

「突然おじゃまをします。長谷部平馬という若輩者です。お見知りおきくだされたい」

客はいかにも親しげな微笑をうかべる。

「どんな用件でまいられたな」

「実は、小森家で買いあげてもらいたい品物を持参したのです。これです」

平馬はわきにおいてある一尺あまりの細長いふろしき包みをとって、茂右衛門の前へおいた。

「小森家で買いあげてもらいたいといわれるのか」

「そうです。しかし、都合では御家老でもかまわんのです」

「短刀のようだな」

「はあ、短刀です」

茂右衛門はふろしき包みを手にしながらいう。

「とにかく、拝見しよう」

ふろしき包みをとくと、中から古びた錦の袋が出てきた。ひもの朱房もやや色あせて見える。何気なくひもをといて、中から白鞘の短刀を取り出し、静かに抜いてみた。

あっと思わず息をのむような名作で、地肌は小本目、刃文は直刃、鉄色さえざえとして一点の曇りもない。

「この短刀、見おぼえがある。藤四郎吉光だな。違うかな」

「わしもそう聞いています」

「これを何ほどで買ってくれというのだな」

「金子五十両いただけば結構です」

平馬の目は相かわらずおだやかな微笑を含んでいる。

——そうか、この顔は主君高久に似ている。

茂右衛門は愕然とした。そして、この顔はまた正室の産んだ若殿亀之助にそっくりなのだ。ただ、若殿のほうは神経質でいくぶん顔の肉がうすい上に、色も浅黒い。

正室お夏の方は古河の土井家から輿入れしてきた夫人で、二十の時嫡子亀之助を産んだが、神経質で嫉妬深く、色も決して白いほうではなかった。若殿はその血をついでいるようだ。

当時奥方づきの腰元に雪乃という娘がいて、こっちは色の白いぽったりとした十八娘だったが、奥方より半年ほどおそく主君の種を身ごもった。それが奥方に知れると、どんなむごい仕置きをされるかわからないので、茂右衛門がひきうけてそっと親もとへかえしてやった。

この藤四郎吉光の短刀は小森家の家宝だったが、たぶんその時、後の証拠として雪乃が手ずからもらってかえったものなのだろう。

すると、この平馬という若者は、主君佐渡守高久の子ということになる。

ふしぎなことに、主君高久は非常に性格が強く、精力絶倫で、その後も何人か腰元に子を産ませているが、男と女を問わずみんなその顔が一目で主君の子とわかるほど、はっきりとした

特徴を持って生まれる。あごが角張って口の大きいのがそれで、しかも高久の子を産む女は、その子も母体もきまって早死にをする因果を持っていた。正室お夏の方も三十五で世を去っているから、決して長生きしたほうとはいえない。

「殿は女馬の御しかたが少し激しすぎるのではないでしょうかな」

ある時、茂右衛門が冗談のようにいうと、

「いや、わしの御した馬はみんな死ぬほどの女(おんな)冥利(みょうり)をよろこんでいるのだから、これほどの功徳はなかろう」

と、むしろ得意そうにわらっていた。

その点からいえば、薬屋から強奪したお加世の方は、千代五郎という子を産んで、もう十年から怪物高久に溺愛(できあい)され、あやしいまでの美貌(びぼう)を持ちつづけているのだから、これもただの女とはいえないものを持って生まれているのだろう。

「お身はこの短刀をどこから手に入れたのだな」

茂右衛門は吉光の短刀を元の袋にしまいながら、わざと冷淡に聞いてみた。

「それは母の形見だそうです」

「すると、母御は亡くなられたのか」

「わしを産むとまもなく死んだそうです」

「なるほど——。それで」

「わしは十になるまで、本所小梅村の植木屋徳兵衛夫婦に育てられました。それから、本所亀沢町(かめざわちょう)に町道場をひらいていた長谷部平左衛門という祖父(じじ)にひきとられて、三年前までいっしょに暮らしましたが、祖父が死ぬ時その短刀を母の形見だといってわたしてくれました」

「その折、この短刀について祖父からなにか話を聞いているはずだが」

それを聞いていなければ、わざわざここへ短

刀を売りにくるはずはないのである。

「それは聞きました。まるで夢のような話で、祖父もあてにはならんとわらっていました」

「なるほど」

祖父平左衛門は、そんなことはあてにするなと、平馬に教えたにちがいない。

事実、茂右衛門は、平馬がこの短刀を証拠に自分から主君の種だと名乗り出るようなら、一応わらって追いかえす腹をきめていたが、逆にあまりにも淡々としてそんなことをいわれてみると、その人柄になにか心ひかれるものがある。

「お身の祖父はなかなかの人物であったとみえる」

「はあ」

平馬はただ微笑しているだけだ。

「ところで、この吉光の短刀だが、これは町の刀屋へ持参すれば、捨て値にしても百金二百金の値になる名作だ。それをどうして当家へ五十金で買いあげてもらう気になられたかな」

「わしは五十金あればいいのです。それは小森家の家宝と聞いているので、小森家へもどしたほうがよいと考えたまでです」

「欲のない御仁だな。御家内はお持ちかな」

「いや、まだ無妻です」

「いまのお住まいは——」

「小梅の植徳の家へ帰っています」

「これからどういう風に身を立てていかれるつもりかな」

「別に大した野心はありません。まあのんきにやっていくつもりです」

どうにもつかみどころのない男だ。こっちからなにか切り出すのを待っているのかと疑ってもみたが、そんなずるい考えもないらしい。

「剣術のほうはだいぶ修業されたようだが。たしか、祖父は町道場の先生だったといわれたな」

「はあ、あまりぱっとしない道場でした。わしにも、そう強くなるな、なまじ強くなるとつい欲が出て身をほろぼすといって、あるところま

でしか教えてくれませんでした」
「なるほど、それでお身は祖父の道場をつがなかったわけかな」
「まあそういうことになります」
「とにかく、この短刀は五十金で買いもどすことにいたそう。それでよろしいか」
「結構です」
「では、金子を持ってまいるから、しばらくお待ち願いたい」
茂右衛門はそういって座を立った。
――わからん男だな。
平馬は自分の素姓をちゃんと知っていて、どうしてそれを主張しようとしないのだろう。無論、いまそれを訴えられても、藩の事情からいえばすぐにどうしてやるということはできない。しかし、一度主家の血筋とわかったからには、もうそのままにほうっておくというわけにはいかないのだ。
早い話が、もし育ちが悪くて家門の迷惑になるような者なら、生かしておけない場合も出てくる。
――はてな。ひょっとすると、平馬はそれを恐れているのかな。
それなら、なぜ、家宝の短刀などを持って、のこのこと自分の前へ出てきたのだろう。どうしても五十両の金がほしいのなら、あれをしかるべき刀屋へ持っていけば、黙っていてもそれ以上の金が手に入るはずだ。あの名刀の価値を知らないでいる平馬ではなさそうである。
――すると、まずこっちの見識をためす腹で、わざとあんなとぼけ方をしているのだろうか。
怪物の血をひいている小せがれだからな、大きにそんな芝居っ気がないとはかぎらない。いずれにしても油断はできないと茂右衛門は思った。
居間へもどって、手文庫の中から二十五両包みを二つ取り出していると、
「だんなさま、お客さまはどなたでしたの」

と、次の間からお牧が出てきて聞いた。
「まだよくわからぬが、怪しい者ではなさそうだな」
茂右衛門は苦わらいをしてから、
「お牧、米次郎をここへ呼んでくれ」
と、真顔になっていいつける。
「はい」
お牧が出ていくと、すぐに米次郎がきて廊下へ手をついた。
「お呼びでございますか」
「うむ、客間の長谷部平馬という男な、まもなく帰るだろうから、お前、後をつけてみてくれ」
「はい。住まいを突きとめればよろしいのですか」
「そうだ。その近所で日常のことも聞いてきてくれ」
「かしこまりました」
茂右衛門が書院へ引きかえしてみると、平馬はのんびりとうぐいすの声を聞いているようだった。
「お待たせいたしました。金子五十両、これでよろしいか」
「かたじけない」
平馬は二十五両包みを二つ手にして、短刀をつつんできた木綿のふろしきにくるみ、無造作にふところへ入れる。
「落とさないように気をつけることです」
「ありがとう。では、これで失礼いたす」
平馬はおじぎをして立ちあがった。
「御用の折は、またまいられるがよい」
「いや、二度と迷惑はかけないつもりです」
あかるい微笑を見せて、平馬は玄関のほうへ出ていく。茂右衛門はわざと見送りには立たなかった。

三　佞臣

一ッ橋外にある小森家の上屋敷を出た長谷部平馬は、神保町のほうへ歩きながら、尾行のあ

るのにすぐ気がついて、
――御家老さまが小細工をやりおる。
と、内心苦笑した。
しかし、こっちははじめから小森家と縁を切る気で形見の短刀を金に換えてしまったのだから、尾行など少しも気にすることはないのだ。
それとも、茂右衛門はそんな血筋などを生かしておいては後のためによくないから、今のうちにかたづけてしまおうという腹でもあるのだろうか。
――まさか、そんな腹の浅いおやじでもないだろう。
あまりものごとにこだわらない性分の平馬は、神保町から小川町へ出るころには、尾行のあることさえもう半分忘れかけていた。
「平馬、お前の母親はな、仏性とでもいうか、お人よしで、のんびりとしていて、損ばかりしているような女だった。お前はどうも母親に似ているらしいな」
祖父平左衛門が生前そういってわらったことがある。しかし、だから気をつけなくてはいけないというような訓戒めいたことは、一度も口にしたことはなかった。
いってみれば、そういう祖父からして無欲で、世わたりがへただったというより、少しも名利にこだわらないほうだから、損ばかりして一生を終わったような人間なのである。
だから、亀沢町の道場も門人は町人のほうが多く、世間にありふれた町道場で、あまりぱっとしない存在だったが、腕は天真一刀流の寺田五郎右衛門宗有の高弟で、晩年は亀沢町の隠居と呼ばれ、江戸の剣客仲間で寄り合いなどがあると、必ず上席へ迎えられていたようだから、心ある者からは相当尊敬されていたのだろう。
「平馬、お前な、父親のところへかえりたければかえるがいい。しかし、父のところへかえると、余計な苦労をしなければならぬ。お前の一生は自分のものなのだから、よく考えて、自分

の好きな道を歩くがよい」
それが祖父の遺言で、平馬はその時はじめて実父は小森家の当主であることを知らされた。おそらく、祖父は平馬を手放したくなかったのと、市井に育った者が急に名門の枷をかけられると余計な苦労をしなければならないと考えて、それまで身分のことは平馬に一言もいわずにおいたのだろう。
その祖父の三回忌が昨日すんだので、平馬は今日いよいよ小森家と縁を切ることにきめ、形見の短刀を金にかえてしまったのである。そして、この五十両は母がわりに自分を十の時まで育ててくれた乳母のおたねに贈ることにきめている。
――祖父もこれで安心するだろう。
平馬は、しみいるような春の日ざしの中を、のんびりとした気持ちで八辻ガ原へ出てきた。
「だんな、いいお天気ですね」
ふっとうしろから声をかけて、肩をならべてきた男がある。盲縞の対の着物をきちんときた、どこかの番頭とも見える三十がらみの年配だが、体中に冷たい気魄がいっぱいにあふれているような、なんとなく油断のできないやつだ。
「お前はだれだったかなあ」
「いまにわかりやすよ。だんなはひもがついているのを知っていなさるかね」
「ああ、ひもか――まだついているかね」
「なんだ、知っているのか」
その男は苦わらいをしながら、
「いい度胸ですね、だんなは。ひもなんかちっとも怖くないって顔だ」
と、冷やかすようにいう。
「あいにく、わしはひもが怖いようなことはなんにもしていないんでね」
「そんなことはないでしょう。行きには持っていなかった大金を、ちゃんとふところに入れていなさるようだ」
「はてな――。すると、お前もひもの仲間か」

「仲間じゃありやせん。だんなは行きに細長いふろしき包みを持って小森の上屋敷へ入っていった。帰りには大金を持って、いまひもについているのは江戸家老中橋茂右衛門の若党米次郎という男だ。だんなの持っていったのは、形見の短刀とかいうやつで、おれは当主小森佐渡守高久の御落胤だと名乗って出た。すると、中橋が、殿様は目下帰国中だから、いずれ出府したら聞きただしてみよう。これは当座の入用にあてるようにと五十両くれた。どうです、だんな、ぴたりと当たったでしょう」

まるで見ていたようなことをいうやつである。平馬はあっけにとられながら、

「少し違うようだが、形見の短刀を五十両で売ってきたのは本当だ。一体、お前はだれなんだね」

と、正直にいって聞いてみる。

「へえ、少し違うとは、どこが違うんだね」

「わしは長谷部平馬、別にだれの御落胤でもない。ただ、小森家の家宝の短刀が手に入ったから、五十両で売ってきたんだ」

「じゃ、どうしてそんな家宝の短刀がだんなの手に入ったんだね」

「わしの祖父は本所亀沢町で天真一刀流の町道場をひらいていた長谷部平左衛門宗次という剣客だ。一昨年すでに死去したが、この祖父が子細あって門弟の一人から買いとってあったものだ」

「なんだ、だんなは亀沢町の御隠居の孫か」

その男は意外そうに、じろりと横目で平馬の顔を見なおしている。

「お前、わしの祖父を知っているようだな」

「あの御隠居なら、よく知ってますよ。おそろしく強い人で、お玉ガ池の千葉も若い時は御隠居にけいこをつけてもらったんだってね」

「そんなこともあったかも知れないな」

「そうか、だんなは御隠居の孫だったのか」

道はいつか筋違橋をわたって黒門町通りへ出

ている。

「平馬さんとかいったね、だんなは」

「うむ、平馬だ」

「御隠居の孫だから、強いんだろうね、やっぱり」

「いや、あんまり強いほうじゃない。祖父はわしがかわいくて、ついけいこが甘くなるんだな。しまいには、剣術などそう強くならんでもいいといって、教えてくれなかった」

「おかしいなあ、平馬さんだけはまったく相がちがう。きっと、御隠居の血のほうが多いんだな。あんたの相にはちゃんと徳がそなわっている」

「そうか、どうもありがとう」

「若先生は茂右衛門家老がいまちょいと苦しい立場だってのを知っているかね」

「知らないなあ」

「じゃ、仕置家老の手塚勘解由のことは」

「そんな家老もいるのかね」

「なあんだ、それじゃ若だんなはまるっきりなんにも知らねえんだなあ」

その男はさぐるように鋭い横目をつかいながら、ちらっと人の悪い薄わらいをうかべて、

「まあいいや、むだにゃならねえから聞いておきなせえ。いまの手塚って野郎と、国もとの仕置家老をやっている大坪兵太夫、いま当主について国もとへ行っている側用人の鎌田治部、これを小森家の三佞臣というんでさ」

と、勝手にしゃべり出す。

「佞臣というと悪い家来だな」

「どなたが聞いても、そういうことになりやしょうね」

「どんな悪いことをしているんだね」

「気になりやすか、若だんな」

「わしは悪い人間とはなるべくつきあわないことにしている」

平馬はのんびりと微笑している。

当主と若殿

「けっ、つきあいにくいねえ、お前さんは」
その男はいまいましそうに舌打ちをしたが、ふっとなにか思いかえしたように、
「いいかね、小森の当主には御愛妾に産ませた千代五郎っていう十になるせがれがあるんだ。当主も三佞臣もこの小せがれに津山十万石をつがせたい。ところが、江戸には本妻の産んだ亀之助って跡取りがいる。いま浜町のほうの中屋敷にいるんだが、これがどうにもじゃまになるんだ。この亀之助てのが本妻に似ていて、神経質で、わがままで、おまけに疑い深いときているから、当主組は若隠居をさせようと考えているが、茂右衛門さん一人が承知しねえんだな」
「その亀之助さんてのはいくつになるんだね」
「今年二十五かな。大名なんてのは、親子の情がふつうとだいぶ違うから、憎いとなると平気で敵味方になれるんだな。親のほうじゃせがれを若隠居させる気だから、二十五にもなってもまだ嫁をもらってやらない。それどころか、三佞臣にすれば、いざとなったら一服盛ってしまいたい腹さえあるんだ。それをまあ茂右衛門さんが一人で反対して、亀之助には自分のせがれ茂太郎をつけてずっとまもりぬいているんだが、どうもだんだん若殿組の旗色が悪くなるんだ。そこで、茂右衛門さんは一世一代の知恵をしぼり出したってわけだ」
「ふうむ、どんな知恵をしぼり出したかな」
「死んだ本妻、つまり亀之助のおふくろってのは、古河の土井家からきている。土井さまは老中をつとめているんで、そこへ泣きこんで、大御所さまの娘を亀之助の嫁にもらおうと考えた。これがきまると、いくら当主や三佞臣が悔しがっても、もう亀之助をどうすることもできない」
「うまくきまったのかね」
「そこなんだ、話というのは。いいかね、大御所さまには一妻二十一妾といって、女に産ませ

た子が五十何人かいる。これが年ごろになるとみんな、男の子は養子に、女の子は嫁に、それぞれ大名の家へ押しつけなくちゃならない。公儀でも困りぬいているところだから、先方は二つ返事で、それなら福姫さまというのを輿入れさせようときまった。そこで、茂右衛門さんが、公儀からこういう話がきたがどうしましょうと、一応、国もとへ問いあわせた。国もとではそんなまねをされちゃたまらないから、当主はいずれこの四月に出府する、それまでこの話は返事を待ってもらうようにしろといってきた。——どうだね、若だんな、おもしろいだろう」
「つまり、お家騒動というやつだな」
「おっしゃるとおりさ。これから、国もとと江戸、当主組と若殿組、三佞臣と茂右衛門父子、この二組みが火花を散らして殺しっこをやるんだ。そんなところへ若だんながいくら形見の短刀を持っていったって、茂右衛門さんは困るばかりだ。しようがないから、五十両の涙金で一時追いかえした。まあ、ざっとこんないきさつになるんだろうね」
いくら隠したってちゃんとわかっているよといいたげで、その男はにやにやわらってみせる。
「お前はだいぶ小森家の事情にくわしいようだな。もとは小森家の家来だったのか」
「若だんな、そいつが聞きたかったら、お前さんのそのふところにある五十両、おれにわたしなせえ。そうしたら、おれもちゃんと名をなのって、お前さんの軍師になってやってもいい」
急に人をくった面がまえになって、そんなずぶといことをいい出す。
「妙なことをいうなあ。わしの軍師になって、なにをしてくれようというんだね」
「小森家十万石をきっとお前さんのものにしてみせる。今のまんまだと、お前さんは五十両の涙金でお払い箱にされちまうかもしれやせんぜ」
「ありがとう、まあ考えておこう」
「本当にしないね、若だんなは」

「いや、お前はすばらしい軍師かもしれない。ただ惜しむらくは、ちょっとひとりよがりのところがあるようだ。そのひとりよがり、つまりうぬぼれだな。それがだいぶ人間を小さくしているようだ」

「なあるほど、たしかにお前さんはおれより背も高いし、体も大きいや」

「その上、人間も少し大きいようだ。お前はたった十万石を相手にしているようだが、わしはいつも天を相手にしている」

「足もとに気をつけなせえ。どぶへおっこちてからじゃ間にあわねえ」

「軍師はそう子供のようにすぐ怒るもんじゃない。わしは、さっきもいうとおり、長谷部平馬という浪人者で、小森家とは縁のない男だが、お前はどうもひどく小森家を恨んでいるようだな。なにかわけがあるのかね」

その男は一瞬きらっと凶悪な目を光らせたが、たちまち人をこばかにしたような顔にかえって、

「若僧のくせに、お前さんは案外頭がいいようだ。小森家に引っかかりはないといい張るんなら、しようがねえ、まあ今日のところは見のがしておこう。縁があったら、またどこかであおうぜ」

ちょうど上野広小路へかかろうとするあたりで、その男はにやりとわらってみせてから、御徒町のほうへさっさと曲がっていく。中肉中背という体つきで、見たところそのうしろ姿のどこにもこれという特徴はないが、足だけはひどく速いようだ。

――おかしな男だなあ。

あの男はどうしてわしの後をつけていたんだろうと、平馬は妙な気持ちである。殺意は別に感じなかったが、今日のところは見のがしておこうといっていた捨てぜりふから考えると、そんな殺すという気が全然なかったともいえないようだ。とにかく、小森家になにか深い恨みを

持っていることだけはたしかだ。

それにしても、あの男のいっていたことが事実とすれば、小森家はいま父と子の二派にわかれて、火の出るような醜い争いをつづけていることになる。これもあまり気持ちのいい話ではない。

――祖父はなるべく小森家へかえるなといっていた。

まさかそんな醜い争いがあるからと知っていたわけでもないだろうが、大名の家にはとかく跡取り問題や勢力争いはつきものなのだ。そんな中へ飛びこんでいってつまらぬ苦労をするより、むしろ身軽な浪人でいるほうが気が楽だ。そういうつもりの、小森家へかえるなだったのだろう。祖父のは孫への深い愛情から出ている心づかいなのだ。

――祖父、わしは大丈夫だよ。

平馬はしみじみと祖父の慈悲を血の中に感じながら、ふっと思い出した。

「この五十両、もらってきて悪かったかな」

そんな事情があるとすれば、茂右衛門も金がいるだろうと、人のいい平馬はそんなことが気になってくる。

「兄さん、なにをひとりごといってるんです」

ふいにうしろから声をかけて、甘い肌の香をただよわせながら、すっと若い女が肩をならべてきた。

その顔を一目見て、あっと平馬は思わず息をのむ。

お粂

その女は、年ごろ二十か二十一、八重桜をおもわせるような派手で明るい面立ちをして、無論、身なりから見ても素人女とは思えないが、そのぱっちりと張りのある目の色に、案外尋常でない芯の強さがある。そういったあざやかな年増ぶりだけに、平馬ははっきりおぼえているが、この女とは昨日祖父の墓まいりした今戸の

慶養寺の墓地で、たしかに行きあっているのだ。

しかも、この女と会釈をしてすれちがい、祖父の墓の前へ行ってみると、いまあげたばかりらしい香華の煙がただよっていた。

「だれかおまいりしたんでしょうねえ、若だんな」

いっしょに行った乳母のおたねがふしぎがっていたが、平馬はひょっとしていまの女ではないかと考えていた。

が、それならどうしてというような思いあたる節はなにもないので、それっきり忘れていたのである。

「おまえとは、たしか昨日会っているな」

なんということなく肩を並べて、山下のほうへ歩きながら、平馬はさっそく切り出してみた。

「物おぼえがいいんですね、若先生」

「冷やかしちゃいけない。昨日の今日だからな、おまえのような美人を忘れるはずはない」

「あら、美人だなんて、兄さんこそ冷やかしっこなし」

女はくすくすとわらっている。

「祖父(じじ)の墓へ香華を手向けてくれて、どうもありがとう」

「恥ずかしいわ、礼なんていわれちゃ。いつも兄さんのほうが先なんで、昨日は朝のうちに出かけてみたんです」

やっぱりこの女だったのだ。

「おまえは祖父を知っているのかね」

「あんなこと、――知らない人のお墓へおまいりする人なんてあるかしら」

「そうか、一本まいったかな」

平馬は苦わらいをしながら、

「わしはまだおまえの名前を聞いていない。わしは長谷部平馬、わしのことは知っていそうだね」

と、軽く持ちかけてみる。

「あたしはお粂(くめ)――平馬さんのことは半分ぐらい知っています」

「どうして、昨日出会った時、声をかけてくれなかったんだね」

「こわかったのよ。いいえ、恥ずかしかったのかしら」

「じゃ、今日はもうこわくも恥ずかしくもないわけか」

「そうじゃないけど、あたし心配だったから思いきって声をかけたんです」

「心配――」

妙なことをいう女である。

「兄さんはさっき、だれかと話しながら歩いていましたね。あれ知ってる人なんですか」

「いや、あれは今日会ったばかりの男で、まだ名前も聞かずに別れた」

「たぶんそんなことだろうと思ったわ。あいつ、兄さんのふところのお金をねらったんでしょう」

「お粂、正直にいってくれ。おまえは度々祖父の墓まいりをしてくれるようだが、お前とわしはなにか血のつながりがあるのか」

平馬は思いきって聞いてみた。

「なんですって――」

お粂は一瞬びっくりしたように目をみはったが、

「ああ、そうか――違うわ、平馬さん、あたし御隠居さんのかくし子なんかじゃありません」

と、おかしそうにわらい出す。

「そうか、違うか。それは少しがっかりだな」

「あら、いまなんといった、平馬さん」

「がっかりだといった。わしは両親の顔を知らぬ、祖父一人が身寄りだった。その祖父が死んで、いまはこの世の中にだれも身寄りがない。たった一人というのは、やっぱり寂しいもんだな」

お粂は返事をしなかった。

道は上野山下の雑踏をぬけて車坂から新寺町のほうへ曲がっていく。

「悔しいなあ、あたし」

お粂がぽつんといった。

「どうしてだね」
「あたしだって、身寄りなんか一人もありません。だから、御隠居さんがおじいちゃんのように好きでした、少しこわかったけれど」
　涙ぐんでいるようなお条の声音だった。
「祖父に何度も会っているのかね」
「五、六度ぐらいかしら」
「その話が聞きたいな」
「恥ずかしいわ。兄さんに愛想なんかつかされちゃいやだもの」
「亀沢町の道場へは一度も遊びにこなかったね」
「ええ」
「祖父がくるなといったのか」
「いいえ、くるなとはいいませんでしたけれど、遊びにこいとはいってくれませんでした。道場にはいつも兄さんがいたからでしょ」
「それはどういうわけなんだ」
「わからない、兄さん」
「うむ」
「いやだなあ。いってみましょうか」
「うむ」
「おじいちゃんは、あたしが兄さんに夢中になると困ると思ったんです。あたしにはちゃんとわかっていました」
「ふうむ、そうか。祖父はそんなことまで考えていたのかなあ」
　その気持ちは平馬にもわかる気がする。母は父なし子を産んで、ふしあわせに死んだ。その子がまた父なし子を産ませるような因果は見たくないと考えていたのだろう。
「悲しくなっちまったわ、あたし」
　お条はじっと歯をくいしばっているようである。
「わしはねえ、お条、父なし子なんだ。母はわたしを産むとすぐ死んだ。祖父はそれが不憫で、わしにはそんな間違いをさせたくないと考えていたんだろう。意地が悪くておまえを道場へ寄せ

つけなかったわけじゃないんだろうと思うな」
　平馬は祖父のために弁護をしておく。
「あら、平馬さんも父なし子だったの」
「うむ」
「あたしもそうだったのよ。それでわかったわ、あたしが父なし子だといったら、御隠居さんはちょっと悲しそうな顔をして、おまえは父なし子を産むようなことをしてはいけない、好きな男ができたら、いつでもわしに相談するのだといわれたことがあります」
「そうか、おまえも父なし子か」
　平馬はだんだんお条に妙な因果を感じてくる。
「困ったわ、あたし」
「どうしてだね」
「おじいちゃんがそんなつもりであたしを兄さんに会わせたくなかったんなら、いまだってこうして兄さんと会っていちゃいけないんじゃないかしら」
「そんなことはない。父なし子さえ産まないようにすればいいんだ」
「いやだ、そんなことはっきりいっちゃ」
　お条はさすがに真っ赤になって、いきなりひじでこっちを小突いている。
「おい、こらっ、真っ昼間でれつきながら歩いているやつがあるか」
　ふいにうしろから、ばかでかい声を出してどなりつけたやつがある。
　両側が寺つづきの道で、そうきびすを接するほどの人通りがあるという町ではないが、それでもちらほらと歩いていた往来の者たちが、びっくりして立ちどまり、みんなこっちを振りかえっていた。

鬼吉という男

「やあ、我々のことかね」
　平馬が思わずそっちを見ると、あまり身なりのぱっとしない浪人者が二人、一人は背が高く、

一人はずんぐりむっくりした不精ひげの濃い、そのひげだるまのほうがぎょろりとした目をむいて、
「無論、お前たちだ。見ろ、ほかに女とでれついて歩いているやつは一人もおらん」
と、にらみつけてくる。
のっぽの顔の青白いほうのやつは、うしろに立ってにやにやわらって見ている。
「別に我々はでれついて歩いていたわけではありません。これはわしの妹で、これから二人で親どもの墓まいりに行くところですからな、ひどく世話じみた話をしながら歩いているところです」
平馬はおだやかにそんな言い訳をする。
「うそをつけ。貴様たちは少しも似ておらん。兄妹(きょうだい)ではあるまい。いいかげんなことをいうな」
「そんなはずはありません。どこか似ているところがあるはずです」
「どこも似ているところなどない。うそだ」
「それは困りましたなあ」
別に酔っているようでもないがと、平馬は相手の顔を見ながら、出ようを待っている。
「貴様たち、親の墓まいりだといったな」
「はあ、そうです」
「よし、うそか本当か、いっしょについていって話してやる。歩け」
だんだん野次馬が取りまいてくるので、あまり見えすいた横車も押しきれなくなったのだろう、ひげだるまは横柄にあごをしゃくってみせる。
「承知しました。――行こう、お糸」
平馬はわらいながらお糸をうながして歩き出す。
「兄さん、みなさんがおまいりしてくれれば、両親もきっとよろこびますね」
お糸は悪びれもせず、うしろへ聞こえよがしにそんなことをいっていた。
案外簡単に話がついてしまったので、なんだ

つまらないというように、野次馬の人がきはたちまちくずれていった。
小一町も歩いたかなと思うころ、
「おい、おまえたちの寺はどこなんだ」
と、ひげだるまは普通の声で聞く。
「今戸の慶養寺です」
「なんだ、この近所じゃないのか」
「はあ、今戸です」
「そいつはちょいと遠すぎるなあ」
ひげだるまはうんざりしているようだ。
「では、あなた方は駕籠(かご)できてください。失礼ですが、親どもへの供養ですから、駕籠賃はこちらで持ちます」
平馬はくるりとうしろを向いて、歩きながら用意しておいた金の紙包みを、素早く二人のほうへさし出す。
「そうか、それはすまんなあ」
ひげだるまは遠慮なくうけとって、中身をあらため、
「一分銀が二つ、二分だな。たしかにうけとった。じゃ、我々は駕籠で行くからな」
と、わらい顔になっている。
「ぜひ、そうしていただこう」
平馬はかまわず歩き出す。無論、二人はもうついてくる様子もなかった。
「えらいなあ、兄さんは――。やっぱり、御隠居さんの孫だけあるわ」
お糸は改めて感心している。
「そうか――。それより、お糸、おまえさっきちょっと身がまえをとったようだが、なにか武術の心得があるのか」
「武術だなんて、そんな気のきいたものを知ってるもんですか。いざとなったら逃げるつもりだったんです」
「まあいい。いざとなったら逃げる、それがいちばん無事なんだ。あの二人は、すっかり貧乏ずれはしているが、二人とも腕はできるようだ。惜しいもんだな」

「あたし、たった一つうれしいことがある」
「なにがうれしいんだね」
「兄さんはさっき、あの人たちに、我々は兄妹だっていってくれましたね」
「うむ、いった」
「それを聞いたとたんに、あたし、はっとして、おとなしくなってしまった。あたし、あんなやつらに負けるの、本当はきらいなんです」
「そうらしいな。おまえは体中でぷんぷん怒りながら、豹(ひょう)のような目をしていたぞ」
平馬はそれをちゃんと見ていたのだ。
「しょうがないわ。気が強くなければ、女一人で、いまごろだれにどうされているかわかりゃしないんだもの」
お粂はつぶやくようにいってから、
「あたしねえ、兄さん、十七の年の秋、一度大げんかをしたことがあるんです」
と、わらいながらいう。
「だれとだね」
「まぼろしの鬼吉っていう悪党よ。さっき兄さんが広小路で別れたでしょ、あの男なの」
「ふうむ。あれはまぼろしの鬼吉っていうのかね」
平馬は思わず真顔になっている。
「あたしのおっかさんは行者だったんです。だから、あたしもおっかさんが死んだ十五の時まで行者をやっていました。おっかさんが死んでしまうと、寂しくて、悲しくて、やけになっちまったんです。あたしは、あたしとおなじようなかわいそうな娘を、みんな家へ引っぱってきて、その姉御になったんです。十七の年の秋、あたしのかわいがっていた妹分のお春が、あの鬼吉に本所のほうの空き家へ監禁されて、手ごめにされたんです。だから、あたし、ある晩あいつを多田薬師の前へ呼び出して、一人と一人、匕首(あいくち)で果たしあいをやりました」
「一人と一人でか」
「そうよ。あたしは行者の娘で荒行をやってるから、たいていの男には負けないんだけど、あいつだけは強かったわ。あいつは悪魔にとりつかれているんだって自分でもいってるくらいで、とても歯がたたないんです。負ければあたしも空き家へつれこまれて、お春とおなじ目にあわされる。死に物狂いで突っかかるんだけれど、あいつはおおかみのように身をかわして、せせらわらっているんです。悔しかったわ」
「それで、どうした」
「そこへ運よく御隠居さんが通りかかってくれたんです」
「ふーむ、うちの祖父がか――」
平馬は我にもなく息をのんでいた。
「おじいちゃんが、もうよせといって、中へ入ってくれました。あたしはそこへ座ったままもう動けなかった。きれいなお月夜だったわ」
「祖父はどうしたね」
「おじいちゃんが鬼吉に、女を相手におとなげないとしかると、鬼吉がせせらわらって、そうか、それならお前を相手にしてやると、ふいに匕首をかまえて、おおかみのように突っかけたんです。あっ、やられた、あたしの目にはそう見えたんで、思わずぞっと目をつぶったとたん、どぶうんと水の音がしたわ。おじいちゃんがあいつを大川へ投げこんだんです」
お粂はほっとため息をついている。

まわりあわせ

その日は平馬にとってまったく妙な一日であった。
小森家の上屋敷へ行って家老中橋茂右衛門をたずね、形見の短刀を五十両の金に換えて小森家との縁を断ったのは、平馬が自分で考えていた予定の行動だったが、その帰りにまぼろしの鬼吉に話しかけられたのと、お粂に呼びとめられたのとは、こっちからいえば考えてもいないまわりあわせということになる。
しかも、鬼吉にしろ、お粂にしろ、ただ行き

ずりに出会って、別れてしまえばそれっきりで路傍の人になってしまう、そういう単純な縁ではなく、もっと深い因果関係を持っているのだから、平馬は意外だった。

　鬼吉は小森家に対してなにかただごとでない恨みを持っている。お条はその鬼吉と命がけのけんかをした時、祖父平左衛門に助けられ、その後も何度か会って、祖父の墓まいりをしてくれるほど、祖父を徳としている娘のようだ。

　そのお条の話では、鬼吉は悔しがってその後二、三度祖父の不意をねらったが、その度に逆に組み伏せられ、お前さんは化け物だといって、とうとうかぶとをぬいでしまったという。

「あいつはねえ、兄さん、おじいちゃんの話だと、若いときどこかの大名におかみさんを横取りされて、それから悪党になってしまったんですって。ですから、その大名を殺して恨みを晴らすまでは、改心なんかするもんかって悪たれていたそうよ」

　平馬ははてなと思った。その鬼吉は小森家を恨んでいる。すると、女房を強奪した大名というのは、小森家の当主ということになりそうだからである。

「お条は、その後、鬼吉にねらわれたことはないのか」

「それがふしぎとないのよ。もっとも、あたしは匕首（あいくち）じゃとてもあいつにかないそうもないから、こんどきたらあれを使ってやろうと思って、少しけいこしたんです」

「あれって、どんな武器なんだ」

「今は話せないわ。おじいちゃんにしかられたんです。それは身のまもりに使ってもいいが、それがあるからといって、決して自分からけんかなどはするな。それと、もう一つは、お前がそんなものを使うことが人にわかると、その裏をかかれることがあるから、絶対に人に話してはいけないって、口どめされたのよ」

「ふうむ」

「鬼吉はきっと、あたしが度々おじいちゃんに会うんで、おじいちゃんからなにかすごい手を習ったと思って、それでねらうのはやめたのかもしれないわ」

「そうかもしれないな。お条の家にはまだ子分がたくさんいるのか」

「子分だなんて、そんなんじゃありません。みんな居候なのよ。居候なら、いつも五、六人はいるわ」

「その居候を、おもえはどうして養っているんだね」

「あたしは十五の時まで行者だったっていったでしょ。おっかさんが死んでから、行者はやめてしまったけど、あたしの勘はよく当たるんです。おっかさんがよくいってたわ、おまえは成田山の申し子みたいだって。だから、あたしには信者がついていて、結構食べるぐらいはお金が入るんです。今日も下谷同朋町（したやどうぼうちょう）のほうの信者のところへ行ってきた帰りなのよ」

「つまり、人の吉凶を占うのかね」

「病人だってわかるわ。これはなおる病人か、死ぬ病人か、なんのたたりで患っているのか、一目見ればちゃんとわかってしまうんです。子供の時からそんなことばかししてきているんですもの」

　とにかく、不思議な女だった。十五の時から一本立ちで、居候までおいて暮らしてきたというのだから、生活力があるという点では、平馬など足もとへもおよばないということになりそうである。

　その日は浅草駒形河岸（こまがたがし）の小料理屋へさそわれて、兄さんはお酒飲める？　というから、少しぐらいは飲めると答えると、お条は銚子（ちょうし）を運ばせて、

「こんなことをしちゃ、おじいちゃんにしかられるかしら」

　と、何度も気にしながら、とうとう夕方近くまで飲んでしまった。

平馬は自分から酒をのみたいと思ったことはないが、のめばいくらでものめる体質らしく、飲んでも決して形はくずさない行儀のいい酒だった。

お粂は酒は死んだ母親からかたく禁じられているとかで、杯に二つ三つしか飲まなかったが、話がおもしろいのでつい長っちりになってしまったのである。

「祖父(じじ)もここへきたことがあるのか」

と、思い出して聞いてみると、

「二、三度あるわ。おじいちゃんはきまってお銚子二本だったけれど、兄さんはおじいちゃんよりお酒は強いのね」

と、お粂は感心していた。

お粂の家は母親の代からこの近くの三間町だとかで、店の女中たちも行者のお粂はよく知っているらしく、それはそれなりに尊敬されてもいるようだから、町内でも相当な姉御行者でとおっているのは、あながち口先ばかりではないようだ。

「ねえ、兄さん、あたし兄さんの妹としてなら、これから時々会っても、おじいちゃんにしかられやしないでしょ」

別れぎわにお粂がまじめな顔をしていうので、

「うむ、それはかまわない」

と、平馬は気軽に約束をして、その日は別れた。

こうしてお粂のほうはあらまし素姓がわかったが、わからないのは鬼吉のほうである。

鬼吉はその日、平馬が小森家へ行く前から、こっちを平馬とは知らずに後をつけている。一体、なんの目的でそんなまねをしたのか、ただの物好きからではなさそうなので、なんとなく気になる。

しかも、鬼吉とはどうやらあくまでも敵と味方という因果をしょっているようだ。

——いや、つまらんことは考えないことにし

よう。わしはもう小森家とは縁を切った男なんだ。

平馬は自分でそうきめたが、皮肉にも小森家と縁を切ったその日から、かえって小森家の醜い争いのうずの中にまきこまれていたとは、夢にも知らずにいたのである。

小梅村

翌朝——。

小梅村の植徳の離れでいつものように目をさました平馬は、昨日の五十両の金をふところに入れて、母屋へ朝飯を食いに行った。

おやじの徳兵衛とせがれの徳蔵はたいてい朝早く仕事に出かけてしまうので、朝飯は乳母と二人きりの時が多い。

「ばあや、この金は亀沢町(かめざわちょう)の道場を売った金だ。祖父の遺言で、これはおまえにやるから取っておいてくれ」

生母の秘密はおたねにも話してないので、そうつくろって金をわたすほかはないのだ。

亀沢町の道場は、祖父の死後、内弟子から師範代にまでなって二十年あまりもずっと祖父に仕えてきた松岡平助(まつおかへいすけ)にあずけてある。これもこんどは松岡にやってしまうつもりでいる平馬だ。

「若だんなは道場の先生はどうしてもいやなんかね」

おたねはちょっと悲しそうな顔をする。

「うむ、わしはやっぱり剣術の先生は向かないようだ」

「そうかね。それじゃ無理にともいえねえですが、これから若だんなはなにして暮らすつもりなんだね」

「わしはここで乳母といっしょに一生暮らすことにする。これから徳兵衛や徳蔵に植木のことを教わってみようかと思っている」

「植木屋になる気かね」

「なってもいいと思っている。みんなが働いて

いるのに、わしだけ遊んでいては悪いだろう」

「そんな遠慮はいらないけどよう、若だんなを植木屋にしたんじゃ、大先生にすまねえです。もう一度よく考えてみなさるがいい。この金は乳母があずかっておくです。いくら入っているんです」

「五十両だ。あずけるんじゃない。それは祖父の形見分けとして、乳母にやるんだ。徳蔵の祝言の時につかってもいいんだ」

「まああずかっておくです。若だんなだっていつまで独り身でいられるわけではなし、金は大切にするもんだ。さあ、飯にしなされ。おつゆがさめてしまう」

どうしても金をもらうとはいいそうもない乳母である。そういう性分なのだから、ほうっておくほかはない。

「乳母、おととい寺で会った若いきれいな女な、あの女に昨日会ったよ」

平馬は飯を食いながら話し出す。

「そうかね、どこの女だったね」

「浅草の行者の娘でお粂というんだ。なんでも、祖父に一度助けられたことがあるんで、それで墓まいりをするんだといっていた」

「行者さんの娘ねえ。きれいな娘だけど、若だんなのお嫁には向かないかもしれねえな」

「当人もそんなことをいっていた。祖父が道場へ一度も遊びにこいといわなかったのは、わしがいるからで、父なし子でもこしらえては困ると考えていたんだろうってね」

「そんなこと、自分の口からいったのかね」

「うむ、はっきりいっていた」

「お嫁は、若だんな、もっとおとなしくて行儀のいい娘のほうがいい。行者さんの娘じゃ男ずれがしているだろうし、うっかり手なんか出しちゃだめだぞ、若だんな、どんないいがかりをつけられないもんでもないでな」

「手は出さないから大丈夫だ」

本気になって心配しているので、平馬はわら

いながら、

「乳母、今日は徳兵衛じいたちはどこへ仕事に出かけているんだ」

と、軽く話題をかえる。

「二、三日前から、三囲さまのそばの姫屋敷へ行ってるようです」

「ああ、あのじゃじゃ姫屋敷か。このごろでも勝手に摘み草に出たり、桜もちを食いに長命寺へ出かけたりするのかねえ」

「さあ、するかもしれないなあ。うちの徳なんかのところへも、平気で出てきて話しかけるそうだからね」

「ふうむ、どんな話をするんだろう」

「利かないことも利かない気らしいが、さばけた性分なんだろうっていってましたよ。昨日もいきなり徳のところへきて、お前はなんという名前だって聞くんですと。徳は高いところで松の手入れをしていたんで、びっくりして下へおりようとすると、そのままでいい、福はつんぼではないから、そこからでも話は聞こえるよって、わらっているんで、徳はへどもどしちまったといってましたよ」

乳母はちょっと誇らしげな顔をする。

「はてな、そのじゃじゃ姫は、たしか福姫さまとかいわなかったかな」

「そうですよ。大御所さまのお姫さまで、気が強いもんだから、お城でももてあまして、三囲さまのそばの屋敷へ別居させられたんだって、御家来さんがそっと話してくれたんですと。顔はとてもいい器量だって話です」

「いくつぐらいになるんだろう」

「お嫁にもらい手がないんで、もう二十か二十一、ひょっとすると二ぐらいになっているかなって、徳はいっていましたよ」

茂右衛門が小森家へ迎えようとしているのも、たしか福姫だとか鬼吉はいっていた。すると、姫屋敷のじゃじゃ姫がそうなのかもしれない。

「おもしろそうなお姫さまだなあ。わしも明日徳蔵に姫屋敷へつれていってもらおうかなあ」
　平馬はそんな冗談をいいながら、朝飯をすませて、自分の部屋にしている離れへもどってきた。
　昨日はお糸と話しこみすぎて、亀沢町へまわれなかった。今日は道場へ行って話をつけておきたいので、平馬は身支度をするとすぐに母屋のほうへ引きかえして、
「乳母、ちょっと出かける」
　と、台所で跡かたづけをしているおたねに声をかけた。
「行っておいでなさい。ああ、若だんな、まさかさっきの行者さんの娘のとこへ行くんじゃないでしょうね」
「心配するな、亀沢町へ行ってくるんだ」
「そんならいいけれど、乳母はあの娘さんだけはどうも心配でねえ」
「どうしてだ、乳母」
「決して悪い心のひととは思わねえが、堅気の女とは思えない。若だんなは一本気だから、だまされると困ると思ってね」
「乳母、わしはもう二十五だよ、娘っ子にだまされるような年じゃない」
「そういえばそうだけどよう」
　おたねもわらい出しながら、
「そんなら、松岡さんにわしからもよろしくいっていたと伝えておいてな」
「わかった。じゃ行ってくる」
　平馬は庭を突っ切って表へ出ながら、今日はなにを土産に買ってかえろうかなと思った。
　今日もうらうらと晴れたいい天気である。
　――そうだ、松岡にも土産がいるな。
　松岡は酒よりもむしろ甘党のほうだ。長命寺の桜もちがいいだろうと思った。
　この辺は広々とした田んぼつづきで、はるか向こうに向島(むこうじま)土手が見える。まもなく花の季節で、花が咲き出すと土手は花見の客でいっぱい

になる。そして、酔っぱらい、けんか、迷子がつきものだ。
　――花見なんて、なにがおもしろいんだかなあ。
　平馬はそんなことを考えながら、畦道(あぜみち)を通って長命寺の裏手へ近づいていった。わざわざ土手のほうの表口へまわらなくても、横から境内へ入る裏口がある。
　そこから森閑とした境内へ入って、掛け茶屋のほうへ出ようとすると、
「お控えなさい。どこへ行かれる」
　と、ふいに供侍らしい若い男に誰何(すいか)された。
「桜もちを求めにまいる」
「それならしばらく待たっしゃい、ただいま高貴のお方さまが御休息中でござる」
　なるほど、向こうの床几(しょうぎ)に腰元風の紫矢絣(やがすり)の女が四、五人掛けているようだ。高貴の方というのは、おそらく掛け茶屋の中にいるのだろう。
「どなたさまでござるな」
　平馬はおだやかに聞いてみた。
「そんな失礼な口をきいてはならん」
　若侍はすこぶる横柄である。
「こんなところへお寄りになるくらいですから、無論おしのびなのでしょうな」
「お黙りなさい。貴公はどうしてそんな余計なことを聞きたがるんだ。待てといったらおとなしく待っていてはどうか」
「困りましたなあ、拙者はいそいでいるんですがねえ」
「なにっ」
「貴公はだいぶ気が立っているようですな。どうしてそう拙者をしかりつけなければならないのです」
　平馬は微笑しながら聞いてみた。

しっぺ返し

「貴公はどうしてそう強情なんだ。いま高貴なお方が御休息中だから、しばらく待つようにと

わしはいっているんだ。なぜ、黙って待っていられないんだ」
　若侍はまたしても押しつけるようにいう。
「では、どれくらい待てばよろしいのでしょうかなあ」
　平馬はわざと当惑したような顔をしてみせる。
「なんだ、そのふくれっ面は——。貴公は高貴なお方を追いたてようとする気なんだな、許さんぞ」
　若侍の声がだんだん大きくなってくるので、何事がおこったかと思ったのだろう、向こうの床几にかけていた腰元の一人が、ほかの腰元たちになにかささやいておいて、すっとこっちへ立ってきた。
　若侍はそっちへ背を向けているのでまったく気がつかなかったらしく、
「孫作、なにを怒っているのです」
と、うしろから声をかけられると、びっくりしたように振りかえり、
「あっ、これはこれは——」
　と、あわててそこへひざまずきながら、
「実は、この者があまりにもわからんことを申して強情をとおそうとしますので、つい声が高くなりました。まことに申し訳ございません」
　と、恐縮の体である。
　はてなと、平馬は思った。普通の腰元なら若侍がこんなに恐縮するはずはない。すると、おなじような腰元姿ではあるが、これが若侍のいう高貴なお方かも知れない。そう思って見ると、ふっくらとした面立ちのどこかに、常人とはちがう気品があるようだ。
「この者が、どう強情なのです」
　ややきつい感じのきれいな目が、平気で若侍と平馬の顔を見くらべている。
「お女中、わしはここへ桜もちを求めにまいったので、別に強情を張っているわけではありません」

「控えろ、無礼者。このお方さまをなんと心得ているのか」
「孫作、そうしかるにはおよびません。福は今日はしのびです」
　腰元は鷹揚に若侍をたしなめて、
「そなたはどこの家来です」
　と、平馬のほうへ聞いた。
「いや、わしは長谷部平馬という浪人者です。主持ちではありません」
　平馬は微笑しながら気軽に答える。
「桜もちを求めにきたといいましたね」
「はあ、これからたずねる知人のもとへ土産にしたいと思ったものだから」
「では、待たせては気の毒、いっしょにまいるがよい」
「恐れ入ります」
　若侍はにらみつけていたが、平馬はかまわず肩をならべていきながら、
「お姫さまは時々おしのびで屋敷を出かけられるそうですな」
　と、話しかけてみた。
「そなたは、福を存じているのですか」
「お目にかかるのははじめてですが、福姫さまは御闊達なお方でいられると、植木職の徳蔵からよく聞いています」
「徳蔵を知っているのですか」
「わしは植徳の離れへ居候をしているのです。実は、わしもこれから植徳の弟子にしてもらって、植木職になろうかなと考えているのです」
「侍はきらいなのですか」
「いや、きらいというわけではありませんが、主持ちは窮屈でしょうしな。なるべくなら気ままに暮らしたいと考えています」
「福も気ままが好きでお城を出たのですが、女ではやっぱりだめなようです」
「なにがだめなんでしょうな。お城を出たから、こうして気ままにおしのびでもなんでもできるのでしょう。なにかまだ御不満があるんですか」

いつの間にか床几のそばへ帰って、つい立ち話をしていた。
　腰元たち四人はさすがに遠慮して別の床几に移り、こっちを見ているようなぶしつけ者は一人もいない。
「平馬、掛けましょう。そなたに聞いてみたいことがあります」
　植徳の家の者と聞いて、なんとなく親しみを感じたか、福姫は自分から床几に掛けて平馬を誘う。
「失礼してもかまわんでしょうかな」
「今日はしのびですから、かまいません」
「では、しばらくおじゃまします」
　これが福姫なら、小森家と縁組みの話があるはずだ。はたして本当かどうか、平馬にはそれを聞いてみたい好奇心もあった。
「平馬は浪人ですから、なんでも気ままにできるのでしょう」
「はあ、毎日のんきに暮らしています」
「福もそれが望みでお城を出たのですが、こんど老中どもがたってお輿入れをするようにと申してきたのです。お輿入れをしてしまえば、もう気ままにこうして外へ出て歩くこともできなくなります。ですから、そんな心配はしてくれぬようにと申したのですが、女はいつまでもひとりでいてはいけないと、老中どもはたってすすめるのです。平馬はどう思います」
　そんなことをいま会ったばかりの男の前でずばずば口にできるのだから、なるほどこれは変わり種だと、平馬は感心した。
「それは、姫君、先方のだんなさまになる人の人柄によると思いますな。つまり、だんなさまが姫君のどんな気ままでも許してくれる、そういう度量のひろい人ならいいのでしょう」
「そんな度量のひろい男がありますかしら」
「一体、老中がすすめる先方というのは、どこの方なんです」
「小森家十万石の若殿だと申すことです」

　やっぱり、鬼吉のいっていた話はうそではなかったようだ。
「姫君はその若殿に会ったことがあるんですか」
「ありません。福が一度見たいといったものですから、明日遠乗りのついでに、屋敷へ立ちよることになっています」
「下世話にいうお見合いですな」
「いいえ、福は明日その若殿にきらわれるようにしむけて、先方からこの縁組みをことわってくるようにしようと考えています。いけないことでしょうか」
「しかし、会ってみたらその若殿が好きになった、ということもありえますな」
　平馬はわらいながら持ちかけてみる。
「そうでしょうか」
　福姫は正直にちょっと考えているような顔つきだ。
「それに、わしは大名のことはよくわからないが、大名の縁組みというものは、当人同士の好ききらいにはおかまいなく、家としての都合で無理にも縁組みを押しつけてしまう、そういう場合のほうが多いんじゃないでしょうかな」
　ことに、こんどの小森家の場合は、無理にでも福姫をもらってしまわなくては、亀之助の若殿の座があぶなくなるのである。
「福は家名や人の都合で縁組みをするのはいやです。ですから、このまま今の屋敷にひとりでおいてくれるようにと、老中どもにも申しているのです」
「そのお気持ちは、わしも賛成です。自分の一生を人の都合で左右されるなどということは、いちばんばからしいことです。人の一生というものは、自分が持っているすばらしい勇気と、正しい知恵とで自分の運命をきりひらいていく、それ以外に道はないと思いますな」
　平馬は自分がそうしてきたのだから、きっぱりとそれをいうことができる。

「勇気と知恵とですね」
「そうです。いやなものをいやだと、はっきりいうには勇気がいります。そのいやだをどうしたら相手にうまく納得させられるかと考えるのが知恵です」
「よくわかったような気がします」
　福姫は目を輝かせながら、
「平馬は植木屋になるのだといいましたね」
　と、明るく微笑する。
「はあ、なろうかなと考えています」
「では、明日、植木屋になって徳蔵といっしょに屋敷へきてください」
「どうしてです」
「明日はお見合いで、福にはいちばん勇気と知恵が必要な日です。そなたが庭へきていてくれれば、いつでも福一人では足りない勇気と知恵が借りに行けますから、安心していられると思います」
「さあ、知恵や勇気が借り物で間にあいますかな」
「それを借り物でうまく間にあわせるのは、福の知恵の働きです。平馬はただ屋敷へきてくれる勇気さえ出してくれればよいのです」
　いきいきとした目が、いたずらっ子のような微笑さえ含んでいる。
「しっぺ返しですな。姫君はわしなどよりよっぽど知恵者でいらせられるようだ」
　平馬は見事に足をすくわれた形になって、唖然とせずにはいられなかった。

むだ足

　その日、平馬の運勢はあまりついていなかったようである。
　福姫に会っていろいろと話を聞けたまでは思いがけない収穫だったが、その後がいけなかった。まもなく表門から入ってきたいかめしい顔の老人が、姫屋敷の用人塚越助左衛門というがんこおやじだとかで、見知らぬ浪人者が姫君と

おなじ床几に掛けていたのがだいいち気にいらなかったらしく、
「お手前はどなたかな」
　と、いきなり床几の前へ立って、詰問してきた。
「助左、よいのです。この者は福がわざわざ呼びとめて、町の話を聞いていましたので、とがめ立てるにはおよびません」
　福姫がいそいでとりなそうとしてくれたが、
「いや、姫君さまはしばらくおひかえください」
　と、老人は耳にもかけず、
「これ、わしはお手前の姓名を聞いているのだ。名乗らっしゃい」
　と、平馬のほうへたたみかけてくる。
「御老人はどなたですな」
　平馬はおだやかに逆襲した。
「なにっ」
　老人はにらみつけるようにしたが、人の名を聞く時はまず自分のほうから名乗るのが作法だから、
「わしはこれなる松平福姫さま付きの用人塚越助左衛門、しっかりとおぼえておかっしゃい」
　と、たたきつけるようにいう。
「手前は浪人長谷部平馬と申します」
「お手前はこのお方さまを松平福姫さまと承知していて、おなじ床几に掛けているのか」
「はあ、今日はおしのびだからかまわぬと、姫君さまからおゆるしがありましたので」
「黙らっしゃい。たとえおゆるしがあっても、身分ちがい、御同席は遠慮するのが礼儀というものだ。早々下へさがらっしゃい」
「これはどうも失礼いたしました。平におゆるしくだされたい」
　ここで老人に盾をつくのもおとなげないと思ったので、平馬はすなおに床几を立ち、
「姫君さま、失礼しました」
　と、福姫のほうへ会釈して、そのまま立ち去ることにした。

「平馬、桜もちを求めなくてもよいのですか」
福姫が気の毒そうにいう。
「それはまた後刻出なおすことにします」
平馬がわらいながら表門のほうへ歩き出すと、うしろで老人が、
「孫作、これへまいれ。かかしではあるまいし、その方どもはなんのために警固についておるのだ」
とどなりつけているのが聞こえた。
表門の前に立っている警固の侍が二人、顔を見あわせながら首をすくめている。
――怖いおやじがついているんだなあ。
平馬は苦わらいをしながら、向島土手へのぼって、吾妻橋のほうへ逃げ出すことにする。この分では、とても明日、植木屋に化けて姫屋敷へしのびこむなど、思いもよらないと思った。
しかし、しっかり者の福姫がどう小森家との縁組みをきらってみても、結局はあたりの者からなだめすかされて、ついには輿入れしなければならない運命にあるようだから、むしろ自分などが横からなまじいらざる知恵はつけないほうがいいかもしれないのだ。
それにしても、小森家と縁を切ったその日から、小森家に関係のある人たちに次から次へとめぐり会っていく。皮肉なもんだなあと、平馬は我ながらふしぎな気がしてならない。
とにかく、せっかく土産にしようと思った桜もちは、そんなわけで買いそこなってしまった。松岡の好物だからそれを土産にしようと思ったので、ほかの物では意味がない。平馬は手ぶらで亀沢町の道場をたずねてみることにした。
が、松岡はあいにく不在で、
「先生はついいましがたお出かけになりました。今夜はおそくなるかもしれないと申しておりましたが――」
と、取り次ぎに出た内弟子が気の毒そうにいっていた。
松岡も女房運の悪い男で、二度目の家内に去年死なれてからは、もう一生女房は持たないことにしますといっているが、そのかわりどこかへ女を囲っているようである。たぶん、そっちへまわる気の夜はおそくなるのだろうから、明日にでも出なおすほかはない。
平馬はその足で、ふっと浅草三間町のお粂をたずねてみる気になった。この二、三日、あまり意外なことばかりつづくので、今日は行者のお粂に運勢をみてもらおうと考えたからである。
お粂の家はすぐ見つかったが、ここも留守で、取り次ぎに出た居候の若い女は、
「ねえさんは夕方には帰るからといっていました。どなたさまでございましょうか」
と、ふしぎそうに顔を見ていた。侍がたずねてくるなどということはあまりないのだろう。
「平馬が運勢をみてもらいにきたといえばわかる。また出なおしてくるといっておいてくれ」
二軒ともむだ足になって、今日はついていないなあと思い、小梅村へ帰ってきたのはもう夕方だった。
「お帰んなさい、若だんな」
柱が二本立っているだけの門口を入ると、珍しく徳蔵が帰ってきていて、そこの植え込みの中から声をかけながら出てきた。
「今日は早じまいか、徳」
「まあ、そんなとこです。若だんなは今日長命寺で、じゃじゃ姫さまに会ったんだってねえ」
「うむ、だれから聞いたね」
「お姫さまが自分でいっていたです。おれを陰へ呼んでね、明日は平馬を植木屋にしてつれてこいっていうから、仕事は今日でおしまいですって返事をすると、じゃ今日の仕事を少し残しておけっていうんだ。若だんなはなにかお姫さまと約束したんかね」
徳蔵は日焼けのした顔をにやにやさせながら聞く。

初対面

「徳蔵、おまえそんなことをたのまれてくるようでは、よっぽどじゃじゃ姫に見こまれているようだな」

平馬もついからかってみたくなる。

「おれ、これでもよう、小梅村じゃちょいと好いたらしい若い衆のうちだもんな。とんだ吉田御殿にならなきゃいいがと、心配しているです」

そんな冗談口が平気できける徳蔵なのだ。

「しかし、気をつけたほうがいいぞ。あそこには塚越助左衛門という怖いおやじがついているからな」

「あの御用人さまを知っているんかね、若だんな」

「うむ、今日長命寺でしかられてきたばかりだ。姫君とおなじ床几に腰かけているなどとは無礼千万だといってね」

「あれえ、じゃ若だんなはお姫さまとおんなじ床几に腰かけていたんかね」

「お姫さまが掛けろというから、遠慮なく掛けて話しこんでいたんだ」

「なあんだ、じゃ若だんなのほうがよっぽど吉田御殿にされちまいそうだな。明日はいっしょにつれていかねえほうが無事かな」

「まあ、そのほうが無事だろう」

無論、平馬はじゃじゃ姫屋敷へ行ってみようなどという好奇心は少しも持っていなかった。

すると、その夜のやがて宵すぎごろ、中橋茂右衛門のせがれ茂太郎が、若党米次郎を道案内にして、突然、平馬の離れをたずねてきたのである。

「父茂右衛門からあなたのことをうかがい、今夜は折り入ってお願いしたいことがあって、突然おたずねしました」

若党米次郎と中間一人を庭の見張りに立てておいて、茂太郎はあいさつがすむとさっそく切り出してきた。茂右衛門によく似た体つきで、

どっしりと落ち着いた人柄も親ゆずりのようである。

「さあ、わしは浪人者育ちで、あまり能のあるほうじゃないから、大した役には立たないかもしれぬ」

平馬ははじめからはっきりとことわっておく。いずれなにか重大な問題がおこったから、わざわざ茂右衛門の使者に立ってきたのだろうが、平馬はなるべく小森家の事件にまきこまれたくないのだ。

「平馬さまはこのごろの小森家の事情をすでにお聞きおよびでございましょうか」

「真偽のほどはわからぬが、あらましのことは耳にしている」

「この度、若殿亀之助さまが大御所さまの御息女福姫さまと御縁組みのあることについてはいかがでしょう」

「明日、遠乗りのついでに三囲の姫屋敷へ立ち寄って、見合いのようなことがあるとか聞いたが」

「そんなことまで御存じなのですか」

茂太郎はさすがに目をみはっている。

「この植徳の親子は姫屋敷へ出入りの植木職なのだ」

平馬はわらいながら種明かしをした。

「なるほど、それならうわさに出てもふしぎはありませんな」

茂太郎はそうだったのかというようにうなずいてから、

「実は、その儀について、突然、困ったことが出来したのです」

と、当惑のまゆをよせる。

「その困ったことをわしが聞くと、なにか解決の道がつくのかね」

「はい、ここはどうしてもお力を借りなくてはなりません」

「そう独りぎめされては困るな。わしはまだ力を貸す気にはなっていないし、事情を聞いても、

場合によってはことわるかもしれないぞ」
「それは覚悟してきております。とにかく、一通り事情をお聞きとり願います」
「よろしい、聞くだけは聞こう」
「この度、父茂右衛門が御老中土井大炊頭さまにおすがりして、たって福姫さまとの御縁組みをお願いしましたのは、大御所さまのお名を借りて、殿さまを取りまいている三佞臣を成敗し、亀之助さま御家督を確立しようというのが父の腹であり、若殿さまもそれを納得しておりました。その辺の事情はおわかりでございましょうか」
「その話はある男から昨日耳にしたばかりだ」
「ある男と申しますと――」
「それは後で話す。とにかく、そっちの話を聞こう」
「失礼いたしました。――若殿亀之助さまは、明日のお見合いをすませると、御老中土井さまの御内意をいただいて、ひそかに国もとへ急行して、三佞臣を成敗する運びになっておりました。もっとも、一人は江戸の仕置家老をつとめていますので、まず国もとの二人を倒し、江戸の一人はそれからにする計画だったのです」
「福姫さまとの縁組みの返事は、殿さま出府の時まで待つようにと、国もとから申してきていると聞いたが」
「そのとおりです。この縁組みは大御所さまから仰せいだされた形になっておりますので、殿さまといえども御辞退はできません。たってこの縁組みをことわるとすれば、若殿を不具廃疾にするほかはありません。三佞臣は必ず若殿をねらいます。そっちからねらわれる前に、むしろこっちから国もとへ奇襲をかけてやろうということになったのです」
「明日の見合いは、福姫さまのほうからいい出されたように聞いているがなあ」
「福姫さまは普通とはだいぶ違った御気性のようですから、人さままかせの縁組みはしたくな

いおつもりがあるのでしょう。それならば、こっちも直接にお目にかかって、姫君が納得してくれたとなれば、亀之助さまはもう大御所さまの女婿ということになりますから、若殿さまの進退もある程度まで黙認されるのではないかと思い、明日の遠乗りを承知したわけなのです」
どうやら、茂太郎は明日見合いをすれば福姫はきっとこの縁組みを承知するときめてかかっているようだ。
「すると、若殿は、明日の見合いが無事にすんだら、すぐにも内密に江戸を立つことにしているのかね」
「そうなのです。平馬どのは本所亀沢町の松岡平助という剣客を御存じのようですな」
「うむ、あれは祖父平左衛門の高弟だから、亀沢町の道場をあずけてある」
「実は、その松岡に四人の剣客をえらばせて、剣客組が五人、家中から五人、わしを入れて十一人で亀之助さまをまもっていこうと、そこまでちゃんと話がついていたのです」
「ふうむ、松岡がねえ」
これは平馬もちょっと意外だった。
「ところが、今日の夕方になって、亀之助さまが急に奇病を発し、明日の遠乗りさえおぼつかなくなってきたのです」
「奇病――」
「軽いいびきをかいて眠ったたまま、なんとしても目がさめないのです」
茂太郎は暗い顔になって、じっと平馬の目を見つめる。それは、こっちの心を試すというより、どんな叱責でも覚悟しているといいたげな純情いちずな必死の目の色のようだ。

侍の道

「それはたしかに自分の体内から発した病気なのかね」
平馬はまゆをひそめながら聞いてみた。
上屋敷には三佞臣の一人、手塚勘解由が仕置

家老という要職についている。おそらく、相当の一味を持って若殿亀之助をねらっているにちがいないから、無論、明日の遠乗りのことは耳に入っているはずだ。福姫に会わせてはまずいとなれば、必ずなにか手を打つ。眠り薬をのまされたのではないかという疑問を持つのは、あながち自分だけではないだろうと、平馬はとっさに考えたのだ。

「今日の夕方、亀之助さまは茶室ではじめて松岡平助に会われました。無論、わしも同席しましたが、お目見えがすんで、わしは明日の打ちあわせかたがた松岡を裏門まで送っていきました。それからすぐ茶室へ引きかえしたんですが、その時もう若殿は座ったまま突っ伏すような形になって眠っていました。茶をのんだ形跡もなく、人と争ったという跡もありません。行儀よく前へ突っ伏して眠っていられる。わしには病気としか思えないんです」

「医者にみせたのか」

「幸い父茂右衛門が明日の打ちあわせにきましたので、すぐに典医を呼んでみてもらいますと、ひょっとすると卒中かもしれないから、このままお寝かせして、あまり動かさずに様子をみるようにということでした」

「しかし、まだ卒中をおこす年ではないな。酒のほうはどうなんだね」

「そう大酒というほうではありません」

「女のほうは――」

平馬はかまわず突っこんでみる。

「おきらいのほうではないようです」

茂太郎は苦わらいをしていた。

「相当お好きのほうだと、そんな奇病にかからないともいえないな」

「わしも実はそのほうを心配しているんです」

「それはそれとしても、若殿を一人でおいたというのは、やっぱり不注意だな」

「申し訳ありません。父からもその点はひどくしかられました」

「それで、わしにどうしろというんだね」

「父が申しますには、明日の遠乗りはいまさら中止するわけにいかぬ。若殿の急病を発表するのは、敵の手に乗るようなものだ。いちかばちか、明日は身代わりを立ててみることにしよう。幸い若殿によく似ている人がある、長谷部平馬という人だと、一通りあなたのことを話してくれました。そんなことができるだろうかと、わしは半信半疑で米次郎に案内されてここへきたのですが、平馬どのの顔を一目見て、なるほど、これならと、父のいうことがはじめて納得できました。御迷惑でしょうが、明日一日だけ、亀之助さまのお身代わりをお願いしたいのです。まげて御承知くださいますよう、このとおりです」

茂太郎はそこへ両手をついて、拝まんばかりにおじぎをする。

「わしに福姫さまと見合いをしろというのかね」

平馬は啞然(あぜん)として聞きかえす。

「決して御迷惑はかけません。ただ体だけをお借りすれば、あとはわしたちがきっとうまくやってみます。無論、万一の時の責任は、父もわしも腹を切ろうと覚悟しています」

「せっかくだが、茂太郎うじ、それはだめだろう」

「なぜです」

「わしは今日、福姫さまに会って、ほんのしばらくだが話までしている」

「本当ですか、それは」

「うむ。しかも、長命寺の境内でな。用人塚越助左衛門にも、ついている腰元どもにも、はっきり顔を見られている」

そんなばかげたことができるものかと、平馬は我ながらおかしくなってくる。

「そうですかなあ。だめでしょうかなあ」

茂太郎はどうにもあきらめきれない顔つきである。

「だめだとも――。いっぺんで化けの皮をはがれてしまうだろう」
「しかし、平馬さま、それなら本物が行っても、先方は承知しないことになりますな」
「ふうむ、亀之助どのとわしはそんなによく似ているのかね」
「ふしぎなほど、よく似ています。それは、お二人をならべてみれば、どこか違うところがあるでしょうが、別々に見てはまったく区別がつきません」
「そうかなあ」
「ですから、明日は亀之助さまのつもりで行っていただけば、それはそれでとおってしまうと思います。まさか小森家の家来が身代わりをつれて乗りこむなどということは、ありえないことですからな。そんなばかげたまねをすれば、小森家十万石に傷がつくことですからな」
「なるほど――」
家来たちのほうでその覚悟があれば、あるいは本物でとおるかもしれない。たとえばだれかに首実検をさせることになったとしても、そんなによく似ているからには区別がつかないはずだ。
「しかしなあ、茂太郎さん、もう一つあんたは勘ちがいをしていることがあるぞ」
「それは、どういうことです」
「今日の話では、福姫さまはどこへも輿入れはしたくない、気ままに一生をおくりたいから、わざわざ城を出たんだというようなことをいっていた。だから、明日は亀之助さまにきらわれるようなことばかりするつもりだといってわらっていたぞ」
「本当ですか」
「かなり変わり種らしいからな。相手を怒らせてよろこぶ、そんな思いきったことをやりかねない女性のようだな」
「これはいいことをうかがいました。それをうっかり知らずに行くと、亀之助さまはわがままで怒りっぽいほうですから、うまく引っかかるところだったかもしれません」

「まあ、そんなところだろうな」
「しかし、明日、亀之助さまがなにをいわれ、どんなまねをされても、一向怒らないとしたら、どういうことになりましょうな」
「なるほど、そういう手もあるな」
平馬は思わず茂太郎の顔を見すえながら、
「茂太郎さん、万一そんなまねをして、福姫さまが本当にわしの女房になる気になった場合は、どういう始末をつける気だね」
と、一本突っこんでみる。
「その場合は、福姫さまは平馬さまにもらっていただきます。冷酷なことをいうようですが、わしは小森家から悪の根を断って小森家十万石が無事に立っていけばそれでいいので、そのためには命をすてても後悔はしないつもりです。いや、こんどのことは、父茂右衛門も、せがれ茂太郎も、はじめから命にかえて主家をまもりぬく、その覚悟でかかっていることなのです」
「では、もう一つ聞くが、当主は十年前に城下町の町人の女房を強奪して、いまだに寵愛しているそうだが、その亭主はいつかは当主を刺して恨みを晴らそうとねらっているそうだ。これはどう始末をつける気なんだ」
「殿さまの間違いは殿さまがつけるほかはありません。そういう殿さまの非道を助けて自分たちの地位をかためた悪臣たちも、いずれはそれだけの因果を自分でしょわなければならない時がきます。非道の手から父祖代々の一藩をまもって、これを子にゆずり孫に受けついでいく、これが侍の道です。主人といえども侍の道はまもらなければなりません」
「わしはなあ、茂太郎さん、侍ではなくて、生まれながらの浪人者なんだ。まだ一度も、小森家の主人からも家来たちからも、恩をうけたおぼえはない。今日まで勝手にほうっておいて、必要ができたからあぶない仕事に使ってやろう

という、これもあんたのいう侍の道の中に入るのかね」

平馬はついそんな皮肉が口に出てくる。

説　得

「失礼ですが、平馬さまは、目の前におぼれかけている人がいても、あれは恩怨のない赤の他人だからと、そのまま平気で通りすぎてしまうことができますか」

茂太郎は真顔で逆を突いてきた。

「うまいことをいうなあ」

平馬はちょっとあきれて苦わらいをしながら、

「正直にいうとなあ、茂太郎さん、一度わしが身代わりをつとめると、明日だけではすまなくなるんじゃないのか」

と、改めて突っこんでみる。

「場合によっては、そういうことになるかも知れません」

この忠実な家老の卵は、悪びれもせずにきっぱりと答える。小森家十万石をまもりぬくためには、多少犠牲者の出るのはやむをえないと考えているようだ。この男は生まれながらにして立派な家老職根性をそなえてきているようである。

「すると、明日の見合いがうまくいったら、わしは国もとへ悪人どもを取りおさえに立つことになるのか」

「ぜひ、そうお願いいたしたいと思います」

「もし、明日の見合いで、福姫さまがこっちをきらった場合はどうする」

「平馬さま、我々はお家の三佞臣をのぞいて小森家が安泰になりさえすればよろしいので、是が非でも福姫さまにお輿入れを願うというのが目的ではありません。ですから、たとえおきらいでも、当分お名を拝借するぐらいのことは、なんとかお許しいただけるのではないでしょうか」

そこがあなたの働き一つだといいたげな茂太郎の顔つきである。

「よかろう、おぼれる者はわらをもつかむというからな。こうなっては、わしはもうそのつかまれたわらも同然だ。当分、茂太郎さんのいうなりになってあげよう。ただし、一つだけ約束しておいてもらいたいことがある」

「どんなことでしょう」

「わしは形見の短刀をもどして小森家とは縁を断った男だ、赤の他人として身代わりはつとめるが、絶対に小森家の人間にはならぬ。あくまでも浪人長谷部平馬で助力するのだから、そのつもりでいてもらいたい」

若殿の座をねらって欲のために働いたとは思われたくないし、たとえば亀之助が再起不能という場合に立ちいたっても、絶対に若殿の座へはつかぬ、それをはっきりと茂太郎に念をおしておいたのだ。

「よくわかりました。お立派なお言葉です」

茂太郎はじっと平馬の目を見かえしてから、

「お身代わりを御承諾くださいまして、ありがとうございます。この上は、不肖茂太郎、必ず平馬さまと生死を共にすることを誓って、わしのお礼にしたいと思います」

と、落ち着いてそこへ両手をついた。軽々しく喜怒を面にあらわすものではないと、親家老から常々きびしくいましめられているのだろう、この男はどこまでも家老型にできあがっているようだ。

「そこで、今夜の手順はどうなるんだ、茂太郎さん」

「いろいろ御都合もございましょうが、わしの考えでは、これからいっしょに浜町の中屋敷へお供して、ひとまずわしのお長屋へお入りを願い、そこで衣装をかえて、ひそかに茶室へ案内するつもりにしています」

「亀之助さまは茶室に寝ているんだな」

「そうです」

「亀之助さまの奇病は、もうみんな知っているの」
「急に御気分が悪くなられて、茶室におやすみになっていることは知れています」
「すると、明日の朝になって、気分がなおったから予定のとおり遠乗りに出かけるということになるのか」
「そのつもりにしております」
「奇病は若殿の体内から発したものでなく、仮に敵が一服盛ったものとして、その辺のことをもう一度考えてみる必要がありそうだな」
「と申しますと――」
「手塚の一味は中屋敷にもいる。そして、手塚は明日の遠乗りは不能になったと確信する一方、こっちがどんな手を打つかと油断なく中屋敷の内外を見張らせておく。わしが手塚ならそうするな」
「なるほど――」
茂太郎はちょっと考えてから、
「つまり、敵はわしがここへ出向いてきたことをもうちゃんと知っている。そして、わしがあなたのお供をして中屋敷へ入れば、それもすぐ知れてしまうということになるんですな」
と、さすがに緊張した顔になっていた。
「もう一つ、今日若殿が松岡という浪人剣客をひそかに呼んで茶室で会ったことも、たぶん知れているはずだ」
「たしかにそういうことになりますな」
「茂太郎さんは、今夜、表門から出てここへきたのか」
「いや、日の暮れるのを待って、お長屋の通用門からそっと出てきました」
「無論、ひもがついていると見たほうがいいだろうな」
「それは十分気をつけていたつもりですが、自信はありません。中屋敷は味方でかためているとばかり、ここへくるまでは安心していたくらいで、考えてみると迂闊千万でした」

茂太郎は正直にいって、我ながら苦笑している。
「よし、こうしよう。茂太郎さんはひもに気がつかない振りをして、きた時とおなじようにして帰る。わしは頭巾で顔をかくして、一足後からついていってみることにしよう。道順は吾妻橋へ出るのか」
「そうです。橋はわたらずに、本所河岸のほうを両国橋へ出ます」
「そうか――。中屋敷へついたら、米次郎を通用門の内へ待たせておいてくれ。わしは戸を三つたたくことにする」
「承知いたしました」
「わしは一足先へ出て、水戸家の下屋敷のあたりへかくれていてみよう。茂太郎さんはしばらく時をおいてから、ゆっくり出てくるがいい」
「なるほど。そうすれば、どんなひもがついているか、よくわかるはずですな」
「では、出かけるぞ」

平馬は気軽に立ちあがり、頭巾の用意をして庭へ出た。外には十四日ほどの月が明るく輝いて、今夜はかなり冷えこむような夜になっている。米次郎と中間はどこへかくれているのか、姿を見せない。別に呼び出す必要もないので、平馬はそのまま母屋の表へまわっていった。
――えらい仕事を引きうけてしまったもんだな。
内心苦わらいをしながらも、しかし、やらねばならぬ仕事のできたことに、平馬は我ながら生きがいを感じている。しかも、一つ間違えば命がけの仕事だけに、強い闘志がわいてくるのだ。
――乳母にはくわしいことはいわずにおくことにしよう。余計な心配をさせることはない。
そんなことを考えながら、何気なく土間の戸をあけると、いきなり目についたのは、意外にも、そこの上がり框へ腰かけておたねと話しこんでいるお粂の派手なあで姿だった。

「なんだ、お糸じゃないか。わしをたずねてきたのか」
　平馬は思わず笑顔になっている。
「お客さまはもうお帰りになったの、兄さん」
　お糸はもうさっさと立ちあがる。
「そうか、客に遠慮して、ここに待っていたのか」
「今日はあたし、留守にしてしまってすみませんでした」
「なあに、いいんだ。別に大して用があったわけじゃない」
　平馬は軽く答えてから、
「ばあや、わしはこれから客を送っていくが、今夜は向こうへ泊まるようになるかも知れぬ。二、三日帰らなくても、心配しなくていいよ」
　と、おたねのほうへいった。
「そうかね。若だんなよう、くれぐれもいっておくですが、あぶないまねだけはしないでくださいよ」
　おたねは人の出入りで、なにかそんな不安を感じているらしく、心配そうな顔をする。
「大丈夫だ。わしはけんかはきらいのほうだから、心配しなくたっていい。乳母だってよく知っているじゃないか」
「そりゃわかっちゃいるけどよう、振りかかる火の粉ってことだってあるんだから、気をつけてもらわなくちゃ」
「わかった。きっと、十分気をつけることにする。――お糸、いっしょにこい。歩きながら話そう」
　平馬は先に立って土間を出る。
「おばさん、おじゃまをいたしました」
「おまえさまも、よく気をつけてな。夜道は物騒だでな」
「ありがとう。じゃ、おやすみなさい」
　下駄をからころと鳴らしながら出てきたお糸が、黙って平馬と肩をならべる。

　平馬は頭巾を出して、目深にかぶりながら歩く。それと見て、お糸もたもとからお高祖頭巾を出してかぶっていた。
　平馬はそれとなく植え込みの中を見て歩いたが、怪しいやつの姿はどこにも見あたらない。
「今夜は少し冷えるようだな」
　往来へ出てから平馬はあたらずさわらずのことを口にする。
「そのかわり、明日もお天気だわ」
　お糸が軽くうけ流す。
「お糸、おまえ植徳の家へ入る時、だれか怪しげなやつの姿を見かけなかったか」
　平馬が小声になって聞いたのは源森川のふちへ出てからで、その川っぷちの道をまっすぐ西へ行けば右手が水戸の下屋敷の長い塀つづきになり、やがて隅田川へ突きあたることになる。
「別にそんなやつは見かけなかったけど、今夜のお客さんてだれなの。立派な若いお侍さんなんですってね」
「うむ」
　お糸なら話しても大丈夫だろうとは思うが、
「実はなあ、お糸、わしは今日おまえの家へ運勢を見てもらいに寄ったんだ」
　と、一応、話をそらしてみる。
「留守居の者から、それは聞いたわ。兄さんが運勢なんか気にするなんて、なんだかおかしい。いいえ、ことによるとなにかおこったんじゃないかと、急に心配になったから、すぐたずねてきたんです。――やっぱり、なにかあるんでしょう、兄さん」
「かくしたっておまえは行者だからな。正直にいえば、たしかになにかあるんだ。どうだ、ひとつ当ててみないか」
「あたしを試してみるつもりなの」
「そういうことは不了見のうちかな」
「不了見だわ。冷やかし半分の人には、行者なんて必要はありません。切羽詰まって神仏にす

がるよりしようがない人でなければ、行者だって本気になれないし、また、そういう人でなければ、行者の言葉などいくら聞いたってむだだわ」
　きっぱりといいきるお条だ。
「なるほど、それはたしかにそうだな。相手が真剣だから、こっちも真剣になる。どんなことだって、それが本当なんだ」
　平馬はなにか教えられたような気がして、ふっと胸がひらけてきた。明日の福姫との勝負もこの手だと悟るところがあったからである。
　いや、身代わりになって若殿に化けるなどという仕事は、よっぽど確固たる信念を持ってかからなければ、到底化けきれるものではない。少しでもこっちに照れるとか、気おくれがするようなすきがあれば、たちまち疑念を持たれる、あくまでも真剣勝負の気持ちでかかるべきだとも、平馬は悟った。
「怒ったの、兄さん」
　ふっとお条が心配そうにいって、肩をよせてきた。
「怒ってなどいないよ。どうしてだ」
「急に黙りこんでしまうんだもの」
「いや、ちょっと考えごとをしていたんだ。つまらない心配はしなくてもいい」
「兄さんは今夜のお客さんのことを考えていたんでしょ」
「うむ、まあそうだ」
「おばさんも心配していたわ。今まで兄さんにはあんなお友達はいなかった。それに、若党さんをあいさつによこしただけで、名前も教えずにさっさと離れへ通ってしまったんですってね。悪いお友達でなければいいがって、何度もいっていたわ」
「そうか、乳母は苦労性だからな」
「でも、今夜のお客さんは、なにかあぶない相談にきたんでしょう」
「どうしてそんなことがわかるんだ」

　平馬はふしぎそうに、ちらっとお条の顔を見る。
「だって、兄さんはさっき、怪しいやつを見かけなかったかって、あたしに聞いたじゃありませんか。怪しいやつってのは、お客さんの後をつけてきたやつということになるんでしょう。ひもがついているようなお客さんなら、どうせおだやかな用でくるはずはないもの」
「なるほど、うまいことをいうなあ。たしかにそういうことになる」
「本当はね、兄さん、自分の心に欲があると、行の勘がみんな狂っちまうんです。あたしさっきから一生懸命に考えているんだけど、兄さんのことだけはなんにも勘が働いてくれないんです。しかも、兄さんはいまとてもあぶない崖の上に立っていることだけはわかるもんだから、胸がじりじりするほど心配でたまらないわ」
　お条は悔しそうにくちびるをかんでいるようだ。
「わしがさっき行者どのを試すようなことをいったから、悪かったのかな」
「違うんです。あたし、さっき植徳さんの庭へ入ったとたん、流れ星を見てしまって、どきりとしたわ。今どき流れ星なんてめったにないことだのに、それが東から西へきれいに尾をひいて飛んだのよ。兄さんはあたしをおいて西のほうへ行ってしまうかも知れない、とっさにあたしはそう思ってしまったんです。それからあたし、ちっとも心が落ち着かなくなってしまったんです」
　お条はがくりとうなだれてしまう。
「そりゃ、ことによると、わしはしばらく旅に出るようなことになるかも知れないが、わしもおまえも身寄りのない者同士なんだ。わしはお条という妹ができたんで、とてもよろこんでいる。いや、半分ぐらいたよりにしているかも知れないなあ。今日、自然におまえの家のほうへ足が向いていたくらいだからな」

「本当、兄さん」
「うむ、本当だ」
「じゃ、今夜のお客さまはだれなの。どんな用できたの。妹にかくすことなんかないでしょ」
　お条は平馬の腕をつかんで、まるで挑戦するような必死な目を向けてきた。

ひもとひも

「この辺でいいだろう。ここへしばらくかくれていてみよう」
　源森橋をわたると左手の原っぱに、かわら焼き場の小屋がいくつもならんで建っている。そのとっつきの小屋のかげへ月光をさけて立つと、源森川を一つ隔てて、いま自分たちが歩いてきた水戸の下屋敷の長い塀つづきの道が一目で見わたせる。
「こんなところへかくれて、どうするの」
　お条が不審そうに聞く。
「ここをいま、わしの今夜の客が通るんだ。その客にもしひもがついていれば、そのひももここを通ることになる」
「頭がいいのねえ、兄さんは。末恐ろしいくらいだわ」
　お条はくすりとわらいながら、
「ついでに、そのお客さんの名前を白状なさいよ」
　と、うまく持ちかけてくる。
「今夜の客はな、小森家の家老のせがれで中橋茂太郎という男だ」
「あら、津山の小森様の御家老さんのせがれなの」
「知っているのか、お条」
「いいえ、知ってるってわけじゃないけれど、あたしも今日、小森様の御家老さんに呼ばれて行ってきたのよ」
　お条が意外なことをいい出す。
「そうか、なんという御家老さまだね」
「手塚勘解由さまっていう、もう四十五、六になる人かしら、立派な人だったわ」

「ふうむ」
　これは聞きずてならないと、内心、平馬はどきりとした。
「やっぱり運勢を見に呼ばれたのか」
「そうなんです。だれからあたしのことを聞いたのか知らないけど、その人、柳橋のつるやっていう料理屋から迎えをよこしたのよ」
「じゃ、芸者や取りまきのたくさんいる席へ呼ばれたのか」
「まさか――。そんなことしたら、あたし、啖呵を切ってさっさと帰ってきちまうつもりだったんだけど、ちゃんと別の小座敷へ案内して、二人きりで、とてもていねいにごちそうまでしてくれたわ」
　お条はちょいと得意そうな声音である。
「そうか、こっちは行者なんだからな、それがあたりまえなんだ。それで、運勢を見てやったのかね」
「ええ。お気の毒だけれど、それがあんまりよくないんです。あたし正直にいってやりました。あなたはここ十年ばかり、することなすことがうまくいって、順風に帆をあげたような運勢でしたが、これからはだんだん下り坂になります。風がなくなって、船が思うように進まなくなるばかりでなく、いつ突風が吹いてくるかわからない、そういうあぶないところへきていますといってやったんです」
「御家老さま、いやな顔をしなかったか」
「ところが、そうでもないのよ。家老という職には味方もあるが敵も多い。風がやんで帆がきかなくなれば、船は艪でこぐよりしようがないなと、わらっているんです」
「なるほど、うまいことをいうなあ」
「あたし、突風がきたらどうしますと、よっぽど聞いてやろうかと思ったけれど、やめたわ」
「どうしてだね」
「船が引っくりかえったら、泳いでいくよとい

いそうな顔なんです。そんな強情な人に、なにをいったってむだですもの」

「そうか。一体、御家老さまはどうして行者に自分の運勢なんか見てもらいたくなったんだろうな」

「よくわからないけれど、今日はあたしの行の力を試しに呼んだのかもしれない、いろんなことを聞いてたから」

「すると、本当はなにかおうかがいを立てたいことが、ほかにあるわけだな」

平馬はたぶん若殿亀之助の命数に関することだろうと想像したが、

「そうかも知れないわ、また呼んだらきてくれるかって、帰りに念をおしていました。だから、あたし、気が向いたらうかがいますっていって帰ってきたんだけど、損しちまったわ」

と、つまらなそうにいう。

「どうして——」

「だって、柳橋へなんか行かなければ、兄さんが家へきたとき、留守にしないですんだんだもの」

「さあ、それはどうだかなあ。わしは運勢をみてもらっても、お賽銭はたかがしれている。向こうは御家老さまだから、ごちそうをしてくれた上に、お賽銭もたくさんあげてくれたんじゃないのか」

「いや、そんなさもしいことをいっちゃ」

お粂はぷっとふくれてしまったようである。

それにしても、仮にも行者の前で、風がなくなったら船は艪でこぐと平気でわらっていられる手塚は、相当腹のすわった人物に違いないと平馬は思った。

「きたようね、兄さん」

お粂が対岸を見ながらいった。

「うむ」

水戸の下屋敷の塀にそって、三人の人かげがこっちへ歩いてくる。先頭はちょうちんを持った中間で、次は頭巾をかぶった茂太郎、後から

若党の米次郎が供をしてくる。

そのうしろのほうをずっと目で追ってみたが、人かげらしいものはなにも見えない。

やがて、主従三人は源森川をわたって吾妻橋のほうへ消えていった。

「ひもなんかついていないじゃありませんか」

お粂が不審そうにいったとき、向島土手のほうから中間風の男が一人、前かがみになりながら、寒そうに腕を組んでさっさと橋へかかってきた。

「あれがそうかしら」

お粂は思わず目をみはっている。

「たぶんそうだろう。おなじ道では目につきやすいから、下屋敷の向こうがわをまわってきたんだ」

「さすがはちょいとした知恵は働くやつなんですね」

「ふん、利口なのは自分たちだけだとうぬぼれてやがる」

ふいにかわら焼き小屋の向こうの角からぬっと出てきて、低い声でこっちを嘲笑したやつがある。

「あっ、鬼吉」

手ぬぐいをぬすっとかぶりにして顔はかくしているが、お粂にはすぐそれとわかったらしい。

「いまさらびっくりしてやがる。お粂、人のひもの心配をするより、まず自分のひもに気をつけるがいいぜ」

鬼吉はせせらわらっているようだ。

「畜生。じゃ、おまえ、昼間からあたしをつけていたんだね」

お粂は素早く帯の間へ手を入れながら、その目が悔しそうにぎらぎらと燃えている。

「相かわらず気の強いあまだな。今夜はけんかはよせ。おれはそっちの若だんなにいっておきてえことがあるんだ」

鬼吉の目がじろりと平馬のほうを向く。

「おい、お人よしの若だんな、おれは昨日おめ

えさんに軍師になってやろうかといっておいたっけな」
　平馬はただ啞然として、どうしてこんなところへ鬼吉があらわれたんだろうと、顔を見ているだけだ。
「なんだ、まだびっくりしたまんまか。よし、教えてやろう。おれは今日、手塚をつけて柳橋へ行った。手塚はどうしてお粂なんかを呼んだんだろうと思ったんで、こんどはお粂をつけた。そのお粂が、一度うちへ帰ってから、植徳のおめえさんの家をたずねた。こいつはまったくもうけ物だった。まさか茂太郎がおめえさんの家へしのんできているとは思わなかったからね」
「それで、わたしにいっておきたいことっていのは――」
「どうだね、おめえさん、いよいよおれを軍師にたのみたくなったんじゃねえのか」
「まあ考えておこう」
　平馬もうっかりした返事はできない。
「そうか、考えるのはそっちの勝手だが、考えているうちに一服盛られちまやそれっきりだぜ」
「素浪人など一服盛ったところで、なんの得にもなるまい」
「おっしゃるぜ。茂太郎がなんのためにわざわざおめえさんをたずねたか、おれにゃおよその見当がつくんだ。まあいい、そのうちにおめえさんのほうから、どうか軍師になってくれと、両手をついてたのみにくる時がきっとくる。ついでだからいっておくが、手塚勘解由を甘くみるととんだ目にあうぜ」
　鬼吉はぬすっとかぶりの中でにやりとしながら、
「お粂、おれは今夜ちょいといそがしくなったんで、おめえとおいろごとをしている暇がねえんだ。またの日のおたのしみってこともあるからな、ごめんよ」
　いいたいだけのことをいって、すっと小屋のかげへ姿をかくす。

「畜生、人をばかにしやがって」
　お粂は歯がみをしているようだ。
「まあいい、出かけよう」
　平馬はかまわず往来のほうへ歩き出す。

敵と味方

　本所河岸を両国橋へ出る茂太郎組のことが、気にならないでもなかったが、お粂を一人で帰すわけにもいかないので、平馬は吾妻橋をわたって浅草へ出ることにした。
「兄さん、あいつは茂太郎さんたちの後をつける気じゃないかしら」
　吾妻橋へかかってから、ふっと気がついたようにお粂が聞く。
「そうかも知れないな。茂太郎をつけているひもの中間、あれは手塚家老のひもなんだ」
「あら、どうして――」
「昨日おまえは、鬼吉は女房をどこかの大名に横取りされてから、あんな風なすごい男になったんだといっていたね」
「ええ、それおじいちゃんから聞いた話なのよ」
「その大名というのは、小森家の当主らしいんだ」
「本当、兄さん」
　お粂はびっくりしたようだ。
「その当主を取りまいて、そんな大名のわがままを手伝った佞臣が三人いる。その一人が手塚勘解由なんだそうだ」
「まあ、――それでわかったわ。だから、鬼吉は手塚さまをねらっているのね」
「たぶんそうだろうと思う。その三佞臣は、そればかりでなく、お加世の方、つまりもと鬼吉の女房の腹にうまれた千代五郎という今年十になる子供を若殿にしようとたくらんでいる。ところが、江戸には亀之助さまという二十五になる若殿がいて、これをまもっているのが江戸家老中橋茂右衛門と、そのせがれ茂太郎の一派なんだ。手塚組としては、どうしても若殿亀之助が

じゃまになる」
「じゃ、茂太郎さんが今夜兄さんをたずねてきたのは、兄さんにぜひ加勢をしてくれってたのみにきたんですね」
「うむ、そういうことになる」
「つまり、兄さんの腕前を見こんだことになるんでしょう」
「実は、その若殿が明日、大御所さまの姫君福姫さまと、三囲の姫屋敷で見合いをすることになっている。その途中で手塚組がどんなまねをするかわからないから、手をかしてくれとたのみにきたんだ」
平馬はうまく話をこしらえておく。
「じゃ、うまくいけば、兄さんの出世のいとぐちになるわけね」
お粂はすなおにそううけとったようだ。
「そのかわり、へたをすれば命がけということにもなる」
「そんなことあるもんですか。兄さんはおじいちゃんの孫なんですもの、きっと強いにきまってます」
「わしが出世したらな、お粂、なんでもおまえの好きなものを買ってやるよ」
吾妻橋をわたりきって、雷門の前から並木町のほうへ曲がりながら、平馬は子供のようにそんなことを口にしたが、お粂はすぐには返事をしなかった。
「いやだわ、あたし。——じゃ、兄さんと手塚さんは敵味方になるわけね」
お粂がはっとしたようにいう。
「まあ、そういうことになるな」
「鬼吉とはどうなるの。あいつ今夜はもうけ物をしたといってましたね」
「鬼吉は手塚組を敵にしているから、こんどは一応、中橋組のほうへ味方をするかも知れないな。しかし、結局は小森家を恨んでいるのだから、中橋組が手塚たちをほろぼしてしまえば、こんどは小森家を倒しにかかるんじゃないかと

思う」
「兄さんは今夜これからどこへ行くの」
「浜町の小森家の中屋敷へ行って、今夜から若殿の警固にあたることになっているんだ」
「あぶないなあ、茂太郎さんにひもがついているくらいだから、中屋敷はもう手塚組で取りかこんでいるんじゃないかしら」
「ことによるとそうかもしれないね」
「いいわ、あたしが兄さんを浜町まで送ってってあげます。あたしは今日手塚さんにお目にかかっているんだから、もしもの時はきっと役に立つと思う」
お粂はそれが当然のようにきっぱりといいきるのだ。
「いや、そんなことをしてくれなくても大丈夫なんだ。お粂に送ってもらうと、またわしがお粂を送ってこなければならなくなる」
「そんな心配してくれなくたって、あたしは一人で帰れます」
「冗談いうなよ。男が女に送ってもらうなんて、それじゃあべこべじゃないか。だいいち、鬼吉がどこに待ち伏せしているかわからない。おまえを一人で帰せるものか」
「兄さんはあたしがどんな女だか知らないからそんなことをいうのよ。あたしはなんといったって、浜町まで送っていきます。兄さん一人じゃ、あぶなくて見ていられないもの」
お粂はわらっているようだ。
「困ったなあ。妹というものは、兄にそんな心配をかけるものじゃない」
「あんなこといってるわ。妹だからこそ、たった一人しかない兄さんのことを心配しているんじゃありませんか」
「なんだかしらないが、おまえのいうことはみんなあべこべのようだな」
平馬は当惑して、なんといったら思いとまらせられるかと、適当な口実をさがしているうちに、

「じゃ兄さん、一足先へ行っていてください。あたしうちへ帰って支度をしてから、すぐ追いつきますからね。なるべくゆっくり歩いていてね」
お粂はそういって、からころと下駄を鳴らしながら、そこの三間町へ出る横町へ小走りに駆けこんでいく。
道はいつか駒形通りへかかって、やがて五ツ半（九時）をすぎた時刻だから、ほとんど人は歩いていない。
——あれも少し変わりすぎているからなあ。
平馬は苦笑しながら、かまわず蔵前通りのほうへ歩いていく。

忍び装束

平馬はわざと浅草見付をさけて柳橋をわたり、床屋横町から両国広小路へ出た。
時刻はすでに四ツ（十時）をまわっているから、人通りはまったく絶えている。
茂太郎のほうは、両国橋をわたって、川っぷちを浜町河岸へ出るはずだ。そのほうが近道だから、途中で変わったことでもなければ、今ごろはもう中屋敷へついているところである。
尾行の中間は、無論、勘解由のもとへ報告に走るだろう。勘解由は大事を明日にひかえているから、地の利からいっても上屋敷へは帰らずに、今夜は柳橋へ泊まっているような気がする。折りかえしてくる中間と行きあってはまずいから、平馬は横山町通りから薬研堀へぬける道をとることにした。
どうしたのか、お粂はいまだに追いついてこない。
相当強情な女だから、ふっと気がかわるなどということは考えられない。とすると、このほうこそ、たぶん途中でなにかにぶつかっているのだろう。
——お粂ならなにかにぶつかっても心配することはない。

平馬の心配なのは、むしろこれから乗りこむ中屋敷のほうだった。
茂右衛門にしても、茂太郎にしても、中屋敷は味方でかためてあると安心していたようだが、肝心の若殿亀之助がほんのちょっとしたすきに一服盛られるようでは、勘解由の一味が相当入りこんでいると見なければなるまい。
そうだとすれば、こっちがいくらうまくやったつもりでも、こっちのやることはみんな勘解由のほうへ筒抜けになっているはずだ。
だいいち、若殿は今日の夕方、だれにどんな風にして一服盛られたのかそれさえわかっていないらしい。心細いかぎりだ。
先年、大名屋敷ばかりをねらって、十年あまりつかまらなかった盗人があるという。その男は、町奉行所で、表から見ればいかめしく門を構え、高い塀をめぐらし、ひどく厳重そうに見えるが、大名屋敷ぐらいのんきなかせぎ場はないと広言していたそうだ。つまり、大名屋敷はあんまり広すぎる上に、住んでいる侍どもが城郭をたのんで、こんなところへ盗人が入るはずはないと、安心しきっているからだろう。
まして、その藩の事情によく通じている重役どもが、悪事をたくらんで一仕事しようとなれば、人の裏をかき、備えのすきをねらうぐらいは造作もないことにちがいない。
そんなことを考えながら、平馬は矢ノ倉へ出て、小森家の中屋敷の手前の角を、通用口のある横町へ曲がった。この手前の屋敷も大名の下屋敷になっていて、両方の塀越しに庭木の枝がのびて屋根を作っているから、道は急に暗くなる。そして、この横町を突きあたると、裏門のある大川端へ出るのだ。
「兄さん——」
ふいに上のほうから小声で呼ぶ者がある。たしかにお粂の声のようだ。
びっくりしてそっちを見あげると、小森家のほうの築地塀の屋根の上へ、ぴたりと腹ばいに

なって、黒装束のお粂が白い顔だけ見せて、いたずらっ子のようにわらっている。
「どうしたんだ、お粂」
平馬は唖然(あぜん)とせずにはいられなかった。
「あたしはねえ、兄さん、こんなこともできるのよ。愛想がつきた」
「驚いたなあ。そんなあぶないまねをして大丈夫なのか」
「大丈夫よ。この屋敷は今のところ静かだわ。ひもの中間が手塚のところへ御注進をすると、少しうるさくなるかもしれない。米次郎が通用門のところで待っているから、今のうちに早く行ったほうがいいわ」
「ありがとう。しかし、おまえはどうする気なんだ」
「あたしは兄さんが無事に茂太郎さんのお長屋へ入ったら帰ります。あたしのことはなんにも心配しなくたっていいのよ」
お粂はそういいながら、あごの下までずらしていた頭巾の布を目の下まで引きあげる。どうやら、これは忍び装束のようだ。
「お粂、あぶないまねはよせ。早く家へかえるがいい」
平馬がそういいきらぬ間に、お粂の姿はすっと塀の向こうへ消えていった。
——困った女だなあ。
お粂の行動は、とても平馬の常識では考えきれない。まさか魔性の女とは思えないが、あんなまねが平気でできるのは、精神的にも肉体的にもなにか異質なものを持って生まれてきているのだろう。一つ間違えばただではすまない。
いや、そのただではすまない命がけの綱渡りがおもしろくて、当人としてはあんなまねがやめられないのだろう。
平馬はなんとなく背筋が寒々としてくる。
そこから十数間歩いていくと、そこに通用門があった。あたりに人かげのないのを見さだめて、約束どおりくぐりの戸を三つたたくと、す

ぐに中から戸があいた。
「お待ちしておりました」
若党の米次郎が小声でいって迎え入れ、すぐに戸じまりをしてしまう。
「いましがた、だれか怪しい者を見かけなかったかね」
「屋敷うちにですか」
「うむ」
「いいえ、別に見かけませんでしたが、なにかあったのでございますか」
若い米次郎の目は、真剣そのもののように光っている。
「そうか——。それならいいんだ。途中でひものついているのを見かけたかね」
「一度だけ、ちらっと中間風のやつを見かけましたが、それっきりで、別にこれはというようなやつは見ませんでした」
「いや、その中間がひもだったようだ」
「やっぱり、あいつだったんですかねえ」
通用門を入った左手に、南に面したお長屋が幾棟(いくむね)かあって、茂太郎の長屋はそのお長屋の西がわを通りぬけたいちばん奥に、板塀をめぐらした一戸建てになっていた。
「ここは男所帯でなんのおもてなしもできませんが、ゆるりとおくつろぎください」
平馬を自分で客間へ案内した茂太郎は、さすがにほっとした顔つきである。
「途中は別にかわったこともなかったようだね」
「ありませんでした。ひもはどうだったでしょう」
「中間風のやつがつけていたようだ」
「米次郎がそんなことをいっていましたが、すると、ひもはたしかについていたことになるんですな」
「それはたしかだ。今ごろはもう手塚のほうへ注進に行っているだろうから、まもなくこの屋敷は物騒になってくるんじゃないかと思う」

「なるほど――」
茂太郎は大きくうなずいてみせる。
「若殿の容態はどうなんだろう」
「いまちょいと茶室へ行って父に会ってきたのですが、まだ昏々と眠りつづけていられるそうです」
「やっぱり卒中なのかね」
「典医はそうだろうという見立てですが、ひょっとすると眠り薬のような毒物ではないかとも思い、父は念のために御徒町へ使いを出して、蘭方の伊東玄朴先生に問いあわせてみたそうです。すると、このごろ毛唐の国では、においをかいだだけで三刻（六時間）ぐらい眠る薬ができたそうで、しかしこれはまだ日本へはきていないから、くわしいことはわからない、卒中で眠っているにしろ、毒物で眠っているにしろ、眠っている間は手のつけようがないから、そのまま眠らせておくほかはないだろうという返事だったそうです」
「医者の立場からいえば、そういうことになるだろうな。しかし、家老職の立場からいえば、卒中ではないとみて善後策をとるのが本当じゃないのか」
「それはそうです。平馬さまをお願いしたのも、その善後策のうちに入ると思いますが」
「そのとおりだ。家老職にしても、茂太郎さんにしても、これは毒物だとちゃんと気がついている。すると、そんな毒物を敵はどういう手段で若殿に与えたのか、まずそれを考えておく必要がありはしないか。敵は、一度その毒物で成功すれば、次にまただれかをそれでねらうにちがいないんだ」
「なるほど――」
茂太郎は思わずあっと目をみはったようだが、急には返事ができないようである。

女ぐせ

「若殿は、茂太郎さんが座を外しているほんの

しばらくのすきに、座ったままおとなしくうつ伏せになって眠っていたんだろう」
平馬はかまわず突っこんでいく。
「そのとおりです」
「すると、下手人は若殿によっぽど親しい者ということになる」
「口から入った毒物にせよ、においで三刻も眠るという毒物にせよ、たしかに親しい者でなければできないことですな」
「若殿は酒はあまりやらないが、女色のほうはおきらいのほうではないといったね」
「はあ、女ぐせの悪いのは小森家一族の欠点のようです」
茂太郎は正直にいって、苦わらいしている。
「愛妾は何人ぐらいいるんだろう」
「三人います」
「そのほかに、腰元などに手をのばすことがあるのか」
「ないとはいえません」
「そうだろうな。下手人は最近若殿がいちばん気に入っている女だと思う。この女をたぐっていくと、必ず手塚勘解由が出てくる。おそらく、直接ではなく、間に橋わたしがいる。つまり、この中屋敷にも手塚の一味が何人かいるということだ」
「恐れ入りました。さっそく手ぐってみます」
「腰元の中に、茂太郎さんの好きな女がいればいちばん簡単なんだがな」
「赤面のいたり――」
赤くなったところを見ると、だれかいるようだ。若殿に義理を立てて、いまだに女房を持たずにいるようだから、そのくらいのことはしようがないだろう。
「もう一つ聞いておきたいことがある」
「どんなことでしょう。赤面ついでに、なんなりと白状いたします」
茂太郎はすっかり覚悟してしまったようだ。
「明日の見合いがうまくすんで、ひそかに若殿

が国もとへ立つのは、側用人鎌田治部と国もとの仕置家老大坪兵太夫の二人を倒すのが目的なのかね」

ただそれだけのことなら、なにも若殿が自分で出向かなくてもいいように思えるのだ。

「いや、本当の目的は、御当主にお目にかかって、こんどの縁組みのおゆるしを得ることにあります。というのは、これまで江戸から出した書状は、御当主さまの手に入っていないようなのです。鎌田と大坪が勝手に握りつぶして、自分たちの都合のいい返事をこしらえ、御当主さまの名を借りて送ってくる、そう考えられる節が多分にあるのです」

「そうか――。つまり、主人父子の仲が悪いということを、間に入ってこしらえているわけなんだな」

「そうです。しかも、悪いことには、ここ四、五年、相当苛斂誅求をやって、領民の間にかなり不穏の形勢があることも、御当主さまのお耳に入っていないようなのです。そういう悪政がすでに御用部屋の耳へ度々入ってくるそうで、大炊頭さまがこんどの縁組みに力を入れてくださるのも、一揆などの起こらぬうちに御当主さまを隠居させ、若殿の手で藩政を一新させたい、そのおつもりがあるからだと聞いています」

「なるほど、それならどうしても若殿が自分で国もとへ乗りこむ必要があるな」

「それと、実はもう一つ重大な問題が起こってきたのです」

茂太郎の顔がふっと曇ってくる。

「どんな問題なんだね」

「東北のさる大名の家に、こっちとおなじような事情にある藩があって、これも某老中が仲に立ち、福姫さまを望んできたそうです。しかし、こっちのほうが一足でも先口なので、いまのところは先方でも遠慮の形をとっているそうですが、こっちがぐずぐずしていると、先方はどんな手を打ってくるかわからない、せめて来月中には結納の儀をすませてしまわないと、先口が無効になるおそれがあるんだそうです」

「茂太郎さん、それはちょっと無理じゃないのか。作州津山まで百七十里、行って帰ってくるだけでもひと月と四日かかる。今日はもう十四日だから、明日立っても国もとへつくのは来月の三日か四日だ。江戸へ帰るのはどううまくいっても二十日すぎということになる」

どうせ敵の多い旅になるだろうから、来月中に江戸へ帰ってくるのはおそらく不可能な話だろう。平馬には成算が持てない。

「だから、明日の見合いが勝負だということになってきます。福姫さまのお心がこっちへきまってくれれば、その問題は解消されることになります」

「それは少し虫がよすぎるようだな。さっきもちょいと耳に入れたが、福姫さまは明日の見合いで、この縁組みをぶちこわす気でいるんだ」

「わしはそうは思いません。明日の見合いは平馬さまの腕ひとつだと考えています」

「おだてちゃいかん。だいいち、福姫さまはわしが身代わりだということを、すぐ見ぬいてしまうはずだからな」

「もしどうしてもだめなようなら、国もとへ行って帰ってくるまで、お名前だけ借りてくる。それまで、東北さんのほうとは見合いをしないこと、いかにもこっちへ縁組みをするという風に見せかけてもらう、このくらいのことはぜひお骨折り願いたいと思うのです」

茂太郎は切羽詰まって、そんな無理を押しつけてくる。

「しかしなあ、茂太郎さん、お名前だけ借りていって、御当主さまがそれを承諾したとなると、御当主さまをだますことになるぞ。しかも、この縁組みが成立しないとなると、こっちの目的はすべて水泡に帰する結果になりはしないか」

「そんなことはありません。その場合は、鎌田

と大坪を切って、御当主さまに諫言し、わしはその場で腹を切ります」
　茂太郎は悲痛な顔をして、きっぱりといいきる。
「茂太郎さんが腹を切れば、わしも腹を切らなければならなくなる。こっちは偽物なんだからな」
「そんなことはありません。たとえ身代わりにもせよ、平馬さまの血の中には御当主さまの血が流れているのです。御当主さまも平馬さまの諫言ならきっと納得されると思います」
「そうか——。まあ、やってみるだけはやってみるが、わしは小森の一族ではないから、女ぐせはいいほうでな、福姫さまがうまくくどけるかどうか、自信は持てない」
　そういってわらいながら、平馬はなんとも奇妙な気持ちである。

父と娘

　翌朝——。
　手塚勘解由は定刻四ツ（十時）に御用部屋上の間へ出仕した。
　この上の間は、上席家老中橋茂右衛門と、相役岡田三郎兵衛と三人の相部屋になっているが、今日は茂右衛門はまだ中屋敷から帰っていないし、三郎兵衛はこの二、三日風邪で引きこもっているので、詰めているのは勘解由一人だけだった。
　——中橋のおやじめ、今日はさぞがっかりしているだろう。
　勘解由はまず一服つけながら、茂右衛門の苦りきった顔をおもいうかべ、つい冷笑したくなる。
　茂右衛門が一人でどうやきもきしたところで、若殿は今日一日は起きあがれないはずである。においをかいだだけで三刻は眠りつづける

オランダわたりの眠り薬は、それがさめても半日ぐらいは頭痛がひどくて頭があがらない。遠乗りどころの騒ぎではないのだ。
　典医は卒中と診断したそうだが、その卒中が二、三度つづけば、いやでも福姫との縁組みはお流れになる。
　こっちは若殿が廃嫡になりさえすれば目的は達するので、なるべく毒殺などという荒療治はやりたくない。
　——当人にしても、毒殺よりは廃嫡のほうが、生きていられるだけありがたいだろうからな。
　勘解由としては、むしろ恩にきせたいぐらいの気持ちなのだ。
　大体、そう大した才能もないくせに、茂右衛門が上席家老の権限を笠にきて、我々三人衆のやることにいちいち盾をつこうとするのが間違いなのだと、勘解由は苦々しい。
　跡目問題にしても、必ず総領がつがなくてはならないと考えるのはもう古いのだ。亀之助にしても千代五郎にしてもおなじ当主の血筋なのだから、その時の藩の情勢に都合のいいほうを立てる、それでいいはずである。
　なまじ小利口ぶって、おれの代にはおれの方針でやると考えているような亀之助では、せっかくうまくいっているいまの藩政をかきまわすことになって、家来たちが迷惑するばかりなのだ。
　——うしろに古河がついているんで、ちょいとやっかいだ。
　こっちにすれば千慮の一失というやつで、まさか福姫をかつぎ出すとは、ついうっかりしていたのである。
　それだけに、国もとの二人もこんどばかりは相当あわてたらしく、万一の場合は非常手段をとれといってきている。一人で困るようなら、どっちか一人出府しようかとも書いてあった。
　遠く離れているだけに、治部も兵太夫も相当気をもんでいるようだが、こっちはもうちゃん

と打つべき手は打ってある。今日の結果いかんで、ほとんど勝負はきまるのだ。

「御家老さま――」

ふっと、障子の外で、あたりをはばかるような声が呼んだ。浜町へ入れてある中間左助の声のようである。

――来たな。

勘解由が立って障子をあけると、案の定、庭ぼうきを持った左助がそこのくつぬぎ石の横へきて、かしこまっていた。

「どうした、左助」

用でもいいつけるようなかっこうで、勘解由は日ざしの明るい縁先へ出て立つ。

「だんなさま、おかしなことになりやした。亀の字は裏河岸からさっき屋根船で向島へ向かったようでござんす」

「なにっ」

勘解由はどきりとして、

「おまえ、自分の目でたしかに見ていたんだろうな」

と、思わず念をおさずにはいられない。

「見ていやした。船は一艘で、供は茂太郎と米次郎、中間又三の三人きりです。近習どもは十人、こっちは馬なんで」

「加藤はどうした」

「やっぱり馬組でござんす」

「右助は――」

「船の後をつけていやす」

「亀の字はしゃっきりしていたようか」

「少しふらふらしていたようでござんす」

「おやじはどうした」

「茶室に残っているようで」

「よし、御苦労だった。いつものところで待っておれ」

「かしこまりやした」

勘解由は左助を去らせて、自分の席へもどってきた。

――薬の効能を信用しすぎたかな。

しかし、あれは自分の女に実験してみて、ちゃんと効くことは試験ずみなのだ。女には効くが、男には効かないというものではあるまい。

現に、若殿は船で、しかも供は茂太郎主従だけだと、左助はいっている。がんこおやじのことだから、無理に船にのせて、船なら寝ていけるし、ともかくも様子を見るようにとせがれにいいつけてあるのかもしれぬ。

ただちょっと気になるのは、昨夜茂右衛門は、御徒町と、小梅村と、両方へ使者を出している。伊東玄朴のほうのは容態をいって手当の方法を聞きあわせに行ったのだろうが、小梅村のほうは、茂太郎がなにをしに行ったのか、右助の報告ではどうもはっきりしない。

茂太郎は手ぶらで帰ってきたというから、そこになにか祈禱所のようなものでもあって、拝んでもらいに行ったのではないかと、勘解由は今までそう簡単に片づけておいた。

――ひょっとすると、その祈禱が効いたかな。

まさかとは思うが、自分もまた昨日はお粂を柳橋へ呼んでいる。お粂の母親のお国も行者のようなことをやっていた。

そんなものが効くもんかと、勘解由はよく冷やかしたもんだが、しかし効くと信じている者には妙によく効くことがある。世の中には理外の理ということもあるらしい。

「あんたはそんなにあたしをばかにするけれど、いまに思いあたることがあるから、よくおぼえておくといいわ。あんたのおかみさんになるひとは、幾度もらったって三年目にきっと死ぬ。あんたはこれからおもしろいように出世するけど、その運も四十五どまりで、後はもうだめ」

お国はよくそういっていたが、自分がすてられることまでちゃんと知っていたようだ。

そして、勘解由はそのとおり、お粂が腹へ入ってまもなくお国をすてて、手塚家へ養子に入った。

その時の家つきの娘は、三年目に難産で母子

とも死んでいるし、次に女房にした娘も三年目が無事にすんだので、それ見ろと思っているうちに、半年だけ命がのびただけで、これも死んだ。

勘解由もさすがにその後は正妻というものを持たずに今日になっている。

昨日、急にお条に会いたくなったのは、別に親子の名乗りをあげるつもりではなく、自分もすでに四十六になっている、ふっとお国の言葉を思い出したのと、お条は自分の血をうけているせいか、かなり常軌を逸した娘になっていると聞いていたので、なんとなく会ってみたくなったからだった。

そのお条は、ちょうど自分がお国をすてた年ごろになっていて、あまりにも母親そっくりなのにまずびっくりさせられた。しかも、いうことまでが母親とおなじで、

「――あなたの運はこれから下り坂で、今までは順風に帆をあげていた船だったのが、これからはその風がぴたりとなくなります」

と、まじめな顔をしていっていた。

いまさらそんなことを気に病むほど老碌はしていないが、そういう自分の経験からみても、祈禱やまじないが絶対に効かないとはいいきれない。

しかし、問題はそんな詮索ではなく、現に船で向島へ向かっている若殿を、どううまく始末をつけるかということである。

――なあに、手はいくらもある。

あくまでも自分の才能を信じきっている勘解由は、たばこ入れをしまって、ゆっくりと立ちあがった。

夜の楽屋

そのころ、偽若殿の平馬と茂太郎をのせた屋根船は、蔵前沖あたりをのんびりとこぎのぼっていた。

月代をきれいにあたって、髷の形を若殿とおなじように結いあげ、衣装もおなじに着せつけられた平馬は、茂太郎が見てさえびっくりするほど、亀之助とそっくりの顔形になっていた。ただ、平馬のほうが色白の上に、骨組みががっしりとしている。

幸いというのも変だが、若殿が一服盛られたらしいということは、もう近習たちの間にも知れわたっているから、なるべく病みあがりといった心ぐみで体つきを弱々しくしてみせれば、色の白いのは毒薬のせいにしてごまかせる。

「人間の目というやつは、こんなにあやふやなもんなんですかなあ」

茂太郎は昨夜からそれを何度もくりかえしている。

亀之助がやっと眠りからさめてきたのは、昨夜の九ツ（十二時）すぎであった。しきりに水をほしがり、

「ここが苦しい」

と、胸をかきむしってみせるかと思うと、

「ここが痛い」

と、子供のように頭痛を訴える。

病室へは乳母のお種と娘の初枝をむかえて、茂右衛門がつききりで介抱したが、明け方近くになって、病人はもがきつかれたせいか、うつらうつらとふたたび眠りに入った。

平馬が茂太郎の迎えをうけて、亀之助とはじめて対面をしたのはその時である。

「これで落ち着いてくれれば、これに越したことはないのだが」

別間にさがった時、茂右衛門はげっそりと疲れた顔をしながら、それでもほっとしたようにいっていた。それは、自分がずっと手塩にかけてきた若殿だけに、肉親の愛情から出るような、しみじみとした声音だった。

「しかし、明日の遠乗りはとても難しいでしょう」

茂太郎が暗い顔をしていうと、

「うむ、そうだな」

茂右衛門ははっとそこへ気がついたように、はじめてまじまじと平馬の顔を見なおし、
「平馬どの、この度はお世話をかけます」
と、改めてあいさつをした。
そのなんとなく度を失っているような、心痛にやつれた老人のすがたを見ているうちに、平馬はいつか老人をあわれむ気持ちになり、心から親しみをおぼえてきた。
「御心配でしょうな、御老人は」
「かたじけない。――しかし、負けてはいられない時です。なんとしても勝たなければならぬ」
茂右衛門は虚勢を張るように、胸を張って座りなおしていた。
「とにかく、今のうちに平馬どのに支度をなおしておいてもらってはどうでしょう」
茂太郎はあくまでも現実的であった。
「うむ。これで、夜があけるまでにすっかり本復してくれれば問題はないのだが」
「それは無理でしょう。とても馬にのれるまでにはいかぬと思います」
「いや、船という手もある」
「場合によっては、そのまま道中へ出なければならないのでしょう」
「その道中だけを、迷惑でも平馬どのにたのむ」
見合いだけはなんとかしても本人にさせたいのだろう。できれば、無論、それがいちばんいいのだ。
「とにかく、支度だけはしておきましょう。むだにはなりません」
茂太郎はもどかしくなったとみえて、押しつけるように自分でそうきめ、平馬をうながして次の間へ立った。
そこは四畳半のかくれ間のようにこしらえてあって、米次郎が一切の支度を用意して待っていた。
月代をそって、髷さえ結いおえれば、後は着物をきかえればいいのだから、そう手間はかからない。

「茂太郎さん、あの初枝というのは、若殿と乳兄妹のわけだな」
「そうです。年もおない年です」
「あれが第一番の御愛妾なんだろう」
「そういうことになります」
「部屋も母屋のほうへもらっているはずだな」
「なるほど――」
どうして平馬がそんなことを口にするのか、茂太郎にもやっとわかってきた。
若殿が初枝に手をつけたのは十五の時だから、もう十年にもなる。いちばん気心が知れているので、手まわりの用はなんでも初枝にいいつけているが、寝間の用はほとんどないようだ。そういう初枝の目が、ほかの愛妾やこれはと思う腰元たちに鋭く光っていないはずはない。
「わかりました。さっそく聞いてみることにしましょう」
「それがいい。――もう一つ、わしが若殿に見えるかどうか、その目ききも初枝にさせてみるのがいちばんたしかだろう」
そんなことを話しあっているうちに、米次郎の手で平馬はどんどん若殿にこしらえられていった。
「若だんなさま、ごらんなさいまし」
支度ができあがると、まず真っ先にそういったのは、いつも口数のすくない米次郎で、自分がこしらえあげただけに、すっかりと興奮しているようだ。
「なるほど、そっくりだなあ」
茂太郎は唖然として、何度も自分の目を疑ってみた。
無論、正体をちゃんと知っているから、どこか違うところはある。が、だんだん見ているうちに、その違うところがはっきりしなくなって、目がくらくらしてくるのだ。
「人間の目なんて、あてにならんもんですなあ」
茂太郎はなにか恐ろしい気さえしてきたので

ある。
「そうか——。これもなにかの因果ということになるんだろう」
平馬は苦わらいをしながら控えの間へかえって、正面の上座へついた。
「父を呼んでみましょう」
茂太郎は三畳の茶室へ入っていった。我にもなくそこに仰向けになって昏々と眠っている若殿の顔を見て、たしかに違うところはあるんだがなあと思った。
むしろ、若殿は相当苦しんで、いつもより面やつれが目立つので、こっちが偽物のような気さえしてくる。
「初枝さん、ちょっと顔を貸してくださらんか」
父よりは初枝に目ききをさせたほうがたしかだと思ったので、茂太郎はそっと声をかけてみる。
年だから落ち着いてはいるが、だれよりも若殿に深い愛情を持っているのはこのひとなのだから、初枝の目は悲しみと心痛にとざされて、怪訝そうにこっちを見る。

若殿ぶり

「まあ——」
病間からこっちへ出てきた初枝は、ちらっと偽若殿のほうを一目見るなり、びっくりしてそこへ座ってしまった。そして、わが目を疑うように、まじまじと平馬の顔を見入っている。
「どうだ、よく似ているかね」
平馬はいささか照れて、苦わらいをうかべながら聞いてみた。
「はい、お声までそっくりでございます」
初枝はまったく唖然としているようだ。
「しかし、どこか違うところはあるだろう。あなたの目から見て」
茂太郎はそれとなく初枝の顔色を見のがすまいと、真剣な目になっているようだ。
「さきほど病間でお目にかかりました時も、よ

く似ていらっしゃるとびっくりしましたが、こんなにそっくりだとは思いませんでした。お身なりのせいでございましょうか」
「どうだろう、ふいに出会ったら、初枝さんでも見まちがえるだろうか」
「さあ、どこかお違いになるところは、たしかにあるようではございますけれど」
ふっと初枝の顔が赤らんできたのは、うっかり間違えてはそれこそ取りかえしのつかないことになりそうだと気がついたからに違いない。
「平馬さん、これなら自信を持っても大丈夫そうですな」
茂太郎はほっとしたようにいう。
しかし、偽若殿がどんなにうまく成功しても、肝心の本物が早く正気にかえってくれなくては、一切が徒労におわることになる。
その亀之助は、夜があけてから二度目の眠りからさめたが、強い薬が脳をおかしたとみえて、一切の記憶を失ってしまっていた。
「そちはだれだ」
だれの顔を見てもそう聞くだけで、
「まあ、若さまは初枝の顔までおわかりにならないのでございますか」
と、初枝はたまりかねて、必死にすがりついていったが、
「初枝——初枝か。だれだったろうな」
亀之助は当惑したように、小首をかしげているだけである。
「狂ってしまわれたのだろうかな、平馬さん」
茂右衛門は悲痛な面持ちで聞く。
「いや、たぶん眠り薬が脳に残っているからで、それさえさめればもとへかえるのではないでしょうかな」
平馬はそうなぐさめておいたが、無論、自信があるわけではない。
「とにかく、若殿は必ず本復されることとして、こっちは筋書きどおり、打つだけの手を打って

いくことにしましょう」
茂太郎はあくまでも現実的だった。
そういわれてみると、平馬としてもやれるだけはやってみなければならない立場に立っているのだ。
幸い亀之助はただ白痴のようにぽかんとしているだけで、いまのところ急に凶暴になるという心配はなさそうだ。そこで、まだ屋敷うちの者が起き出さないうちに、病人は茂右衛門がおぶって、乳母のお種の隠居所へひそかに移した。これは、乳母と初枝が介抱して、だれにも知れないように正気にかえる日を待つほかはない。
偽若殿の平馬と茂太郎は、昨夜から一睡もしていないので、ともかくも茶室で一眠りすることにした。その間に、米次郎にいいつけて屋根船を一艘裏門前の桟橋へ用意させておいたのである。
二人が茂右衛門に呼び起こされたのは、やがて五ツ半（九時）ごろだった。
茂右衛門はすぐに中屋敷用人成田清右衛門を呼び、
「若殿にはこれから船にて向島へお立ちになる。近習どもは予定のとおり騎馬にて出発して、長命寺の前あたりで若殿の船を待ちうけるよう申しつけてくれ」
と、いきなりいいわたした。
若殿が一服盛られたらしいということは、すでにたいていの者は知っている。ただ口に出してそれを話題にしないだけだ。
「若殿はお船でまいられるのでございますな」
清右衛門はびっくりして家老の顔を見なおしていた。
「うむ、茂太郎が供をする。船の用意はしてあるから、その手配には及ばぬ。それと、馬は船よりも早いから、近習どもに落ち着いて支度をするようにと注意しておいてくれ」
「御家老さま、若君は本当に大丈夫なのでございましょうな」

「実は、清右衛門、万一だめなようなら、茂太郎が途中から船を引きかえすことにしているのだ。今日の供頭は千葉兼之進か」
「さようでございます」
「供頭だけには、そっと耳に入れておいたほうがいいだろう」
「かしこまりました」
律儀な清右衛門は、やっぱりそうだったかというように、暗い顔になりながら母屋のほうへ引きかえしていった。
まもなく、若殿は茂右衛門と茂太郎に両方から支えられるようにして茶室を出て、裏門の前の桟橋から船へ乗りこんだのである。
「近習どもは今ごろさぞかしびっくりしているだろうな」
「いや、手前は勘解由のほうが、それよりもあわてているのではないかと思います」
「なるほど、さっそく次の手段を考えているかも知れないな」
「勘解由の手は、どうもがいても姫屋敷まではとどかないでしょう。そのかわり、姫屋敷に福姫さまという大敵がひかえております。若さまはもうなにか成算がおありでございましょうか」
茂太郎は、余計なことに頭を使わずに、まず当面のことを考えてくれといいたそうな顔つきである。
「さあ、そのほうはまるっきり見当がつかぬ。まあ、また考えようもない。出たとこ勝負でぶつかってみるほかはないな」
「そうでございましょうか」
茂太郎はちょっと不服そうである。
「わしがもし本物でも、茂太郎はそういう注文をつける気だったのか」
平馬は苦わらいをしながら聞いてみた。
「いや、本物にそんな注文は無理です。あなたさまですから、安心して注文をつけるのでございます」
「はっきりしているんだなあ。じゃ、本物なら

どうする気だったんだね」

「なるべくお廊下を借りて、場合によっては早く切りあげる。後のことは古河様におすがりする覚悟でいました」

「そうか。それで、わしならどんな注文があるんだろうな」

「それは、昨夜もお願いしましたとおり、これから国もとへ行って帰ってくるまで、他の縁組みは黙殺しておいていただき、こちらへお輿入れの気がまえを見せておいていただく、最悪の場合でもそれだけはおすがりしてみてもらいたいのです」

「なるほど、国もとへはどうしても行ってこなければならないんだな」

「そうなのです」

「どうだろう、勘解由のほうは、こっちが国もとへ行くことを、およそ計算に入れているだろうか」

「今のところでは、まだまさかと思っているのではないでしょうか。若殿のお国入りには公儀の許可が必要ですからな」

「なるほど――」

「どういそいでも、手続きに十日ぐらいはかかりましょう。ぐずぐずしていれば殿さま御出府の行列と途中で出会うようなことになってしまいます」

それはそれとして、まず福姫をくどくという大役がある。はたしてうまくいくかどうか、これだけは平馬にもちょっと自信が持ちかねる。

姫屋敷

船が長命寺の近くの桟橋へついたのは、もう昼に近い時刻だったろう。

馬を土手の桜の木につないで、相当待ちくたびれていたらしい近習どもが、それと見るといっせいにぞろぞろと土手をおりてきた。この辺は相当河原が広いから、桟橋までは歩きである。

偽若殿は艫に立って、近習たちが近づいてくるのを待っていた。

今日はおだやかな春日和で、若草に埋められた河原一面にうらうらとかげろうがもえていた。

ともかくも、毒殺されかけた若殿がしゃっきりと艫に立っているのを遠く見た近習たちは、はっとしたようにだれからともなくこっちへ走り出した。

「一同喜んでいるようでございます」

そばにひざまずいている茂太郎が、そっと告げながら、目は油断なく近習たちの様子を見ているようだ。

「先頭は今日の供頭千葉兼之進、そのうしろに二人ならんでいるのが、右が矢頭金吾、左が加藤市兵衛――」

茂太郎が教えている間に、近習たちは桟橋の前まできて、一同そこへひざまずき、

「若殿さまにはごきげんうるわしくいらせられ、大慶至極に存じます」

と、千葉兼之進があいさつをして、そろっておじぎをする。

「出迎え大儀――」

それでいいか悪いか、そこまで打ち合わせはしていないから偽物にはわからないが、かまわず自分流にやってのける。

「はっ」

一同が感激したようにもう一度おじぎをしたところを見ると、まだだれも疑ってはいないようだ。

「茂太郎、まいるぞ」

少し元気がよすぎたかなと、我ながらおかしかったが、びくびくしていては余計妙なことになりそうなので、偽若殿は颯爽と船から桟橋へおりた。

「若さま、目まいなどいたしませんか」

うしろからついてきながら茂太郎がそう聞いたのは、病人を忘れるなという注意なのだろう。

「もう大丈夫だ。心配するな」
「しかし、まだ油断なすってはいけません」
その間に千葉兼之進と矢頭金吾が走りぬけて先導に立つ。
——なるほど、大名という稼業もまんざらすてたものじゃないな。
偽若殿ちょいといい気持ちである。
「兼之進、心配いたしたか」
つい口がきいてみたくなる。
「はっ、昨夜は一睡もしておりませんので、さきほど土手でうさぎのまねをいたしました」
兼之進は前を向いたまままあかるくこたえる。
「そうか、そのほうたちにも心配をかけたな」
家来たちにとっては冗談ごとではなかったのだと、平馬は思わず胸をうたれて、神妙な声になっている。
土手へあがると、先頭は牛ノ御前のほうへ道をとる。花にはまだ二十日あまり早いから、土手にはほとんど人通りはない。
——はてな。
やがて牛ノ御前の向こう角までできて土手をおりると、そこの土手下に立って、じっとこっちを見ている女がある。たしかにお粂だ。
偽若殿は知らん顔をして通りすぎたが、お粂はあっけにとられたような顔をして、偽若殿を見送っていたようだ。
今日の供の中に平馬がいると思って見にきたのだろうが、それが若殿になっているので、すっかり戸惑いしてしまったのだろう。
牛ノ御前と料亭平石との間の道を入ると、右手は三囲稲荷の裏手になり、その裏手がつきて横手へ入る道の向こう角が姫屋敷だった。
「小森亀之助さま、お着き」
先頭の金吾が走っていって門内へ触れこむと、待ちかねていたように、中間が門を八文字にひらき、別の中間がその間に表玄関へ走って、
「小森亀之助さま、ただいまお着きい」
と、奥へ触れこむ。

用人塚越助左衛門がすぐに若侍一人、腰元二人をつれて玄関へあらわれ、一列に座って両手をつかえながら若殿を出迎える。
茂太郎がそれへ進んで、
「わざわざのお出迎え恐れ入ります。主人亀之助さま、遠乗りの途中お屋敷の前へかかりましたので、福姫さまのごきげんうかがいに立ち寄りましてございます。お取り次ぎくだされば ありがたきしあわせに存じます」
と、来意を告げる。
「ようこそお立ち寄りくだされました。遠乗りの途中なれば、お縁先のほうがお気軽でよろしかろうと、姫君さまお廊下にてお待ちかねにござります。ただいま御案内いたさせます」
老用人は気さくにこたえて、ふっと若殿の顔を見あげ、思わず老いの目をみはる。
助左衛門ばかりでなく、若侍のほうは昨日長命寺の裏口でやりあった小堀孫作だし、腰元二人もその時床几にいた顔だから、あっとみんなこっちを見てびっくりしているようだ。
偽若殿は知らん顔をしている。
「孫作、御案内申せ」
「はっ」
孫作は立って内玄関のほうへいそぐ。
茂太郎はむっとした顔つきだ。
「お待たせいたしました。御案内つかまつります」
まもなく右手の内木戸から出てきた孫作が、若殿のほうへいって会釈をする。
「一同、まいれ」
偽若殿は近習たちをうながして、孫作のあとにつづく。
「若さま、これはちと手ごわいようです」
うしろから小声で茂太郎がいう。
遠乗りのついでというのは口実で、今日のお見合いのためにわざわざと出てきているのだ。しかも、昨日は父茂右衛門が打ち合わせにきて、ちゃんと贈り物までしてあるはずである。

客は当然書院へとおすのが礼儀だ。それを庭先で追っ払おうというのは、無論、福姫のいいつけなのだろうが、失礼千万である。

いや、失礼のほうは我慢もするが、福姫の気持ちがそう冷たくては、とてもこっちの希望はかなえられそうもないと、そのほうが心配になってくる。

「心配するな。まかせておけ」

偽若殿はそっと答えて、ここまでくるとかえって度胸がすわってきた。

建物の西がわをまわって、南の奥庭へ出ようとするところにも内木戸がある。そこを入ると、大きな泉水が目について、その泉水を前にして奥の書院の廊下が見える。

泉水の向こうの築山あたりから、野うぐいすのないているのがいかにものどかである。

――徳蔵はきているだろうか。

平馬はふっとそんなことを思い出す。きていればあの築山の向こうだなとも思う。

気がついて、ひょいと廊下のほうを見ると、盛装の福姫が腰元四、五人をしたがえて、すらりとそこに立っている。そばに老用人が座っているから、もうなにか耳打ちをされているのだろう。福姫のきつい目がじっとこちらをにらんでいる。

築山の四阿（あずまや）

「若殿、福姫さまのようです」

すぐうしろからついてくる茂太郎が、小声で偽若殿の平馬に注意した。ちょっと怒ったような声音にきこえるのは、さすがについ緊張しすぎているせいだろう。

「うむ」

偽若殿は鷹揚（おうよう）にこたえて、さあ真剣勝負だぞと思いながら、少しもためらわずに、まっすぐ福姫のほうを見て廊下先へ進んでいった。

剣の奥義では、心をどこへもおくなと教えている。無念無想になれば、敵の気持ちが自然にこ

っちの心の鏡にうつってくるというのである。

平馬はその心がまえで福姫にぶつかっていくつもりだ。

福姫は決してそう美人という顔ではない。ただ、そのふっくらとした色白な面立ちに、育ちだけの気品をそなえ、いちばん目立つのはいきいきと張りのあるいかにも強情そうな目だ。

その目が今日は特に闘志に燃えているようだから、気の弱い者にはまともに目をあわせかねるものがあるだろう。

「福姫さま、おじゃまをします」

偽若殿はくつぬぎ石の前へ立って、微笑しながらまず軽く会釈をした。

福姫はじっとこっちの顔を見おろしながら、これはたしかに昨日の浪人者に似ているとでも思っているのだろう。

「あなたは小森亀之助さまですか」

と、冷たい声で詰問するように聞いた。

そばにひざまずいている老用人は、じろりとついてきた家来どもの顔色を見ているようだ。左右にひかえている腰元たちは、どうなるかというように体中をかたくして、顔をあげている者は一人もない。

一瞬なんとなく重苦しい空気が流れる。

「そうです。わしは亀之助ですが、どうかされたのですか」

偽若殿はふしぎそうに福姫を見あげながら聞く。

「本当に亀之助さまですね」

これはいささか失礼にあたる言葉だから、なんにも知らない家来どもははっとしたにちがいない。

「おどろきましたなあ。わしは本当に小森亀之助です」

「では、勇気があるはずですね」

「男ですからな、勇気はあります」

「知恵もありますか」

さすがに老用人がおどろいたように、福姫の

顔を見あげている。
「知恵というと、たとえばどんな知恵ですか」
偽若殿はわざとぽかんとした顔になる。
ここまできて、福姫はふっとわが目を疑ってきたのだろう。昨日の浪人者は五分月代で、無論、身なりも歩き方も違っていたはずだからだ。
「楓、亀之助さまを築山の四阿へ御案内なさい。福も後からすぐまいります」
福姫は腰元の一人にいいつけてから、
「助左、小森家の供の者に、ここで茶菓をもてなし、ゆるりと休息させますように」
と、老用人にいいつける。
「亀之助さま、あちらで知恵のお話をしますから、しばらく待っていてください」
「承知いたしました」
要するに、二人きりになってもう一度勝負をする気なのだろう。福姫は腰元どもをうながして、ゆうゆうと奥へ引きとっていく。
――なかなかやるなあ。
平馬は内心好奇心さえわいてくる。
「亀之助さま、四阿へ御案内申し上げます」
これも昨日長命寺で顔見知りの楓という腰元が、庭下駄をはいてこちらへまわってきた。
「さようか」
偽若殿はおっとりとこたえて、楓のうしろにしたがう。
老用人がまだ廊下にがんばっているので、偽若殿は茂太郎のほうや近習たちのほうはわざと見向きもしなかったが、みんな相当に緊張した顔色になっているようである。
「さあ、御家来衆、姫君のおゆるしである。みんなこっちへきて掛けさっしゃい」
老用人ははじめて気さくに庭の一同に声をかけていた。
築山の四阿というのは、泉水の東がわにあって、そこへのぼると東から南へかけて広々とした葛飾の田畑が一望のうちにながめられ、そのはるか野末に筑波山が顔を出している。

西はこの屋敷の泉水をながめて、その向こうは三囲稲荷の森になっている。
「そちは楓というのか」
「はい」
「姫君は今日、ごきげんが悪いのか」
「いいえ、いつものごきげんでございます」
「こわい、御気性がはげしい、よくお腹立ちになる、そのようなことはないか」
「でも、さばさばとした御気性でございますから、後はすぐおなおりになります」
楓はもう二十二、三になっているかも知れない。少し顔を赤らめながら、なんでもはっきりと答えてくれる。
「こんどの縁組みの話、あまりお気がすすまれないようか」
「さあ、どうでございましょうか。あたくし――」
これは返事ができないようだ。
「ほかにも、どこか縁談がまいっているように聞いたが、本当か」
「そのように承ってはおりますが、あまりお話には出ませんので」
そんな話をしながら、いつか四阿へついたので、
「こちらでございます。しばらくお待ちくださいませ」
楓はそういって、いそいで引きかえしていった。これも福姫の耳に入れることになっているのだろう。
――さて、こんどの勝負はどうなるかな。
無論、平馬は場合によっては、こんどは仮面をぬぐつもりでいる。福姫に全然縁組みの意志がなければ、偽若殿のままであっさり引きあげるよりしようがないが、少しでもその気があるようなら、仮面をぬいでからの上でないと、協力をたのむわけにはいかない。
茂太郎は小森家のことばかりを考えているようだが、こっちの都合で一人の女性をだますと

いうのは、男としていちばん罪深いことなのだ。

――それはそれとして、お粂はどうしたろうな。

四阿の陶器の椅子にかけながらそんなことを考えていると、目の下の木の間がくれの道を、腰元が一人のぼってくるのが、ちらっと見えた。

その紫矢絣が一度右のしげみにかくれたと思うと、まもなく坂の上り口へまわってきた。見ると、腰元ではなくて、昨日のように腰元姿になった福姫なのである。

「やあ、お姿がかわりましたな」

のびのびとした肢体に春の日ざしをいっぱいあびて、坂道をあがってきた顔は少し汗ばむように上気している。その健康そうな、どっちかといえば大柄で肉づきのいい引きしまった立ち姿は、ひどく新鮮な感じで美しい。

「亀之助さま、あなたは昨日たしかに一度、福をためしにまいったでしょう」

前に立つなり、福姫は怖い顔をしていきなり切りこんできた。

「福はひきょうなまねはきらいです。それに、あなたは今日、遠乗りではなく、お船だったといいますね。お馬には乗れないのですか」

つづけざまに二本、竹刀で面へ打ちこまれた感じで、これはひどく手きびしいぞと、平馬は思わず目をみはってしまった。なによりも、だまされているということが、とても癇にさわって、腹が立つらしい。

受け太刀

「姫君は立派な勇気をお持ちのようですなあ」

これ以上若殿の仮面をかぶっていてもむだと見てとったので、平馬はわらいながら、とにかく受け太刀のほうへまわる。

「福には、福だけの知恵もあります」

「お立派なお言葉です。昨日茂右衛門がまいって、なにかお耳に入れませんでしたか」

「茂右衛門がまいった時、福は長命寺へ出かけていましたから、なにも聞きません」

「なるほど。すると、茂右衛門が帰ったので、助左老が姫君をさがしに出たということになるんですな」

「福は小森家の騒動のために利用されるような縁組みはきらいです」

「では、小森家の騒動については、多少ご存じなのですね」

「たとえ女でも、そのくらいの知恵分別はあります」

「恐れ入りました。実は、亀之助は昨夕一服盛られて、倒れました」

「なんですって――」

福姫はわが耳を疑うように、びっくりした顔になる。

「お掛けになりませんか。立っていては疲れるでしょう」

すかさず平馬は台の向こうの椅子をすすめてみる。

「もう一度いってごらんなさい。亀之助さまが昨夜どうしたのです」

福姫は台の向こうへきて立ったが、腰をおろそうとはしない。

「亀之助は昨夜、ほんのちょっとしたすきに茶室で一服盛られたらしく、残念ながらいまだに正気にかえりません」

「では、あなたはだれなの」

「昨日長命寺でお目にかかった浪人、長谷部平馬です」

平馬はわらいながら、はっきりと名乗った。

「それを、それを供の者はみんな存じているのですか」

「いいや、だれもまだ知りません。知っているのは茂右衛門と茂太郎の親子だけです」

「どうして、近習たちはまだわからないのでしょう。ちゃんと顔を見ているのでしょう」

「その前日、つまり一昨日、わしは小森の上屋敷へ出向いて、はじめて茂右衛門に会い、亡く

なった母からあずけられていた形見の短刀を五十両の金と取りかえてもらい、その金は乳母に、育ててもらった礼にやってしまいました。乳母というのは徳蔵の母です」

「では、では、平馬は亀之助さまと腹ちがいの兄弟なんですか」

「そういうことになるはずです。しかし、わしは形見の短刀を金にかえてしまったから、もう兄弟ではなく、ただの浪人長谷部平馬です」

「どうしてでしょう。お金がほしかったのですか」

「いや、長谷部平馬のほうが気楽だからです。一服盛られないだけでも安心ですからね」

「昨日もそんなことをいっていましたね。ああ、昨日はもう平馬になったばかりの時」

「というより、勇気と知恵のおかげで、あぶない形見を売ったばかりの翌日ということになるのです」

「福の母も、極く身分の低いお腹さまでした」

福姫はちらっと寂しそうな目になって、

「福にも、福にも平馬のような知恵と勇気があればよかったのです」

と、じっと平馬の顔を見おろしている。

「あなたには知恵と勇気がそなわっています。わしをうらやましがることはない」

「平馬はそんなに亀之助さまに似ているのですか、家来が見てもわからないほど」

「よく似てるようです。だから、昨夜、茂太郎に引っぱり出されてしまったのです」

「亀之助さまはお命は助かるのですか」

「たぶん大丈夫でしょう。いまは頭がしびれていてなんにもわからないようですが、そのうちには正気にかえると思います」

「平馬、福の手を取ってください」

福姫は台の向こうから白々とした両手をさしのべて、たちまち顔が燃えるように赤くなってくる。

「いやですか、平馬」

「どうしたのです、急に」

平馬は立ちあがって、福姫の両手を取ってやる。

福姫はその手をしっかりと握って、熱ぼったい目になりながら、台のまわりをこっちへまわってきて、

「福は、福は、平馬が好きになりました、抱いてください」

そんなことを口走りながら、火のように体ごと胸へ身を投げこんできた。

「わしも姫君は好きだ」

我にもなく平馬はその肩をしっかりと抱きとめて、

――はてな、これはどういうことになるんだろう。

別の心が戸惑いしたようにそんなことを考えはしたが、むらがるような甘い脂粉のにおいにむせ、むっちりと柔らかい女体を体中で感じると、かっと歓喜に狂ったように、福姫のあえいでいる赤いくちびるへくちびるがのしかかっていった。

「平馬、うれしい」

福姫は目をつむって、全身から力がぬけたように男の腕の中へまきこまれ、あらしのように胸をはずませている。

明るい真昼の日ざしをうけて、目にしみるような若葉にかこまれた四阿(あずまや)は、しいんとしてただ燃えているようだ。

後で考えてみると、福姫は十九という年の熟れた肉体のうずきにはけ口を求めえず、激しい気性がいよいよ鬱血(うっけつ)して、自分を持てあましていたのだろう。その激情が平馬という相手を得て奔流したのだ。

平馬もまたその福姫の異常な情熱に男心を呼びさまされ、はじめて女への激しい愛情に目ざめたのである。

平馬も福姫も、ただくちびるだけでは満足できない、次にどうすれば満足するか、それはわ

かっている。が、ここではさすがにそこまでは行きえないのだ。
　満ち足りぬままに、若い男と女の肉体は身もだえしながら絡みあって、いつまでも離れようとしなかった。
　やがて、肉体は疲労を感じ出し、おたがいの胸の中へおたがいの熱情をはっきりと植えつけて、少しずつしずまってきた。
「お福さん、まだ話が残っているんだ」
「平馬、福は平馬のところへお輿入れします。ほかへは行きたくない」
「無論、わしはお福さんを女房にする。しかし、その前にぜひやらなくてはならない仕事が、わしにはあるんだ」
「平馬、福はもうそなたの妻ですね」
「わしは浪人者だが、大丈夫かなあ」
「なにがです」
「櫓下がそんなことを承知するかな」
「承知しなくても、もうしようがありません。福はいつでもこの屋敷を出ます」
「そうか、その勇気があれば大丈夫かも知れない」
「このまま、裏口から出て、平馬の家へまいりましょう」
「待った、その前に仕事がある」
「まだ放してはいや。福はもう離れたくない」
「困ったなあ。わしはいまのところ、まだ小森亀之助なんだからな」
「いいえ、そなたは平馬です。もう福の平馬です」
　福姫は平馬の胸を抱いてなかなか離れようとしない。いや、平馬も福姫の肩を抱いたまま、まだ青春の美酒に酔いながら、口がうわごとをならべているだけなのだ。

お福さん

「はてな。これはやっぱりちょっと困ったことになりそうだぞ、お福さん」

　平馬はふっと気がついていった。
「どうしてです。平馬」
「まあ掛けましょう」
　平馬は福姫をそこへ掛けさせて、両手で肩をおさえつけるようにしながら、姫君の顔を見おろした。
　福姫は少し口をあけて、いぶかしそうに平馬を見あげている。その目も顔も体つきまで、もうさっきの毅然とした松平福姫ではなく、平馬のものになりきっている恋娘の姿だった。
「お福さんはいま平馬のものだといった。わしもお福さんが好きだから、お嫁さんにしようと思う。つまり、松平福姫とお嫁の約束をしたのは長谷部平馬ということになる」
「そうです、福が好きなのは平馬なのですもの」
　福姫はたのしそうにわらっている。
「ところが、ここに立っているわしは、小森亀之助として見合いにきているんだ。そして、福姫さまがお輿入れを承知してくれたら、亀之助はすぐに江戸を立って国もとへ走り、大御所さまの女婿だという力を借りて、三人衆といわれる佞臣どもを取りおさえ、改めて福姫さまとの縁組みを当主佐渡守からゆるしてもらう、そういう大役をわしは引きうけているんだ」
「平馬は悪人どもに命をねらわれますね」
「それはねらわれるでしょう。現に、亀之助はすでに一服盛られているんですからね」
「福が国もとまでいっしょに行ってあげましょう。平馬一人では心配です」
「いや、そこに問題がおこってくるんです。事がうまく落着した後で、平馬は亀之助にかわって小森家の悪人どもを退治しましたと、ここまではだれにでも立派にいえるが、そのかわり福姫さまは平馬がいただきますとはいえないんじゃないか。仮にそんなことを小森家でゆるしたとすれば、小森家は公儀をだましていたことになる。老中としても、小森家十万石の嫡子だから福姫さまとの縁組を進めてきたので、浪人長

谷部平馬では常識からいってもそんなことはありえない、処置に困るんじゃないかと思う。──お福さんはどう考える」
「そんなこと、福はかまわないと思います。平馬は小森家が気の毒だから、小森家を助けてやるのでしょう」
「無論そうです」
「福はその平馬の勇気と知恵が好きになったから、平馬に加勢するのです。少しもおかしいことはないではありませんか」
「すると、今日の見合いはどういうことになるんだろう。まさか、偽若殿だからお輿入れを承知したとはいえないから、亀之助として承知する。つまり、世間をだましておくことになるわけでしょう」
「そんなことはかまいませんというのに。後で、こういう事情があったから、福は平馬が身がわりだとわかっていて、平馬の仕事を助けたのだと話せば、ちゃんと筋はとおります。だましたのだまされたのではなくて、それは小森家を救うためにそうしなければならなかった方便なのです。少しも恥ずかしいことではありません」
福姫は至極簡単にそう考えているようだ。
しかし、この問題はそんな簡単なものではなく、後で亀之助が正気にかえり、万一福姫を横取りされたというような感情を持たれると、そのたたりは中橋茂右衛門父子にも行くことになりそうだし、どう考えても世間からすなおにみとめられる問題ではなさそうである。
が、実際問題として、平馬はすでに福姫と過ちをおかしてしまったのである。世間からいえば、これはたしかに過ちなのだ。いまさらどうしようもない。後のことは後のこととして、ここは知恵と勇気で筋書きどおりに押しきっていくほかに道はない。
「よし、わしは腹をきめた。ここはあくまでも小森亀之助で乗っ切ろう」
「それで、平馬は今日ここからすぐ江戸を立つ

気なのですか」
福姫はもうその気になっているようである。
「わしは早いほうがいいと思っている。ここへ茂太郎を呼んで相談してみよう」
「では、福が茂太郎を呼んであげます」
福姫は立って、坂の下り口まで進み、下のほうへ手をたたいた。
まもなく下から顔を出したのは、さっきの腰元楓（かえで）である。
「楓、茂太郎にここへ一人ですぐまいるように、呼んできてください」
「かしこまりましてございます」
楓は心得て坂をおりていく。
「平馬、茂太郎の前では、平馬と呼んではいけないのでしょう」
福姫は四阿（あずまや）へ引きかえして、ふっと気がついたようにいう。
「そうです。当分は小森亀之助のつもりにしておいてもらいましょう」
「おもしろいお芝居がはじまるのですね」
福姫はいたずらっ子のように目を輝かせながら、差し向かいの腰掛けへ行ってかける。気が強くて怖いもの知らずの上に、毎日退屈しているのだろうから、本当にいっしょに国もとへ行く気でいるのかも知れない。
おもしろいどころか、こっちは命がけの道中なのだ。つれていけもしないし、また屋敷で出すはずもないと思ったが、それを口にしてみても、とめれば余計行きたがる、そういう性分らしいと見たから、平馬はただわらっていた。
「平馬、作州津山まではどのくらいの道のりでしょう」
「百七十里はあるでしょうな」
「幾日ぐらいかかるのかしら」
「旅なれている足で十七日、普通まず二十日はかかると見ておいたほうがいいでしょう」
「箱根峠にはまだおおかみが出るそうですね」
「山賊もいるだろうし、くまやいのししだって

出るかも知れません」

「平馬は強いから大丈夫でしょうけれど、鉄砲を持っていったほうが安心かも知れませんね」

ほおを上気させて、胸がわくわくしているような口ぶりである。

「お福さんは鉄砲も持っているんですか」

平馬はそれとなく話をかえようとする。

「いいえ、鉄砲だけは助左がゆるしてくれません。火薬があぶないというのです」

「馬へは乗れますか」

「そうだ、馬で行けば、百七十里ぐらいなんでもありませんね」

どうしても旅の話から離れようとしない。

「失礼いたします。お呼びでございましょうか」

そこへ茂太郎がきて、四阿の外へ片ひざをついた。緊張した目が、様子いかにというように、素早く偽若殿の顔色を見ている。

「茂太郎、今日ここからすぐ江戸を立ってもよいか」

偽若殿はいきなり切り出してみる。

「はい。すると、姫君さまの御内諾はいただけたのでございましょうか」

「それはいただいた。そちからも姫君にお礼を申し上げてくれ」

「はっ。――福姫さま、御内諾をいただきましたそうで、まことにありがたきしあわせに存じます。小森家一藩の家来どもになりかわりまして、厚くお礼申し上げます」

茂太郎はほっとしたのだろう、感激の色をそのまま見せて、福姫のほうへ礼の言葉をのべる。

「茂太郎、福も亀之助さまといっしょに国もとへ行ってあげます」

福姫はずばりと好意のありったけを見せようとする。

「はっ、それは――」

わが耳を疑うように、茂太郎は愕然（がくぜん）とした顔つきである。

人の目

茂太郎としては、今日は福姫の内諾を得て、土井老中から福姫さまとの縁組みはぜひお受けするようにという当主あての一書をもらい、明日にも江戸を立つ。道中は若殿の資格ではなく、家来の名で急行して、手塚組を出し抜いてもらおうという腹だった。

しかし、福姫がいっしょに行くとまでいい出したことは、無論、ただいい出しただけで実行はできないまでも、福姫が偽若殿にそれだけ好意を持ったことになるから、偽若殿をこしらえて小細工をしたこっちに大きな責任がかかってくる。

これはうっかりした返事ができないのだ。思わず口ごもっていると、

「茂太郎、今日の旅立ちの都合はどうか」

と、偽若殿がうまく口を入れてきた。

「はい、姫君さまの御内諾をいただきました上は、大炊頭（おおいのかみ）さまから国もとの殿さまあてに一書をちょうだいすれば、いつ江戸を立ってもよろしいのでございます」

「その一書はいついただけるのだ」

「今夜にもお願いできるかと存じます」

「さようか。わしの考えでは、屋敷へもどってぐずぐずしていては、手塚らにどんな先手を打たれないものでもない。わしはここで家来の衣類を借り、裏口からひとまず小梅の植徳の家へのがれ、日暮れまでに品川へ入って老中の一書を待つことにする。できれば今夜は川崎あたりまで進んでおきたいと思うが、そちの考えはどうか」

「しかし、裏口からひそかにここを出るというわけにはいきますまい。御当家さまにごあいさつもございますからな」

「そうか、それでは御当家へあいさつをして、一応船へもどろう。家来どもにそう伝えて、支度をさせておいてくれ」

「かしこまりました」
茂太郎はおじぎをしてから、
「姫君さま、今日はありがとうございました。今後ともなにぶんよろしくお願い申し上げます」
と、丁重にあいさつをして立ちあがる。
「茂太郎、また後ほど会いましょう」
「はっ、――はっ」
茂太郎は逃げるようにして築山を去っていく。
「平馬、茂太郎はうれしそうでしたね」
「これもひとえに姫君さまのおかげです」
「だれもいませんから、もうお福さんと呼んでください。そのほうが福はうれしい」
「いや、もう築山をおりるのですから、このまま亀之助でいましょう」
平馬はわらいながら立ちあがる。
「平馬、福はどこで平馬を待っていればいいのです」
福姫はいきなり平馬の前へ立ちふさがって、両腕をつかんでくる。
「お福さんは本当にこの屋敷がぬけ出せるのか」
平馬の両手がつい福姫の肩へいく。
「福は平馬から勇気と知恵を持てと教えられています」
それができると信じきっているような福姫の明るい顔である。
「助左たちが後で責任を問われ、切腹でもするようになったらどうします」
「助左は昨日茂右衛門から事情を打ちあけられて、なんでもよく知っているはずです。福をとめはしないでしょう」
平馬の胸の中へ、ふっと大きな動揺がまき起こってきた。自分はすでにありうべからざる座へすえられてしまっているのだ。そのために起こってくる世の中との摩擦は、自分たちの力で闘っていかなければならない。福姫はどうせ一度は屋敷をぬけ出さなくてはならないのだし、

自分はまたその福姫を敢然としてまもりぬいてやらなければならない男の責任があるのだ。
一度くちびるまでふれておいて、その責任を取らないのはひきょうだ。あくまでも男らしく、この恋に命をかけて闘うべきである。
「お福さん、これだけはおぼえておいてほしい。我々がいっしょになるということは、いまの世の中では非常に難しいことなんだ。だから、恋に命をかけてわしたちはどんなに苦しい立場に立っても、人の命まで犠牲にするのはよそう。そういう時がきたら、むしろ自分たちのほうが甘んじて犠牲になる、そのことだけは忘れないことにしよう」
「平馬は屋敷の者のことを心配しているのですか」
「無論、それもあります。そのほかのことでも、わしたちがうっかりしていると迷惑がどこへ及ぼしていくかわからない」
「平馬、福は人を犠牲にしないかわりに、自分の恋を犠牲にするのもいやです。それではいけませんか」
福姫は必死の目の色になっている。
「それでいいのです。だから、屋敷を出る時はなるべく後で人が迷惑をしないようにぬけ出すのです。わしはたぶん夕方まで徳蔵の家にいるようになると思う。その時は無論、長谷部（はせべ）平馬です。たとえば、夕方前にそこを出るようなことがあっても言づてをおいていきます」
「よくわかりました」
「なるべくなら、こんどは江戸に待っていてくれるほうがいいんだが、無理にとはいいません」
「二十日もひと月も平馬のいない江戸にいるのはいやです。福はきっと夕方までに徳蔵の家へまいります」
それがどういう結果になるのか、平馬にも先のことはわからない。いまは運を天にまかせて闘ってみるほかはないのだ。
さすがにその不安は気の強い福姫の胸にもう

ずいているのだろう、
「平馬、もう一度抱いて――」
と、男の胸の中へ体を投げかけてきた。
平馬もしっかりとその体を胸にうけとめて、肩を抱き、黙ってくちびるを重ねていった。
人目が怖いなどという感情は、二人とももう少しも持っていなかった。
やがて、福姫とつれ立って築山をおりてくると、その坂の中腹に楓が控えて、黙っておじぎをしていた。
「姫君、ずいぶん長い間おじゃまをしました」
泉水のふちをまわって、書院の庭のほうへ肩をならべて歩きながらいうと、
「またいつなりとお立ち寄りくださいませ。なんのおもてなしもできませんけれど」
と、福姫も姫君らしくしゃっきりとして答えていた。
近習どもはもうみんな勢ぞろいして、庭先に待っている。
腰元たちは廊下へ座って、それとなく姫君のほうを見ている。
腰元姿にかわった姫君が珍しいわけではなく、とてもうまくいきそうもないと見ていた見合いが、案外二人きりで長かったのと、いま見る福姫のすがたにはなんとなくさっきと違ったもののあるのを敏感に感じているのだろう。
そこに立っている老用人塚越助左衛門も、びっくりしたように福姫のほうばかり見ているようだ。
「平馬、みんなが妙な顔をしていますね」
福姫は小さな声でいって、平気でわらっていた。

恋ごころ

お粂は牛ノ御前の前あたりの土手に立って、小森家の若殿が近習たちに見送られ、若草の河原を踏んで、そこの桟橋から屋根船に乗りこむのを、はるかにながめていた。

――平馬さんがどうして若殿になんかなったんだろう。
髷の形から身なりまで、すっかり若殿姿にはなっているが、それはたしかに平馬にちがいないのである。
昨夜、お粂は九ツ（十二時）すぎまで浜町の中屋敷にひそんでいて、平馬と茂太郎がそっと茶室へ入りこむのを見とどけてから、もう大丈夫と見て家へ帰ってきたのである。
考えてみると、どうして二人はそんな時刻に急に茶室へなど行ったのか、いや、若党米次郎がなぜ二人を迎えにくるようになったのか、そこになにか秘密があったにちがいない。
――あの時、もっと茶室へ近づいて見てくればよかった。
こっちはそれが目的ではなく、悪人どもがなにかたくらむようならと、そればかり考えていたので、そんな様子はない、屋敷うちも寝しずまっているようだし、もう大丈夫だろうと見て引きあげてきたのである。
それにしても、若殿に化けて福姫と見合いなどして大丈夫なのだろうか。ほかのことと違って、一つ間違えば福姫をだますことになってくるのだ。なんだってそんなあぶないまねをしなければならなかったんだろう。
お粂はどうにも不安でたまらない。しかも、行きに一度、帰りに一度、平馬はこっちを見ようともせず、冷たい顔をして通りすぎている。うっかり声でもかけられたらと、それを用心したのだろうけれど、そんなあさはかなあたしじゃないのにと思うと、それもなんとなく悔しい気がする。
船はいつか桟橋を離れて、舳を斜めに河心のほうへ向け、川下のほうへゆっくりこぎ出したようだ。
それをしばらく見送っていた家来たちは、やがて土手のほうへ引きかえしてきて、それぞれ桜並木につないである馬に乗った。

ほこりをかぶっちゃたまらないと思ったので、お粂はいそいで土手を河原のほうへおりていった。
ちょうど目の前を河心に出た平馬たちの屋根船が通りすぎようとして、あいにくのぼってきた帆かけ船のかげになる。
土手の上を近習たちの騎馬がひづめの音高く通りすぎていった。
――あの船のあとを追ってみようかしら。
しかし、船はどうせ浜町の中屋敷へかえるのだ。昼間では中へ入って平馬をさがすわけにはいかない。
やっぱり日の暮れるのを待つほかはないと、そんなことを考えながらお粂は土手へあがって、目はやや川下になった船を追いながら、吾妻橋のほうへ歩き出す。
「ひどいわ、兄さんは。妹の気持ちなんかちっとも考えてくれないのかしら」
お粂はなにかもの寂しい。正直にいえば、平馬に若殿などの身がわりになってもらいたくないのだ。
「お粂、また会ったな」
ふっとうしろから肩をならべてきたのは鬼吉のようだ。
「なんだ、おまえまたあたしの後をつけていたのかえ」
お粂の全身がとっさに闘志にあふれてくる。というより、鬼吉の男くさいにおいをかいだだけで、肌が鳥肌立ってくるのである。
「しょってやがる。おれは当分平馬小僧に用があるんだ」
「ふうん、どんな用があるのさ」
「気になるか、お粂」
「さあ、どうだかねえ」
「かわいそうになあ。おめえはどうやら平馬小僧に夢中になり出したようだが、そいつは今のうちにあきらめたほうがいい。あいつはそのうちに味方から一服盛られてしまうやつだ。だから、おれを軍師にしろと親切にいってやっているのに、強情だからいけねえ」
「どうして味方から一服盛られるのさ」
お粂はどきりとせずにはいられなかった。
「おめえ、平馬がどうして今日、若殿の身がわりになったか、そいつは知っているんだろうな」
「あいにく知らないねえ」
「なあんだ。おめえ、ゆうべ浜町の中屋敷へ入りこんでいたくせに、あそこの茶室をのぞいてみなかったのか」
畜生、鬼吉もゆうべ中屋敷へしのびこんでいたのかと、内心びっくりはしたが、
「あたしはこれでも女だからね。おまえのようにずうずうしいまねはできないのさ」
と、空っとぼけておく。
「よかろう。それじゃ、あきらめのいいように話してやろう。おれはゆうべ茂太郎が小梅の植徳の家をたずねたとわかって、ああそうかとおよその見当はついていたが、その勘に狂いはなかった。あの茶室で本物の若殿は手塚組に一服盛られていたんだ。どうやら命は助かりそうだが、今日の見合いには間にあいそうもない。平馬は亀之助と腹違いの兄弟で、双子といってもいいほどよく似ているんだ。そこで、忠義者の中橋親子が相談して今日の一幕になったんだが、こんなことが公儀へばれてみろ、中橋親子が切腹したぐらいではすまねえ。それをうまくほおっかぶりしおおせるには、平馬を利用するだけうまく利用しておいて、最後にだれにも知れないように一服盛る手よりほかはない。――どうだ、わかったかね」
鬼吉は人ごとのようにいって、にやりとわらっているようだ。
亀之助が一服盛られたというのは初耳だったが、そうわかってみれば平馬が若殿の身がわりにされたのもなるほどとうなずけてくるし、その身がわりが見合いをするなどという相手を小ばかにしたようなまねをすればただではすまな

いんじゃないかと、お粂もいまそれを心配していたところだから、味方に一服盛られるという鬼吉の言葉は、痛いほど胸へ突き刺さってきた。
が、鬼吉の前でびっくりした顔はしたくないし、どうしてこの男がそんなことをわざわざ親切ごかしに知らせてくれるのか、その真意がわからないうちは、うっかり油断もできない。
「利用するだけするって、中橋親子はこの上どうあの人を利用しようっていうんだろう」
「茂右衛門にしても茂太郎にしても、今日こんなあぶない芝居をしたのは、福姫の名を借りて三人衆を倒したいのが一番のねらいなんだ。早くやつらを片づけなくては、自分たちの身があぶない。茂太郎は偽若殿をつれて今夜にも国もとへ立つ気なんだろう。かわいい男を殺したくなかったら、いまのうちに平馬をつれて逃げたほうが安心ということになりゃしないかね」
「どうもありがとう。なんだって、おじさんはまた、急にあたしにそんな親切がしてみたくなったんだろうね」
「おれは元来は親切な男なんだ」
「それが、おかみさんをだれかに取られてから、不親切な男になったんだってね」
「ふん、相かわらず口の減らねえあまだ。いまに見な、おめえだって好きな平馬をだれかに寝取られりゃ、お粂狂乱てことになるんだ」
「さあ、それはどうだかねえ。その前に、あの人は中橋親子に一服盛られちまうんじゃないかしら」
「どっちにしても、おめえにゃ縁のうすい男らしいな。まあ、しっかりやってみな」
ちょうど源森橋をわたりきって、鬼吉はにやりとわらってみせながら、ぷいと昨夜のかわら焼き場のほうへ別れていく。
――畜生、あたしをからかいにきたのかしら。
お粂には鬼吉の気持ちがどうにもわかりかねる。しかも、平馬の船が目の前をこぎ下っているのに、それを捨ててどこへ行く気なのだろう

と、思わず鬼吉のうしろ姿をにらんでいた。

中間右助

時刻にすれば、やがて昼すぎごろだろうか。よく晴れた春日和なので、吾妻橋は今日もきびすを接するほどの行き来の人で橋いっぱいに人が盛りあがっているように見える。
お粂はその東たもとを走りぬけようとして、
「もし、失礼ですが、三間町の行者さんでござんすね」
と、うしろから声をかけられて、はっと立ちどまった。行者さんと呼ばれたのが耳なれないからである。
見ると、中間風の若い男が、ていねいに小腰をかがめている。
「どなたでしたかしら」
わざと小首をかしげながら聞いたが、ゆうべ茂太郎の後をつけていた手塚の中間にちがいないと、すぐ頭にはぴんときていた。
「手前は昨日柳橋へ行者さんにきていただいた手塚の中間で右助と申します」
「ああ、小森さまの御家老さまでしたね」
「そうでございます」
「昨日お迎えにきてくれたのもあなたでしたかしら」
「いいえ、昨日お迎えにあがったのは左助のほうでございます」
「そうだったかしら――。なにか御用なんですか」
こっちは平馬の船が気になるので、そわそわせずにはいられない。
「実は、主人に申しつけられまして、お迎えにきましたんで。主人はすぐこの橋をわたった船宿へまいっています。ちょっとお立ちより願えませんでしょうか」
「あら、御家老さまがきているんですか」
「はい、船七という船宿なんです」
「でも、どうしてあたしがここにいるのがわか

ったのかしら」
お粂はわざと不審そうな顔をしてみせる。
「三間町のほうでうかがいましたら、ことによると小梅の植徳さんかもしれないとうかがいましたんで」
年はまだ二十二、三だろうか、中間ずれのしていないきびきびした男ぶりで、顔にひどくあいきょうがある。
――そうか、手塚が今日の見合いをうっかりしているはずはない。
それは前からそうだろうと考えてはいたが、そのまわし者がこっちを見つけて手塚に知らせたので、それでこの男を呼びによこしたのだろう。平馬の船も気にはなるが、どうせそっちは夜にならなければ近寄れないのだ。いっそ手塚に会って、敵の様子をさぐっておくほうが、平馬の役に立つかも知れない。お粂はとっさにそう考えたので、
「あたし、どうしようかしら」
と、わざと右助の気をひいてみる。
「行者さんはおいそがしいんですか」
「いそがしいことはいそがしいのよ」
「そうでしょうねえ。でも、主人の用はすぐすむんじゃないかと思います。だんなさまもとてもいそがしい人なんですから」
右助は絶えずにこにこしている。
「じゃ、とにかく行ってあげるわ」
「ありがとうございます。そうしてもらえると、わしが助かるです」
お粂は右助と肩をならべて、吾妻橋の人の流れの中へ入っていった。
川下のほうをそれとなく目で追ってみると、平馬の屋根船は本所河岸ぞいに、やがて多田薬師の前あたりへかかろうとしている。
――兄さんのばか。あんなに大名をきらっていたくせに、こんなあぶない仕事にまきこまれてしまうなんて。
お粂はふっと悲しくなってくる。おじいちゃ

んが許してくれなかったんだから、いまさらどうしようもないとあきらめてはいるが、本当はこれが恋というものだと、お粂はちゃんと自分でも知っている。しかも、それが初恋なのだから、なお切ないのだ。
「行者さんは植徳の離れにいる浪人さんと仲がいいんですか」
右助がなれなれしく、ふいにそんなことを聞く。別に悪気があるとも思えないので、
「仲がいいわ。どうして」
と、こっちも開けっ放しに聞いてみる。
「ゆうべも行者さんは小梅へ行っていたようだから、たぶん仲がいいんだと思ったんです」
「中間さんもゆうべ小梅へ行ってやしなかったの」
「あれえ、知っていたのか、行者さんは」
「知ってたわ。あんたは茂太郎さんて人のあとをつけていたんじゃない」
「うむ、知ってるんなら、かくしてもしようがないな。行者さんは平馬さんが小梅にいなくなったの知ってるかね」
「知ってるわ」
「平馬さんてのは、どんな人なんだろうな」
「そんなことを聞いて、あんたどうする気なの」
こいつ油断ができないと、ちょっとお粂は緊張してくる。
「行者さんにうそをいったってわかってるだろうから、おれ本当のことをいうがね、そのかわりおれに罰なんかあてないでもらいたいな。おれは行者さんが少し怖いんだ」
「あんたのような人のいい人に、罰なんか当てるもんですか」
「そういってくれるとうれしいんだが、おれ、これでなかなか人の悪いところもあるんだ。これでも男だからね、芯はしっかりしているつもりなんだ」
「じゃ、罰なんか気にしなくたっていいじゃありませんか」

「それがそうはいかないんだ。おれはいちばん神さまが怖いんでね」

「神さまにしかられるような、そんな悪いことしたことがあるの」

「それはまだないつもりなんだが、さっき行者さんにうそをいった。おれは三間町で行者さんの行った先を聞いてきたんじゃなくて、向島土手で立っている行者さんを見ていたんだ。それを左助とかわってだんなさまに知らせに行ったら、それなら呼んでこいといいつけられたんだ。怒るかね、行者さん」

「怒りゃしないわ。たぶんそんなことだろうと、あたしにはわかっていたもの。じゃ、あんたはだんなさまにいいつけられて、向島土手でなにかを見張っていたわけね」

「ちょっと違うな。浜町から屋根船の後をつけてきたんだ」

いわれてみれば、それが当然だった。

「じゃ、その帰りの屋根船も、だれか後をつけているわけね」

「うむ、そういうことになる。おれたちは御主人さまのいいなり次第に働いているんで、罰のほうは大丈夫だろうな、行者さん」

「大丈夫だわ。罰のほうはあたしが引きうけてあげるけれど、御家老さまはどうして平馬さんのことをそんなに気にするんだろう」

「それは、行者さん、少しおかしいぞ。行者さんだって、平馬さんのことが心配になるから、向島土手へ行っていたんだろう」

「ああ、そうか。あんたやっぱりすみにおけないな。じゃ、御家老さまは平馬さんのことが聞きたくて、あたしを迎えによこしたのね」

「たぶんそうだろう。――さあ、行者さん、もうまじめになるべ」

右助はすっと一足さがる。吾妻橋をわたりきって、いつか川っぷちを左へ曲がり、材木町河岸へ出てきているのだ。

船七の心配

通称船七でとおっている船宿荒川屋七五郎の店は、材木町の角から川ぞいに、家数にして五、六軒行ったところに、稼業の掛け行燈を出していた。

七五郎は年ももう五十に近く、船頭仲間では相当の顔役で、隣に玉屋という小料理屋を出している。ここにはおしろいくさい酌女を何人かおいて、若い女房のお松に店をやらせていた。

実をいうと、船七は、まだ手塚勘解由が浪人していたころ、しばらく居候をさせて面倒を見てやったことがある。もう二十年あまり前のことで、その手塚が数年前ひょっこりたずねてきて、昔の恩がえしだといって玉屋を買ってくれたのだった。

そんなわけで、船七は、お粂が手塚の娘だということは、たぶんそうだろうとはじめからわかっていた。

しかし、意地っ張りのお国行者は一言もそんなことは口にしないし、手塚のほうはそれ以来ずっと行方さえわからなかったので、船七はお国親子にはあまり近づこうともせず遠くから見ているだけだった。

それが七年前、お国が死んだ時、こっちはちょうど玉屋を手塚に買ってもらったころのことだったので、こんどはその恩がえしにお国の葬式を一切引きうけて、お粂を助けてやった。

それでも、手塚はまだ、お粂はおれの娘だとは、船七にさえいわなかった。いや、いまだにそれはそれっきりになっているのだ。

娘のお粂がまた、母親のお国より変わっていて、母親の葬式以来、おじさんおじさんといってよく遊びにきていたが、どうぐれ出したものか、三年とたたないうちに、男を相手にけんかはする、ばくち場へは入りこむ、頭のおさえ手がないから家へいろいろな女を引っぱりこんで居候をさせ、女親分気取りであごで使うといっ

た始末で、浅草かいわいでも評判な跳ねっかえり娘になってきた。

それはどんな鬼娘になろうと当人の勝手だし、人に迷惑をかけるの、悪事を働くのと、そういうあばずれ方なら船七も年寄り役で小言の一つもいってやるのだが、別にそんな悪たれたところはない。結構母親の行者をついで、看板こそかけていないが、そのほうは母親まさりと折り紙をつける信者さえあって、金に困るようなこともないようだから、まだ一度も意見がましいことは口にしたことはない。

が、当人にすれば、自分のやっていることは普通ではないと承知しているから、やっぱりおじさんになにかいわれやしないかと、それが煙ったいのだろう、いつか足が遠のいて、たまにあいさつにくる時も、なるべく留守をねらってきて、土間だけでさっさと帰っていくということだった。

そのお粂が、今日は手塚の中間右助といっしょに、珍しく土間へ入ってきたのである。

「おじさん、しばらく――」

「なんだ、お粂坊じゃないか、珍しいなあ」

船七は出先からかえってきて、いま二階の手塚にあいさつをしてきたばかりだった。

「行者さん、ちょっとここに待っていてください」

右助はお粂にそういいおいて、いそいで二階へあがっていく。

「はてな。すると、お粂坊は手塚のだんなに呼ばれたのか」

「そうなんです」

船七はいま手塚に会ってきたばかりだが、そんなことはなんにも口にしていなかった。

「前にも手塚さんに呼ばれたことがあるのかね」

「いいえ、昨日柳橋へ呼ばれたのがはじめてで、これが二度目なんです」

お粂は明るい顔でわらっている。

「おめえ、だんだんおっかさんに似てくるなあ」

「そうかしら――」

「それで、なにか、手塚さまは昨日どんな用だったんだね」

「運勢をみてくれっていわれたのよ。おじさんは御家老さまを前から知ってるんですか」

「うむ、前からごひいきになってるお方なんだが、それで昨日はただ運勢をみてあげただけなのか」

「いやだなあ、おじさん、そんな変な顔なんかして。あたしはこれでも行者なんですからね、ほかの用をたしてあげるはずなんかないじゃありませんか」

「そ、そりゃまあそうだろうが。――すると、今日はどんな用なんだろうな。また運勢をみてくれって、そう運勢ばかりみてもらったってしようがないはずだからな」

「今日はちがうのよ。あたしねえ、おじさん、今日は御家老さまとけんかになるかも知れない。下におじさんがいてくれるんで、よかったわ」

「なんだって――」

船七は唖然(あぜん)としながら、お粂の強い顔を見なおして、

「冗談じゃねえ、御家老さまがおめえとけんかなんかするはずはないじゃねえか」

と、どうにもふにおちない気持ちである。

「ちがうのよ、おじさん、けんかはあたしのほうから吹っかけるんです」

「いけねえ。そいつは、お粂坊、いけねえ。一体、どんな話になってるんだ。こっちへあがって、おじさんに一通り話してみな」

そこへ、右助が二階からおりてきて、

「行者さま、お待たせいたしました。どうぞおあがり願います」

と、まだ上がり框(かまち)に腰かけているお粂に告げた。

「おじさん、その話は後でします」

お粂はしゃっきりと立ちあがって、下駄(げた)をぬ

ぎ、いま右助がおりてきたばかりの階段を、入りかわりにさっさとあがっていく。
「親方はお条行者を知ってるようですね」
　中間が炉端へきて座りながら聞いた。
「うむ、おなじ土地にいるんだから、おれはあの娘の母親の代から知ってる。御家老さまは昨日もお条を呼んだそうだね」
「そんな話です」
「二日もつづけて、なにをそんなにおうかがいを立てることがあるんだろうな」
「そりゃ親方、御家老さまはしなくちゃならない仕事をいつもたくさんお持ちなんですからね」
「なるほど、そういやそうにちげえねえが、いまお条のやつ、今日は御家老さまにけんかを吹っかけるんだといっていたんでね。あれはやりかねない女なんだから、ちょいと気になるんだ」
「へえ、行者さんが御家老さまにけんかをねえ。そうか、行者さんは小梅の若い浪人さんと仲よしらしいからな」
　右助は意味ありげににやにやわらい出す。
「その小梅の若い浪人てのは何者なんだね、右助さん」
「それなんだ、親方、御家老さまもそれがはっきりしないんで、今日また行者さんを呼んだんじゃないかと思うな」
「ふうむ。じゃ、お条はその若い浪人をよく知ってるんだな」
「そりゃ、ゆうべも行者さんのほうから小梅へ押しかけていったくらいだから、ただ知ってるだけぐらいじゃないかも知れない」
「ふうむ、あのお条がねえ」
　母親のお国行者がお条を身ごもったのも、ちょうどいまのお条の年ごろだったと、船七はそれを思い出して、いよいよ気がかりになってくる。

語るに落ちる

　そのころ、二階ではお条が闘志をみなぎらせて、手塚勘解由と対座していた。
　手塚はすでに若殿亀之助に一服盛っている。平馬がその若殿がわについたとすれば、お条にも手塚は敵ということになるのだ。いや、平馬はもう手塚の一味に命をねらわれているのだから、場合によってはこっちは立場をあきらかにして、堂々と手塚と闘ってやろうという気持がお条にあるのだ。
「つかぬことを聞くが、行者どのは昨夜小梅村の長谷部平馬とかいう浪人をたずねたそうだね。平馬とは心やすくしているのかね」
　手塚は昨日と少しもかわらぬおだやかな顔つきですぐに本題へ入ってきたようだ。
　若殿に一服盛るからにはお家の悪人にはちがいないだろうが、江戸家老としての手腕見識をそなえ、それだけの貫禄は十分持っているような、どっしりとした手塚の風丰である。
　そんな貫禄なんかに負けてはたまるもんかと、お条は手塚の目をまともに見かえしながら、
「今日の御用ってのは、平馬さんのことなんですか」
　と、わざと意外そうに聞きかえしてやる。
「いや、用はほかにもあるが、これも用のうちの一つでな、まずそれから聞きたいのだ」
「御家老さまは、どうして平馬さんのことなど聞きたいのかしら」
「行者どのは長谷部平馬さんとなにか約束のようなものでも持っているんじゃないのか」
　手塚の目にちらっと微笑がただよう。それは少しも悪意のない、むしろあたたかい微笑のようだが、
「じゃ、あたしは今日、行者のお条としてここへ呼ばれたんじゃないんですね」
　と、もう一度意地悪く出てみる。
「そうか、行者のお条としてでなければ、わし

と口をきくのもいやかな」
「いやじゃありませんけれど、人に迷惑のかかるようなことは、あたし口にしたくないんです。また、そんなことを口にしなければならない義理はありませんもの」
「それはそうだな。いまのところ、わしとお糸は行者と客で、それ以外になんの義理も恩怨もない。しかし、そで振りあうも他生の縁といってな、道で出会った赤の他人でも口をききあうことはある。まして、わしと行者どのは、昨日もう顔見知りになっている。どうだろうな、行者どのは自分では口はききたくないが、なにかわしに聞いてみたい、そんなことはなにもないかな」
　手塚はにこりとわらってみせる。
「さあ、そんなことあるかしら」
　虚を突かれて、お糸はどきりとしながら、口で空っとぼけようとする。
「たとえば、いまわしは平馬さんのことを口にした。なんでわしが平馬さんのことなど聞きたがるのか、聞いてみたい、そんな気持ちは少しもないかね」
「そりゃあります。平馬さんはあたしと兄妹分の約束してくれたたった一人の兄なんですもの」
「ふうむ、兄妹分の約束ね。夫婦にはなれない事情がなにかあるのか」
　手塚はまじめな顔をして聞く。
「あたしはあの人のおじいちゃん、剣術の先生で長谷部平左衛門という人に助けられたことがあるんです。今から四年ぐらい前かしら。本所亀沢町に道場があって、おじいちゃんはあたしを孫のようにかわいがってくれたけれど、一度も道場へ遊びにこいとはいいませんでした。そして、おととしの春死んじまったんです。悲しかったわ、あたし」
　お糸はその時のことを思い出すとやっぱり目がうるんでくる。

「あたしは十四の時、おっかさんに死に別れました。おとっつぁんはだれだか知りません。一人になってから、あたしのいうことを親身になって聞いてくれるのは、ここの船七おじさんと、亀沢町のおじいちゃんとたった二人でした。あたしはこんな跳ねっかえりですから、だれも本気になって相手にはしてくれません。あたしには掛けがえのない、いいおじいちゃんでした」
「たしか天真一刀流の達人だった人だな」
「そうなんです。平馬さんはその孫で、はじめ十ぐらいの時まで、今の小梅の植木屋さんに里子に出されていて、それから亀沢町のおじいちゃんの道場へ引きとられたんです。顔は前から知っていたけれど、はじめて平馬さんと出会って口をきいたのは、おととしなんです。その時になってあたしやっとわかったんだけど、おじいちゃんは道場に孫の平馬さんがいるんであたしを道場へ遊びにこいとはいわなかったらしいんです」
「なるほど——。間違いのないようにと考えたわけか」
「そうなんです。平馬さんも父なし子だし、あたしも父なし子でしょう。おじいちゃんがよくあたしにいいました。お糸、好きな人ができたら必ず相談にこいよ。おまえはしっかりしているようだから、まさかそんなこともあるまいが、父なし子を産むと、産んだ母も、生まれた子供も、余計な苦労をしなければならないって。だから、あたし、おとといも平馬さんにいったんです。おじいちゃんが許してくれないんだから、小梅へ遊びに行くの悪いんじゃないかしらって。そしたら、平馬さんがわらい出して、兄妹のつもりならかまわないだろうっていってくれたんです」
「なるほど、それはたしかにそうだね」
　手塚の顔にまたしてもおだやかな微笑がうかんでいる。お糸の目には、それがなんとなく寂しい微笑に見えた。

「あら、もっと大変なことがあったんだわ」
「なにがだね」
「おじいちゃんはきっと、平馬さんがあたしと間違いをおこさないようにって、もっと心配なことがあったんだわ」
「ふうむ、どんな心配だろうな」
「あたし、たったさっきわかったんだけれど――、御家老さまの前ではいえません」
お粂はきっぱりといって、急に意地の悪い顔を取りもどす。
「そうか、いいたくないことはいわなくてもいいが、昨夜茂太郎は小梅の平馬さんの家へひそかにたずねている。今朝、平馬さんは小梅にはいない。これはどういうことなんだろうな」
手塚はもう大体わかったような顔である。しまったとお粂は思った。うっかりこんな話をするんではなかったと、いまさら後悔してもおっつかない。突然、悔しくなってきて、
「御家老さま、これだけは間違わないでくださいね。平馬さんはあたしが出会ったおとつい、形見の短刀を中橋さまのところへ五十両で売りに行って、もう小森家とはなんの縁もない、これで気楽な素浪人になれたと、さばさばとして帰ってくる途中だったんです。あの人は大名なんか大きらいなんです」
と、たたきつけるような口ぶりになっている。
「そうか。――では、どうして今日身がわりなどをつとめる気になったんだろうな」
「それは若殿さまに悪いやつがだれか一服盛ったからだって、あたしは聞いています」
「お粂行者はそんなことをだれから耳にしたんだね。まさか平馬さんからではないだろうしな」
「ゆうべ、中屋敷のお茶室をのぞいてきたやつがあるんです」
「茶室をのぞく――」
手塚はまゆをよせながら、いつもの冷たい顔になってきたようだ。

「鬼吉という悪党なんです。自分の女房をどこかの殿さまに横取りされてから、きっと敵討ちをしてやると誓って、魂を悪魔に売ってしまったやつなんです」
「すると、さっき行者どのが向島土手をいっしょに歩いていた男が、その鬼吉なのか」
手塚はぴたりと図星をさしてくる。

悪人の解釈

「行者どのはその鬼吉と仲がよいのか」
手塚がいぶかしそうに聞く。
「いいえ、あいつとあたしは敵と味方です」
「しかし、小者の話では、今日は向島土手を仲よく話しながら歩いていたそうだね」
「あいつは時々あたしにいやがらせをいいに出てくるんです。もっとも、こんどはあいつとおなじ仕事の中へまきこまれてしまったようなもんですから、どうしてもぶつかることが多くなると思います」
「なるほど――。どうしてああいう男と知り合いになったのかな」
「ずっと前、あいつはあたしが世話をしている女をどこかの空き家へつれこんで、手ごめにしたことがあるんです。あたしは敵をとってやろうと思い、あいつを本所河岸の多田薬師の前へ呼び出して、果たし合いをやりました」
「おまえ一人でか――」
「ええ、一人と一人です。あたしはこれでも行で体を鍛えているから強いんです。でも、あいつはその時はあたしより強くて、もう少しで負けそうになったところへ、亀沢町のおじいちゃんがきて助けてくれたんです」
「その口ぶりでは、いまは負けぬ自信があるようだな」
手塚の目がわらっている。
「いまはもう負けません。あたしは負けない工夫を自分でしたんです」
「どんな工夫だね」

「それはいえません。その話をおじいちゃんにしたら、だれにもいうな、それを人に話すと、人はまたその上の工夫をするから、身のまもりにならなくなると、とめられているんです」
「そうか、それなら話さぬほうがよい。――しかし、鬼吉はその後よく行者どのをねらわないな」
「あいつはずるいから、あたしがなにかおじいちゃんからいい手を教わっていると見て、手出しをしないんです。でも、いまにきっともう一度、あいつと果たし合いをする時がくると覚悟しています」
「なるべく、あぶないまねはさけるほうがいいのだ」
「御家老さまだって、いつあいつにねらわれるかわかりゃしませんわ」
「男はいつもだれかと闘っているものなのだ。それが一生なのだから、驚きはせぬ」
　苦わらいをしている手塚の顔を見ているうちに、お粂は急にまた平馬のことが心配になってきた。
「御家老さまは平馬さんと敵味方になったわけなんですね」
「どうもそういうことになりそうだな」
「じゃ、あたしも今日から御家老さまと敵味方だわ」
　お粂はきっぱりそう割り切って、手塚を敵にまわす心構えになろうと思う。
「いや、敵味方というものは、そうあわててきめなくともよい。平馬さんが中橋親子に利用されさえしなければ、敵味方にならずにすむことだ」
「そうはいきません。罪もない人に一服盛るなんて、悪い人にきまっています。平馬さんは心の正しい男なんです」
　怒るなら怒ってみろと、お粂は手塚の顔をまともに見すえていた。
「行者どのは少し勘ちがいをしているようだな」

「あたしがなにを勘ちがいしているっていうんです」
「将軍さまの御息女を嫁にもらうということは、非常に金のかかることなのだ。十万石ぐらいの藩では養いきれない上に、万一あれこれと藩政にまで口を出されるとやっかいなことになるので、どこの藩でも将軍家との縁組みはできるだけことわるように骨を折っている。たとえば、大工が公卿の娘を嫁にもらって困るのとおなじことなのだ」
　聞いてみれば、ああそうかと、お粂にもそれはわかるような気がする。
「中橋親子が将軍家の姫君を無理にももらいたいのは、若殿に箔をつけて、自分たちの勢力を藩内へのばそうという野心があるからで、後で一藩がどんなに困ってくるかということは勘定に入れていない。それを心配する家来たちが、眠り薬のようなものを使って、今日の見合いのじゃまをしようというのは、手段は少し底意地が悪いが、ここまできてはそうするよりしようがないことで、行者どののようにそんなことをするやつは悪人だと一方的にきめつけるのはどうかと思う」
「だって、悪人のほうはお家を自分たちの手でかきまわしたいから、若殿がじゃまになるんでしょう」
「そこをもう一つのほうから考えてごらん。行者どののいう悪人どもは、殿さまといっしょにもう十年も二十年も藩政を無事におさめてきている。それが悔しいから、若殿に箔をつけてこんどは自分たちが藩政を取ってかきまわしたいと考える、おかしな話だとは思わないかね。これは、悪人だの、忠義派だのという問題ではなくて、若殿につく中橋一派と、殿さまにつく重役組との勢力争いなのだ。一方が一方を悪人ときめつければ、一方のほうでも一方を悪人ときめつけなければならない。つまり、どろ試合と

いうことになるのだ」
「じゃ、平馬さんが若殿組になったのは、忠義でも、悪人退治でも、なんでもないことになるんですか」
「そのとおりだ。もし平馬さんがそれを忠義のためと考えているようなら、中橋親子になにかだまされているのだろう」
「そうかしら──」
お粂はだんだんわからなくなってくる。
「それはまあそれとして、平馬さんは今日、義のために立って、若殿の身がわりに姫君と見合いをした。これは取りかえしのつかぬ大きな過ちなのだ」
「どうしてなんです」
「もし姫君が後で小森家へ輿入れをしてきて、これは見合いの時の若殿とは違うということになったらどうなる。姫君が怒っただけではすまない、小森家は公儀を偽った罪に問われ、天下のわらいものになって、しかも家名断絶の憂き目を見なければならないのだ」
「それは、あの、あたしも心配しているんです」
お粂もそれだけはどう考えてもいいことだとは思えないのである。
「しかし、見合いはどうやらすんでしまったのだ。これから中橋親子は偽若殿をどういう風に利用する気かわからないが、いずれにしても偽若殿は最後には生かしておけなくなる。ことに、鬼吉がそれを知っていると、中橋親子はひそかに偽若殿を殺さなくてはすまない立場になってくるだろう」
「鬼吉もそういっていました」
「行者どのがな、平馬さんをそんなみじめな目にあわせたくなかったら、今のうちに平馬さんを自分の力で取りもどすことだ。平馬さんは自分から形見の短刀を中橋に売ってしまうくらいだから、欲に目がくらんでこんなまねをしているのではない、正義のためだと思いこんでいるだろうだけに、わしは気の毒に思うのだ」

「御家老さま、あたしもう帰ります。すいませんが帰らしてください」
お粂はとうとう居ても立ってもいられない気持ちになってきた。
「そうか、帰るか。実は、ほかにもまだ用があったのだが、それはまあ後でもよかろう。気をつけて帰りなさい」
「どうもすいません」
「平馬さんにな、真心から話してごらん、きっとよくわかると思う」
「はい、そうします」
「すると、なんだな、行者どの、いまはまだわしは平馬さんや行者どのと敵味方ではないわけだな」
手塚は思い出したようにそういって微笑した。
「ふ、ふ、敵味方なんて、やっぱりあわててきめちゃいけないんですね」
お粂は少し照れながら、いそいでおじぎをして立ちあがった。

強情者

──小梅村に御落胤があったのか。
勘解由はお粂が娘にしては荒っぽく階段をおりていく足音を耳にしながら、自分の運命の灯がまた一つ、ふっと消えたような気がした。
こっちは先手先手と十分に手を打って、茂右衛門などよりはるかに知恵は勝っているつもりだったが、そんな御落胤があるとは夢にも知らずにいた。しかも、年ごろから顔までそっくりだというのは、あまりにも皮肉すぎる。
そんな御落胤さえなければ、今日の勝負は完全にこっちが勝っていたのだ。
茂右衛門にしても、もしその御落胤が一昨日形見の短刀を売りにきていなければ、今ごろ悔しがって歯がみをしていたところだろう。要するに、これは知恵の問題ではなく、敵に運が向いていたということなのである。

「——あんたは四十五までで、それがすぎたらだめになる」
勘解由は死んだお粂の母親の言葉を思い出して、なるほど、運とはそんなものかなあと、胸へ冷たいものを感じてくるのだ。
そういえば、いま帰った娘のお粂まで、あなたの運はこれから下り坂ですと、昨日もっともらしく宣告していた。
——母と娘に見放されるようじゃしようがない。
勘解由がなんともつかず苦わらいをしていると、階段口から右助が顔を出して、
「だんなさま、行者さんのほうはどうしましょう」
と、指図をうけにきた。
「ずっと後をつけてみてくれ」
「はい」
「お粂が今夜どこへ泊まるか、それを見てくるのだ」
「かしこまりました」
右助は風のように素早く階下へおりていったようである。
——わしはお粂からなにかをさぐり出すより、娘の身が心配になる、そんな気持ちになってきたようだ。
一瞬、勘解由は自分が別のものになっているような気がして、うすら寂しさを感じてくる。
しかし、事実はそんな親心などに酔っていられない場合になっているのだ。
平馬を偽若殿に仕立てた以上、中橋党はおそらく今夜にも国もとへ立つかも知れない。
今日の見合いは、かなり時間がかかっているところを見て、これは成功したと見るべきだ。
いざとなれば、この偽者をあばき立てるという手段がないことはないが、この場合、平馬が御落胤ということになると、逆に悪人の名がこっちへかえってくるおそれがないともかぎらない。

平馬には気の毒だが、いちばんいいのは浪人長谷部平馬として死んでもらうことだ。
その上で、中橋親子は偽者を仕立てた罪で自決させることにする。
これが成功すれば、敵が身がわりをこしらえたことは、かえってこっちには好都合だったことになるのだ。
——お粂を自分の手にかけてもいいのか。
ふっとどこかそんな声がする。
——そういうまわりあわせなら、しようがあるまい。お粂がうまく平馬を説き伏せてくれれば、これに越したことはないんだが。
勘解由はまたしてもどっちともつかぬ自分になってくる。勝たなければならないとも思うし、負ければそれまでの運という気もしてくる。
「手塚さん、いなさるかね」
引き戸の向こうで船七が遠慮そうに聞いた。
「七五郎か、入ってくれ」
「ごめんなさいよ」
船七はもそもそと入ってきて、火ばちの前へ座り、なにか落ちつかないようにたばこ入れを取り出す。
「なにか用か、七」
「いや、用ってわけじゃないが、手塚さんは昨日もお粂を呼びなすったそうだね」
「ああ、行者どののことか。よく当たるというんでな、運勢をみてもらった」
「当たったようかね」
「いや、あなたの運はこれから下り坂になるばかりだといわれた」
「今日はなんの用で呼びなすった」
「あれはな、妙な浪人者を知っている。その素姓が聞いてみたかったのだ」
「小梅の浪人さんだな」
「七も知っているのか」
「いや、そのことはさっき右助さんから聞いたばかりだが、お粂坊はここへあがる前に、今日は御家老さまとけんかをするんだといっていた。

なにかそんな話はでたかね」
「行者どのはな、わしとその小梅の浪人長谷部平馬というのが敵味方にわかれるんじゃないかと、それを心配しているんだ」
「あれは平馬さんとだいぶ仲がいいんだって話だ」
　船七はぽんときせるをはたいてから、
「なあ、手塚さん、お条坊はだんだん死んだおふくろそっくりになってきやしないかね」
　と、じっとこっちの顔を見る。
「そういえばそうだな」
「ただそれだけかね」
「どうしてそんなことを聞くんだね」
「おれはねえ、手塚さん、なんのこともできやしねえが、お条坊だけは姪っ子のような気がしてな、これでもかげながらいつも心配している。変わった娘で、とてもおれの手にゃ負えねえが、あの娘の育ちかたを考えてみると、不憫で小言もいえねえ。――手塚さんはなんとも思わないかね。一生おれの娘だとはいってやるつもりはないのかね」
　勘解由はかすかにまゆをひそめて、そっぽを向いた。
　船七ははっとしたように、まじまじとこっちの顔を見すえているようである。そして、ふっとその目を火ばちの中へおとしながら、
「強情だねえ、おまえさまも」
　と、苦わらいをしたようだ。
「船七、わしは近いうちに旅へ出るかもしれないのだ」
「お国もとへかね」
「うむ。実はなあ、ここへ百両の金を持ってきている。お条にやろうと思ったんだが、敵だの味方だのという話の後では出しにくかった。おまえにあずけておくから、死んだおふくろのものだということにして、おまえからいい折にわたしてやってくれぬか」
　勘解由はふところから重い袱紗包みを取り出

してそこへおいた。
「これ、おふくろの名でわたすんかね」
「そのほうがいいんだ。そうしてくれ」
「つまり、今の敵と味方って話がじゃまになるんかね」
「いや、生まれた時から敵と味方だったんだろう。わしは手前勝手な男で、自分のことよりほかはなにも考えずに世渡りをしてきた。いまさらいい子になるのは虫がよすぎる。また、いい子になろうとしても、もうおそい。わしはこのまま悪党でいることにしよう」
「悪党――、だれが悪党なんだね」
「敵から見ればわしは悪党に見えるらしいな。八方美人では食ってはいけない世の中に生まれてきたんだから、しようがあるまい」
　船七は百両の袱紗包みをひざの上へおいて、ぽかんと勘解由の顔を見ている。

明日の戦法

「だんなさま――」
　引き戸の向こうで呼ぶ声がした。茂太郎たちの船をつけさせておいた左助が帰ってきたようである。
「左助か――。入りなさい」
　戸をあけて顔を出した左助は、そこに船七のいるのを見て、黙って端近へ座ってしまう。
「どれ、おれは座を外したほうがよさそうだ。用があったら、いつでも手をたたいておくんなさい」
　それと見た船七は火ばちの前を立って、
「左助さん、御苦労だったね」
　と、如才なく下郎に声をかけながら、階下へおりていく。胸に不服があるのだろう、なにか重そうな足取りだ。
　――まず、これでよし。
　勘解由も娘のことは一応これで片づいたと割

り切ってしまいたかったが、その娘から意外な事実を耳にして、それがあまりにも大きな収穫だっただけに、なんとなく皮肉な気持ちが後へ残っている。正直にいえば、お粂はあくまでもこんな騒動の外へおいておきたかったのだ。

　今となってはどうにもしようがない。

「左助、もっと火ばちのほうへ寄れ」

　勘解由はいつもの冷静な顔になって、左助のほうへ声をかける。

　左助は黙って少し前へ出る。左助と右助は猟犬のように忠実な勘解由の手足で、それだけに一味腹心の侍どもより大切に目をかけているが、右助のあかるい性分にくらべて、左助は陰気なほうで、口数もすくない。

「船はまっすぐ浜町へついたのか」

「いいえ、両国橋の下をくぐってから、一度水戸様の石揚げ場へついたです」

「だれか船からおりたのか」

「へえ、わしは両国橋の上にいたんで、顔ははっきりしねえですが、一人おりて、船はすぐ浜町へ向かいました」

「その船をおりたやつの後をつけてはみなかったのか」

「橋の上から駆け出しても間にあわないと思ったんで、船のほうにしたです」

「そうか――」

　船に乗っているのは、偽若殿の平馬と、茂太郎、中橋の若党米次郎と中間又三の四人である。

「石揚げ場でおりたのは、若党の米次郎だと思うです。これも遠くで顔はわかりませんが、浜町へあがった時、若党の姿が見えなかったです」

　左助が考え考えつけ足す。

　もしそれが本当なら、地の利からいって米次郎は亀沢町の松岡道場へ走ったのだろう。松岡平助は昨日の夕方若殿に呼ばれて会っている。若殿亀之助が国もとへ潜行する時の警固組に雇われているはずだから、今日の米次郎の使いは、

江戸出発の時刻を知らせに行ったと見て見られないことはない。

　が、勘解由にはどうもそうは思えない。直感的に考えられるのは、平馬が若党の姿になって船をおりたにちがいない。

　目的はやっぱり江戸出発の打ちあわせで、松岡は師匠長谷部平左衛門の死後、平馬の後見人になっているだろうから、米次郎が行くより平馬が自分でぶつかっていったほうが話が早い。

　――もう一つには、おなじ江戸を立つにしても、中屋敷からでは人目につきやすい。平馬はそのまま亀沢町の道場から松岡たちといっしょに品川へ向かう。同時に、茂太郎や近習組も、ばらばらになって中屋敷を出て、品川で落ちあうことにすれば、完全にこっちの目をくらますことができる。

　――これだな。

　勘解由はそう見て取ったとたん、万一今日の若殿が平馬だと知らずにいたら、これをどう判断したろう。おそらく、船をおりたのは米次郎と見て、こっちは中屋敷から若殿がしのび出ることにだけに目を光らせていて、うまく一杯食わされるところだったろうと考え、

　――これも娘のおかげか。

と、苦笑せずにはいられない。

「左助、おまえ長谷部平馬の顔を知っていたな」

「へえ、若殿さまに似ている人です」

「おまえの目で、それがはっきりと区別がつくか」

「まさか。そんなことは大丈夫です」

　左助はちょっと怒ったような顔をする。これはまだ偽若殿に気がついていないようだ。

「それならな、これからすぐ亀沢町の松岡道場へ行ってみてくれ。そこに平馬がいるはずだ。平馬が今夜どこへ泊まるかつけるんだ」

「かしこまりました」

「もし平馬がそこにいなかったら、小梅村のほうへ行ってみろ」

「へえ」
左助はおじぎをしてすぐに立っていった。
——敵は今夜立つつもりだ。
これだけははっきり見当がついた。
たぶん品川で落ちあうことになるだろう。
品川で泊まって、明日六郷の渡しを一番船でわたることにするには、品川から川崎へ二里半、どうしても品川を七ツ（四時）前に立つことになる。
道中は無論、長谷部平馬で歩くだろう。そのほうがこっちも片づけいい。
第一陣は鈴ガ森、第二陣は蒲田村あたり、第三陣は六郷、少しおおげさすぎるかも知れないが、おそらくこれで敵は全滅するだろう。
人数は、一浪人の道中なのだから、敵は今日の近習組十人に松岡組が五人ほど、先頭は近習組五人で、これが斥候の役をつとめ、中軍は松岡組でこの中に平馬をおく。しんがりは茂太郎が五人ひきいてこっちの追跡にそなえる。
勘解由は頭の中でその敵の陣形を組み立てていきながら、こっちの戦法を立ててみる。
第一陣の鈴ガ森は十人、いきなり敵の中軍へ切って出て、長追いはせずに引きあげる。
この時の隊形のととのえ方で、平馬がどこにいるかがわかる。
第一陣の鈴ガ森組はただちに第二陣の蒲田組と連絡をとってひそかに敵を追跡し、第二陣が討って出るのを待ってしんがりから追い討ちをかける。
第三陣の六郷はすでに白々明けになるだろうから、ここはこっちも浪人組を伏せておいて真っ向からかからせ、第一陣第二陣の味方は後方から挾撃に出る。
——これで万事うまく片づくはずだ。
しかし、用心深い勘解由は、なにか手落ちはないかと、こんどはもう一度、敵がわになって戦法を検討してみる。
そこへ、中屋敷の加藤市兵衛から小者が密書

をとどけてきた。
せがれはやぐらしたへひそかに急行。亀は茶室にて不快のごとし。なお、向島にては首尾よろしき模様なり。
密書にはそう簡単に書き流してある。
——そうか、茂太郎は土井老中の指示をうけに行ったな。
これは勘解由の予期していたことだ。向島の首尾がよければ、当然そういうことになるはずだ。
ただちょっと解せないのは、亀が茶室へ入ったと書いてあることだ。もっとも、身がわりのまた身がわりが衣装だけ取りかえて茶室へ逃げこめば、不快と称して人を近づけないようにするのはわかりきった話だ。
いちばんおかしいのは、今日の近習たちの中に一人も偽若殿を見破っている者がないらしいことで、もしそんな話が一言でも出れば、この密書に書きもらすはずはない。
——まあいいだろう。夕方までにはもっとくわしい様子がわかる。
勘解由は一人でうなずきながら、密書を火ばちの中へくべた。
そのきなくさい紫色の煙の中からふっとお条の顔がのぞいて、子供っぽくわらいながら消えていった。
「お条——」
勘解由はそっと呼んでみて、親心というやつはこんなものかと、一抹のさびしさを思わず奥歯でかみしめていた。

気がかわる

そのころ——。
船七を出たお条は、あたふたと川っぷちを駒形のほうへ駆け出していた。
「お条坊、もう帰るのか」
土間へおりて下駄を突っかけている時、船七が呼びとめたそうに炉端から声をかけていた

が、こっちはそれどころではなく、

「おじさん、また明日出なおしてくるわね。急用ができちまったんだもの」

と、口から出まかせをいってきた。

そこにいた中間の右助が、にやにやとわらっていた。

――かまうもんか、どうせ敵と味方なんだもの。

お粂は体中の血が燃えたぎっているような気持ちである。

あたしはうっかりあの人のことをみんな手塚に話してしまった。本当は悪かったかもしれないが、手塚を説得するにはそうするよりしようがなかった。

そのかわり、こんどはいま手塚から聞いてきたことをみんなあの人に話してしまわなくては気がすまない。

手塚は自分で悪人ではないといっている。中橋家老が若殿を押し立てているのは一藩の藩政を一手に握って自分の勢力を大きくしたいからで、こっちがそれに反対しているのは、若殿には欠点があって、殿さまにしては小森家のためによくないからだと、手塚はいっていた。

つまり、これは悪人だの忠義派だのという問題ではなくて、両方とも自分に都合のいい殿さまを押し立てて、自分がいいと思う藩政をしきたい、そういう勢力争いだというのである。

それなら、大名にさえ欲のないあの人が、なにも中橋組に命がけで働いてやる義理はないことになる。

――平馬さんはなんというかしら。

ともかくも手塚組は若殿に一服盛っているのだから、あっちは悪人で、こっちは忠義のために働いているんだ、もしあの人がそういう考えだったら、あたしはどうすればいいのかしらと、お粂は迷わずにはいられない。

ことに、今日の福姫さまの問題は、そんな姫君をもらっては小森家では金がかかってたまら

ないと、手塚はいっている。しかも、あの人が今日若殿の身がわりになって福姫さまと見合いをしたのは、それがわかると小森家が立つか倒れるかの大問題で、結局は中橋組はあの人をやみに葬る以外に手はないという。

それは、鬼吉もさっきちゃんとそういっていたことなのだ。

――一体、平馬さんはなにを考えているんだろうな。

殺されるとわかりきっていて、そんなあぶないまねをするあの人もあの人だし、しまいには殺すつもりであの人を仲間へまきこんだとすれば、中橋親子は我慢のならない悪党だということになる。

――とにかく、早く平馬さんに会わなくちゃ。

船はたぶんもう浜町へつくころなのだ。かまやしない、あたしは表門から乗りこんでいってやる。お粂はそう決心しながら、ふっと気がついたのである。

こっちは平馬の妹のつもりで、門番にそう名乗って出ても、こんな町の女だから、ひょっとすると門前払いをくわされるかもしれない。そうなると、日の暮れるのを待って勝手にしのびこむ以外に手はなくなる。

――そうだ、いっそ植徳へ行って、おばさんをたのんでこよう。

植徳のおばさんはあの人の乳母なのだ、二人で行って、わけを話せばなんとかなるかもしれないし、お乳母さんがいっしょの前でこっちの話をすれば、平馬さんもきっと中橋組と手を切る気になってくれるかもしれない。おばさんは、ゆうべも、あの人がどんなに乳母おもいのやさしい人かという話をして、涙さえこぼしていた。こんな話をすれば、お乳母さんは心配して、泣いて騒ぎ出すにちがいないのだ。あの人だって、お乳母さんの涙には勝てやしない。

「そうだ、小梅村のお乳母さんをたのんで、いっしょに行ってもらうのがいちばんいい」

お粂はやっと腹がきまって、思わずそこへ立ちどまった。とっくに駒形をすぎて、もう御厩河岸の渡し場の近くまできていた。
このまま後へ引きかえして吾妻橋をわたるより、渡しで本所河岸へわたってしまうほうが早そうだ。
お粂はわき目もふらず渡し場へいそいで、ちょうどいま出ようとしている渡し船に乗りこんだ。
船はすぐ岸を離れたようである。
お粂は四、五人乗っている客の顔を見ようともせず、一番前の舳のほうへ行って、青い大川をながめていた。
時刻はもう八ッ（二時）すぎごろかもしれない。いい天気で、かもめが何羽も水面をすべっていっては空へ舞いあがっていく。
船はまもなく本所河岸の桟橋へついた。
お粂は客のいちばん後から桟橋へあがりながら、おやと思った。
いちばん先へ往来へあがって、すたすたと吾妻橋のほうへ歩いていくのは、どうやら手塚の中間右助のようである。
あたしの後をつけてきたのかしら。
妙にどきりとして、一瞬険しい目になりかけたが、右助は神さまが怖くてうそがつけないとさっきいっていた。
——よし、おどかしてやろう。
お粂はそんないたずら心がおこって、足早に右助をおいかける。
どうやら右助はそれをちゃんと知っているような体つきである。
「中間さん——」
こっちから声をかけながら、すっと肩をならべていってやると、
「なんだ、行者さんか。またお目にかかりましたね」
と、右助は空っとぼけてわらっている。
「どこへお使いに行くの」

「小梅村までまいります」
「うそをおっしゃい。小梅村なら、あんたはこっちへくるより吾妻橋をわたったほうがずっと早いじゃありませんか」
「行者さんだって、そうのはずなんだがな」
右助はあかるくわらっている。
「あたしは途中から気がかわったんだからしようがありゃしない」
「行者さんが気がかわったら、わしも気がかわったです。しようがねえです」
「御家老さまがあたしの後をつけろっていったんでしょう」
「そのとおりなんです。わしはとてもだめだと思ったんだけど、御主人さまのいいつけじゃそむけませんからね、悪く思わないでくださいまし」
「御家老さまは、一体、あたしのなにをさぐり出そうって腹なのかしら」
お粂は手塚のそんな小細工が妙に腹立たしくさえなってくる。

親類づきあい

「行者さんは、御家老さまにさぐられては困るような、そんな内緒ごとをなにか持っているんですか」
川っぷちをぶらぶらと吾妻橋のほうへ肩をならべて歩きながら、右助は冗談のように聞く。
「そりゃあたしにだって内緒ごとはあるわ、生きている人間なんだもの。けど、そんなことは御家老さまになんにも関係のないことじゃありませんか。黙って何度も人のあとをつけさせるなんて、ひきょうだわ」
「だから、おれはちゃんとこうして、御家老さまのひもですと、はじめから名乗っているです」
「じゃ、あんたは一体、御家老さまからなんていいつけられてきたの」
「行者さんが今日どこへ行くか、そしてどこへ泊まるか見とどけてこいといいつけられてきた

です。別に内緒ごとをさぐり出してこいなんてそんな難しいことはいわなかったです」

　こっちにはなんの悪意もないんだといいたげな、けろりとした右助の顔つきである。

「その行く先がもしこっちの内緒にしておきたいところだったら、どういうことになるんです」

「じゃ、行者さんは御家老さまを敵だと思っているんかね」

「そりゃ、これから敵になるかも知れないわ」

「だって、今日向島へ行った行列の中に、小梅村の平馬さんはいなかったんじゃないかね」

「だから、どうだっていうの」

「平馬さんが御家老さまの敵でなければ、行者さんだって無理に御家老さまを敵にしなくてもいいんじゃないかなあ」

　お粂はおやと思った。右助はまだ平馬が偽若殿になっていることには気がついていないようだ。

　そんな大切なことを、なぜ勘解由は自分の隠密(おんみつ)の耳に入れておかないのだろう。

――話している暇がなかったのかしら。

　ちょっとおかしいとは思ったが、それならこっちにも考えがあると、急に気がかわってきた。

「右助さん、御家老さまはどうして若殿さまの今日のお見合いのじゃまをしなければならないの。あたしにはそれがどうしてもわからないんだけれどな」

「そういう難しいことは、おれにもわからねえです。けれど、ある人から聞いた話だと、将軍さまのお姫さまを嫁にもらうと、暮らし向きに莫大(ばくだい)な金がかかる上に、もしそのお嫁さまがいろいろな御用のことに口を出すようになると、お家が騒動するばかりだっていっているです」

「でも、今日のお見合いはうまくいったんじゃないかしら」

「どうもそんな風です。世の中にはわからず屋が多いから、御家老さまもやりにくくてしようがねえです」

「まさか、このまま負けちまうような御家老さまじゃないんでしょう」

「御家老さまはそんな弱いお方じゃないです。御家中の中には、三佞臣(ねいしん)とか三人衆とかいって、うちのだんなさまもそのうちの一人なんだが、まるで悪人のようにいいふらしている御家来衆があるそうだ。けど、だんなさまは決してそんな悪人じゃないです。自分がこれでいいと決心したことは、たとえ悪人と呼ばれようが、鬼といわれようが、きっとやってのけなくちゃおかない、そういう強い気性の人なんで、敵も多いが、そのかわり味方もたくさんいるです」

「右助さんもその味方の一人ってわけね」

　お粂はちょいとおだててみる。

「それは違うです。おれと左助はだんなさまに恩があるんで、一生下郎奉公をしようと二人で約束しているです。主従は三世というからね、味方だなんて、そんな水くさいもんじゃないです」

「御家老さまは何人ぐらい味方があるのかしら。これなら自分のためにいつでも命を投げ出してくれるというような、本当の味方のことよ」

「三十人ぐらいはいるです」

「あら、そんなにいるの」

　茂太郎組がたよりにしているのは、今日向島へお供をした十人ぐらいらしいから、人数ではとてもかないそうもない」

「みんな強いんでしょうねえ」

「行者さんはおれからそんなことを聞き出して、みんな平馬さんに話してやるんかね」

　にやりとわらいながら、右助がふいにそんなことをいう。

「そうかも知れないわ。だから、いやなら話してくれなくてもいいのよ」

　お粂はわざとつんとしてみせる。

「あれえ、怒ったんかね」

「怒りやしないわ」

「おれ、行者さんに罰をあてられると怖いから

な。それにねえ、行者さん、平馬さんはまだ敵ときまったわけじゃないんだろう」
「そんなことわかりゃしないわ。あたしは御家老さまにたのまれて、これから平馬さんのところへ、中橋組にならないようにって、いいに行くんだもの」
「ふうむ、行者さんはそんなことをたのまれたんかね」
　さすがに右助は目を丸くしている。
「ああ、そうか、平馬さんはゆうべ中屋敷へ行っている。今は小梅村に帰っているんかね」
「それだってまだはっきりしないわよ」
「すると、これから小梅村へ行ってみて、そこに平馬さんがいなければ、まだ浜町の中屋敷にいるということになるんかな」
「たぶんそうかも知れない」
「平馬さんは敵にまわらないほうがいいな。行者さんからよく話してあげるといい。もし、これから小梅村へ行って平馬さんがいなかったら、おれ浜町へ行って平馬さんを呼んできてやってもいいよ」
　右助はこっちへなんの悪意も持ってはいないようである。これが本心なのだろうかと、お粂は用心しながらも、ついこの男を利用してやろうと、そんな大胆な気持ちになってくるのだ。
「じゃ、右助さんはあたしの味方になってくれる」
「おれははじめから行者さんの味方です」
「あら、どうして――」
「行者さんは船七の親方と親類みたいなもんだってね」
「そうよ。伯父さんみたいなもんだわ」
「御家老さまは若い時分、船七親方の家へ居候をしていたことがあるんだとかで、いまでも親類づきあいをしているです」
「まあ、それ本当なの――」
　これはまったく意外だった。
「平ったくいえば、御家老さまと船七親方は兄

弟分で、行者さんはその親方の姪ということになるんだから、御家老さまにも姪御さんにあたる。御家老さまの家来のおれから見れば、行者さんはおれの御主人と思わなければならないです」
「あらあら、変なことになってきたのねえ」
「ちっとも変なことではないです。だから、御家老さまが行者さんの後をつけてみろというのは、行者の内緒ごとをさぐってこいっていうそんなけちな根性からでなくて、行者さんがあぶない目にあわないようにっていう、いってみれば親心からなんだとおれは思うです。おれは今、はじめから行者さんの味方だといったけど、本当は家来のつもりでいたです。だから、こんどからはそう思って使ってくれてかまわないです」
「困っちまったなあ、あたし」
「どうしてだね、行者さん」
「だって、あたしは平馬さんが向こうへつけばやっぱりあたしも向こうへつくようになるのよ。そうなれば右助さんとも敵と味方ってことになるでしょ」
「そんなことはそうなってから考えればいいです」
　右助はあかるい顔でわらっている。
「そういえばそうだけれど――」
　こっちは平馬がすでに偽若殿をつとめているのを知っているだけに、だんだん気が重くなってくるばかりだ。

ごろん棒剣客

　そのころ――。
　平馬は船の中で若党米次郎の衣装を借り、髷も若党風になおして、東両国の水戸家の石揚げ場へ船をつけさせて、そこから一人で陸へあがった。
　本当はもっと早く陸へあがったほうが小梅村に近いのだが、船には無論手塚組のひもがついているだろうし、どうも適当な場所がない。い

っそ水戸家の石揚げ場にしよう、そこから亀沢町の松岡の道場も近いからということになったのである。

今夜の計画は船の中で大体打ちあわせをすましておいた。

南品川に鶴屋という旅籠屋がある。そこへ今夜はおそくも九ッ（十二時）までに落ちあい、明日は明け六ッ（六時）の一番船が出るまでに六郷の渡し場へ着くように、品川を七ッ（四時）前に立つ。

人数は今日向島へ供をした近習組十人と、加勢にたのんである松岡組五人、これに茂太郎主従三人と平馬、総勢十九人ということになる。

それらの打ち合わせは簡単にすんだが、問題になったのは福姫の同行ということである。

「実際問題として、そんなことが実行できるでしょうかなあ」

茂太郎ははじめ、そんなまねは屋敷で許さないだろうと、軽く考えていたようだ。

「いや、あのじゃじゃ姫は、屋敷で許さなくても、黙って出てきてしまう度胸を持っているようだ」

平馬はなんとなくそんな気がするのである。

「それと、あそこの用人塚越助左衛門は、昨日茂右衛門からこっちのくわしい事情を聞いているそうだ。無理に引きとめれば無断で飛び出すとわかれば、結局はじゃじゃ姫のいうなりになるか、座敷牢へ入れるか、どっちかということになる」

「こっちが江戸を立つ時刻を伏せておいたらどうなるだろう」

「それは、茂太郎さん、いかん。じゃじゃ姫が国もとまでいっしょに行ってやろうというのは、お姫さまの精いっぱいの好意なんだ。それをこっちが冷淡に取りあつかえば、こんどの縁組みを破談にしてくるにきまっている」

「しかしな、平馬さん、姫君はあなたを亀之助さまだと思って、今日この縁組みを承知してい

る。もし国もとへいっしょに行くようになって、それが偽物だったとわかったら、もっと問題が大きくなりはしないか」

「その問題なら、たとえばこの事件がこっちの思いどおりに片づいてからでも、やっぱり大きな問題になってきはしないのか」

「なるほど――」

「こっちは背に腹はかえられない立場だから、やむをえず姫君をだましにかけたんだが、だまされた姫君にとっては泣き寝入りにできないものが必ず残る」

「うっかりするというような僥倖はありえないだろうか」

茂太郎はそんな虫のいいことをいい出す。

「それはありえない。仮に姫君がうっかりしていても、それでは亀之助さんが承知できないだろう」

「正直にいえばな、平馬さん、この問題はその時がきたら破談になってもしようがない。できればなにか理由をこしらえてうまく破談にする、そんなことも考えているんだ。責任は無論わしがとる」

さすがに茂太郎は申し訳なさそうな顔をしている。

「いや、その責任ということになれば、いちばんわしが重いことになるんだ。承知の上で姫君をだましたんだからな」

その点は中橋親子ばかりを責められないものがあるのだ。

「人間というやつは手前勝手なもので、今日のどたん場さえなんとかしのげればうまくいくんだと、そのほうへばかり頭がいっていた。さて、それがうまくすんでみると、いまさらのように大変なことをやったもんだと、我ながらあきれている」

「僥倖はありえない。また、僥倖などにたよってはいかんのだ。だから、わしは、万一姫君が屋敷をぬけ出してくるようなら、その時一切の

事情をうちあけ、その上で協力をたのんでみようと考えている」

「承知してくれるだろうかな、平馬さん」

「それは承知してくれるようにたのんでみよう。また、万一、姫君が屋敷をぬけ出せないようなら、こんど国もとから帰った時、ひそかに屋敷をたずねて、わしがあやまることにする。姫君の問題は一切わしにまかせておいてもらえばいいんだ」

なんにも知らない茂太郎にはちょっと気の毒だが、いまはそういっておくほかはない平馬だった。

「たのむ、平馬さん。そのかわり、わしの命が必要な場合は、いつでもよろこんで死にます。これだけは誓っておきます」

茂太郎はきっぱりとそういいきって、いくらか安心したようである。

「ついでに聞いておくんだが、手塚が討っ手を向けるとして、急に彼の手で集められる人数はどのくらいいるだろう」

「江戸だけで三十人ぐらいはいるんじゃないかと思う。もう十年がかりで手なずけているんだから、決して侮りがたい勢力になっているようだ」

「こっちは松岡組の五人を入れても十五人、あんたとわしを入れて十七人。約半分ということになるな」

「いや、手塚はもう一組み、外に浪人組を持っているんだ」

「ふうむ、浪人組をねえ」

「下谷の車坂に渋川一心斎という念流の達人が道場をひらいている。これが手塚の若い時分からの友達で、はじめのうちは小森家へ指南番に入れたかったらしいが、どうも人間に癖がありすぎて、それだけはあきらめたようなんだ。そのかわり車坂へ道場を持たせてやったが、やっぱりあまり門弟がつかない。腕はできるんだが、やくざっ気が多すぎるんだな。いつの間にか目

の寄るところへ玉で、ごろん棒浪人どもが集まってきて、地獄道場になってしまった。こんどはこの渋川一心斎を主に使うんじゃないかと思うんだ。家中の者は、たとえ軽輩でも、みんなそれぞれ役を持っているから、そう屋敷をあけるわけにはいかないだろうしね」

「つまり、こっちが松岡をたのんだのは、その渋川とかみあわせるためなんだな」

「平馬さんは松岡さんをよく知っているはずですな」

「そりゃ、よく知っている。祖父の後継者だからね」

「松岡さんは五人で大丈夫だといっている。あの人は相当な剣客らしいな」

「松岡は無論、腕に自信はある。しかし、五人で大丈夫だといったのは、自分の手で集められる人物は四人しかいなかったんじゃないかな」

平馬はここにもふっと不安なものを感じさせられる。

牛の平助

平馬は水戸家の石揚げ場から一ッ目橋の南たもとへ出て、竪川ぞいの南河岸を真っすぐ松井町へ進んだ。幸い、尾行者らしいやつはだれもついていないようである。

松井町を出外れたところに二ッ目橋があって、それをわたると亀沢町になる。

さっそく松岡の道場をたずねると、平助の在宿は道場から聞こえてくるにぎやかな竹刀の音でもわかった。師匠がいるといないとでは、どこかけいこの活気がちがうのである。

「若先生、昨日は不在にしまして、申し訳ありませんでした」

奥座敷へ通されて、待つというほどの時もおかず、すぐに出てきた松岡は、いつものとおり下座へついてまず昨日のわびからいう。

松岡平助は平馬より年がひとまわり以上も上なので、平馬が満十五で元服した時は、もう祖

父の師範代として立派に長谷部道場を切りまわしていた。だから、平馬の剣術はほとんど松岡から仕込まれたのである。
その平馬が元服した日から、松岡は平馬を若先生と呼ぶようになった。
「若先生、あなたは他日この長谷部道場の後継者になるのですから、老先生に勝るとも劣らぬだけの腕にならなくてはいけません」
それをいうための若先生であり、平馬をそう仕込んでいくことが祖父平左衛門からうけた恩義をかえす唯一の道だと思いこんでいるような、律儀な松岡だった。
それだけに、松岡の剣は見た目に派手なところは少しもないが、牛のように根強い底力を持っているという定評があった。
「そうだ、昨日の用から片づけておこう」
平馬はきちんと座りなおして、
「実はねえ、松岡、おかげでさきおととい祖父平左衛門の三回忌も無事にすんだ。わしは前からいろいろ考えていたんだが、どうも祖父のように剣客者として世に出る気持ちにはどうしてもなれない。わしの生きる道はほかにあるような気がするんだ。それで、これを機会に、今日まで道場ごとあずかってもらっていた剣客者としての祖父の遺業は一切、改めておまえにゆずるから、長谷部一刀流の後継者はおまえがついでもらいたいんだ。いささか押しつけがましいが、承知してもらえるだろうね」
と、あっさりこっちの気持ちをうちあける。
「若先生、突然そんなことをいわれても、わしは困ります」
松岡は急にむずかしい顔をした。
事はいやしくも一流の後継者の問題だし、長谷部家にはささやかながらこの道場という財産もついている。わしは剣術使いはいやだから、道場ごとおまえにやろう、そうですか、それではもらいますと、そう簡単に話をきめられる問題ではないし、だいいち、松岡としては、たと

え自分は一生平馬の後見人として終わっても、平馬にこの道場をつがせなくては、死んだ恩師に対して申し訳がないという責任感もあるのだろう。
いまの平馬には、それをいちいち納得させるまで松岡と話しこんでいる暇はない。
「松岡、わしは今日、妙なかっこうをしているだろう」
平馬は軽く話題をかわす。
「どうかしたのですか。さっきからそれを聞こうと思っていたんです」
「わしは昨日、突然、妙な事件にまきこまれてしまってねえ。よく話を聞いてみると、松岡も一役買っているとわかった」
「すると、小森家の騒動ですね」
松岡は声をひそめながら、思わずひざを乗り出している。
「うむ、その騒動なんだ」
「失礼ですが、若先生は小森家となにか関係がありはしませんか。わしが昨日の夕方お目にかかった小森家の若殿は、若先生とうり二つなんで、びっくりしました」
「そうか——。実はな、さきおととい祖父の三回忌をすませたんで、その翌日、つまりおとといの朝、わしは母の形見の短刀を中橋茂右衛門に五十両で売りに行ったんだ。祖父が死ぬ時、帰りたければ父のもとへ帰るもいいが、帰ると余計な苦労をするぞといっていた。だから、わしは帰らないことにきめたんだ」
「それでわかりました。老先生はわしに一度、平馬は剣客者になる気はあるまい。無理にけいこをさせぬがいいといったことがあります。その時、わしは、老先生でも孫にはこんなに甘くなるものかと、意外に思ったことがありましたが、——そうですか、そんな事情が平馬さんにはあったんですか」
「松岡、その事情はもう忘れてもらっていいんだ。わしは形見の短刀を売って、もとの長谷部

平馬になった。小梅の乳母はいまだになんにも知らないんだが、五十両の金は乳母にやって、わしは一生小梅の離れでのんきに暮らすことにきめていた。その時、この道場もおまえにゆずろうときめたんだ」

「それが、どうして小森家の騒動にまきこまれたんです」

「亀之助さんな、松岡に昨日の夕方会ったそのすぐ後で、オランダわたりの強い眠り薬を一服盛られて倒れてしまった。命だけは大丈夫らしいが、当分体がきかないんで、わしが身がわりに引っぱり出されたんだ」

「おどろきましたなあ。すると、国もとへも身がわりで行くことになるんですか」

「乗りかかった船でしようがない。今日は向島へ見合いに行って、船で帰る途中こんな姿に化けて、ここへ逃げてきたんだ」

「今日の見合いはうまくいったんですか」

「うむ、うまくいった。そこで、今夜江戸を立つことになるんだが、おまえにも今夜の九ツまでに、南品川の鶴屋へ集合してくれるようにということだ」

「承知しました」

「松岡はどうして中橋党へ引っぱられたんだね」

「わしの死んだおやじさまは、もと津山藩の浪人です。若先生とはどうしても切っても切れない縁があるんですなあ」

松岡はしみじみといって、いまさらのように平馬の顔を見なおしている。

「わしはなんのかんのといって、一生松岡の世話になるようにできているのかな」

平馬は思わず苦わらいが出る。祖父の恩義を枷（かせ）にして、あまり松岡に重い負担をかけるのは虫がよすぎはしないかと、ふっとそんな気がしてきたのだ。

「若先生、その、世話になるの、世話をするのという考えはよしましょう。人間はすなおに自

分のやれることをやっていけばそれでいいんだと、わしは老先生にいわれたことがあります。それはわしの態度の中に、自分は老先生に養われているんだから、早く剣術が上手になって恩をかえさなくてはという孤児根性があったんですな。つまり、それだけいじけているわけです。老先生は、そんなつもりでおまえを養っているんじゃない、おまえはおまえのなりたいものになればいいんだから、もっと気を楽に持て、毎日をのびのびとした気でやってみろと、そういう心だったんです。それがはっきりとのみこめて、妙な肩の凝りがとれてから、ふしぎとわしの技はのびてきたようです」

「要するに、こだわりすぎてはいかんということか」

「そうのようです」

「つまり、世話になる時は遠慮なく世話になれというんだな」

「そうです。そのかわり、世話をするほうも、無理をしてまで世話をする必要はない。無理をすると、つい恩にきせたくなるからでしょうな」

「なるほど、そう考えると気が楽になるな」

「しかし、若先生、途中でやりかけた仕事を投げ出すようだと、その人間の価値はぐっと下落しますぞ」

「わかっている。わしはとことんまで松岡の世話になることにする。それならいいんだろう」

「そのとおりです。それでいいんです」

平馬が冗談のようにいうと、松岡はうれしそうにわらっていた。

「先生、申し上げます」

内弟子の伊村三平が廊下へきて座った。なにか興奮している顔つきである。

「どうした、三平」

「いま玄関へ二人づれの浪人者がきて、一人は山根五郎蔵、一人は西野甚内（じんない）、ぜひ先生と一本お手合わせが願いたいと申しております。どういたしましょう」

「修業者のようか」
「いいえ、二人とも着流しで、どうも道場破りにきたんじゃないかと思います」
「そうか——。とにかく、ていねいに道場へ通しておきなさい」
「はっ」
若い三平はいそいで玄関へ引き返していく。

他流試合

道場へ道場破りがくるのは、祖父の代から珍しいことではない。
他流試合にも二種類あって、本当に修業のために腕をみがきにくるのと、はじめから包み金が目的で道場荒らしにくるのとがある。
そのどっちにしても、他流試合は道場の先生を一本打ちこんで自分の手柄にするのが目的だから、道場がわでも相手が弱いと見せしめのために足腰の立たないほど打ちすえて追いかえすのが例になっている。
したがって、他流試合はくるほうも命がけだし、道場がわでも道場の名誉にかかわることだから、命がけにならざるをえない。
祖父平左衛門が生きていた晩年は、あまり悪質な道場破りはほとんど寄りつかなかった。道場は小さいが、師範の平左衛門は本所の隠居でとおるほどの名人だったし、松岡が師範代になってからは、牛の平助と呼ばれて、他流試合を一手に引きうけ、まだ一度も負けたことがないからである。
祖父が死んで、長谷部道場が松岡道場にかわってからは、平馬はずっと小梅村のほうに引きこもっていて、くわしいことはわからないが、やっぱり道場荒らしはほとんど寄りつかなかったようである。牛の平助の名がそれだけひろまっていたからだろう。
「松岡、他流試合は珍しいんじゃないのか」
平馬は念のために聞いてみた。
「そうですな、田舎から出てくるてんぐ連が、

ときたま、こんな小さい道場なら大丈夫だろうというんで、からかい半分にまぎれこんでくることはありますが、たちの悪いのはほとんどきません」
「いまの山根と西野というのは着流しだというから、田舎てんぐではなさそうだな」
「ごろつき剣客は年々歳々ふえる一方ですから、たまには場違いも出てくるんでしょう」
松岡はあまり気にもしていないようである。
「松岡は下谷車坂の渋川一心斎という男を知っているかね」
「まだかけ違って会ったことはありませんが、名前は聞いています。念流の達人だそうですな」
「人柄に癖があるんで、道場はまるっきりはやらない。ごろつき剣客が集まってきて、いまでは地獄道場になっているそうだ。この渋川は問題の手塚勘解由（かげゆ）と若いころからの友達なんで、こんどのこっちの国入りには、手塚はたぶん渋川の浪人組を使うんじゃないかと茂太郎はいっていた」
「なるほど——」
「いまきた二人は、渋川の息のかかった連中で、松岡の実力をためしにきたんじゃないかとわしは見る、少しうがちすぎるかな」
「いや、若先生のいうとおりかも知れません。普通では、ごろつき浪人など、ここへ寄りつけるはずはありませんからな」
「どうする。といったところで、逃げる手もないだろうが」
「まあ、会ってみようと思います。こだわることはありません」
松岡は相かわらず牛のようにどっしりと落着いてわらっている。
「なるほど、こだわらずに白紙流でぶつかってみるか」
「そうします。すぐすむでしょうから、若先生はここでしばらくくつろいでいてください」
松岡はそういって、気軽に立ちあがった。

道場ではすでに竹刀の音がやんで、ひっそりとしている。他流試合をむかえた門弟たちは、両側の羽目板ぎわへさがって、みんなしいんと息をのんでいるのだろう。

　松岡が道場へ出ていくと、平馬はやっぱり気になるので、門弟たちが着物をきかえる控えの間までそっと出ていってみた。

　――はてな。

　そっと道場をのぞいてみると、師範席を正面に見て道場の中央に二人並んで座っている浪人の顔に、どうやら見おぼえがあるようだ。

　一人はずんぐりむっくりとして不精ひげの濃いやつ、一人は背の高い四角張った顔のやつ、おとといお糸と新寺町通りを歩いていた時、からんできた連中にちがいないのだ。

　――そうか、新寺町通りは車坂のおひざもとだからな。

　あの時はうまく一分銀を二つ、二分やって無事にわかれたが、二人とも相当の腕前だと見ていた。

「わしがおたずねにあずかった当道場の主、松岡平助です。御貴殿方は――」

　師範席についた松岡は、目に柔和な微笑をただよわせがら、無造作にあいさつをする。

「拙者は武州浪人山根五郎蔵――」

　ひげだるまが名乗る尾について、

「わしは野州浪人西野甚内」

と、のっぽがむっつりと名乗る。

「我々両人、剣道執心の者でござってな。三年前に江戸へ出てきた当時から、本所亀沢町に天真一刀流の松岡平助先生ありと耳にして、いつか一度お手合わせが願いたいものだと思っていました。それが、今日ちょうどこっちへまいる用でこの前を通りかかり、ああ、ここが牛の平助先生の道場かとわかると、もう矢も盾もたまらなくなって、二人で相談の上おじゃましました次第、後学のためなにとぞ一本お手合わせが願いたく、お願いいたします」

　ひげの山根がもっともらしくのべ立てて、改めておじぎをする。

「つまり、他流試合をのぞまれるわけでござるな」

「おこがましく申せば、そういうことになります」

「御両所は何流を学ばれたのかな」

「両人とも真庭念流を少々修業しました」

「いや、わしの目に狂いがなければ、おのおのがたはもう一流の指南ができる域まで達していられる。わしに試合を求めるのは、後学のためというより、なにか目的があってのことのように思えるが」

　松岡はおだやかに、それとなく、そんな皮肉を口にする。

「いや、別に目的などと、そんな人の悪い我々ではありません。要するに、剣道執心の者でござってな」

　山根は空っとぼけるように、にこにこわらっている。

木剣勝負

「松岡先生、天真一刀流は本来組み太刀をきわめるのが目的で、竹刀打ちのけいこは邪道としたものだそうですな」

　ひげの山根がもっともらしい顔になって聞いた。

「さよう。流祖寺田先生は竹刀をほとんど取らなかったと聞いています」

　松岡は正直に答える。

「つまり、竹刀剣術では真剣の気組みに遠いから、いくらけいこをしても役に立たぬということなんでしょうが、わしはその組み太刀の気組みというものを、後学のためにぜひ一度拝見しておきたい。どうでしょうな、今日はひとつ木剣で試合をしていただきたいと思うんだが」

　平気でそんな乱暴な挑戦(ちょうせん)をしてくる山根五郎蔵は、無論それだけ腕に自信があって、ただ松

岡の実力を試しにきたばかりでなく、あわよくばこっちをかたわにして、明日道中へ出られないようにして帰ろうという腹があるのだろう。

　考えてみれば、この二人がもし渋川組のまわし者なら、こっちとはすでに敵と味方の間柄なのだから、そのくらいのことをたくらむのは当然の話で、要するに戦いはもう昨日からはじまっているのだ。

「御同様に剣客者と世に立つ我々が、あぶないという言葉を口にするのはどうかと思うが、木剣試合は真剣勝負もおなじで、へたをすると命取りになる。あなたがたは命にかけてもわしと試合をしなければならない理由がなにかあるんですかな」

　松岡はあくまでもおだやかである。

「いや、剣の道はしょせん命がけのもの、常に白刃の下に身をおく覚悟でなければ、真の奥義には達せられぬ。その意味の木剣勝負でしてな、別に他意があるわけではありません」

「その考えは少し行きすぎのようですな。人を殺してまで名人になりたいというのは邪道です。おのれを責めて、工夫をかさね、おのずから名人の域に達するのでなければ修業の意味はありません。もう一度考えなおしてみられてはどうかな」

「おそらく、先生はそういう正しい修業をつまれて名人の域に達せられたのでしょう。我々はその先生の実力、といっては失礼ですが、つまり、真の力量を後学のために見せていただきたいのです」

「困りましたな。そういうお心がけでは見てもおわかりにならんと思うが、ことわるのも狭量のようで本意ない。よろしい、木剣で立ち合いましょう、支度をなさい」

　松岡は無造作に立ちあがった。

　その松岡の言葉の中に、あきらかに相手を自分より下に見ている節があるので、山根はむっとしたようだが、それより木剣試合は逃げると

見ていた松岡があまりにもあっさり立ちあがったので、そのほうがむしろ意外だったのだろう。

「はじめ門弟衆とやらんでもよろしいかな」

と、きょとんとした顔で聞く。

「いや、けがをするといかんので、木剣試合は門弟には禁じてあります」

「なるほど、それはそうでしょうな。こっちはむしろそのほうがありがたい」

　山根は苦わらいをしながら立ちあがって、西野といっしょに道場の下手へさがり、さっそく身支度にかかる。

　身支度といってもけいこ道具をつけるわけではないのだから、至極簡単で、手ぬぐいではち巻き、刀の下げ緒をとってたすき、あとは着流しのしりっぱしょりをすればそれでいいのだ。

　そのかわり、打ちどころが悪ければ即死するかもしれないのだから、気持ちのほうはそう簡単ではないはずである。

　内弟子の三平が木剣二振りを持って山根のそばへ行く。山根は一本ずつ手にして、びゅっびゅっと素振りをくれてみてから一本のほうを選ぶ。そのころから、山根の顔はさすがに少しずつ引きつってきたようだ。

　松岡はけいこ着姿になって、はち巻きをしめ、手なれた木剣をさげて、つかつかと道場の中央へ進む。これはいつもとおなじ顔色だ。むしろ両側に並んで座っている門弟たちのほうが、すっかり緊張して顔色をかえ、口もきけないようだ。

　武者窓に五、六人の顔が目白押しにならびかさなっている。これも息をのんでいるような顔ばかりだ。

「支度がよければ、始めますかな」

　松岡のほうからゆったりと声をかける。

「よろしい」

　意を決したように進み出た山根は、

「お手やわらかに――」

と、それでも行儀よくおじぎをした。

「御同様に」
静かにあいさつをかえした松岡は、しゃがんで、木剣をすっと前へ出す。
山根がそれにならって、おなじ姿勢を取り、双方視線がぴたりと合って、
「いざ」
「おう」
さっと同時に立ちあがった。戦闘開始である。
「えいっ」
「おうっ」
相青眼で、剣先の間合いは六尺ほどに取る。真剣勝負とおなじだから、双方大事をとっているので、この間合いが切っ先のふれるところまで縮まった時、勝負は一刀一撃できまるのだ。
山根の目は恐ろしいまでにつりあがってきたが、さすがに自分から木剣試合をいどむくらいだから堂々たる青眼で、さあどこからでもこいといった必死の面魂に見える。
松岡のほうはいつも竹刀げいこをつける時とおなじで、ただ目に底光りがしてきたように見えるだけである。
——松岡は強い。
控えの間からのぞいていた平馬は、久しぶりに松岡の構えを見て驚嘆した。こういう他流試合を見るのは平馬も今日がはじめてだが、これだけの強敵を向こうにまわして精神に少しの動揺もないのは、技もさることながら、それ以上に腹ができているからだろう。
こう柔らかくうけていられては、必死に殺気を駆り立てて全身から火を吹いている相手は、そう長くおなじ気力を持ちつづけられなくなってくる。一度は必ず息をつく時が出てくるのだ。
「おうっ」
山根はありったけの気合いを振りしぼって相手を圧倒し、そのかげで息をつこうとする。
「とうっ」
松岡の気合いがすかさずそれへのしかかって

いくので、山根は息をぬくことができないようだ。
「えいっ」
「とうっ」
山根のひげだるまの顔が真っ赤に充血してきた。先手に先手にと息を詰められて、苦しくてたまらなくなってきたのだろう。
後はいちかばちか、捨て身になって強引に打って出るほかはない。と、平馬が見た一瞬、
「えいっ」
鋭い気合いと同時に、松岡の体がすべるように間合いをつめていった。
「おうっ」
山根が夢中で木剣を振りかぶりそうにした時、松岡はすでに自分の木剣を鍔ぜりあいに持ちこんで、あっという間に敵の木剣の中柄に左手をかけ、ぽろりとそれをもぎとっていた。
「ま、まいった」
山根はあっけにとられて、ぽかんと松岡の顔を見ている。
すっと六尺ばかりさがって、両手に木剣をさげた松岡は、
「山根さん、おわかりになったかな」
と、もうおだやかな顔になってわらっている。
「はあ、わかりました。よくわかりました。遠く我々ごときの及ぶところではありません。しかし、わしはどうして自分の木剣をとられたんでしょうな」
山根は正直に小首をかしげている。つまり、相手の強いことはわかったが、どうして木剣をとられたかはわかっていないのだ。
「まあ、ゆっくり研究されるがよい。わしにさえできるのだから、貴公にその工夫がつかないことはないはずだ」
「恐れ入りました。松岡先生はたしかに名人です」
無論、連れの西野甚内も、これですっかり自信を失ってしまったらしく、二人とも無礼をわ

びて、ほうほうの体で帰っていった。

いい仕事

「三平、わしはあの二人のあとをつけてみるから、松岡にそう伝えておいてくれ」
平馬は内弟子にそういいおいて、山根と西野の後をつけてみることにした。
二人はすっかり当てが外れてがっかりしたらしく、両方ともしばらくは口をきく元気もなく、お竹蔵にそってまっすぐ北本所のほうへ歩いていく。
この辺は片側は旗本屋敷になっていて、あまり人通りのないところだから、人を尾行するには都合が悪い。が、平馬はこっちから話しかけてみるつもりで後を追ってきたのだから、かまわずすぐうしろから歩いていく。
「おい、甚内、おぬしどう思う」
しばらく歩いてから、五郎蔵は怒ったように西野に聞いた。
「なあに、あんなことは軽業のたぐいだ。真剣勝負の役には立ちゃしねえ」
西野が吐き出すように答える。二人とも腹の中はひどく悔しいようだ。
「負け惜しみじゃないが、おれもそんな気がするんだ。あれは天真一刀流の組み太刀の中にあの手があって、特にそれを松岡はけいこしたんだろうと思う」
「無論、そんなところだろう。きんちゃく切りが人のふところをねらうのとおなじことで、少し器用なやつがその気でけいこすれば、だれにだってできることだ」
「いっそ竹刀の試合のほうがよかったな、実力を見るには」
「いや、実力はもうわかっている」
西野はきっぱりという。
「そうか。わかっているか」
「無論、凡手じゃないが、いざ殺しっことなれば、技より度胸だ。それに、道中へ出れば一人

に二人がかからなくちゃならないというおきてはない」
「なるほど、それもそうだな」
山根はにやりとしながら、
「どうだ、甚内、渋川さんとどっちだろうな」
と、声をひそめていう。
「それは、無論、渋川一心斎先生だろう。先生は決して正道はとらぬ。奇襲に妙を得ているからな」
「実戦は奇襲にかぎるからな。楠正成（くすのきまさしげ）さんだって、ほとんど奇襲戦法だった」
「五郎蔵、約束しておこうじゃないか。明日からいよいよ実戦に入る。一人一人で手柄を立てるより、いつも二人でかかったほうが安全なんだ。いいか、一人でめざましく死んだって、だれもほめちゃくれないんだ」
「わかっている。二人一組みでやることにしよう。相手が一人なら絶対に勝てるからな。ところで、帰ったら渋川さんになんといっておこうな」
「道場剣術は強いようですといっておけばいい」
「なるほど――」
「人間は正直で、あまり融通のきかないほうですから、実戦の役には立たないでしょうとつけ加えておく。なあに渋川先生は苦労人だから、それだけいえばちゃんと通じるはずだ」
「よし、じゃそうしよう」
山根はやっと安心したようだ。
平馬はもういいだろうと思ったので、ちょっと立ちどまって距離を作り、
「やあ、御両所、また会いましたなあ」
と声をかけながら、二人に近づいていった。
どきりとしたように振りかえった二人は、
「はてな、おぬしにはどこかで出会ったことがあるな」
と、山根のほうがじろじろと顔を見ている。
「おととい新寺町通りで会った者です。その時

は妹がいっしょでした」
　平馬はかまわず山根のほうへ肩をならべていく。
「ああ、そうか。駕籠賃を二分もらった御仁か。今日は変わった身なりをしているじゃないか、どうしたんだ」
「背に腹はかえられませんからね。ある人の世話で若党奉公に入りました」
「なるほど、近ごろ浪人者は暮らしにくいからな。じゃ、おとといの二分は、相当痛かったんじゃないか」
　そんなところへ気がまわるようでは、山根も腹から悪党になりきれないものを持っているようだ。
「いや、あの二分は親どもへの供養のつもりです。心配しないでください」
「そうか。それは気の毒だな。どうだ、貴公いくらか腕は立つんだろう。どのくらい修業したんだね」
「目録ぐらいです。とても一人前というわけにはいきません」
「度胸のほうはどうだ」
「あんまり自慢にはなりません。試胆会にはいつも腹痛をおこすほうでしてね」
「そうか、それだと少し無理かな」
「なにが無理なんです」
「実は、いい仕事があるから、世話をしてやろうかと思ったんだ。――なあ、甚内」
「やめておけ、五郎蔵、若い者にすすめる仕事じゃない。若党奉公のほうがまだましなくらいだ」
　西野がぶっきらぼうに答える。これも根は悪人にはなりきれない男らしい。
「聞かしてもらいたいなあ。それはどんな仕事なんです」
　平馬はわざとせがんでみる。
「なあに、用心棒という仕事でな。ちょいと命がけじゃあるが、うまくいけば支度金が入る上

に、その藩に仕官できるかもしれないんだ」
「そりゃ耳寄りの話ですな。しかし、目録の腕じゃだめなんでしょうね」
「いや、自分が切られないようにすれば、腕は目録でもかまわない。一人でやるわけじゃなく、こっちには大勢味方がついているんだからな」
「ぜひ世話をしてくれませんかねえ。そこへ仕官ができれば、これに越したことはないし、妹にも安心させてやれますからな。こんないい話はめったに聞けません」
「おぬし、あの時いっしょに歩いていたのは、本当におぬしの妹なのかね」
　山根が真顔になって聞く。
「そうです。お粂というんです。どうしてですか」
　平馬はわざと不審そうな顔をした。

単純な男

「あの妹は、いまどこに住んでいるんだね」
　山根はお粂のことがまだ気になるらしい。
「あれは浅草三間町にいます。近所へ行って行者のお粂と聞いてもらえばすぐわかるはずです」
「そうか、行者の家へ奉公しているのか。惜しいもんだなあ」
「どうしてです」
「いずれはどこかへ嫁にやるんだろう」
「それはそうです」
「どうだろうな、あの妹をわしの家内にくれぬか。そのかわり、貴公のことはわしが引きうけて、きっと渋川先生にたのんでやる」
　この男の頭はよっぽど単純にできているらしいと、平馬は内心あきれながら、
「それは、貴公、本気なんですか」
　と、わざと聞いてみる。
「本気だとも――。わしは武州浪人山根五郎蔵といってな、今こそ車坂の渋川一心斎先生の道場にごろごろしているが、こんどの仕事がうま

くいけば、きっとそこへ仕官の道がひらけるんだ。無論、祝言は仕官がきまってからでいいんだが、約束だけしておきたい。励みにもなることだしな」
「では、一度妹に聞いてみます。わしはこれから一軒用たしをして、それから妹に会って山根さんをたずねることにしますが、車坂の道場へ行けばいいんでしょうね」
「いや、今日は夕方まで吾妻橋のそばの玉屋という料理屋にいる。ことによると、今夜そこから出発するようになるかも知れないから、貴公本当に仲間に入りたかったら、日の暮れる前にこなければ間にあわんぞ」
「わかりました。きっと妹の返事を持ってうかがいます」
平馬は少しばからしくなりながら、石原町へかかろうとする角で山根と西野に別れた。そこを右へおれて、いわゆる本所割り下水の旗本屋敷といわれる広い屋敷町の間をまっすぐ横川へ抜け、川にそって北へしばらく行くと業平橋(なりひらばし)の西たもとへ出る。業平橋をわたれば、もう小梅村なのだ。
——渋川組は恐れるに足らぬ。
平馬はそう思った。無論、渋川組はあの二人のような単純な男ばかりだときめてしまうのは早計かもしれないが、たいていは仕官と金とにつられてくる連中だろうから、どたん場へきて命まで投げ出そうという気になれる男は、おそらくほとんどないんじゃないか、平馬はそんな気がするのだ。
しかし、昨日の夕方ひそかに松岡が若殿に目通りしたことを敵はもうちゃんと知っていて、あの二人をさっそく腕試しによこしたとすれば、敵の目はすでに中屋敷じゅうに光っていると見るほかはない。
現に、いま別れた山根でさえ、今夜江戸を立つかも知れないといっているのだ。それは、こっちが今夜江戸を立つことを、もうかぎつけて

いるということになる。
こっちが今夜江戸を立とうとはっきりきめたのは、さっき帰りの船の中でなのだから、まさかこれはまだ外へもれるはずはない。敵がその用意をしているのは、無論、手塚勘解由の予想と見ていいだろうが、そういう予想のもとに急所急所へ手を打たれているとなると、こっちの計画は片っぱしから手塚のほうへ筒抜けになっていきそうだ。
——わしにしても、茂太郎にしても、今夜うまく品川へ敵の目をくらまして行くことさえ、ひょっとするとあぶないんじゃないかな。
横川へ突きあたって左へ曲がる時、平馬はそれとなくうしろを注意してみたが、今のところ、ひもらしい者はついていないようだ。
しかし、まだ油断はできない。意地悪く考えれば、敵はもう小梅村と中屋敷との間をある程度まではさぐり出しているかもしれないのだ。それだと、たとえうまくひもはまいても、小梅村のほうへ先まわりをされているかもしれない。
——今夜つれていく近習十人の中にも、裏切り者がいないとはいいきれないんじゃないかな。
いわゆる疑心暗鬼というやつで、疑い出すときりがなくなってくる。
ちょうど業平橋のたもとへかかってきた平馬は、あっと目をみはった。寺町のほうから若い中間風の男といっしょに出てきたお粂と、ばったり顔をあわせてしまったのだ。
「あら、兄さん、どこへ——」
「お粂か、どこへ行くんだね」
連れの中間を一目見た瞬間、これはただの中間じゃないというような気がしたので、平馬はうっかりしたことはいえぬと思った。
「どこへ行くって、あたしこれから小梅の兄さんのところへ行く気で出てきたのよ。兄さんこそ、そんな変なかっこうをして、どうしたんです」

お粂はまじまじと平馬の顔を見ながら、これもちょっと連れの中間に気がねをしているようである。

「行者さん、おれずっと離れて歩いて、これからはなんにも聞かないことにするから、遠慮なく平馬さんと話してみるがいい」

それと見た中間が、人なつこそうな微笑をうかべながらお粂にそういって、正直に後ろへさがろうとする。

「あんたはわしを知っているようだが、だれなんだね」

平馬は気さくに聞いてみた。

「わしは手塚勘解由さまの中間右助といいます。くわしいことは行者さんから聞いてもらいたいです」

右助はおじぎをして、五、六間後もどりをしていく。

「とにかく、うちへ行こう。こんなところに立っていたってしようがない」

平馬はお粂をうながして、業平橋をわたり出す。

「兄さん、あたし、いま手塚に会ってきたのよ」

「どこでだね」

「吾妻橋のそばに船七っていう船宿があるんです。そこへ呼ばれていったんだけど――」

お粂はなんとなく青ざめた顔になりながら、

「兄さんは今朝、向島土手であたしと会ったの、知ってるんでしょう」

と、思いきったようにいう。

「お粂、それは会わなかったことにしておくわけにはいかないのか」

平馬は用心深くまず聞いてみる。

「だめよ、もうみんなわかってしまっているんだもの」

「そうか、どうわかっているんだ。話してみてくれ」

「本当は、あたし、向島土手で会った時は、兄さんだとは思ったけれど、まだそうだといいきれない気持ちもありました。すると、船で帰る兄さんを見送ってから、鬼吉につかまってしまったんです」

「ふうむ、今日は鬼吉も出張っていたのか」

平馬は思わず苦わらいが出る。

「あたしはねえ、兄さん、ゆうべは兄さんが茶室へ入るのを見て、もう大丈夫だと思って、そこからうちへ帰ってきたんです。ところが、鬼吉は茶室の中まで見とどけて、夜明け前に中屋敷を出たんだっていってました」

「なるほど、鬼吉ならやりそうなことだな」

「あたしは鬼吉に別れてから、兄さんの船のあとを吾妻橋までつけていくと、あの右助という中間に呼びとめられたんです。あたしはその時、よし、それなら手塚のほうをさぐってやろうと、そんな気もあったんで、右助といっしょに船七へ行って、手塚に会ったんです」

お粂はそこで言葉を切って、じっとくちびるをかんでいるようである。

もうこの辺は田んぼ道で、右助は十間ばかり離れてゆっくり後からついてくる。少しも悪気なさそうな顔つきである。

話しあった末

「兄さん、怒っちゃいやですよ」

突然お粂が念をおすようにいい出す。

「わしはあんまり怒らないほうだ。まあ話してごらん」

「あたしはおじいちゃんのことを話しているうちに、つい兄さんのことまでしゃべっちまったんです」

「そうか――。まあいいだろう。どうせ知れることだ」

まずかったなあとは思うが、しかし、もうそのことは大したことではなくなっているような気もする。

「それで、手塚はなんといっていたね」

「中橋党はわしたちのことを三佞臣とか三人衆

とかいって悪人呼ばわりをしているそうだが、自分たちは御当主さまを立ててもう十年も二十年も無事に藩政をおさめてきている。わしたちにいわせれば、あまりできのよくない若殿を擁して、あくまでも次の藩政をわがものにしようという中橋党こそ、お家をみだすものだということになる。だいいち、将軍家の息女を小森家へむかえるのは、入費ばかりかさむだけで、一藩にとってはなんの役にも立たぬことだというんです」

「なるほど、そういう目で見れば、たしかにそう見えるかも知れないな。それで――」

「だから、自分たちは人から悪人といわれようと、佞臣と陰口をきかれようと、将軍家との縁組みだけはこわさなくてはならない。おまえが本当に平馬さんの体を心配するなら、よくこのことを平馬さんの耳に入れて、この事件から早く身をひいてもらえ、そうでないと、平馬さんは中橋党にさんざん利用された上、しまいにはやみへ葬られるというんです」

「一服盛られるということか」

「そうなんです。今日福姫さまをだました罪は、それでないとおさまらないというんです。そのことは、あの鬼吉もいってました。兄さんはどう考えているんです」

お糸はおそるおそるというような聞き方をする。

「お糸は手塚にたのまれてそれを聞きにきたのか」

「いいえ、たのまれたわけじゃありません。あたしが手塚に、御家老さまとは敵と味方ですとはっきりいってやったら、そういそいで敵味方になることもあるまい、まあ、平馬さんとよく話しあってみて、それからきめてもおそくないというんです」

「右助という中間は、その返事を聞きに、いっしょにつけてよこしたんかね」

「それも違うわ。あたしはね、兄さん、はじめ

浜町へ行こうと思ったんです。でも、よく考えてみると、あたし一人で行ったんじゃ門番が相手にしてくれないでしょうし、真っ昼間じゃ塀をのりこえるわけにはいかないでしょ。だから、小梅のお乳母さんをたのんで、いっしょに行ってもらおうと思って、御厩河岸の渡しにのってこっちへあがったら、右助がついてきていたんです。あれはとても正直な男で、御家老さまから、行者が今日どこへ行くか、どこで泊まるか、それを見とどけてこいといいつけられたんで、後をつけてきた。けど、黙ってつけるのは悪いから、いっしょに歩いてくれっていうんで、ああしていっしょに歩いていたんです」

「ふうむ、おかしな男だな」

「あれで芯はなかなかしっかりしてるんだって、自分でいってるのよ」

お糸はくすりとわらっている。

「それはそうだろう。手塚ほどの切れものが、そんな甘い男を隠密に使うはずはないからな」

「手塚にはもう一人、左助というおない年ぐらいの中間がいて、二人とも御家老さまには深い恩義があるんで、死ぬまで奉公しようと約束しているんですって」

「そういえば、お糸は吾妻橋の近くに玉屋という料理屋のあるのを知らないかね」

平馬はふっと思い出して聞いてみる。

「玉屋は船七の隣で、船七の親方がやっている店だわ。その玉屋になにかあるんですか」

「いや、今日おもしろいことがあったんだ。おとといお糸と新寺町通りで二人の浪人者にからみつかれたろう」

「ええ、二分やって話をつけたやつでしょう」

「そうなんだ。あのひげだるまのほうは山根五郎蔵、のっぽのほうは西野甚内、それがさっき亀沢町の松岡の道場へ他流試合にやってきたんだ」

「あら、あの二人はそんなに強いの」

「うむ、どっちも場末の町道場の先生ぐらいに

はなれる腕らしいな」
「それで、松岡先生は試合をしたの」
「それはしたさ。本当のことをいうとねえ、お条、あの二人は車坂の渋川一心斎の道場にごろごろしている剣客浪人でね、渋川はこんど手塚組について我々の国入りのじゃまをすることになっているんだ。なんでも渋川は手塚の若い時からの友人だそうだ」
「ああ、わかった。じゃ、松岡さんの腕だめしに行ったのね」
「そうなんだ。だから、うまく木剣試合にさそいこんで、松岡をかたわにする気だったんだろうが、あべこべに木剣をもぎとられて、ほうほうのていで逃げ出したんだ」
「強いのねえ、松岡さん。さすがにおじいちゃんの一番弟子だわ」
「わしはその二人の後をつけていって、お竹蔵のあたりで話しかけてみたんだが、向こうでも顔をおぼえていてね、どうだ、いい仕事があるから世話をしようか、若党なんかよりましだぞというんで、ぜひたのむといったら、そのかわりおまえの妹を嫁にくれというんだ」
「そんなことをいったの、あいつ」
「だから、一度妹に聞いて返事するから、車坂のほうへ行こうかと聞くと、いや、今日は玉屋にいるからそっちへきてくれ、それも夕方までてないと出発してしまうかも知れないといっていた。浪人組は今日玉屋へ集まっているのかもしれないな」
「兄さんはどうしてそんなかっこうをして浜町をぬけ出してきたの」
「いや、屋敷へつく前に、両国の水戸家の石揚げ場へ船をつけてもらって、そこからあがってきたんだ」
「小梅の家へかえるのね」
「そうだ」
「お乳母さんと別れにきたのね」
「もう一軒、三間町へも寄る気だった」

「じゃ、今夜やっぱり江戸を立つことにきまったのね」
「そういうことになるだろう。とうとうみんな話しちまったな、お条」
平馬はまたしても我ながら苦わらいが出てくる。
お条は急に黙りこんでしまったようだ。もう向こうに植徳の家の森が見えるところまできていた。
時刻はやがて八ツ（二時）をすぎるころだろう。風が北にかわって、日ざしの色まで寒々としてきたようだ。
「兄さん、あたしどうしたらいいのかしら。なんだか悲しくなってきちゃった」
ふっとお条が顔をあげていう。
「どうしてだね」
「兄さんはやっぱり中橋党なんでしょう。もうちゃんとそうきめているのね」
「うむ、そういうことになる。しかし、お条はなにも手塚を敵にまわさなくていいよ」
「そんなこと、あたしにはできない」
お条はつぶやくようにいってから、
「いいわ、あたしこれから船七へ行って、手塚にはっきり敵と味方だとことわってきます」
と、決心したようにそこへ立ちどまる。

姫君の使者

「お条、おまえそんなことわりに行かなくては気がすまないのか」
平馬は不審そうな顔をする。
「あたしは船七との関係で、手塚に少し義理があるんです。ですから、船七の親方にも、あたしは今日から兄さんの味方になるからと、伯父姪みたいな縁をはっきり切ってもらってきます」
お条はちょっと悲しそうである。
「そうか、お条はずっと船七の親方に世話をかけてきた、その船七と手塚は親類みたいな間柄というわけだな」

「そうなんです。だから、あたし、うっかり手塚に兄さんの話をみんなしちまったんです。こんどこそ、はっきり縁を切ってもらって、敵味方になります」
「無理にそんなことをしなくてもいいじゃないか。わしは乗りかかった船で、いまさら後へひくわけにはいかないが、お糸は今までどおり行者のお糸で、どっちへもつかず、この騒動のおさまりのつくのを外から見ている、それがいちばんいいと思うんだがね」
「そうはいきません。あたしは鬼吉とけんかをしているし、今のうちに敵味方をはっきりしておかないと、船七親方との義理で、自分では気のつかないうちに、いつ手塚組のほうの手先につかわれないとはかぎらないもの」
「そうか、それなら好きにするがいいが、敵味方になると、場合によっては、その時から命をねらわれないとはかぎらない。その点は十分覚悟していないといけない。わしはいつもお糸についていてやるわけにはいかないんだからね」
「それで、兄さん、今夜はいつごろ江戸を立つの」
「それはな、お糸、いくらわしがお前を妹だと思っていても、わしの口からはいえないんだ。男の仕事には、たとえ親兄弟にも打ちあけられないことがある。わかるだろう」
「わかります。そんなこと聞いちゃいけなかったのね。これから手塚のところへ行って、もし拷問にでもかけられたら、しゃべっちまうかも知れない」
　お糸は自分でいって苦わらいをしている。
「それに、そんなことはわしに聞かなくても、車坂の渋川一心斎一味の様子を見ていれば自然にわかることなんだ」
「いやだなあ、兄さんは。どうしてそう人の先まわりばかりするのかしら」
「きっとお先っ走りの性分にできているんだろう」

「とにかく、あたしこれから行ってきます」
　お糸はわらいながらくるりときびすをかえして、右助の待っているほうへ駆けだした。
　――どうせとめたってすなおにうむというお糸じゃない。
　平馬はそう思って、植徳のほうへ歩き出した。
　柱だけの門から植え込みの庭へ入って、母屋の見えるところまでくると、植徳父子はまだ屋敷から帰ってこないらしく、乳母のおたねが縁側へ出てなにかつくろい物をしているようだ。
「ばあや、徳蔵はまだ帰っていないようだな」
「ああ、お帰んなさいまし。あれえ、そのかっこうはどうしたんだね、若だんな」
　おたねは針の手をおいて、びっくりするというより、急に心配そうな顔をする。
「いや、これはゆうべたずねてきた家老のせがれにたのまれて、わざとこんなかっこうをしているんだから、心配しなくてもいいんだ」
「ゆうべはその御家老さまのところへ泊めてもらいなすったんかね」
「うむ。今夜はなあ、ばあや、やっぱりその仕事のつづきで、松岡といっしょに旅へ出るかも知れないんだ」
「旅って、どこへ行きなさるんだね」
「上方まで行くようになるだろう」
「そんなに遠くへ、どうしても行かなければいけないんかね」
「なあに、半分は上方見物に行ってくるようなものなんだから、安心していてくれ」
　平馬は至極のんきそうにいっておく。
「それは松岡さんがいっしょなら安心だけどよう、御家老さまの仕事ってのがどんなもんだか、本当に、若だんな、大丈夫なんかね」
「うむ、大丈夫なんだ。ばあや、徳蔵は今日もたしかじゃじゃ姫屋敷へ行ったんだろう」
「そんなこといっていたです。徳になんか用かね」
「いや、別に用じゃないが、一度会っていきた

いんだ。もうそのうちに帰ってくるだろうから、わしは離れで待っている」

平馬は気軽にそういいおいて、自分の離れへ入った。

この離れへも当分帰ってこられないだろうと思うと、なんとなくなつかしい。暮れ六ツ（六時）までにはまだ一刻（二時間）ほどあるが、すでに手塚党との闘いははじまっているので、いつどんなことが突発するかわからない。

平馬はすぐに若党米次郎の借り着をぬぎすて、押入から自分の衣類を出して着た。ついでに小倉の袴をはき、大小は祖父の形見の物を差していくことにする。これで手甲脚絆さえつければ、もういつでも旅に出られるのである。

一通り支度を終わった平馬は、改めてそこへ座って、祖父遺愛の大小のうち大刀のほうを抜いて、一応調べてみた。貞宗三哲の一人といわれている元重と二字切り銘のある業物で、日ごろ手入れがしてあるから、無論、一点のくもりもない。

――これで人は切りたくないものだ。

平馬はふっとそんなことを考えて、おそらくそれは不可能だろう、そんな甘い敵じゃない、むしろ切らなければこっちが切られてしまう、そういう激しい道中になりそうだと思いなおし、なんとなく薄ら寒い気持ちさえしてくる。

「若だんな、今夜旅に出るんだって本当かね」

ふいに縁先へきて、仕事着のまま徳蔵がのそりと立ちながら聞いた。

「やあ、徳蔵か――。いま帰ってきたのか」

「うむ」

徳蔵はじっとこっちの顔を見ている。

「おまえ、じゃじゃ姫さまからなにかたのまれてきているんじゃないのか」

平馬はわらいながら聞いてみた。

「あれえ、どうして、若だんな、そんなことがわかるんだね」

徳蔵はにこりともせずに、いつになく妙にか

たくなっているようだ。

「どうしたんだ、徳、――じゃじゃ姫さまはおまえになんといいつけたんだ」

「おれ築山のうしろで仕事をしていると、お姫さまが腰元の姿で出てきて、徳蔵、これからすぐに帰って、平馬をここへつれてきてくださいって、いきなりいいつけるです。おれびっくりして、平馬さんを植木職人にしてつれてくるんですかって聞くと、いいえ、侍のまんまでよいというです。だから、それじゃ御家来衆に見とがめられると返事に困るですといったんだ」

「ふうむ、お姫さまなんといったね」

「見とがめられたら、姫のいいつけだといえ、きっとすぐにつれてくるのですよといって、行ってしまったです。おれ困ってしまってねえ」

「なにが困るんだ、徳」

「だってよう、若だんな、お姫さまは今日、小森さまの若殿さまとかと見合いをしたばかりなんだ。それだのに、若だんなを呼んでこいってのは、おれ、きっと吉田御殿にちがいねえと思うです。もしそんなことが御用人さんに知れたら、それこそ若だんなもおれも首が飛ぶにちがいねえもんな。どう思う、若だんな」

「それなら、徳、わしが吉田御殿にならなければいいんだろう」

徳蔵は本当に青くなっているのである。

「そうはいかねえとおれは思うだ。相手はあんなじゃじゃ姫さまだもんな。それと、若だんなは今夜旅に出るんだってね」

「お姫さまはそんなことまでいっていたのかね」

「違うです。いまうちへ帰ってきたら、おふくろさまが、徳、くたびれているところすまないが、魚屋へ行って鯛を買ってきてくれって、だしぬけにいうです。どうしてだって聞くと、若だんなが急に今夜上方のほうへ立つんだっていうから、いま赤飯は炊いているけど、尾頭つきがいるんだって、涙こぼしているんだ。本当に

今夜立つんかね、若だんな」
「そうか、乳母は涙こぼしていたか」
平馬はさすがにじいんと胸にこたえるものがあった。生まれて二十五年、生母の顔を知らぬ平馬には乳母のおたねが母親のように思える。乳母にすれば、それにもまさる深い愛情から、平馬の身が気にかかるのだろうと、よくわかるからだ。しかも、こんどの旅がただの道中でないことを、こっちがなんにもいわなくても、乳母はもうちゃんと感じ取っているにちがいないのである。

肝っ玉くらべ

「徳蔵、すぐに出かけよう」
平馬はふいに立ちあがった。
「お屋敷へ行くんかね、若だんな」
「そうだ。早くじゃじゃ姫さまのほうの用を片づけてこないと、乳母のせっかくの心づくしがむだになる」
「大丈夫かなあ、若だんな」
「吉田御殿のことなら、心配しなくたっていい。わしは夕飯までにはぜひここへ帰ってこなくちゃならないんだ」
「じゃ、おれちょっとおふくろにことわってくるです」
「いや、このまま黙って裏口から出るんだ。鯛は帰りに買ってくればいい」
平馬はそういって、さっさと裏口から表へ出た。福姫のほうの様子はぜひ聞いておきたいし、屋敷のほうはいそがないと、福姫にどんな都合があるかも知れないのだ。小梅村からじゃじゃ姫屋敷まではずっと田んぼ道で、秋葉山の近くから向島土手へかけて畑道になる。
「若だんな、うしろからついてくる変な浪人な、あいつはおれが家へかえる時から、家のまわりをうろうろしていやがった。一体なんだろうね」
裏口から出るとすぐ、徳蔵が小声でいった。
上背のあるがっしりした体つきで、剣客くずれ

と一目でわかる男だ。
渋川組の刺客だなと、平馬はちらっと見たときからそう見当をつけていた。渋川組が材木町の玉屋へ集合しているとすれば、山根たちが帰って松岡の報告をしたついでにこっちの話が出れば、同席の手塚にはそれがすぐ長谷部平馬だとわかる。時を移さず刺客を向ければ、ちょうど今ごろここへくることになるのだ。
しかも、選ばれて一人でくるからには、相当腕の立つやつにちがいない。
もう一つ考えられることは、手塚はお粂の口からこっちを当主の血筋だとすでに知っているはずだ。それを浪人長谷部平馬として切る決心をしたからには、この刺客はのがれても、第二、第三の刺客を用意しているだろうから、今夜品川へ入ることとさえ容易ではないと覚悟しなければならないことだ。
「徳、知らん顔をして歩くんだ」
「じゃ、あの野郎、若だんなをねらっているんかね」
「たぶんそうだろう。もしけんかになったら、おまえはけがをしないように遠くへ逃げていろ」
「おれはそれよりしようがねえけどよう、こういうことがあるんなら、おれも若だんなに少しやっとうを習っておくんだった」
徳蔵はちょっと悔しそうである。
「なあに、おまえは植木屋なんだから、その道の名人になればいいんだ。おやじがよろこんでいたぞ、せがれはおれより仕事のたちがいいようだってな」
「けどよう、鋏と鋸じゃけんかの役に立たねえもんな」
小一町も歩いて、二間ばかりの川にかかった土橋をわたろうとしたところで、
「おい、長谷部平馬、どこまで逃げる気なんだね」
と、浪人刺客ははじめからけんか腰で声をかけてきた。

「徳、おまえは橋の向こうへ行くんだ」

平馬は徳蔵に素早くいっておいて、くるりと敵のほうを向く。

こっちは夕日に向かって歩いていたので、くるりと向きをかえれば夕日が背中になる。相手はその夕日をまともにうけて、すさんだ顔がまるで鬼のように見える。

こっちをたかが若僧と侮っているにしても、心得のないやつだと平馬は内心けいべつしながら、

「貴公は渋川道場の御仁かね」

と、落ち着いた声で聞く。

「さよう。さすがに役者がつとまるだけあって小才はきくようだな」

「ほめてくれてありがとう。ついでに、貴公の御姓名をうかがいたいな」

「わしは神道無念流の大場鬼七、冥土の土産によくおぼえておきなさい」

「大ばか鬼七、珍しい御姓名ですな。本名ですか」

「おめえ若いのに耳が少し遠いようだな。まあいいだろう、どうせまもなく耳が聞こえなくなって、世の中が真っ暗になるんだ。こんど生まれかわってくる時は、閻魔さまからいい耳をもらってくるがいい」

さすがに老獪なやつである。そんな憎まれ口をたたきながら。――早春のことで田んぼはまだ水がほしてある。そのかわいた土の上へおりて、ゆっくり右へまわり出す。

「なるほど、貴公はまんざら大ばかうじでもなさそうだ、ちゃんと地の利は心得ている」

「口だけは達者なようだな、若僧」

鬼七は苦わらいをする。

「まあ、口のきけるうちに精々きいておこうと思いましてな。――つかぬことを聞くようだが、山根、西野の御両所は無事に玉屋へ帰ったんでしょうな」

「うむ、帰った。あの二人も悔しがっていたようだ。おめえと別れるとすぐ、こっちの中間が行きあわせて、その若党の口から長谷部だとわかった。すぐに後を追いかけようとしたんだが、町中じゃ具合いが悪い、どうせ行く先はわかっているんだからと、一度玉屋へかえってきたんだ」

「そこで御両所より一枚上の大場さんが殺し屋に選ばれたということになる。平馬、光栄の至りですな」

その間に鬼七は川ぞいの道の上へ出て、じっとこっちの顔を見すえながら、

「おめえ本所の隠居の孫だって話だが、いい肝っ玉のようだな」

と、目に殺気がもえてきたようだ。

「大場うじも肝っ玉はわしより大きいようだ。惜しむらくは、その肝っ玉、酒で少しふやけているんじゃないかと思うが、ちがいますか」

「その返事は刀でしょう。行くぞ」

鬼七の刀がぎらりと西日に光って、ぴたりと青眼につける。

同時に抜刀した平馬も、すかさず青眼につけたが、平馬にとってはこれが生まれてはじめての真剣勝負だったのである。

霊明の太刀

天真一刀流の創始者寺田五郎右衛門宗有は、けいこ道具をつけて竹刀で打ちあいをするけいこを剣法の邪道として、専ら組み太刀の工夫に精進した人である。

つまり、真剣勝負と竹刀打ちの勝負とでは、全然心がまえが違う。いくら竹刀打ちのけいこを積んでも、いざ事があった場合は手も足も出ないのが普通だ。

そこへいくと、組み太刀のけいこは常に事にのぞんだ場合の生死を眼目において研究していくのだから、その場になって迷うということがない。事にのぞんで心によこしまなく惑いなく、心気が平らかであれば自在に変に応ずることができる。その心境を霊明の域といって、そもそ

も相手を一刀両断にしようなどと考えるのは、邪心のもっともはなはだしいものであると説いている。

　祖父長谷部平左衛門は、無論、組み太刀を主としてその工夫精進を怠らなかったが、町道場でそのとおりにやったのでは、ほとんど入門する弟子がない。そこで、初心者には竹刀打ちのけいこから入るようにしたのだが、残念なことに竹刀打ちを卒業して組み太刀に入るような門弟は皆無といっていいほどで、わずかに松岡平助を筆頭に五指にも足らぬということである。

　平馬はその松岡から組み太刀の手ほどきをうけたのだが、祖父は平馬を剣客にする気は毛頭なかったらしく、一度も自分でけいこをつけてくれたことはなかった。

　だから、実をいうと道場で他流試合さえまだ一度もした経験のない平馬なのである。が、松岡の指導が、祖父に対する恩義感もあって、相当きびしいものだったから、平馬にも自信はあった。

　そして今、いきなり真剣勝負で大場鬼七という強敵と相対したのである。

「えいっ」

「とうっ」

　大場の構えを見たとたん、平馬が真っ先に感じたことは、これは松岡より怖い相手ではないということだった。心に恐れがなくなれば平らかになる。心が平らかになれば自在に変に応じることができる。

　組み太刀は相手のどんな仕掛けにもこれに応じて後の先を取る工夫がしてあって、一刀一撃で勝負を決する修練を積んでいくのだから、いわゆる霊明の域に達していれば、自然に敵の仕掛けようとする意図がこっちの心眼にうつってくるのだ。

　切っ先と切っ先の間合いは三尺、これは一気に踏みこんでいけるどっちにとっても危険な間合いで、大場は相手を若僧と見くびっているか

ら、わざとその危険な間隔で抜刀した。相手が適当に飛びさがって抜きあわせるだろうと見ていたのだ。また、そうしなければ一気に踏んごんでしとめるだけの話だとも考えてのことだ。

　が、平馬はその位置で平然と抜きあわせた上に、こっちから一気に踏んごんでいけるすきはどこにもない。

　無論、大場は真剣勝負の経験も度々あるし、大体用心棒を稼業にしてきたのだから、けんか場の乱戦も知っている。

　若いやつは真剣を抜きあわせると、どんなに度胸のいいやつでもはじめちょっと固くなるのが普通だ。そこを一気に切って出ると、たいていそれで片づくし、また致命傷をおわせないまでも、相手はその一撃に圧倒されて二度と立ちなおれないものなのである。

　――こいつは度胸のいいやつだ。

　いつもの伝でなめてかかった大場は、とっさにそう見てとりはしたが、まだ怖いとは思わない。

「えいっ」

　気合いで圧倒しておいて、こんどこそ間合いをつめていきながら、はじめてあっと息をのんでしまった。

「おうっ」

　平馬の切っ先が気合いと同時に軽くこっちののどへすっと吸いついてきたからである。

　このまま切って出れば、逆にもろ手突きを食いそうだ。底光りのするいかにも若々しいきれいな目が冷静な闘志をみなぎらせて、来るならこいといっているようである。

　いや、相手はすでに無念無想の域にいて、天真一刀流でいういわゆる自在に変に応じられる構えに入っているのだ。

　と見た時には、大場はすでに敵の突きからのがれるように、我知らずじりじりと後へさがり出していた。

「とうっ」

「えいっ」
平馬は無意識にじりじりと前進してくる。最初にとった三尺の間合いが伸びも縮みもせずに、切っ先はぴたりとのどに吸いついたまま離れようとしない。
――うぬっ。
くれば引っ払って、体当たりに出ながら切る、その心がまえで大場は必死に踏みとまり、
「おうっ」
と、誘いの気合いをかける。
「えいっ」
平馬はこっちの気合いをはねっかえして、かまわず突っこんできそうな気魄だ。
大場はまたしてもじりじりとさがる。
川っぷちの道は普通の往来ではなく、百姓が使う畦道同様にできているから三尺幅ぐらいしかない。大場としては左右の変化がきかないから、ただ後へさがるよりしようがないのだ。
――くそっ。
たかが青二才一匹、鬼七ともあろう男が、引っ払って切る、そのくらいの芸ができなくてどうするんだと、歯ぎしりしながら踏みとまった。
「えいっ」
「おうっ」
突かせて、後の先を取る捨て身の戦法だったが、平馬はその大場の意図を一瞬先に読みとったらしく、こっちの構えが十分に形を取る前に、だっと飛燕のもろ手突きを入れてきた。
後の先を取るどころか、冷やりと背筋に悪寒を走らせながら、それでも必死に飛びのいて、あやうくもろ手突きをまぬがれたのが精いっぱいで、しかも飛びのいた足が川っぷちのほうへ踏み外していたから、
「あっ」
しまったと思った時には、ばしゃんと川の中へ横っ倒れに水しぶきをあげていた。幸い、水はひざのあたりまでしかなかったので、頭からずぶぬれになり、片手をどろだらけにしてすぐ

に立ちあがりはしたが、もう岸へあがって挑戦していくだけの気力はない。
「大場うじ、今日の勝負はあずかりですな。夕風は寒いから、風邪をひかんようになさい」
平馬はにっこりわらってみせながら、もうさっさと橋のほうへ歩き出す。
「逃げるのか、平馬」
それでも悪態だけは忘れなかったが、知らん顔をして普通の足どりで橋をわたっていく平馬の姿には、気のせいか負けたくせにと微笑している顔さえ見えるようで、大場は川の中の自分の情けないかっこうがむかむかするほど腹が立ってきた。
――畜生。
思わずそっちをにらみつけているうちに、平馬は道で小者といっしょになり、肩をならべて夕日の方へ次第に小さくなっていく。
ふっと気がついてみると、その時、目の前の土橋を若い下郎が一人、寒そうにわたっていった。手塚の中間左助である。

待っていた者は

「若だんなは強いんだなあ」
徳蔵が心からそういったのは、やがて畑道が近くなってからであった。
「わしより松岡のほうがもっと強い」
平馬はわらいながら答える。
「けどよう、若だんな、あの浪人者も弱いほうじゃないようだね。おれははじめはどうなるかと思って、目があいていられなかった」
「そうだな。弱いほうじゃないんだろうな。ただ、肝っ玉が酒でふやけているから、息がつづかないんだろう」
「そうかなあ。おれ、真剣勝負ってのを見たのははじめてだけんどよう、すごいもんだねえ、若だんな。がたがた体中がふるえちまって、歯の根があわねえんだ」
「乳母には黙ってろ、徳蔵、余計な心配をする

からな」
「若だんな、あいつ仕返しにこねえだろうかねえ」
「そんなことはないだろう」
平馬はあっさり答えたが、第二、第三の刺客(せっかく)はもうまぬがれないと覚悟していた。
こっちがこれなのだから、茂太郎のほうへも無論、手はまわっているにちがいない。むしろ、こっちよりそっちのほうが心配になってくる。
道は秋葉山の前を通りぬけて、そこから大七、武蔵屋(むさしや)と料亭が二軒つづく。そこを出外れると、じゃじゃ姫屋敷の裏手へかかってくるのだ。
裏の外がわは生けがきをめぐらせて、木戸はついているが番人はいない。
「若だんな、ここから入るべ」
徳蔵は無造作にその木戸をあけて、平馬を先に入れる。
「ここはいつでもかぎがあいているのか」
平馬はびっくりして聞いてみた。
「そうではねえです。いつもはかぎがしめてあるんだが、今日は吉田御殿だからね」
徳蔵はにこりとしたが、ふっと気がついたように、
「若だんなよう、吉田御殿だけはいけねえです。わかっていなさるね」
と、急に真顔になる。
「それはわかっている。徳蔵、そこのかぎをしめておけ」
「どうしてだね」
「怪しい中間が一人、後をつけているようだ。ここからしのびこむと悪い」
平馬はそれを手塚の中間左助のほうだと見ている。
「本当かね、若だんな」
「本当だ」
「そいつはいけねえ」
徳蔵はいそいで輪がきをかけてくぎをさす。
外庭は一面の雑木林で、土地柄、桜の木が多い

ようだ。小道が一筋ずっと奥へのびていて、林の中はもう薄暗い。
「ここをぬけていくと、例の築山の裏がわへ出そうだな」
「あれえ、よく知っているなあ、若だんな」
「なあに、今日茂太郎から聞いてきたばかりなんだ」
平馬はさりげなくいってのける。
「そうかね。実はよう、ここをぬけると内木戸があって、そこまでつれてくればわかるようにしておくからとお姫さまにいわれているんだけど、うまくそんな具合いにいってるかどうか、おれ、なんだか心配になってきたです」
徳蔵は不安そうな目をしょぼつかせている。
「まあ、行くところまで行ってみよう。うまくいっていなかったら、黙って帰ってくればいいんだ」
平馬は先に立って、かまわず林の小道を歩き出した。かなり深い林のようである。
「大丈夫かなあ、若だんな」
だんだん気が弱くなってくる徳蔵だ。
平馬はわざともう相手にならなかった。
ちょうど中程まできたと思うころ、そこの紅つばきの花が咲いているしげみのかげから、
「長谷部うじ——」
小声で呼びながら、のそりと前へ出てきた男がある。昨日長命寺の境内で、高貴なお方を笠(かさ)にけんつくを食わされたからよくおぼえている、小堀孫作という若侍だ。
「やあ、たしか小堀さんでしたな」
平馬はまた引っかかったかなと思って立ちどまった。
「昨日は失礼しました。実は、折り入ってお願いがあるんですがなあ」
今日はひどく当惑したような顔つきである。
「どんなことです。正直にいうと、わしは今日高貴なお方の内密のお呼び出しをうけて、ここまでしのびこんできたんだが」

平馬はしかられない前に、こっちから白状しておく。
「いや、実はそのことについてなんです」
小堀は神妙にいってから、
「徳蔵、おまえは向こうの木戸のところでしばらく待っておれ」
と、いま入ってきた裏木戸のほうを指さす。
「へえ。——けど、小堀さん、若だんなは大丈夫なんでしょうね」
「心配するな。平馬どののことは、わしがちゃんと心得ている」
「そうかね、そんなら安心だ」
徳蔵はいそいで裏木戸のほうへ引きかえしていった。
「高貴なお方が、どうかされたのか、小堀さん」
平馬もちょっと心配になってくる。
「それがなあ、長谷部うじ、ちょっとやっかいなことになりましてな。貴公もここへ出てこられるくらいだからもう御承知でもあろうが、姫君さまは今日小森家の若殿さまとお見合いをされたのです」
その偽若殿が前に立っているとは、小堀は少しも疑っていないような顔なので、
「そういうことだそうですな」
と、平馬は澄まして空っとぼけておく。
「それで、その、姫君さまはなんでも今夜屋敷をぬけ出して、亀之助（かめのすけ）さまといっしょに国もとへ乗りこむのだといわれるのです。お供は腰元の楓（かえで）どの、それに男は大草源太郎うじと拙者の二人に貴公をたのんであるから、それで十分だといわれましてな」
「御用人塚越助左衛門さまには内緒なのですか」
「いいえ。はじめは御用人さまに御相談されたようです。御身分から申せば、もう大奥を出られて松平福姫さまという旗本並みになられているのですから、ある程度のわがままは御自由なのですが、しかし、江戸を出られるとなると、

やっぱり面倒がある上に、こんどの道中はだいぶいわくつきのようですからな」
「わしもそれは聞いています」
「御用人さまも当惑しましてな、まあ下世話にいえば、これから嫁に行く夫の難儀を助けるのがなんで悪い、そなたたちが納得しないのなら、葵（あおい）の紋さえかえせばいいのだろうから、身軽になって屋敷をぬけ出すばかりだと、とにかく定評のあるじゃじゃ姫さまですからな、いい出したら御用人さまの手にもおえません」
「なるほど——」
「それにな、塚越さまは福姫さまがかわいくてしょうがない、洗ってみれば血肉をわけた孫娘なんですからな」
「ふうむ、——なるほど」
これは平馬も初耳だった。
「そこで、とにかく一応土井大炊頭（おおいのかみ）さまのお耳に入れてみるからと、昼から櫓下（やぐらした）へ出かけられたわけです」
「御老体、御苦労さまですな。土井御老中の返事はどうだったんです」
「それが、御老体はまだ帰られないのですが、いっしょに行った大草うじが一足先へかえってまいりましてな」
どうやらそこになにか問題が起こったような小堀の口ぶりである。

伊勢まいり

「大草うじはどうして一足先にかえられたんでしょうな」
平馬はじっと小堀の顔を見すえる。
すでに夕日が落ちたのだろう、雑木林の中はいっそう薄ぐらくなってきた。
「土井御老中にすれば、御自分の孫にあたられる亀之助さまの奥方になる姫君さまのことですからな、はじめ塚越さまから話を聞かれた時は、だいぶ難しい顔をされたそうです。しかし、そこは人情とでもいいましょうかな、表向き亀之

助さまといっしょに道中をすることは許されない。姫君はお輿入れ前に伊勢まいりがしたいということにして、願書を届けたらどうか、それなら考えてみようといわれたそうです」
「なるほど――」
伊勢まいりだけは、奉公人が主人に無断で行ってきてもしからないのが例で、これを町家では抜けまいりといっている。土井老中はそれを理由にして、福姫の道中を許そうという腹なのだろう。
「さすがに御老中は頭がいい」
「ところで、たとえ抜けまいりにもせよ、行列を立てていくのだから、道中奉行へ通達して泊まり泊まりの日程、宿所をきめておかなければならない。とりあえず明夜は戸塚泊まりときめて、明朝は七ッ（四時）立ちということになります。そこで、大草うじだけが一足先にかえってきて、その支度をする一方、姫君さまに、御用人さまがもどるまでは決して軽挙はなさらぬように、おまえたちも十分気をつけて、姫君さまを外へ出さぬようにと、こういいつけられているのです」
「姫君さまがそれを承知しないのですか」
「そうなのです」
「御用人さまはまだ帰ってこられないんですね」
「はあ。なにぶん今日の明日という急なことで、手つづきが面倒な上に、公用人さまとの打ち合わせがいろいろあるらしいです」
「なるほど、面倒なものですな。旗本の御身分になったとはいっても、直系の姫君にはちがいないんですからな」
その姫君を場合によっては盗み出さなければならないのだから、平馬はちょっと気が重くなる。
「たとえばですな、作州津山までは百七十一里、伊勢の内宮までは百十三里として、約六十里ほどの開きがあります。伊勢まいりのほうは、一

日に十里歩くとしても行って帰って二十四日、おまいりと見物に十日ほど日をとっても三十四日です。津山まで行くとすれば、往復だけで三十四日はかかる。江戸へ帰る日をいつに予定しておけばいいか、その辺の打ち合わせがなかなか難しいんだろうと思うのです」
「わかりました。つまり、御用人さまがもどってくるまで、わしに姫君さまを引きとめておいてくれるようにというわけなんでしょう」
「そうなのです」
「しかし、わしのいうことなど、お姫さまが聞いてくれるでしょうかなあ」
平馬はわざと当惑したような顔をする。
「実はなあ、長谷部うじ、今日見合いにこられた亀之助さまは、まったくあなたとうり二つというほどよく似ておられるのです。それで、御用人さまはじめ、我々まで、これはどうしたことかと不審に思っていたのですが、姫君さまは姫君さまで、昨日長谷部うじが長命寺の境内へこられたのは、亀之助さまがわざと姿をかえて下見にこられたのだと考え、内心大いに怒っていられたのだそうです。しかし、亀之助さまに会ってよく聞いてみると、それはまったく別人で、小梅村にお腹のちがう弟がいる。自分はまだ会ったことはないが、その長谷部という男は、年ごろからいっても、たぶんその弟だろうといわれたそうです。――そういうおぼえがありますか、長谷部うじ」
小堀孫作は改めて平馬の顔を見なおしながら聞く。
「たしかにおぼえはあります。そのことは祖父長谷部平左衛門から一度聞かされてはいますが、別に証拠の品があるわけではなく、わしはただ話として聞いておいただけです。無論、祖父もただ話としてそれを口にしたので、おまえは一生長谷部平馬で終わるがいいといっていました」
平馬はあっさりそう答えてわらっていた。

「なるほど――。平左衛門どのは一流の剣客だけあって、立派な心構えですな。姫君さまはあのとおり少し変わっておられるので、亀之助さまからその話を聞かれて、失礼ですがすっかり平馬どのに興味を持ったようです。それがあるので、平馬どののいわれることなら、姫君さまもあるいは納得されるのではないか、こう大草うじとも話しましてな、わしがここであなたを待っていることにしたのです。どうでしょうな、ぜひお骨折り願いたいのですが――」
「つまり、姫君さまはお駕籠で道中をされるようにとおすすめすればいいのですか」
「そうです。せっかく御老中さまの御好意で、伊勢まいりだけはゆるされることになった。これ以上のわがままがあっては、その御好意に対しても申し訳ないじゃないかというのが、我々の腹なんです」
「よくわかりました。お姫さまがなんといわれるか、お目にかかった上でないとわかりませんが、とにかくできるだけのことはやってみることにしましょう」
「それを聞いて安心しました。では、御案内いたしましょう」
小堀は、ほっとしたようにいって、先に立って歩き出す。
「姫君はどこにおられるのです」
平馬は後についていきながら聞く。
「内木戸を入って、築山のふもとにそって少し行くと、右手の林の中に離れのお茶室があります。そこに楓どのとお二人で待っておられることになっています」
内木戸を入ると、なるほど左手は今朝福姫とのぼった築山になっていて、道はどうやらその登り口のほうへ進んでいくようである。西の空はその築山のかげになるが、赤々と夕焼けがしているようだ。
――どうする、平馬。
平馬はもう一度心に聞いてみた。

日が暮れてからの品川への道も、明日の朝は七ツ立ちにする六郷への道中も、何度か敵の待ち伏せを覚悟しなければならない。福姫といっしょに微行することはとても無理だ。
福姫は、やっぱり行列を仕立てて、明日の晩は戸塚泊まりのほうが無事だ。ただ心配なのは、敵はひょっとするとその行列へも待ち伏せをかけるかもしれない。福姫を奪って軟禁して、それを枷にこっちの国入りを思いとまらせる、そういう戦法をとらないとはかぎらない。行列の人数だけではたしてその待ち伏せを撃退できるかどうか、それも心配である。
平馬はまだどっちとも決断がつかないうちに、とうとう茶室の枝折り戸の前へ出てしまった。
それは平馬が想像していたとおり、築山の登り口の前の小道を二十間ばかり入った林の中に、風雅に建てられた茶室であった。
「お越しあそばしませ」
そこまで出迎えに出ていた腰元の楓が、丁重に平馬をむかえ、
「小堀さま、御苦労さまでございました」
と、小堀に声をかける。
「楓どの、拙者はこの林の見張りに立ちますから、御用の折はいつでも呼んでください」
「はい」
楓はうなずいて、平馬の案内に立つ。

葵の紋

枝折り戸を入って、飛び石づたいに南の廊下のほうへまわっていく。福姫は腰元姿で、その廊下まで出て待っていた。こんどの腰元姿はいつでも屋敷をぬけ出せるための用意なのだろう。
「平馬、よくまいってくれました」
福姫はうれしそうにほほえみながら、今朝とはまったく違う平馬の身なりを物珍しそうに見ている。
「徳蔵からおことづけをうかがい、すぐに参上

いたしました。昨日は長命寺の境内で、まことに失礼いたしました」
　平馬は廊下から少し離れたところに立って、ていねいにおじぎをする。後の言葉は楓に聞かせるためである。
　楓は会釈をすると、黙って枝折り戸のほうへ去っていく。そこの見張りにつくことになっているのだろう。
「平馬、こっちへあがってください」
　楓の姿が見えなくなると、福姫はもう燃えるような目をかくそうとせず、言葉つきまでとろんと甘くなってくる。
「それでは恐れ多すぎます。ここにいるのは浪人長谷部平馬ですからな、御同席はなりかねます」
「ふ、ふ、今朝お見合いにまいったのも、長谷部平馬によく似ていました」
「それをお口にされてはいけません。いまも楓がふしぎそうにわしの顔を見ていましたからな」
　平馬は声をひそめていいながら、廊下へ腰をおろす。
「平馬――」
　福姫は横あいからひざを折るなり、いきなり両手を平馬の首っ玉へまきつけて、体ごと男のひざへのしかかるように抱きついてくる。
「あぶない」
　平馬は思わずその胸を抱きとめて、熱い姫君のくちびるを口に押しつけられていた。
「福はうれしい」
「だれかくると、えらいことになりますぞ」
　亀之助ならとにかく、平馬では絶対にありえないことなのだ。
「だれがきてもかまいません。平馬はちっともうれしくないのですか」
　返事のかわりに胸を抱いている平馬の両手に愛情がこもって、こんどはこっちのくちびるが、強く福姫のくちびるを吸っている。

「わしのお福さん」
「きっとですよ、平馬」
　福姫は燃えあがる激しい愛情の炎に身もだえしながら、切なげにあえいでいる。
「お福さん、大事な話があるんだ。座ってください」
「このままではいけませんか」
「どこに敵の目があるかわからないんです。とにかく、わしの話を一応聞いてください」
「ここは福の屋敷ですもの、敵の目などはありません」
「いや、敵の間者が平馬の後をつけてきているんです」
「まあ、本当ですか、平馬」
「本当です。だから、徳蔵を裏木戸へのこして見張らせてあるんですが、間者というやつは忍びの術を心得ていますからな、いつどこへ忍びこんでくるかわかりません」
「平馬は福をおどかすのでしょう」
　福姫はいたずらっ子のようにわらいながら、それでも平馬のひざをはなれてそこへ座る。
「お布団がなくては痛いでしょう」
「かまいません。大事な話というのを早く聞かせてください」
「お福さんのほうは、御老中の計らいで、伊勢まいりということにして、うまく話がきまったそうですな」
「きまりました。源太郎がいま明日の支度をしています」
「ありがとうございます。明朝は七ツ立ちで、戸塚泊まりだということですね」
「こんどは福が身がわりを使います」
　福姫はいたずらっぽくそんなことをいう。
「わしは今日ここからの帰りに船の中で若党に姿をかえ、小梅の家へ帰ってくるとすぐ、徳蔵からことづけをうかがいました」
　平馬は真顔になって話し出す。
「このことはだれも知らないはずなんですが、

徳蔵といっしょに家を出ると、もう敵の刺客が一人、後をつけているのです」
「まあ、――それでどうしました」
「田んぼの中でその男に呼びとめられて、真剣勝負をしました。幸いその男が足を踏み外して川の中へ落ちこんだんで、かまわずここへきてしまいましたが、もう一人中間風のやつがちゃんと後をつけているんです」
「その中間も川の中へ落としてやればよかったのに」
　福姫はそんなのんきなことをいう。
「手向かいしてくれば別ですが、中間など相手にしてもおとなげないと思って、そのままにしておいたんです。それはそれでいいんですが、我々が今夜品川へ集まるということは、どうやらもうすっかり敵に知れてしまったようです。だから、ここを出て品川へ行く間にも、第二、第三の刺客、場合によっては数人の待ち伏せも覚悟しなければならなくなったんです」
「平馬は強いから大丈夫です。負けはしませんね」
「はあ」
「勇気と知恵さえあれば、ちっとも恐れることはありません。それに、福がついていってあげますから、きっと大丈夫です」
　福姫は一人で引きうけて、目を輝かせている。
「さあ、そこなんですがなあ」
「平馬、そんな顔をして、福をおいていく気でも、それはだめですよ」
「しかしですな」
「いいえ、福をだまそうとしてもだめです。福はもうちゃんと覚悟をきめているのですからね」
　勇気と知恵だなどと、あの時なまじけしかけておかなければよかったと平馬は苦わらいをしたが、いまさらどうしようもない。
「お福さんにたのみたいことが一つあるんですがなあ」
　それとなく戦法をかえてみる。

「どんなことです」
「ここから品川までは約三里、明日の朝、七ツにここを立てば、行列が品川へかかるのは六ツ半（七時）ごろになります。我々はその時刻に品川を立つとして、第一戦は鈴ガ森あたりという見こみです。そこで乱戦の最中に葵の紋の行列が通りかかれば、敵はいやでも逃げなければならない。我々はそのまま行列の中へまぎれこんで戸塚まで行く。たぶん、敵は手も足も出せなくなる。これが犠牲者を最小限度にくいとめる最善の道だと思うんですがねえ」
「それは、平馬、いい知恵かもしれません。葵の紋が役にたつなら、助左によく申しつけておきましょう」
「無論、お駕籠の中にお福さんがいれば、敵は決して手向かいはできないと思うんです」
「いいえ、福は平馬といっしょに今夜は品川へ行って、そこで行列を待つのです。そこから駕籠に乗ってもかまいません」
「そんなことを御用人さまがゆるしますかなあ」
「ゆるすもゆるさないもありません。福は平馬といっしょのほうがいちばん安全なのです。平馬は知恵があるくせに、どうしてそれがわからないのかしら」
　福姫はたしなめるようにそんなことをいい出すのである。

二度負ける

「お福さん、わしといっしょのほうが安全だというのは、どういうわけなんです」
　平馬は不審そうに聞く。
　夕焼けはいつか色あせかけて、やがてたそがれをむかえようとしている。
「平馬、三人衆は福が小森家へお輿入れをすると困るから、いろいろじゃまをしているのでしょう」
「無論、そういうことになります」

「福がそなたたちとおなじ日に伊勢まいりに立つとわかれば、悪人どもは必ず福の駕籠をねらいます」
「いや、まさか葵の紋に対しては、いくら悪人どもでも手出しはできないでしょう」
「人ができないようなことを平気でするのが悪人ではないのですか、平馬。ことに、江戸とちがって旅先のことです。もし悪人どもが福を人質にとって、亀之助さまを隠居させるようにというような脅迫をうけたら、そなたも茂太郎もどうします」
「なるほど――」
そういわれてみると、そんなことは絶対にないとは平馬にもいいきれない。だから、福姫は江戸を離れないほうがいちばん安全なのだが、それを今ここでいっても、すでにおそいのである。
そういう顔色を福姫は敏感に見てとったらしく、
「平馬は、だから福が江戸に待っていればいいのにといいたそうな顔ですね」
と、わらいながら突っこんでくる。
「それは、いちばんそれが安全なのです」
「平馬は今朝のことをもう忘れたのですか」
「今朝のことといいますと――」
「今朝、築山でお見合いをした時、福は平馬が好きだから小森家を助けてあげるのだといったでしょう。もし、福が江戸へ残って、平馬といっしょに苦労しなければ、後で福は平馬のお嫁になれないではありませんか。ここでいっしょに苦労しておいてこそ、福は後で老中どもに、偽若殿を承知の上で、平馬のところへお輿入れしたいから小森家のために働いたのだと、立派にいえるのです。それでないと、福も平馬も、世間からはただ不義を働いたのだとわらいものにされるばかりです。そうは思いませんか、平馬」
じゃじゃ姫の目に、燃えるような恋心と、激しい闘志のようなものが、平馬にもはっきりと

読みとれる。
「わかった、お福さん。平馬の負けです」
平馬はかぶとをぬがざるをえない。たとえその結果がどうなろうとも、福姫のいうことは正しいのだ。平馬は男として、あくまでも福姫をまもらなければならない。ただ、自分たちのために家来の中から犠牲者が出ないように、これだけは十分考えておかなければならないのである。
「正直にいうとねえ、お福さん、我々は今夜九ツ（十二時）までに南品川の鶴屋という旅籠屋へ、おもいおもいに集まることになっています。そして、明日の朝は七ツ（四時）立ちにして、六郷の渡しを一番船でわたり、泊まりはたぶん藤沢になるだろうと見ている。それなら十分敵の意表を突けると考えていたんだが、どうやらこっちの計画はもうみんな手塚のほうへ知れてしまっているらしい。そうなると、今夜品川へ集合することは、もう取り消す暇がないからしようがないとして、明日の朝なにも無理をして六郷の渡しを一番でわたる必要はなくなってくる。つまり、お福さんのほうの行列が明日七ツ立ちとして、戸塚泊まりなら、こっちも品川で行列を待っていて、戸塚泊まりでいいわけです」
「だから、福に、明日は行列といっしょに立つようにというのですか」
「そのほうが御用人さまも安心するし、家来たちにも迷惑がかからなくていいと思うんですがねえ」
「平馬、戦には臨機応変ということがあるのでしょう」
福姫が勇ましいことをいい出す。
「それはあります」
「今ここで品川組は明日福の行列を待つといっても、敵の様子によってはどう変わるかわかりません。それに、平馬の体は明日のことより今夜これから品川へ行くまでのほうがあぶないに違いありません。ですから、平馬が今夜品川へ

行くのなら、福もいっしょに品川へ行って、明日行列のくるのを待つことにしますし、もし平馬が今夜ここへ泊まって、明日行列といっしょに七ツ立ちをしてくれるのでしたら、福も明日は駕籠で行きます。それでなければ、いっしょに苦労することにはなりません。どっちにします、平馬」

「そのお福さんの気持ちはよくわかるんだが、それでは家来たちが不行き届きのかどで、御用人さまからしかられるようなことはありませんかなあ」

みすみす今夜の品川行きはあぶないとわかっていて、福姫をつれていく気にはどうしてもなりきれないのだ。

「平馬はおかしなことばかりいいますね。福はもう今朝築山で、助左や家来たちが迷惑をするようなことをちゃんとしてしまっているのです。いまさらそれを心配してもしようのないことです。旅立ちに不吉なことを口にしたくはありませんが、こんどの道中で平馬にもしものことがあって、福だけ残るようなことがあったら、福は自害と覚悟しているのですよ。どうして平馬にはそれがわからないのでしょう」

あっと平馬は思わず目をみはらずにはいられなかった。

気性の激しい福姫は、自分の恋は世にありふれたいたずらな恋ではないと、はっきり告げているのだ。無論、平馬もこの恋は命がけでなければ成就はしないとわかっていた。ただ、平馬の場合は、その命がけということを、もう一つ小森家の騒動のほうへかけていたので、つい福姫のほうを軽くあしらいがちになっていたのである。

「わかった、またわしの負けだ。今日は二本目ですなあ、お福さん」

平馬はあかるくわらってから、急に真顔になって、

「じゃ、こうしよう。お福さんは長谷部平馬が案内をして、小堀孫作と楓を供につれ、これか

ら浜町の中屋敷へ打ち合わせに行く。場合によってはそのまま亀之助さまと江戸を立って、明日品川か六郷で駕籠を待つことにするから、行列は心配せずに予定どおり明朝七ツ立ちにするようにと、大草源太郎をここへ呼んでいい残していく、それならいいでしょう」

と、策をさずける。

「いますぐ源太郎を呼んでもかまいませんか、平馬」

福姫はきれいな目を輝かしながら、ほおが紅潮してくる。やっぱり興奮がおさえきれないようだ。

「そうですな。そうときまったらいそぎましょう」

「はい」

福姫は手をたたいて楓を呼ぶ。

枝折り戸のところに見張り役をつとめていた楓が、小走りにもどってきて、

「お召しでございましょうか」

と、庭先へひざをついた。

「源太郎にいそぎの用があるからこれへと、すぐ呼んできてください」

「かしこまりましてございます」

楓はおじぎをして、小走りに去っていった。

大草源太郎

「お福さん、大草うじの前では、わしは浪人長谷部平馬ですから、そのつもりでなければいけません」

楓が去ると、平馬はそう注意して、廊下から庭先へ移って片ひざづきの形を取る。

福姫はにっこりしてうなずき、廊下へすらりと立ちあがる。

「それはそれとして、これからお屋敷をぬけ出すとすれば、旅の支度がいります。御用意はできているのでございますか」

平馬はもう素浪人にかえって聞いてみた。

「それは楓に申しつけておきましたから大丈夫

です」
「なるほど――」
その楓にどれだけの旅の知識があるかあぶないものだが、福姫としてはそれよりしようがなかったのだろう。
まもなく、枝折り戸のほうから、二十七、八とも見える分別ありげな侍が庭先へまわってきて、じろりと平馬のほうを一瞥しながら、福姫の前へ立った。
「お呼びだそうでございますな」
「源太郎、それにいるのが植徳の離れに仮住まいをしている浪人長谷部平馬です。あいさつをしてください」
福姫はまず源太郎にいいつける。
「はじめてお目にかかる。手前は当家の用人大草源太郎です。この度は姫君の道中、行列供に加わってくれるそうで、御苦労です」
源太郎は用人格で、塚越老人を助け、実務はほとんど一人で切りまわしているというだけあって、あいさつぶりもなかなか見識高い。人格もそれだけの気品をそなえ、男らしい好男子である。
「ごていねいなごあいさつで恐れいります。浪人長谷部平馬、よろしくお引きまわしを願います」
平馬も丁重にあいさつをかえす。
「失礼だが、あなたは小森家の若殿となにかつながりがおありだそうですな。まったくよく似ておられますな」
すると、こっちはつい気がつかなかったが、源太郎のほうは今朝ちゃんと偽若殿を見ていたことになる。
「はあ、祖父からちょっとそんなことを耳にしたことがありますが、わしは本当にしていません。別に証拠のあることではなし、祖父も生前おまえがその気ならそれでよいと申していました」
「おじいさまは本所亀沢町の長谷部平左衛門ど

のだそうですな」
「はあ」
「では、貴公もそのほうは免許皆伝ですな」
「いや、わしはうりのつるになすびがなったほうで、そのほうは一向にだめです」
「源太郎――」
あまりぼろを出さないうちにと思ったのだろう、福姫が急に呼ぶ。
「はい」
「福は、これから楓と孫作を供につれて、平馬に案内させ、浜町の亀之助さまのところへ打ち合わせに行ってきます」
「なんの打ち合わせです、姫君さま」
源太郎はちょっとびっくりしたらしい。
「亀之助さまは今夜ひそかに屋敷をぬけ出されて品川へまいるそうです。そして、明日は品川を七ツ立ちにして、悪人どもを出しぬく考えのようです」
「それはどなたからお耳にしたのです」
さすがに源太郎の頭はよく働くようだ。
「いま平馬から聞きました」
「平馬どの、あなたは小森家にだれか知人がいられるのか」
「いや、小森家とは無縁ですが、今日偶然、亀沢町へ祖父の高弟松岡平助という者をたずねましたところ、これがなにかこの度若殿の護衛にたのまれましたそうで、よく聞いてみると松岡の父は小森家の浪人だとわかりました。まあ、そんな縁で道中の警固を引きうけたのでしょう。その者の口から、若殿は今夜品川の鶴屋という旅籠へぬけ出し、そこへ供の者を集めるのだと聞いたのです」
平馬はすらすらいってのける。
「それは間違いないことでしょうな、平馬どの」
「松岡は偽りをいうような男ではありませんから、間違いないと思います」
「姫君さま、これだけ小森家のことがわかっているのに、この上なにを打ち合わせをしようと

仰せられるのです。また、どうしても必要があるのでしたら、御自分でまいられなくても、御名代をお立てになればすむことです」
　源太郎のいうことは、ちゃんと筋がとおっている。
「いいえ、名代ではすまないことがあるのです」
「それはまた、どういうことでございましょうな」
「それがわかりませんか、源太郎」
「はあ――」
　源太郎は小首をかしげている。
「亀之助さまはこんどお家の悪人どもをのぞきに微行でお国入りをするのです。源太郎もそれは承知のはずですね」
「はい。それなればこそ、今日、塚越さまが櫓下へまいられ、無理をお願いして、やっと姫君さまは伊勢まいりということにしてお旅立ちのおゆるしをうけてまいったのです。姫君さまの道中は、明朝七ツ立ち、お泊まりは戸塚と、ちゃんと道中奉行からそれぞれへ通達が出ておりますので、それを勝手に変更することはできないのです」
「行列は身がわりを立てて、公儀の通達どおり明朝七ツに屋敷を立てばよいのです。福は品川か六郷で行列を待って、そこから駕籠へ乗ります」
「すると、姫君さまは今夜おしのびで、亀之助さまと品川までまいられるおつもりなのですか」
　源太郎はさすがにびっくりしたようだ。
「そうです。福がこんど道中を思い立ったのは、亀之助さまを助けていっしょに悪人をとりのぞいてやりたいからです。ただ駕籠にのって伊勢まいりをしてくるだけなら、なにも道中などすることはありません。そのことは、助左にもそなたにも、はじめからはっきりと申しておいたはずではありませんか」
　じゃじゃ姫はいよいよ本性を出してきたようである。

「それはよくわかっております。しかし、行列を立てていけばこそ亀之助さまのお役に立つこともございましょうが、そのような腰元姿でおしのびになられては、悪人どもの討っ手が姫君さまとは知らずに、どのようなまねをしないともかぎりません。それではかえって亀之助さまの手足まといになるだけのことではございませんか。まして、姫君さまに万一のことでもございますと、塚越さまはじめ我々一同、腹を切っただけではすまないことになります」
「源太郎、福の行列が旅先で悪人どもにおそわれ、もし福が人質にとられ、それを枷にそなたたちに小森家との縁組みは取りやめるようにと脅迫してきたら、そなたたちどうします」
　あっと源太郎が目をみはる。
「闘いは行列や人数の問題ではありません。行列が百人の頭数をそろえれば、悪人どものほうは二百人の人数を集めるでしょう。葵の紋などを恐れるようでは、悪人にはなれません。闘いは形ではなくて、知恵と勇気の勝負です。そのくらいの覚悟がなくて、悪人をほろぼせると思いますか」
　お福さんがやるぞと、平馬はうつむいたままひそかに感心していた。
　あたりはようやくたそがれかけてきたようである。

形見の金

　小梅村からいそいで引きかえしてきたお粂は、颯爽と船七の土間へ入っていった。
「親方、またきました」
「やあ、お粂坊か」
　店の炉端で一人でぽつねんとたばこをふかしていた船七は、
「どうした、顔色がよくないようだな。まあ、こっちへおあがり」
と、やさしくいいながら、太いまゆをひそめてみせる。

「外は今日とても寒いのよ。手塚さまはまだ二階にいますか、おじさん」
「いや、御家老さまはさっきお帰りになった。なにか用なのかね」
船七は何気なさそうにいうが、うそだ、手塚は隣の玉屋にいるとお粂は思いながら、
「困っちまったなあ。あたし用があるんだけれどなあ」
と、店へあがっていって船七の前へ座る。用件は船七にいっておいてもすむことだからだ。
「一体、どんな用なんだ、お粂坊」
「あたしねえ、おじさん、手塚さまとはやっぱり敵と味方にならなければならないんです。おじさんから御家老さまに、ついでの時そういっといてくださいな」
お粂は思いきってきっぱりという。
「なんだって――」
船七は目を丸くしながら、
「すると、お粂は小梅村の浪人さんのほうの味方をすることになるのか」
と、困ったような顔になる。
「そうなんです。しようがないんです。でも、あたしねえ、おじさんとは敵味方になりたくありません」
「そりゃおまえ、いまさらなにもおじさんと敵味方になることはねえが、――それで、なにか、長谷部平馬さんとかいったな、その浪人さんは。その平馬さんてのと、お粂坊はいっしょになるとでもいうような約束があるんかね」
「そんな約束なんかないわ」
お粂は思わず炉の中へ目をおとしている。
「じゃ、おかしいじゃないか。夫婦約束もなんにもねえその平馬さんに、どうして味方をしなくちゃならないんだね」
「本当をいうとねえ、おじさん、あたしは平馬さんのおじいさんに一度助けられているんです。そのおじいさんは死んでしまったけれど、生前

はとてもあたしをかわいがってくれたんです。でも、おじいさんはあたしを平馬さんのお嫁にはしたくなかった、あたしにはそれがちゃんとわかっているんです。だから、あたしたちは兄妹（きょうだい）の約束なんです」
「どうして、そのおじいさんは、おまえを平馬さんの嫁にしたくなかったんだろうな」
船七が、そこは身びいきで、ちょっと不服そうな顔をする。
「それにはわけがあるんだけれど、今は話せないんです。ことによると、御家老さまは知っているかも知れないわ」
「ふうむ、手塚さんがそのわけをな」
「おじさん、とにかくそんなわけで、あたしは平馬さんの味方にならなければならないんですから、そのことだけははっきりと御家老さまにいっておいてくださいな」
お粂は気を取りなおしたように、しゃっきりと顔をあげる。
「そりゃお粂坊がそういうんなら、ことづけはしておくが、おまえ、それでなにか、その平馬さんと旅へでも出かける気なんか」
「ことによると、そうなると思うんです」
「そいつはおじさんは感心しねえな。やめてもらうわけにはいかねえか」
「そうはいかないのよ、おじさん」
「平馬さんがぜひいっしょに行けというんかね」
船七がなんとなく悲しそうな顔をする。
「そうなのよ」
お粂はあきらかにうそをつきながら、もし平馬がぜひいっしょに行けといってくれるのなら、どんなにうれしいだろうと思うと、内心急にたまらない寂しさにおそわれてくる。
「そうか――。平馬さんがその気で、おまえがその気なら、ここでおじさんがどう引きとめてみてもむだな話なんだが、おじさんはどうもその旅にだけは行ってもらいたくないんだ」

「どうしてさ、おじさん」
「平馬さんの旅は普通の旅じゃない。あぶない旅なんだ。そうだろう」
「それはそうらしいわ」
「そんなあぶない旅に出るのを、おじさんがよろこぶはずはないじゃないか。まして、お粂坊は女なんだからな」
「でも、しようがないのよ。もうきまってしまった話なんだから」
「そうか——。どうしてもだめなんか」
船七は暗い顔をして、しばらく考えこんでいたが、
「それじゃしようがねえ。お粂坊にわたしておくものがある」
と、立ちあがって、仏壇の引き出しから重そうな袱紗包みを取り出してきた。
「旅に出ればおまえもいつ帰ってくるかわからないから、今のうちにこれを渡しておく。これはおまえのおっかさんから死ぬ時あずかっていたんだ、お粂が嫁に行く時、これで支度をしてやってくれとな。中は金だ。さあ、調べてみるがいい」
お粂はそのずしりと重い袱紗包みをうけとって、びっくりしながら船七の顔を見なおす。
「おじさん、これ大金ね」
「うむ、大金だ。おれは一度も中をあけてみたことはないが、たぶん百両入っているはずなんだ」
「それ、本当に、死んだおっかさんからたのまれたお金なの」
お粂がふしぎそうに念を押す。
「うむ、おっかさんの形見の金なんだ。大切につかわなくちゃいけねえ。おまえのおっかさんが苦労をしておまえのためにためておいた金なんだからな」
船七は目をうるませて、仏壇のほうを見あげている。
「違うわ。おっかさんにこんな大金がためられ

るはずありません。あたしよく知ってます」
「だからよう、おっかさんがおまえのおとっつぁんと別れる時、そのおとっつぁんがおまえのためにくれていった金かもしれねえじゃねえか。おまえのおっかさんも、おまえに似て勝ち気な女だった。だから、どんなに困っても、この金だけには手をつけなかった。そのおっかさんの恩を忘れるんじゃねえぜ、お粂坊」
考え考え、しみじみという船七である。
そうだとお粂は思った。それなら、その時、母の手から、この金をわたしてくれるはずである。だいいち、この袱紗包みの色は二十年も歳月のたった色ではない。
——あの人は若い時、船七の居候をしていたことがあるといっていた。
ひょっとすると自分の父親は手塚勘解由なのかも知れぬ。そういえば、あの人が自分を見る時の目は、いつもあたたかくわらっているようだった。
あたしが今日つい平馬さんのことをしゃべってしまったのも、そのあたたかい目につりこまれてしまったからなのだ。
——あの人があたしのおとっつぁん。
お粂は敏感にそう感じながら、顔から次第に血の気がひいてくる。
——あたしは平馬さんの敵の娘。
結局はどうしても平馬とは結ばれない宿命に生まれてきてるのだとはっきりわかったとたん、お粂はくらくらっと目まいを感じ、あたりが真っ暗になってきた。

下郎のひとりごと

「お粂坊、しっかりしろ。どうしたんだ」
耳もとでそういう声が聞こえ、お粂がはっと我にかえってみると、うしろへまわった船七がしっかりと両手で肩をおさえていてくれた。意識が真っ暗になったのは、ほんのちょっとした間だけだったらしい。

「すみません、おじさん、もう大丈夫だわ」

勝ち気なお粂は無理にもしゃっきりとしてみせる。

「本当か、お粂坊。おまえはひどく疲れているようだ。少し二階で寝ていったらどうなんだ」

「水を一杯ください。本当にもう大丈夫なんです」

「おまえ、だれかに似て、強情だからなあ」

船七は苦わらいをしながら、台所へ水を取りに行ってくれる。

その間、お粂は片手を畳について体を支え、片手で両方のこめかみを軽くもんでみる。

――あたしはどうして目まいなんかおこしたんだろう。

重いどんよりとした気持ちである。

「そら、水だよ。口をあけな。ついでに、これをのんでみるといい」

船七は水の湯のみをわたして、宝丹を少し多めに口の中へ入れてくれた。

急に口中がさわやかになって、冷たい水をのみほすと、すっかり気持ちが落ち着いてきたようである。

「行者が目まいをおこすなんて、変ねえ、おじさん」

「ふいに炉の中へ突んのめりそうになったんで、おれはびっくりしちまったが、――そんな口がきけるようなら、もう大丈夫だろう」

船七はもとのところへかえって、それとなくお粂の顔色を見ている。

「おじさん、このお金ねえ、あたしが旅から帰ってくるまでやっぱりあずかっといてもらうわ」

「そうか――。おまえがそういうんならあずかっといてもいいが、どうしても平馬さんといっしょに行く気なのか、お粂坊」

「わがままばかりいってすみません。そのかわりね、おじさん、こんどあたし旅から帰ってきたら、おじさんを親だと思って、きっと親孝行します」

お粂はあかるくわらってみせる。顔色もいくらか出てきたようだ。

「その気持ちがあったらなあ、お粂坊、おじさんが毎日おまえのことを心配しているのを思い出して、道中であんまり跳ねっかえりなまねは慎んでくんな。いいだろうな」

「はい」

珍しくお粂はすなおに答えて、

「じゃ、おじさん、あたしちょっとうちへ行って支度をしてきます」

と、いそがしそうに立ち上がる。

「もうふらふらしねえか」

「大丈夫だわ。これでも寒中何度も水垢離をとっている体なんだもの」

「そういやそうだが、――晩飯はうちへきて食いなよ、待ってるからな」

「ありがとう。そうさせてもらいます」

お粂は下駄を突っかけて、土間から表へ出た。前の大川はもうたそがれかけている。

――おじさん、さようなら。もう会えないかも知れません。

ふっと目頭が熱くなってくるお粂だった。

川っぷちを駒形堂のほうへいそぎながら、いまさら父親なんかいるもんかと、お粂は腹が立ってくる。それが、あの手塚にしろ、だれにしろ、おっかさんは一度もそんなことは口にしなかったが、子までなしてその男にすてられて、どんなにかつらかったにちがいないのだ。父親はおっかさんの敵なんだ。

――あたしは一生、平馬さんの妹でいい。そうだ、あたしは今日から男になってやろう。

そう考えると、お粂はいくらか落ち着いてきた。そして、あたしはやっぱり平馬さんに恋していたんだなあと、それを失ったいま、しみじみと悲しくなってくる。勝ち気だから涙だけは外へこぼさなかったが、そのかわりにこんどの旅ではいつでも平馬さんの身がわりになって死んでやろうと、そんなことも覚悟した。

——おっかさん、あたしとうとうおっかさんとおんなじになったわ。

いや、あたしのほうがまだおっかさんよりしあわせかもしれない、長谷部平馬という立派な兄さんがいて、あたしをかわいがってくれるんだものとも思う。

「右助、おまえまだあたしの後をつけているのかえ」

お粂はくるりとうしろを振りかえって、右助をにらみつけた。

「すいません。おれの役目なんだもの、しようがねえです」

右助は邪気のない顔をして、ぺこりとおじぎをする。

「さっき、あたしはもう手塚の敵なんだって、ちゃんといってあるじゃないか」

「へえ、それはちゃんと聞いているです」

「おまえ、あたしが船七に話しているうちに、手塚にあたしのことをみんなしゃべってきたんだろう。そうに違いありゃしない」

「そんなことはねえです」

右助はいつの間にかお粂と肩をならべて歩いている。

「空っとぼけたって、あたしにはちゃんとわかっているんだからだめだ。手塚はまだあの玉屋にいるんだろう」

「おれ、なんにも知らねえです」

「うそをおつきったら。白状しないと、不動の金しばりにかけて、歩けないようにしてやるぞ」

「勘弁しておくんなさいよ。おれもこれでつらい立場なんです。今夜は行者さんのあとをずっとつけろ、もしまかれるようなへまをやると、打ち首だぞと、だんなさまにいいつけられているです。金しばりと打ち首じゃ、命があるだけまだ行者さんの金しばりのほうがいいかもしれねえもんな」

右助はけろりとして、そんなことをいう。とぼけてはいるが、下郎ながら腹は侍に負けないほどすわっているようだ。

「もう一度聞くけど、手塚は玉屋へ浪人者を何人ぐらい集めているんだえ」

「そんなこと、おれに聞いたってわからねえです」

「うそつき——おまえはちゃんと知っているんだ。いいよ、そんなにあたしをばかにするんなら、あたしはおまえをうまくまいてしまうからね。打ち首にでもなんでも勝手にされるがいいさ」

「それじゃおれ困るです。行者さんは船七の親方とけんかしてきたんかね。ずいぶんきげんが悪いんだなあ」

右助は本当に困ったような顔をしたが、お粂はもう知らん顔をして、ずんずん三間町のほうへ曲がっていく。

「おれ一つだけ、ひとりごというです。平馬さんはもう小梅村にいねえです」

「なんだって——」

お粂はぎょっとせずにはいられない。

「これ、おれのひとりごとなんだ。——平馬さんは植徳のせがれといっしょに、じゃじゃ姫屋敷へ行ったです。その途中、田んぼの中で大場鬼七というすごい浪人者と真剣勝負をして、鬼七先生は田んぼの中へおとされてしまったです」

「本当かえ、右助」

思わずお粂は右助の腕をつかんで立ちどまっている。

強情をとおす

そう夜、日の暮れるのを待って、福姫はついに平馬といっしょに向島(むこうじま)の屋敷の裏口から、ひそかにしのび出ることになった。つまり、用人大草源太郎はじゃじゃ姫にいい負かされたことになるのである。

しかし、その時、源太郎ははっきりとこういっていた。

「姫君さまがなんと仰せられても、松平福姫さ

まとしては、明朝七ツ、行列を立てて江戸をお立ちあそばすのがいちばん無事なのでございます。しかし、どうしても今夜のうちに亀之助さまと品川までおしのびになりたいお覚悟でしたら、これ以上おとめはいたしません。あなたさまは強情で、これ以上おとめしてもむだだからでございます」

「ごめんなさい、源太郎」

福姫は多少すまなそうにわらっていた。

「正直に申し上げますと、姫君さまはそういう思いきったことがお好きな御性格だとよく承知していながら、かようないわくつきな小森家との縁組みを持ちこんだ御老中、それをまたうっかりお受けした塚越さま、そもそもの責任はこのお二人にあるのです」

「いいえ、この縁組みを承知したのは福です。だれのせいでもありません」

「それはそうなのでございますが、――とにかく、今夜のことは、手前が知らないうちに屋敷を抜け出されたということにしていただきます。そのかわり、明日行列が品川の本陣で休息の折は、必ずそこでお待ちくださいますよう、かたくお願いしておきます。それでないと、あるいは手前は品川で切腹しなければならない事態がおこらないとはかぎりません。お含みおきくださいますでしょうな」

「わかりました。明日の朝は必ず品川の本陣で待っています」

「平馬どの、お聞きおよびのとおりです。なにぶんよろしくお願いします」

「承知いたしました。一命かけて、手前の責任は果たす覚悟です」

平馬がそう誓うと、源太郎は後はなにもいわずに茶室を出ていった。

そこで、福姫は楓を呼んで旅の支度をさせ、女たち二人はお高祖頭巾で顔をかくして、内木戸へ出ていった。そこを守っていた小堀孫作がびっくりして、

「平馬どの、これはどうしたわけなんでしょうな」

と、目を丸くしているのへ、

「孫作、黙って供をしてくればよいのです」

姫は高飛車にいいつけて、さっさと林の小道のほうへ歩き出す。

裏木戸には徳蔵が待っていた。

「徳蔵、だれも怪しいやつは表へこなかったか」

「へえ、人は三、四人通ったけど、立ちどまったやつはいなかったです」

徳蔵はそう答えながら、そっと女たちのほうを見ている。おなじ腰元風で、背かっこうもおなじようだから、そのうちの一人が福姫だとは、さすがに気がつかないようだ。

「お姫さまに会ってきたんかね、若だんな」

「うむ、会ってきた。おまえ一足先へ表へ出てな、さっき通ってきた道をそのとおり家まで歩いてくれ」

「若だんなは――」

「わしは少し後からついていく。なるべくうしろを振りかえってみないようにするんだ」

「わかったです」

徳蔵は木戸をあけて往来へ出ていく。

「小堀さん、こんどはわしとお福さまが出ていくから、あんたは楓どのと百ほど数を読んでからここを出てくれ。田んぼ道へ出ればわしたちの歩いているのが見えるから、そのとおりついてくるがいい」

「心得た」

平馬は福姫をうながして往来へ出る。

十五日の月がもう明るく下界を照らしていた。

「平馬、口をきいてもかまいませんか」

福姫は肩をならべながら、ついでに平馬の手をさぐってそっと聞く。

「田んぼ道へ出てからならかまいません」

平馬は必ずどこかに敵の目が光っていると見ているのだ。

武蔵屋と大七の前を通りぬけると、畑道から田んぼ道へかかってくる。

「お福さん、大草源太郎は物の役に立つ侍のようですな」

田んぼ道へかかってから、平馬は自分のほうから口を切った。ずっと向こうの道を、徳蔵がいわれたとおりまっすぐ前を向いて歩いていくのがはっきり見える。

「平馬、源太郎が妙なことをいっていましたね」

「どんなことです」

「明日の朝、品川の本陣で福がいないと、切腹するようなことがおこるかも知れないといっていたでしょう。源太郎はなにを心配しているのかしら」

「さあ——。たぶん、助左老人を安心させるのが一つ、もう一つは、ひょっとすると御老中の見送りの使者が品川で待っているかもしれません。それに、小森家の手塚がわざわざこれもお見送りを口実にして、姫君の真偽をたしかめにくると、源太郎さんは見ているんでしょう」

「では、福はどうしても本陣にいなければいけませんね」

「そういうことになります」

「その時は平馬もいっしょにきてくれますね」

「無論、今夜の源太郎さんの好意に対しても、そうしなければ平馬の武士が立ちません。今夜はきっと源太郎さんは助左老人にひどくしかられるでしょうからな」

「大丈夫です。源太郎は知恵と勇気がありますから、いくら助左が怒っても、すぐなだめてしまいます」

福姫はあまりそのことは気にしていないようである。

田んぼ道はいつか、さっき平馬が大場鬼七と真剣勝負をした土橋の上へかかってきた。

「平馬、これから植徳の家へ行くのですか」

「そうです。わしの乳母が今夜の門出に尾頭つきの膳をこしらえて待っていてくれる約束なのです。黙って行ってしまっては乳母がかわいそうですから、ちょっと顔を見せていってやろうと思うんです」

「福に遠慮せずに、ゆっくり別れを告げてきてかまいません。福は待っていますから」

「そうもいかないのです。こっちがゆっくりすればするほど、敵の手まわしが十分になると見なければなりませんからね」

「では、今夜、敵はきっとどこかへ出るのですか」

「たぶん出るでしょう。今夜うっかりしているような敵なら、そう恐れるには足りないんだが、そんな甘い敵じゃないでしょう」

「そんな敵より、平馬のほうがずっと知恵も勇気もありますから、福は大丈夫だと思います」

福姫はそういいながらしっかり平馬の手を握っている。

——福姫はまだ闘いの恐ろしさを知らないのだ。

その場になったら、はたしてどんな顔をするか、平馬はちょっと心配である。

もっとも、今夜で懲りれば、後はずっと駕籠に乗っていくようになるだろうから、そのほうが安心には安心なのである。

二組みの道行き

植徳の家では、一足先に帰った徳蔵の知らせで、土間の戸をあけて平馬を待っていた。

「おかえんなさい、若だんな」

上がり框まで出迎えた乳母は、いっしょについて土間へ入ってきた腰元のほうを見て、

「さあ、おまえさまもいっしょにあがって、立ち祝いのまねごとをしてくださいまし」

と、心やす立てに声をかける。

奥の座敷にちゃんと膳の支度がしてあるようだ。

「ばあや、もっと早く帰ってくれればよかったんだが、もうあがっている暇がないんだ。顔だけ

見せに寄ったんだから、ここで勘弁してくれ」
　そういっている間に、福姫はかぶっていた頭巾をぬぐ。
「あれえ、お姫さま——」
　そばで見ていたおやじの徳兵衛とせがれの徳蔵は、あっけにとられてじりじりとしりごみをする。
「そんならよう、このお方さまがじゃじゃ姫屋敷の」
「これ、ばあさま——」
　びっくりして徳兵衛が乳母のたもとを引っぱる。
「そうです。じゃじゃ姫屋敷の福です。ばあや、こんどはしばらく福が平馬を借りますから、ゆるしてください」
　福姫は微笑しながら鷹揚に会釈をする。
「あれまあ、お姫さま——」
　乳母は額を畳へこすりつけるようにして、顔があげられないようである。
　長居をしては乳母がかえって窮屈だろうと思ったので、
「では、ばあや、達者でいてくれ。おそくとも四月末には帰ってくるからな」
　といい聞かせて、福姫に外へ出るようにと目くばせする。
「徳蔵、親孝行をしてあげてください」
　福姫はそういって、先に土間を出る。
「じいやも達者でな」
　平馬は徳兵衛にあいさつをしてから、
「徳蔵、ちょっと顔をかしてくれ」
　と、徳蔵を呼んで土間を出た。
　福姫はもう頭巾をかぶって、向こうの月の中に立って待っている。
「若だんな、これどういうわけなんだよう」
　軒下まで出てきた徳蔵は、しっかりと平馬の腕をつかんで、泣き出しそうな顔をしている。
　おそらく、これは吉田御殿よりえらいことになったようだと、気が気ではないのだろう。

「わけはいずれ後でわかる。おまえ、すまないが、できるだけ早く亀沢町の道場へ走って、もし松岡がいたら、両国橋の東たもとで待っているように伝えてくれ。たのむ」
「おれ、なにがなんだかわからなくなってきたけど、——そんなら、とにかく亀沢町へ突っ走ることにするです」
「うむ、そうしてくれ。一度、親どもにことわっていけよ、心配するからな」
「へえ」
　徳蔵が家の中へ引きかえしている間に、平馬は福姫とつれ立って、往来のほうへ出てきた。
　そこの植え込みのかげに、楓と孫作が待っている。
「小堀うじ、我々の後をつけているような怪しいやつは見かけなかったか」
　平馬は念のために聞いてみた。
「さあ、わしは気がつかなかったが、楓どのは——」
「あたくしもそれらしい者は見かけませんでした」
「そうか。じゃ、こんどはあんたがたの組が先を歩いてくれ。これから源森橋へ出て、川っぷちを両国橋へ出よう」
「承知しました」
「ひょっとすると、こんどは敵が出るかも知れないから、十分気をつけてくれ」
　そう話している間に、徳蔵がそばを走りぬけながら、
「じゃ、行ってくるです、若だんな」
　と、声をかけていく。
「もしな、小堀うじ、怪しいやつが出てきて、どこへ行くんだと聞いたら、福姫さまの名代の供をして、浜町の小森家へ行くと答えてかまわない。それならたぶん無事に通すはずだから、なるべくこっちからけんか腰にならないほうがいいだろう」
「よくわかりました。そうします」

二人はおじぎをして、往来へ出ていった。

「平馬、福がいっしょだったので、乳母はゆっくり話もできず、気の毒なことをしましたね」

「いや、夕方ちゃんと話はしてあるんですから、あれでいいんです」

「福が平馬の奥方さまになったら、乳母はびっくりしますかしら」

福姫はなにかたのしそうである。

これから敵刃の中をくぐりぬけようとするのに、のんきなものだなあと平馬は苦笑しながら、

「それは、乳母などより御老中さまや助左老人のほうがもっと仰天するでしょう。――さあ、こっちもそろそろ出かけますかな」

と、往来の月の中へ出る。

福姫はいそいそと肩をならべて、ちゃんと手につかまってくる。

小堀と楓が源森川にそって、やがて水戸家の下屋敷のほうへかかっていくのが、やや遠くはっきりと目についた。

「徳は見えませんねえ、平馬」

「あれは業平橋のほうへ近道をとったはずです」

「どこへ使いにやったのです」

「こんど我々の警固役にたのんだ松岡平助の道場へやったのです」

「平馬のおじいさまの高弟ですね」

「そうです」

源森橋をわたる時、もうここからはあまり口をきかないようにと、平馬は福姫に注意した。どこに敵の待ち伏せがあるかわからないから、うっかりできないのである。

月はあかるいが、いわゆるさえかえるというような寒い夜になっていた。

「今晩は、平馬さん」

源森橋をわたるとまもなく、うしろから福姫とは反対がわへ、すっと肩をならべてきたやつがある。相かわらず手ぬぐいをぬすっとかぶりにしたまぼろしの鬼吉だった。

「やあ、鬼吉うじか。今夜はなにを教えにきてくれたんだね」

平馬はわらいながら、先まわりをする。

「ふん、虫のいいことをいうぜ。おめえはおれが軍師になってやろうっていうのを、そんなものはいらねえってことわったじゃねえか。なにか教えてもらいたかったら、頭をさげて、軍師になってくださいとたのみな。そしたら、なんでも教えてやらあ」

今夜の鬼吉はなんとなくはじめからきおっているようである。

平馬は福姫が体中で怒っているのを、ぎゅっと手を握って口をきかないようにと制し、

「そうか、鬼吉うじは今夜もわしをからかいにきたのか」

と、わざとのんびりやりかえす。

「けっ、おめえはどこまでも甘くできてやがるんだな。それでもよく大場鬼七に切られずにすんだもんだ」

「うん、あれは運がよかったんだ。あの男はたしかに強い」

「あたりめえさ。あいつは自分で鬼七と名乗るくらいで、渋川四天王の一人なんだ」

「すると、おまえも鬼吉と名乗るくらいだから、渋川四天王の一人なのかね」

「ふざけちゃいけねえ。おれは侍じゃねえや」

鬼吉は苦わらいをしたようだが、

「そのおめえの連れのねえちゃんは、やっぱりじゃじゃ姫屋敷のいらせられましょうか」

と、冷やかし半分に聞く。

「よくそんなことがわかるなあ」

「少し前にも一組みそんなのが通ったが、一体どっちがじゃじゃ姫なんだね」

どうも鬼吉はなにかかぎつけているらしい。

第一陣あらわる

本所河岸の道は外手町へ突きあたるまでは町家つづきである。が、時刻はすでに五ツ（八時）

に近いだろうから、ほとんど人の往来は絶えている。
　対岸に駒形堂（こまがたどう）が黒々と見えていた。
「鬼吉うじ、今夜は途中で手塚組の待ち伏せがあるだろうかな」
　平馬は、川っぷちのほうへ肩をならべている鬼吉に、わざとのんびりと聞いてみた。
「知らねえなあ、そんなことは――」
　鬼吉は底意地の悪い声で答えてから、
「おめえ、そっちのねえちゃんをつれて、これからどこへ行こうっていうんだね」
と、逆にさぐりを入れてくる。
「浜町の中屋敷へ行くところなんだ」
「ふん、空っとぼけちゃいけねえや。おれはちゃんと知っているんだぜ」
「なにを知っているんだね」
「平馬、おめえはどうしてもおれを軍師にたのみたくないんだな」
「鬼吉親分は、どうしてそんなにわしの軍師になりたいんだね」
「おめえは今朝、おれのことづけをお粂から聞いているはずだぜ」
「どんなことづけだったかなあ」
「おめえ、このねえちゃんの前で、おれが今朝のことをみんなしゃべっちまってもかまわねえっていうんだな」
　鬼吉は脅迫するように、すごみをきかせてくる。こっちがあわてて出すとでも考えているのだろう。
「今朝のことっていうと、どんなことなんだろうな」
「けっ、おめえはよっぽどずぶとい野郎にできてやがる。いいか、平馬、今朝おめえはどこかの若殿に化けて、向島の屋敷へ見合いに行ったろう。これでもまだ白を切る気か、天一坊先生」
「ああ、そのことか――。それなら、たしかにお粂から聞いた。それがどうかしたのか」
「なんだと――」

「手塚はなにか勘ちがいをしているんじゃないかなあ」
　平馬は空っとぼけて、むしろ手塚のほうの様子を聞き出そうとする。どうやら、鬼吉は今日、おそくとも夕方あたりからずっと手塚につきまとっていたらしい形跡があるからだ。
「おい、そっちのねえちゃん。おめえさんはじゃじゃ姫屋敷のいらせられましょうなんだろう」
　鬼吉は作戦をかえたらしく、ふいに福姫のほうへ話しかけていく。
　平馬は福姫の手をぎゅっと握って、口をきくなと合図をしておく。
「いいか、そっちのねえちゃん、おめえはこの平馬って天一坊になんといって屋敷をつれ出されたかしらないが、今朝この男は小森家の若殿亀之助に化けて、おめえんとこのじゃじゃ姫と見合いをしているんだ。無論、家老の中橋親子もぐるでな。それが、いまおめえをつれ出して、見りゃ二人とも旅支度だ。しかも、一足先をおめえとおなじような旅支度のいらせられましょうが、これはおめえんとこの家来らしい若侍と二人で歩いている。おれがこの判じ物を解いてみると、こうなるんだ。――聞いているだろうな、ねえちゃん」
「うむ、聞いている」
　平馬がかわりに返事をした。
「けっ、おめえはよっぽどうまくこのねえちゃんをだましてるようだな。まあいいや、よく聞いときなよ、そっちのねえちゃん。――今日の夕方、この男が植徳のせがれといっしょに裏口からじゃじゃ姫屋敷へ入りこんだのは、若殿の内密の使者長谷部平馬という触れこみで、実はじゃじゃ姫は明日の朝七ッ立ちで江戸を立つことになった。それはそれとして、今夜こっちは偽姫をこしらえ、一度浜町の中屋敷へ寄って、いかにもじゃじゃ姫が若殿といっしょに品川まで先行するように見せかけ、手塚の討っ手をおびき出してやる計略だから、いらせられましょ

うを二人ばかり貸してくれとじゃじゃ姫にたのんだ。根が跳ねっかえりのじゃじゃ姫のことだから、それはおもしろいってんで、その話に乗ったのがこの二組みの道行きになった。――どうだ、図星だろう、ねえちゃん」

「うまいうまい、そのとおりだ、親分」

またしても平馬がのんびりと半畳を入れる。

「ところが、困ったことには、手塚のほうでは、この男が若殿亀之助と長谷部平馬とを一人二役でやっていることは見ぬいているが、今夜の道行きの相手が二人とも偽姫だとは気がついていねえんだ。どっちか一人は本物のじゃじゃ姫だと見ている。このおれでさえ、はじめはそう考えたくらいだから、さすがの手塚もうまくこの男の計略に引っかかってしまったんだ。ということはなあ、ねえちゃん、おめえは今夜どこかで手塚の討っ手に取りかこまれて、この男といっしょに切られてしまうということなんだ。それとも、ねえちゃんだけはとりこにされて、偽姫とわかってから、みんなになぐさみものにされて切られるか、どっちみちまあ命はないものと思わなけりゃならねえ。ねえちゃん、おめえ死んでもいいのか、逃げるんなら今のうちだぜ」

おれが逃がしてやろうといわぬばかりの鬼吉の口ぶりである。

「すると、親分、手塚の討っ手は浜町の中屋敷へ入る前に出てくる気なのかね」

「そうれ見ねえ、おめえはどうしてもおれを軍師にたのみたくなってきたろう。いいかげんにかぶとをぬいだらどうだね」

「まあ、それは手塚の討っ手が出てきてから、もう一度考えてみよう」

平馬はけろりとしてわらっている。

「おめえはよっぽど強情にできてやがるんだなあ。討っ手が出てきてからじゃ間にあわねえじゃねえか。切られて死んでもいいのか」

「しかし、親分、じゃじゃ姫さまの明日は七ツ立ちなんてことが、どうして手塚のほうへ知れ

たんだろうなあ」

これだけは、土井老中と塚越老人との間できまった話を大草源太郎が屋敷へ持って帰ったばかりなのだから、まだ外へもれるはずはない。もう一人知っているとすれば、今日土井老中をたずねた茂太郎ぐらいの者である。

「そいつが聞きたかったら、かぶとをぬいでからにしな」

こんどは鬼吉が相手になろうとしない。

「平馬、その卑しい下郎はだれです」

福姫がとうとうたまりかねたように、それでもできるだけ感情をおさえながら聞いた。

「これは小森家になにか恨みのある梁上の君子で、鬼吉という下郎です。あまり気にかけないほうがよろしい」

「気にはかけませんが、その下郎の声には悪魔のように濁ったひびきがあります。友達になってはいけません」

さすがに福姫は毅然たるものである。

「なあるほど、じゃじゃ姫に化けるだけあって、その雌はなかなかやるぜ。おい、ねえちゃん、おれを友達にしねえと、おめえさんたち、いまにほえ面かくようになるぜ。――そうれ、あそこを見ねえ、もうそろそろはじまってやがる」

鬼吉はうれしそうにうふふと鼻でわらい出す。

外手町へ突きあたって、右の川っぷちの道を行くと、この辺はずっと大名の下屋敷つづきになる。ちょうど御厩河岸の渡し場のあたりで、前を行く楓と孫作の組が、覆面のくせ者五、六人に道をふさがれているのが、はっきりとこっちから見えてきた。いよいよ手塚の討っ手の第一陣が出てきたようである。

火花

「平馬、いそいでみましょう」

「そうですな」

福姫にうながされて思わず平馬の足が早くな

ると、鬼吉はたちまち後になり、
「おいおい、おめえたち、そりゃあ本気なのか。相手は五人だぜ」
と、うしろからあきれたように声をかけてきた。
二人ともそれには返事をしようともしなかったが、さすがに平馬は、
――大丈夫かな。
と、内心おだやかでない。
自分一人ならただ闘いあるのみとすでに覚悟はついているが、こうなってみるとやっぱり福姫のことが心配になる。
もっとも、手塚組は決して福姫を切るようなことはすまい。切るより生け捕りにしたほうが、はるかに有効な人質になるのだ。
そうか、お福さんに生命の心配がないとすれば、こっちは落ち着いて闘いさえすればいいんだと、平馬はとっさに考えなおす。
「平馬、福がついていてあげますから、知恵と勇気を出すのですよ」
あべこべに、福姫は平馬の手をしっかりと握ったまま、ふっとそんな励ましの言葉をかけてくる。どこかこっちの体が固くなっているのを、敏感に感じたのかもしれない。
「いや、わしは、お福さんにそれだけの度胸さえあれば、いつもより百倍の知恵と勇気を出してみせます」
「福は平馬が好き」
こんどはささやくようにいって、福姫はお高祖頭巾の中でにっこりしたようだ。
若い男女がぴったりと肩を寄せあいながら、足を早めて近づいていくのを、覆面どもは五人ともいささかあっけにとられて見ているようだ。
そのそばで、小堀孫作も、すでにお高祖頭巾をぬいで顔を見せている楓も、心配そうにこっちを見ている。
平馬はいざという時の場合を考えて、福姫を

体で下屋敷の土塀のほうへ少しずつ押していきながら、やがてその下へ立ちどまった。
「来たな、平馬」
覆面の中からいきなり名を呼んで、すっと一足前へ出たやつがある。
「はてな、わしの名を知っている貴公は、だれだったかなあ」
たしかに大場鬼七と見てとりながら、平馬はわざと空っとぼけて聞く。
「おい、おぬしがいま手をひいてきたその婦人のお高祖頭巾をぬいで、顔を見せてもらいたいな」
「さあ、わからん。一体、貴公はだれなんだ」
平馬は福姫を背にかばうようにして、ふしぎそうな顔をする。
「そんなことはどっちでもいい。こっちはその婦人に用があるんだといったら、名は聞かなくてもわかっているだろう」
大場は夕方の勝負で懲りているから、すでに抜き打ちのすきをねらって、ひそかに目を光らせているようだ。
「そうか、貴公たちは手塚に雇われてきた浪人さんたちか。どうもただのおいはぎにしては様子が違うと思った」
「そうわかったら、その婦人のそばを離れろ。けがをさせてはかわいそうだ」
「大場さん、貴公も名のある剣客だろう。そんな夜盗のまねをしないで、覆面をとって堂々と勝負をしたらどうだね」
距離は九尺、これ以上少しでも距離が縮まると、一気に踏みこんで抜き打ちがきくから、平馬も油断はできない。やや往来を斜めにして、こっちは土塀、向こうは渡し場の桟橋を背にして、どっちもまだ立ったところは動かない。動いた時は刀を抜く時だ。
「おれは夜盗でいい」
今夜の大場は、夕方の時よりあきらかに気持ちのゆとりを失っているようだ。というより、

自分から川へ落ちこんだのが悔しくて、こんどこそという火のような敵愾心が胸を焼いているのだろう。

その左がずんぐりむっくりした背かっこうで、ひげだるまの山根五郎蔵、そのまた左へのっぽの西野甚内と平馬は見ているが、今のところこの二人は大場に先陣をまかせた気で、平馬の度胸のいいのにむしろあきれているようだ。

後の二人の覆面は、三人のうしろの川っぷちに立っている小堀と楓に備えて、ともすれば平馬のほうへ気を取られがちのようである。

まぼろしの鬼吉の姿はもうどこかへ消えているようだが、こんな大芝居を見のがすやつではないから、どこかで高見の見物としゃれこんでいるのだろう。

――今のところは敵は大場鬼七ひとりと見ていいだろう。

平馬がそう見ているうちに、到底抜き打ちはきかないと観念したか、

「小僧、行くぞ」

大場はさっと抜刀した。

同時に、平馬が無言で抜きあわせる。

一瞬おくれて、山根と西野の白刃がきらっと月かげにきらめく、

「えいっ」

「おうっ」

いずれも青眼で、気合いは殺気を呼ぶように敵の口からほとばしる。

平馬は無言で切っ先を大場に向け、山根と西野のほうはほんの目端にかけているだけだ。

「平馬、しっかり――」

思わず口に出たらしく、すぐうしろで福姫がはっきりといった。

――あぶない、それでは近すぎる。

と平馬は思ったが、もうそれを口にしているゆとりはない。大場だけでも強敵の上に、ともかくも相手は三人なのだ。

が、ここまでくれば死ぬか生きるかしかなく

なるから、平馬は一切の雑念を去って、すぐ霊明の域に没入することができる。

その心眼にまずうつったことは、福姫が声を出した時、大場はたしかに一瞬ぎくりとしたことだ。おそらく、この男も鬼吉とおなじで、まさか福姫が今夜こんな冒険をおかすことは考えていなかったが、その声音を聞いて、あるいはと直感したものがあるからだろう。

しかし、それはそれとして、大場には今夜是が非でも平馬だけは倒しておかなければ男が立たないという意地があるのだ。男の意地は往々にして、生死を度外視することがあるものである。今夜の大場はあきらかにそれで、

「おうっ」

たちまち捨て身になりながら、じりじりと間合いをつめてくる。距離は九尺ほどだから、それが少しでもつまればもう一気に切りこめるのだ。

「とうっ」

平馬もすかさずその気合いをうけて、じりじりと前へ出た。うしろに福姫がいて、後へは下がれないから、平馬も自然と捨て身にならざるをえない。

間合いが頂天に達したとたん、

「えいっ」

「とうっ」

白刃が戛然と火花を散らして、双方の体が激しく飛びちがっていた。

平馬のもろ手突きを大場が引っぱらって飛びぬけたので、大場のしかけより平馬の突きのほうがわずかに早かったことになる。

いきおい平馬の飛んだ場所は川っぷちで、目の前は渡し場の桟橋だ。

そこから三間ばかり川下に、小堀が楓を背にかばいながら、二人の覆面を相手に抜刀を構えている。

くるりと平馬が大場のほうへ立ちなおった時、同時に向きなおったこっちの敵は大場を入

れて三人、そのうしろの土塀の下に、位置はやや上手へ身をさけながら、福姫が毅然と立っていた。

親の因果

——平馬は強い。

川を背にして立っている平馬の、見た目にはゆうゆうと青眼の構えをとっている颯爽たる姿を、敵三人の肩の間から正面に見ながら、福姫はとてもうれしかった。

いま火花を散らして敵の一人と飛びちがった時も、たしかに平馬のほうから突きを入れたので、くせ者はそれを必死に引っぱらっていた。しかも、くせ者の味方二人は、手も足も出ずに、こっちへ飛びぬけた大場というくせ者について、自分たちもこっちがわへ移り、ただ刀をかまえているだけである。

いまこっちへ背中を見せている大場は、悪鬼のように全身に殺気をみなぎらせているようだが、心に切ってやろうというあせりが強すぎるせいか、なんとなく体つきがかたい。

無論、福姫は真剣勝負を見るのはこれがはじめてだった。じいんと胸をしめつけられるような気持ちで、自分までわきの下へ冷や汗をかいてはいるが、すでに魂は平馬に吸いよせられ、平馬といっしょに闘っているから、恐怖は少しも感じない。というより、恐怖など感じているゆとりがないのだ。ただ平馬に勝たせたいばかりである。

その平馬のがっしりと男らしく落ち着いているたくましさを見ると、これならきっと勝てると思い、ついほれぼれとその顔に見とれているのだ。

そのくせ、福姫は平馬から三間ばかり離れた川っぷちに、くせ者二人を相手に抜刀している孫作の顔もちらっと見ていて、その引きつったような必死の表情が心配にはなっている。それだけに、凛々しく緊張している平馬の気魄にみちた顔がいっそうたのもしくて、目をひきつけられてしまう。

「おうっ」

目の前の大場が火のような気合いをかけて、またしても攻撃に出ようとした出端を、

「えいっ」

平馬の涼しい気合いがすかさず跳ねっかえして、かすかに剣先が浮動したようだ。大場が踏みこめば、それより早くふたたび平馬のもろ手突きが飛びこんでくると、福姫にもはっきりわかるのだからふしぎである。

「とうっ」

出端をくじかれた大場は、憤然としたように絶叫しながら、じりじりと前へ出はじめたようだ。

「おうっ」

こんどは平馬の剣先がぴたりと大場ののどのあたりに吸いついたようである。

——まあ、すばらしい。

冷静で、しかも気力いっぱいに突いて出ようとする平馬の剣は、胸がわくわくするほど美しい形になる。

「あぶない、お姫さま」

この時、頭の上で、ふいに女の声がした。福姫はそっちを振り向いてみる暇さえなく、目は素早く前の渡し場の桟橋からおなじ覆面のくせ者三人がこっちへまっすぐむかってくるのを見た。刀を抜いていないのは、おそらく生け捕りにして船へつれていこうというのだろう。

「ひきょう者——」

福姫は帯のうしろへしのばせてきた短筒を取るなり、

だあん。

無造作に一発ぶっ放す。いざという時はこれがあるから、平馬といっしょに微行する気になったので、いつも屋敷で遊び半分に射撃のけいこをしているから、腕には十分自信がある。

「わあっ」

三人の中の真ん中のやつが、左肩をおさえて桟橋へぶつ倒れていった。
「うぬっ」
一度はぎょっとして立ち止まった残る二人は、短筒は一発しか撃てないものと気がついたらしく、急にこっちへ飛びかかってこようとする。
だあん。
福姫の持っているのは弾丸が六発こめてある最新式のものだ。
「う、うっ」
一人ががくんと両ひざを突くと、残る一人は飛びあがらんばかりにびっくりして、ばたばたっと往来から桟橋へ逃げ出していく。
驚いたのはその男ばかりではなかった。
「いかん、引けっ」
大場鬼七が鋭く叫んで、こっちの覆面のくせ者五人もばらばらっと桟橋へ走り、そこに用意してあった船へ逃げこんでいくようだ。これは、短筒が怖いばかりでなく、御府内で発砲した者は重罪とされている。万一、近くの下屋敷から侍どもが駆けつけてくるようなことがあると、覆面をしているだけこっちが不利と見て、あわてて逃げ出したのだろう。
「平馬――」
福姫は、道がひらくとすぐ、なによりもまず平馬のそばへ走り寄っていった。
「お福さんは大変なものを持っているんだなあ」
平馬は刀をぬぐって鞘におさめながら、目を丸くしている。
「これは福の護身用です」
福姫はいそいで短筒を帯のうしろへしまってしまう。
「オランダわたりの六連発ですか」
「ええ、よく知っていますね、平馬」
「このごろはすごいのがあると、話に聞いていたんです。お福さんはそれをおもちゃにして、

いつも遊んでいたらしいな。あつかい方がすっかり板についている」
「そうですかしら」
うれしそうな顔をしてわらっている。
「ああ、わかった。源太郎さんはそれを知っているから、今夜わしといっしょに出かけるのを無理にはとめなかったんだな」
「そうかも知れません」
「しかしねえ、お福さん――」
平馬は両手を福姫の肩において、
「なるべく、急所を外して撃つほうがいい。わしも決して相手に致命傷はあたえないことにしている」
と、さとすようにいう。
「福は今まですずめだって撃ったことはありません」
「そうか、それなら大丈夫だ」
「なにが大丈夫なのです、平馬」
「いや、いまに子供が生まれる時、親があんまり罪なまねをしていると、その子が因果をうけないとはかぎらない。わしはお福さんにそんなかわいそうな子供は産ませたくないんだ」
「まあ、平馬は――」
福姫は頭巾の中で真っ赤になったようである。
「孫作うじ、あぶなかったなあ」
平馬は福姫の肩を放して、少し離れたところへ立っている小堀と楓のほうへくるりと向いていった。
「長谷部さんは強いですなあ」
小堀は前へ進みながら、まったく感心しているようである。
「楓、けがはありませんか」
「はい。お福さまも御無事で」
女たちはもうしっかりと手を取りあっている。こんなあぶない目にあうのは、二人ともはじめての経験だろうから、さすがに興奮せずにはいられなかったのだろう。

くせ者どもは船で、すでに対岸へ逃げてしまったようだ。

　こんども楓孫作組が先頭で、一行はまもなく両国橋のほうへ歩き出す。

　福姫はしきりにうしろばかり気にしているようだ。

「お福さん、鬼七をさがしているのか」

「いいえ」

「じゃ、どうしてうしろばかり気にしているんです」

「さっき福が短筒を撃った時、頭の上のほうで、あぶないお姫さまと、女の声で、くせ者があらわれたのを教えてくれた者があります。礼をいいたいと思って、福はさっきからさがしているのですけれど、どこにも姿が見えないのです」

「ふうむ、たしかに女の声だったんですか」

「ええ、若い女の声でした。その時、福はそっちを見ている暇がなかったのです」

「お姫さまと、その声はいったんだね」

「そういいました。だれか心あたりがありますか、平馬」

　腰元姿になって歩いている福姫をお姫さまと知っているからには、行者のお条よりほかにない。

「それはねえ、お福さん、さっきも鬼吉の口からちょっと話の出た、行者のお条だろうと思う」

「行者のお条というのは、どういう女なのです」

「わしの祖父がかわいがっていた娘で、死んだ母親が行者だった。お条もいまは行者をやめているが、行者の修業をしたことがあるんで、世間では行者のお条でとおっている娘なんです。

　頭の上で声がしたというのは、お条はあそこの土塀（どべい）の上にいたんでしょう。平気でそういうことのできる、普通の娘とはちがう風変わりな娘なんです」

　平馬の顔に思わず明るい微笑がうかんでいる。

「平馬はその娘が好きなのですか」

「好きというより、――さあ、なんといったらいいかなあ」

「福とその娘と、平馬はどっちが好きなのです。はっきりいってください」

　その声音にかなり激しい感情がこもっているようだ。

　なんだ、お姫さまもやきもちは知っていると思うと、平馬はおかしくなって、

「わしはねえ、お福さん、お福さんにはわしの子供を産んでもらおうと思っているが、ほかの女に子供を産ませるような行儀の悪いことは、絶対にしないつもりなんだ」

　と、耳もとへそっとささやいてやる。

「本当ですね、平馬」

「わしはほかの女の腹にできた子供なんだ。わしは別にそれで自分は不幸だとは考えちゃいないが、母は決してしあわせじゃなかったろうと思う。お福さんだって、そういう母から生まれたんだから、母親の苦労はよく知っているはずだ。わしはそういう罪な母親をこしらえようとは思わないし、さっきもお福さんにいったように、生まれてくる子供のことだって、今からちゃんと考えているくらいなんだ」

「福は平馬が好き」

　福姫はうれしそうに平馬の手を力いっぱい握りしめてくる。

「でも、お条はどうして姿をかくしてしまったのかしら」

「あれはそういう娘なんだ。さっきの鬼吉を相手に果たしあいをしたくらい気が強くて、一本気で、こんどはあぶない道中なんだから、ついてきてはいけないといっておいたんだが、兄さん一人じゃあぶないといっていたから、やっぱりついてくる気かも知れないな」

「では、こんどのことをよく知っているのです

ね」
「鬼吉と敵同士だし、手塚勘解由に呼ばれておうかがいを立てたこともあるから、お粂だけはわしとお福さんの本当の仲まで知ってるはずだ」
　福姫はじっと平馬に寄りそいながら、しばらく自分の幸福を胸の中でかみしめているようだったが、
「平馬、鬼吉もどこかへ行ってしまいましたね」
と、思い出したように聞く。
「あれはまたふいにどこからか出てくる。あれが出てきたら、なにか事件がおこると見ていいんです」
「あの男は腹黒い悪魔です。気をつけなければいけません」
「承知しました」
「こんどは敵はどの辺で出ますかしら」
「さあ、お福さんが短筒をぶっ放したんで、敵もこんどは策戦をかえなければならない。まあ、品川海岸あたりかな」
　そういってから平馬はふっと気がついて、
「こんどは手塚も短筒の用意をするだろうから、油断はできない」
　と、ひとりごとのようにいう。
　結果としては、敵につまらないことを教えてしまったことになるのだが、人の生死は天命なのだ。
　敵の凶弾に命を落とすような運命ならば、こっちに運がないのだから、それまでとあきらめるほかはないのである。
　左手が藤堂家の下屋敷の塀にかかってきたから、まもなく両国橋の東たもとへ出るだろう。そこには松岡たちが待っていてくれるはずである。
　月のあかるい川っぷちの往来を、二人のずっとうしろから、お粂がうなだれがちに歩いていた。お粂は忍び装束になっているから、人の目には男だか女だかわからない。

二間ばかりうしろから、相かわらず中間右助が尾行している。
　――かわいそうに、行者さんはがっかりしているようだな。
　右助にはお粂のうしろ姿がひどくしょんぼりしているように見える。さっき剣陣のほうへ駆けつけるまでは、ちゃんと男になって颯爽と歩いていたのだ。
　それが、手塚組が逃げ出して、平馬が福姫と肩をならべて歩き出すのを見てから、だんだんあんなうしろ姿になってきたのである。
　無理もない、福姫と平馬が肩をよせあって話しこみながら行く姿は、だれが見てももうただの仲には見えないほど、心がとけあっているようだ。
　――いくらあきらめたとはいっても、行者さんは平馬にほれきっているんだからな。
　右助はその女心に同情せずにはいられない。
　さっき三間町の家へ飛んで帰ったお粂は、まもなく忍び装束になって、小ぶろしきをかかえながら飛び出してきた。
「あれえ、行者さん、変な着物を持っているんだなあ」
　右助があきれながら肩をならべていくと、
「右助、おまえはどうしてもあたしから離れない気なの」
　と、怒ったようにいった。
「しようがねえです。御主人さまのいいつけだもんな」
「あたしはこのまま旅へ出てしまうんだよ。それでもついてくるかえ」
「おれ、地獄へだってついていくです。忠義のためならしようがねえです」
「執念深いんだねえ」
「執念ではないです。おれのは忠義なんです」
「よし、それならこれを持ってどこへでもついておいで」
　お粂はふろしき包みをわたしていった。

「持っていくです。これも忠義のためだからね」
吾妻橋をわたったところで、平馬と福姫とが月の中を歩いていくのが、はるか向こうに見えた。それからずっとこうして平馬たちの後をつけているのだ。

思いあたること

「お粂、おめえだいぶがっかりのようだな」
藤堂の下屋敷の長い塀にかかろうとする角から、すっと出てきたぬすっとかぶりの鬼吉が、肩をならべてきながらお粂にいった。
お粂はさっきまで鬼吉が平馬にからんで歩いていたのを見ているし、こんどはたぶんこっちへからかいに出てくるだろうと思っていたから、別に驚きはしなかった。ただ、こんなやつと口をきく気にもなれないから、知らん顔をして歩いている。
「おめえがふさぎこむのも無理はねえ。あのいらせられましょうが、まさか本物のじゃじゃ姫だとは、おれも短筒をぶっ放すまでは気がつかなかった。うわさにゃ聞いていたが、あいつはまったく恐れ入ったお姫だぜ」
鬼吉は本当にあきれているらしく、
「だが、あいつが本物のお姫だとすると、どうもわからねえことが一つあるんだ。おれはさっきわざとお姫に、今朝亀之助に化けて見合いに行ったのはこの平馬さんだと教えてやったんだ。ところが、あのお姫のやつ、少しもびっくりしやがらねえときている。すると、お姫はなにもかも承知で、平馬の野郎に今夜引っぱり出されてきたってことになるんだ。そうだろう、お粂」
と、小首をかしげている。
「なにもかもわかっていると一人でうぬぼれているおまえが、おめでたくできているのさ、ばからしい」
お粂は冷淡に吐きすてるようにいう。
「ふうむ。じゃ、おめえは、お姫は天一坊を承

知で、平馬に今夜ああして引っぱり出されてきたというんだな」
「そんなことはあたしに聞かなくたって、おまえの目がちゃんと見ていたとおりじゃないか」
「こいつはおもしろい。素浪人平馬がそこまでお姫をたらしこんだとなると、おれの口一つで天下の一大事になるってわけだ」
「うれしそうだねえ、鬼吉」
「うれしいとも。いいか、お粂、おれがひとっ走り番所へ駆けこんで、実はこれこれでござんすと今日のことを役人にしゃべってみろ、お姫はさしずめ座敷牢、平馬は打ち首、小森家は家名断絶の上、関係者はみんな切腹ものだ。そんなからくりを知らずに、お姫の伊勢まいりを取り計らった土井老中だって、ただじゃすまねえことになる」
「やってごらんよ。そうなりゃ、おまえは小森家へいい敵討ちをしたことになるんだろう」
「なあるほど、かわいさあまって憎さが百倍ってやつで、おめえは平馬が打ち首になるのを手をたたいてわらってやろうって気になったんだな」
「うぬぼれるのも大概におしよ。おまえってやつは、よっぽどおめでたくできているんだなあ」
「そのわけをいってみな。納得がいかなけりゃ、男としてわらってすますわけにゃいかねえ言葉だ」
「下司は下司だけの器量、そんな狭い了見だから、大名に女房を取られて悪党なんかになりさがりたくなるのさ。悔しかったら、おまえ、御老中になった気になって、今のことをもう一度考えてごらん」
「わかったわかった。うっかりそんなまねをすりゃ、てめえの口から先へふさがれてしまうっていいてえんだろう。おれだって、そのくらいのことはちゃんと承知のすけだ。どうだ、お粂、おれがあの跳ねっかえりのお姫をそっと消してやろうか。そうすりゃ、平馬はもとどおりおめ

えのところへけえってくるぜ」
　けろりとして、そんなことをいい出す鬼吉である。
「そんな口には乗らないよ。やりたければ、おまえ勝手に自分でおやりよ。うまくいけば小森家をつぶせるかもしれないからね」
「ふん、知ってやがる。こんど平馬に会ったらそういっときな、お姫はいつ鬼吉が引っさらっていくかも知れねえから、気をつけろとな」
　そこがもう両国橋へ出る東両国の盛り場で、無論、今は見せ物はしまって人かげもなくひっそりとしているが、平馬の一行は橋へかかった様子がない。
「はあてな。すると、野郎は浜町へは寄らねえ気なんだな。畜生、いよいよおもしろくなってきやがった」
　鬼吉はそこへ立ちどまって、ひょいとうしろを振りかえり、
「下郎、手塚に御注進をするなら今のうちだぜ」
と、右助のほうへ冷やかし半分にいい捨てて、さっと両国橋のほうへ走り去る。
「右助、おまえどうする」
　それを見送ってから、お粂はかぶっていた覆面頭巾を無造作にとって、右助のほうを向いた。頭巾をぬぐと、髪を笄にくるくると巻きつけて、こまかい紺絣の野良着にもんぺという田舎娘のかっこうに見えるからふしぎである。ただ、田舎娘にしては色が白すぎて、目に神がかった鋭さがありすぎる。
「あれえ、変われば変わるもんだなあ」
　右助はびっくりしたように目を丸くしている。
「ばか、おまえはそれどころじゃないんだろう」
「なにがだね、行者さま」
「今あいつがいってたじゃないか。あの人たちは浜町の中屋敷へは入らずに、まっすぐ永代へ向かったようですって、御注進に駆けつけなくてもいいのかえ」

「それはおれの役目でねえから、かまわないです」
「ふうむ。じゃ、おまえの役目は、ただあたしのあとをつけていればいいのかえ」
「そのとおりです。おれ得したです」
「なにが得なのさ」
「行者さんの後をつけていればいいなんて、いちばん楽で、まるで道行きしてるみたいだもんな」
　右助はなんの屈託もなさそうな明るい顔をしてわらっている。
「そんなにあたしを甘く見ているんなら、うまくまいてやるぞ」
「ごめんなさい。それだけは勘弁してくだせえまし。行者さまにまかれちまうと、おれ忠義のために腹を切らなけりゃならねえです」
　急に真剣な顔になって、これだけは掛け値がなさそうだ。
「なら、おとなしくついてくればいいじゃないか」
　お粂は怒ったようにいって、さっさと一ッ目橋のほうへ歩き出す。その実、心の中は悲しかった。
　手塚が右助にそんなことをいいつけたのは、敵の動静をさぐるのが目的ではなく、到底行かなくては気のすまない娘の長い道中に間違いのないようにと、非情な親のせめてもの親心、きっとそれだと思いあたる節があるからだ。そんな親心がお粂にはかえってうらめしい。
　——あたしは行者の母親の父なし子お粂でよかったんだ。
　なによりもつらいのは、ひそかにその血をうけている父が、人もあろうに平馬の命をねらっていることである。たとえ恋はあきらめても、平馬は忘れることのできない男なのだ。
　それをちゃんと知っていながら、手塚はさっきあれだけの刺客を平馬に向けている。お粂は、そんな非情な手塚が、悲しいというよりむしろ

憎い。
――そうだ、あたしはいっそ平馬さんの身がわりになって、手塚の刺客の手にかかって死んでやろう。
ふっとお粂はそんな皮肉な気持ちにさえなってきて、あやうく涙がこぼれそうになるのを、ばか、なんだって泣きたいのさ、泣いたってだれもほめてくれやしないじゃないかと、じっと歯をくいしばってがまんしてしまう。
「右助、こんど敵の討っ手が出るのはどの辺だろうね」
お粂はつい右助に八つ当たりがしてみたくなってくるのだ。
一ツ目橋をわたると川っぷちのほうに長いお船蔵の塀がつづき、左手は旗本の屋敷つづきになる。月はあかるいが、道が少し曲がっていくので、平馬たちの姿はまだ見とおしがきかない。
「討っ手のことは、おれわからねえです」
お粂のふろしき包みを後生大事に左手でかかえながらついてくる右助は、もうのんきな顔をしていた。
「わからなければ、御主人に聞いてきておくれよ」
「その御主人さまも、いまどこにいるんか、おれは知らねえです」
「ああ、そうか。じゃ、御主人さまも今夜、江戸を立つ気なんだね」
きっとそうだと思うと、お粂はやっぱりどきりとせずにはいられなかった。

心ごころ

「なぜ黙っているのさ。返事をおしよ」
お粂はうしろを振りかえって、いきなり右助の右腕を引っつかみ、引っ立てるようにして歩きながら責めつける。案外がんじょうにできている腕のようだ。
「江戸の御家老さまは、黙って江戸は出られないって話だからね。そんなことはないと、おれ

は思うんだけどな」
「だって、お姫さまだって、ああしておしのびで歩いてるじゃないか」
「だから、あのお姫さま、さっきの鬼吉にさらわれるとえらいことになると、おれ心配しているです」
「あんなやつに、なにができるもんか」
「そうではないです。あんなやつだから、なにをするかわからないです」
「なんだって――」
「あの男は気ちがいなんだ。気ちがいだから、お姫さまだって、行者さんだって、だれだって怖いものはないんだ。それに、あいつは毒蛇のように、どんなところへだってもぐりこんで、ふいに人にかみつくことを知っているからね、――おれは、さっき、よっぽどうしろから首をしめ殺してやろうかと思ったんだけど、今夜はがまんしておいたんだ」
つかんでいる右助の腕に力がみなぎってくるのが、その鉄のようなかたい筋肉の手ざわりで、はっきりとお粂にもわかる。
「おまえにあの男が殺せるかなあ」
お粂はそっと右助の腕を放しながら、いくぶんからかうような語気になっている。
「やってみなけりゃわからないけど、どうせ一度はきっとやる時がくると、おれは思っているです」
右助はそういう宿縁を信じきっているような顔つきをして、平気でわらっている。
「おまえ、その時の手を考えてあるの」
「おれは下郎だから、手なんてなんにも知らないです。だから、出たとこ勝負でやるです」
「あたしはあいつと一度、匕首でけんかしたことあるのよ。あいつは本当に毒蛇のように強かったわ。もう少しで、あたし、あいつに巻きつかれてしまうところだった」
お粂はいまそれを思い出してもぞっとする。
「行者さんはその時、平馬さんのおじいさんに

助けられたんだってね」
「あら、だれからそんなことを聞いたの」
「船七の親方から聞いたです」
「ああ、そうか――」
船七には自分でそんなことを話したおぼえはないが、家にいる居候の女たちの口からでも聞いて、およそのことは知っているのだろう。
「行者さんはいまあいつとけんかをしたらどうなんだね」
「いまなら、もう負けないわ。あたし悔しいから、あいつに勝てる手を一つだけ、それから工夫したんだもの」
「それで、あいつ、行者さんに手を出そうとしないんだな」
「そうらしいわ。あいつはなにかそんな手をあたしが平馬さんのおじいちゃんから教わったと見ているのよ」
「その手ってのはねえ、行者さん、もし行者さんが眠っているところへ、ふいにあいつがかかってきても使える手なんかね」
「さあ、それはどうだかなあ」
お粂は思わず苦わらいをしながら、
「どうして、おまえ、そんな変なことを聞くのさ」
と、つい突っかかっていきたくなる。
「だって、行者さん、旅へ出れば旅籠屋(はたごや)へ泊まらなければならないだろう。旅籠屋の座敷は、隣も前も他人が泊まっていて、まさか戸へかぎをかけて寝るわけにはいかないもんな」
なるほど、そういわれてみれば、そんなことは絶対にないとはいいきれない。
「いいわ、あたしは目ざといほうだから、たいていそんなことはありゃしないけれど、――あたしが眠っている時は、おまえが部屋の前で寝ずの番をするのさ。忠義のためなんだから、そのくらいのことはしようがないだろう」
「じゃ、おれは毎晩眠れないんかね」
「がまんおしよ、忠義のためなんだから」

お粂がわらい出すと、
「行者さんでさえそのくらいあぶないんだから、お姫さまはもっとあぶないとおれは思うです」
と、右助はまじめに心配している。
「お姫さまには平馬さんがついているわ。だいいち、あの人たちは鬼吉なんかよりもっと怖い殺し屋にねらわれているんだもの、そんなこと心配したってしようがありゃしない」
さすがに右助は返事ができないようだ。
お粂はまたしてもむらむらっと腹が立ってきて、
「あたしはねえ、右助、平馬さんのおじいちゃんに命を助けられた恩があるんです。色恋なんかは別にしても、その恩を平馬さんにかえさなくちゃ人間じゃない。だから、もしこんどさっきのような殺し屋が出たら、いつでも平馬さんの身がわりになって死ぬことにきめたのよ。その時、おまえは黙って見ていなくちゃならないんだろう。――そんなつらいおもいをするくらいなら、今のうちに御主人のところへ帰ったほうがいいとあたしは思うんだけれどな」
と、こんどこそはっきりといってやる。
右助は黙って考えているようだ。
「おまえ、なにかあたしのことを知っているの」
そう問いつめながら、お粂の顔は我にもなく真っ青になってくる。
「おれ、なんにも知らねえです」
きっぱりといいきって、右助の顔からもみるみる血の気がひいてきた。
「わかったわ。おまえは、あたしの死ぬのを見とどけてこいって、御主人さまからいいつけられてきたんだね」
「そんなことはないです」
「本当のことをおいいよ。あたしは平馬さんの身がわりになって死ぬんだって、今はっきりおまえに打ちあけているんじゃないか」
「そんな無理いわないでくださいまし。おれだ

って、おれだって死ぬことぐらいは知っているです」
怒ったようにいって、ぽろぽろと涙をこぼしたのは右助のほうが先だった。
やがて新大橋の東たもとへ出て、この辺から月のあかるい川幅がぐっと広くなるのである。平馬たちのうしろ姿はまだ見えない。

大木戸の外

世俗に高輪海岸十八町という。その実、十はおまけで八町ぐらいのものだが、語呂がいいから高輪海岸十八町というのだという説もある。江戸八百八町、旗本八万騎のたぐいで、この八町説も確実な数字かどうかはわからない。
芝田町九丁目を出外れるところに町木戸があって、それを出ると高輪北町となり、東にからりと海がひらけてくる。ここからが高輪海岸で、北町から中町、南町とつづき、南町の外れに大木戸がある。ここまでが江戸のうちで、町奉行の支配下だが、一足大木戸を出ると八ツ山下から品川宿へ入り、関東郡代の支配下になる。
江戸から東海道へ踏み出す初旅の者は、たいていこの大木戸の辺まで親戚知己に見送られてきて、ここで別れを惜しむ者が多いから、海っぷちのほうにずらりとよしず張りの掛け茶屋が店をならべている。無論、この掛け茶屋は夕方になるとみんな店をしまって帰ってしまうのである。
風よけ頭巾で顔をかくした手塚勘解由は、その大木戸外の掛け茶屋の一軒を無断で借りて、前に立てかけてあるよしずの一方から中へ入り、浪人組の総帥渋川一心斎と床几に向かいあって掛けながら、さっきから平馬たちの一行がくるのを待ちうけていた。
灯はなくても、外に十五日の月がさえかえっているから、よしず張りの中にたがいの顔が見えるほどにほの明るかった。
一心斎は頭を総髪にして、角張った顔の落ち

くぼんだ目に鋭い光を持っている、いかにも剣客者らしい大柄な男だ。
もう一人、手塚とならんで掛けているのは、こんど一心斎と国もとまで同行する藩士組の頭取で関谷十三郎といい、年はまだ三十前だが、腕も頭も度胸もずばぬけている手塚腹心の才物である。
時刻はやがて四ツ（十時）に近く、これから品川の青楼へ飛ばしていく駕籠、帰りをいそぐ駕籠が、えんほい、えんほいと掛け声に威勢をつけて、絶えるともなく、つづくともなく、よしず張りの前を行き交っていた。
今夜は海から吹きつけてくる風がかなり寒い。
「塚、連中は少しおそいようだな」
往来へ目を向けていた一心斎が、ふっと手塚のほうを見ていった。
「うむ」
こっちは御厩河岸の渡しで大場たちが失敗するとすぐ、浅草を立ってここまで急行してきたのだから、たとえ平馬たちは女づれでも、半刻（一時間）以上おくれるとは考えられない。陸を歩いてくれれば、もうそろそろ姿を見せなければならないはずなのだ。
「永代から船という手もありそうですな」
そばから関谷が口を出す。
「その手もあるにはあるが、今夜は波が少し高い。男ばかりならともかく、姫御前が承知しなかろうと見た。思いすごしだったかな」
一斎の落ちくぼんだ目に、ちらっと苦わらいがうかぶ。
「実は、わしも先生とおなじ考えでした。しかし、こうおそいところをみると、相手は短筒を振りまわすようなじゃじゃ姫ですからな」
「そのじゃじゃ姫というのが、わしにはまだどうもふにおちぬ。平馬にしても、じゃじゃ姫にしても、なんで今夜わざわざそんなあぶないまねをしなければならんのだろう。その目的がわ

しにはわからぬ」
「常識からいえば、たしかにそうですな。そんなあぶないまねをしなくても、明日はじゃじゃ姫として江戸が立てるのですからな。それとも、平馬は姫君といっしょならこっちが遠慮するとでも考えたか」
　関谷もじゃじゃ姫の真偽にはまだ疑いを持っているようだ。
「いや、色恋というやつは上下のへだてがないように、理屈もない。じゃじゃ姫のほうから無理に平馬についてきたか、あるいは平馬のほうで誘ったか、ただそれだけのことだろう」
　手塚ははっきりといって、頭巾の中でわらっている。
「すると、じゃじゃ姫は素浪人平馬に恋慕しているということになるのか」
　一心斎は意外そうな顔つきだ。
「まあ、そう見ていいだろう。それでなければ、伊勢まいりなどはいい出すまい」
「しかし、素浪人平馬では屋敷の者が承知すまい。小森家十万石の若殿だから婚儀が成立するんで、相手が素浪人では、だいいち老中が納得しないだろう」
「屋敷の者も、櫓下も、じゃじゃ姫と平馬にうまくだまされているのだ。いや、中橋親子も、後で二人の仲がわかると、おそらく青くなる組だろう」
「それでは、手塚、なにも我々がこんな苦労をしなくても、どたん場へくれば婚儀は破談、中橋親子は切腹で、万事こっちのおもいどおりにけりがつくんじゃないのか」
「その考えは甘い。ほっておけば、どたん場へくる前に、我々三人衆のほうが、追放か、切腹か、先に始末されてしまう」
「なぜだ、それは――」
「悪いことにはなあ、川、平馬は若殿に化けてもおかしくないだけの資格を持っている。しかも、茂太郎が今日老中からもらってきた密書は、

福姫さま輿入れの承諾をうながし、当主の隠居を勧告している。当主にはこの二つとも拒絶するだけの理由がない。それが実現すれば、小森家十万石はいやでも若殿と中橋親子の天下になるんだ」
「では、今のうちにじゃじゃ姫と平馬の不義を櫓下へ密告してみてはどうだ」
「まず、握りつぶされてしまうだけのことだろう。無論、ひそかにしかるべき手は打つだろうが、それは少しもこっちの得にはならんことだ」
「なるほど。それで、御家老はじゃじゃ姫の生けどりを平馬同様に消すべしと変更されたんですな」
　関谷の冷たい顔に、不敵な微笑がうかんで消える。
「侍の家の不義は手討ちときまっている。不義の弱みは向こうにあるのだから、証拠さえ残さなければ、先方でも公表するわけにはいくまい。是が非でも勝たなければばうそなのだ。勝てば、理屈は後でいくらでもつく」
　手塚は冷酷にそういいきってみたが、しかし、なんとなく自信は持てなかった。こっちに勝ち運さえあれば、御厩河岸の渡し場の待ち伏せで、今夜すでに勝負はついているはずなのだ。
「あなたの運はこれから下り坂です」
　臆面もなくいっていた行者のお粂の声が、いまだに耳に残っていて消えない。
　――わしに昔ほどの闘志がなくなったのは、年のせいかもしれないな。
　手塚はふっと寒々としたものを胸に感じてくる。
「御家老、左助がきたようです」
　関谷がつと立っていって、よしずの端の透き間から半身を乗り出し、そっちへ手で合図をしている。
　その左助をうしろから追い抜くようにして、品川へいそぐらしい町駕籠が一丁、えんほい、

えんほいと、目の前を駆けぬけていく。

関谷のうしろからついて入ってきた中間左助は、土間へひざまずいてまだ息をはずませている。

「だんなさま、行ってきたです」

「御苦労だった。様子はどうだったな」

「浜町の裏門から出たのは、みんなで十三人です。先頭が二人で加藤市兵衛さまと矢頭金吾さま、次が十間ばかり離れて多田信助さまたちの三人、また十間ばかり離れて三人、それからまた十間ばかり離れて三人、千葉兼之進さまと西村安蔵さまと、もう一人は頭巾をかぶっていて顔はわかりませんが、その後から若党米次郎と中間又三がついていますから、たぶん中橋の若だんなだと思います」

「すると、二人、三人、三人、三人に若党と中間の順だな」

「そうです。わし、金杉橋までずっと後をつけて、もう大丈夫と見たから裏通りを走りぬけて先まわりしてきたです」

「平馬たちは一緒ではないのか」

「へえ、どこで一緒になるだろうと思って気をつけていたですが、どこからも出てきませんでした」

「塚、平馬たちはやっぱり船にしたんだ」

そばから一心斎が口を入れる。

「うむ。——左助、ここから品川寄りの三軒目のよしず張りの中に大場たちがいる。こっちが往来へ出たら、すぐに切って出ろといっておけ。ねらうのは頭巾の中の中橋茂太郎一人でいいのだ」

「へえ」

左助はすぐによしず張りのすきから抜け出していく。

「十三、遠慮せずに思いきってやれ」

手早く頭巾をかぶっている関谷に手塚はきび

しくいいつける。ここで茂太郎を切って、ふところの老中の密書を取りあげてしまえば、平馬たちだけで国もとへ乗りこんでもむだ足になるのだ。つまり、御厩河岸の失敗を取りかえしたことになる。

「十三、わしが後見してやろうか」

一心斎がそばから念をおす。

「いや、一人で大丈夫です」

身支度を終わった関谷は、大刀の目抜きにしめりをくれながら、きっぱりという。

「よし、その意気で行け」

一心斎は満足そうにうなずいてみせる。

「来たようだな」

手塚も一心斎も、すっと床几から立つ。一瞬あたりの空気が痛いほどどしいんと緊張してきた感じだ。

月かげの青い往来へ、先頭の二人が早足にあらわれて通りすぎていく。こっちがわを歩いている加藤市兵衛が、なにかをさがすようにちらっとよしず張りのほうを見ていた。

ほっと関谷が一息ついている間に、十間ばかり離れて、後の三人が足早にあらわれてくる。この三人はわき目もふらずに通りすぎていった。

関谷はまた一息ついたようだ。

次がまた三人、左助の報告に間違いはないようだ。

「十三、この次だぞ」

「はっ」

関谷は大きく息を吸いこんで、一刀の鯉口を切る。

幸い、近くに品川通いの駕籠の声もない。磯打つ波の音がざざあっと耳につく。

来た。最後の三人。しかし、三人とも素顔で頭巾をかぶっているやつはいない。すぐ後から中間の又三がついているからこの三人にちがいないのだが、中橋茂太郎の顔はないようだ。

「いないようです」

関谷が振りかえっていう。

「うむ、いないようだ。それに、若党米次郎が欠けている」
　また出しぬかれたと手塚はとっさに見てとる。
「やりますか、御家老」
　騎虎の勢いといったような関谷の声音だ。
「むだだ。やめておけ」
　もう冷静な声で手塚はとめた。
　しかし、若党に化けた茂太郎が、いつ一人でくるかわからないから、まだ油断はできない。
　向こうのよしず張りから、ひたひたと左助が駆けもどってきた。
「だんなさま、申し訳ありません」
「うむ、若党が欠けていたようだな」
「千葉さまと西村さまの真ん中を歩いていたのが米次郎です。金杉橋をすぎてから入れかわったにちがいありません」
「そうではなかろう。頭巾をかぶっていたやつははじめから米次郎で、大木戸が近くなってからわざと頭巾をぬいだのだ」
「すると、若党に化けた茂太郎はどうしたのでしょう」
「ここは品川通いの駕籠が絶えず飛ばして通るからな」
　手塚は苦わらいをしながら、床几へもどってかける。
「茂太郎もなかなかやりますな、御家老」
　拍子ぬけがしたように関谷は支度を解きながらいう。
「運がないのだ」
　手塚は苦い顔のまま一心斎の方へ向いて、
「川、わしは江戸を離れるわけにはいかん。これから後はおぬしに一切の采配をまかせる。いいだろうな」
　と、念を押すようにいう。
「よし、引きうけた。万一、失敗したら、二度とおぬしの顔は見ないつもりだ」
「この勝負に負ければ、わしも生きていようとは思わぬ。また、敵が生かしてもおくまい」
「参考のために、おぬしの大体の意見をもう一度聞いておこうか」
「平馬、じゃじゃ姫、茂太郎、この三人のうちだれが一人欠けてもこっちの勝ちだ。ただし、茂太郎の場合は土井老中の密書が手に入らないとむだ骨になる。いちばん確実の勝ちは、じゃじゃ姫を消すことだ。次は平馬で、これを消せばじゃじゃ姫がこの件から手をひく。そのつもりで、一人ずつねらってみてくれ。そのほうが失敗がすくない」
「心得た」
「明日のことは、加藤からの内通を待ってきめるがいい。連絡には左助を使うことだ。なるべくなら、箱根を越える前に勝負をつけてもらいたい」
「それは、わしもそう考えている」
「浪人組はともかくとして、藩士組はそうみんな箱根から外へ出すわけにはいかぬ。箱根を越えるのは関谷を筆頭にして五人、それでいいだろうな」
「それで十分だ。しかし、わしは明日のうちに勝負をつけてしまいたいと考えている」
「そうできればこれに越したことはないが、絶対に証拠を残してはいかんぞ。ことに、箱根を越すまではな」
「よし、わかった。必ず成功してみせる。わしもまだ十年は死にたくないからな」
　一心斎はにやりとわらってみせる。
「十三、藩士組はそちの責任だからな、なるべくむだ死にをさせないように、しっかり後をたのむ」
「心得ました。わしも失敗したら二度と御家老の前へは出ない覚悟です」
　若い関谷は張りきっているようだ。これが成功すれば、微禄の徒士組から、やがては重役にまで出世をする道が約束されているからである。
「だんなさま、そこまでお供しなくてもいいで

すか」
　左助が心配そうにいうのへ、
「おまえには仕事がある。一人でよい」
　手塚はそういって、一人で往来へ出た。
　月の道は真昼のように明るい。
　大木戸を入ると、向こうからまた品川がよいの駕籠が一丁、えんほい、えんほいと飛んでくる。
　その駕籠のかげになった二人づれがある。一人は黒っぽいもんぺ姿のようだが、たしかに行者のお粂のようだった。すると、いっしょに歩いているのは右助のはずだ。
――やっぱり、行く気になったようだ。
　手塚はまたしても寒々としたものを感じながら、ゆっくりとそっちへ歩いていく。

ありがた迷惑

　品川は目黒川を境にして北本宿と南本宿にわかれ、橋でつながっている。鶴屋はその橋をわたって南本宿へ入った左角で、この辺では上旅籠の一つになっていた。
　小森家の近習組十人は奥の十畳と八畳の二間つづきの座敷へ案内され、みんなほっとした顔つきで、渋茶をすする者、さっそくたばこ入れを出す者、それぞれ気の合った者同士がひとかたまりずつにわかれてくつろいではいるが、まだだれも口数をきく者はなかった。それだけみんな緊張しているのである。
　その次の間のふすまをしめきってある六畳で、駕籠で一足先についていた茂太郎は、若党米次郎の着くのを待って、いそいで着物を取りかえっこしていた。
「米、別に待ち伏せはなかったようだな」
　茂太郎は袴をつけながらそっと聞く。
「はい。でも、大木戸の外の掛け茶屋の中に何人かはかくれていたようです」
「そうか――」
「若だんなさまの顔が見えないんで、きっとまだあそこに待っているかもしれません」
「すると、こっちは計略が図にあたったことになるが、平馬さんのほうはあぶないかもしれぬ」
「平馬さん組は、まだ着いてないんだそうですね」
　もとの若党姿になった米次郎は、ちょっと心配そうな顔をする。
「なあに、向こうには松岡平助組がついているはずだから、たぶん大丈夫だ」
　口では軽くいったが、松岡組は大丈夫にしても、茂太郎はまだ平馬の実力を知らない。万一、道中にさしつかえるようなけがでもされると、今までの苦労が水泡に帰してしまうのだから、内心は気が気ではなかった。
「米、大木戸の掛け茶屋にかくれていたのは何人ぐらいか、およその見当はつかないか」
「さあ、手前がそれらしいと見かけたのは一軒だけですが、あの辺にはおなじようなよしず張りがずらりとならんでいますからね」
「そうだな。平馬さんに注意しておけばよかった」
「若だんな、これからひとっ走り行って見てまいりましょうか」
　主人思いの米次郎はすぐにも立ちあがろうとする。
「まあ待て――。もう少し待ってみよう」
　とにかく一度隣へ顔を見せておいてやらないと心配するからと思い、ふすまをあけに立とうとしたところへ、又三が廊下から駆けこんできた。
「若だんなさま、お着きになりました」
「そうか、無事に着いたか。人数は――」
　ほっとして、念のために聞いてみると、
「男が七人、女の人が二人います」
　と、又三も変な顔をしているが、
「なに、女が二人――」
　茂太郎にはその意味がわからない。
「へえ、二人ともお高祖頭巾をかぶっているん

で、顔はよくわかりませんが、どっちもお腰元風です」
「それはたしかに平馬さんのつれなのか」
「そうのようです」
「よし、行ってみよう」
茂太郎は我にもなく店へ走っていた。
一行はいますすぎを取って店へあがったところで、なるほど平馬のうしろに腰元風の紫矢絣(やがすり)の女が二人、お高祖頭巾のまますらりと立っている。
「やあ、茂太郎さん、みんな無事に着いたそうだね。よかったなあ」
平馬はいつもの明るい顔で、気さくに声をかけてくる。
「御一同、御苦労です」
茂太郎はとにかく一同にあいさつをして、
「番頭、御一同を二階へ案内してくれ」
店先でごたごたしていては人目につくので、そこへ出迎えに出ていた番頭にいいつける。
「かしこまりました。——お客さまがた、お座敷へ御案内いたします」
ちょうど自分たちの座敷の真上におなじような十畳と八畳の二間つづきの座敷がある。そこを平馬と松岡組のために取ってあるのだ。
「茂太郎どの、後刻改めてごあいさつします」
松岡はていねいに会釈をして、腰元たちの後から仲間四人をつれて二階へあがっていく。
「我々は永代から船できたんだ、女づれなんでねえ」
いちばん後に残った平馬が、わらいながら説明する。
「あの女二人は、だれなんだ、平馬さん」
「一人はじゃじゃ姫さま、一人は腰元の楓(かえで)さんだ」
「えっ、じゃじゃ姫さま——」
「まあ、二階へ行こう」
平馬は先に立って階段をあがり出す。
——やっぱり福姫さまだったのか。

福姫が明日伊勢まいりに旅立つことは、土井老中から今日聞いている。それは若殿亀之助どのへの好意からだと、その時土井老中はよろこばしげに口をそえていた。
それでさえ、身がわりを使っているこっちとしては冷や汗の出るようなうしろめたさを感じているのに、平馬はどんな風に福姫をさそい出してきたか。もっとも、じゃじゃ姫が同行したがっているとは、今日船の中で聞いていた。それにしても、福姫が腰元と二人きりで屋敷をぬけ出してくるということからして、茂太郎の常識では考えられないことなのだ。
「平馬さん、わけを話してくれ」
一つ間違えば小森家十万石の家名にかかわる重大問題になりそうなので、茂太郎はどうにもがまんができず、二階の廊下へ出るとすぐ、そこの暗い座敷へ平馬を無理に引っぱりこんでいた。
「実は、今日、あれから植徳の家へ帰ると、徳蔵が姫君のいいつけで長谷部平馬を迎えにきてね、しょうがないからいっしょに行ってみると、こんどの伊勢まいりに供をしろというんだ」
「それで——」
「浪人平馬としては、それをことわる理由がない。承知しましたとおうけすると、それならこれから品川へつれていって亀之助さまに会わせろという。そんなことはお屋敷で許さないでしょうといったんだが、許さなければ抜け出していくという意気ごみで、用人格の大草源太郎という者を呼びつけた。まだ塚越老人は櫓下(やぐらした)から帰っていないようだった」
「源太郎どのはあの屋敷の実際の采配(さいはい)を振るっている実力者なんだ」
「そうらしいな。そんなむちゃなことはいけませんといって強硬にとめたんだが、やっぱりじゃじゃ姫にはかなわない。こんどの伊勢まいりの目的は、陰ながら亀之助さまの道中をまもるためなのだ。そんなことはもうちゃんと敵も知

っている。あぶないという段になれば、葵の紋のついた駕籠に乗って行列の人数にまもられていても、そんなことを遠慮する悪人どもじゃない。むしろ、今夜のうちに品川まで行っておいたほうが、敵の意表を突くことになる。明日の朝、品川の本陣で待っていて、そこから駕籠にのればそれでいいじゃないか。たってとめるなら、黙って屋敷をぬけ出しますと、頭から高飛車なんだ」
「一体、そんなにまでして品川へきたい姫君の目的はなににあるんだろうな、平馬さん」
　茂太郎はまゆをひそめながら、さすがにずばりと急所を突いてくる。
「それは、亀之助さまに会って、勇気をつける必要があると考えているんだな。つまり、じゃじゃ姫は、今朝見合いをした時から、亀之助さまにとても好意を感じているということになるんだ」
「しかし、ここには亀之助さまはいないことを、平馬さんはよく知っているはずじゃないか」
　茂太郎は思わず平馬をなじるような語気になっている。
「それは浪人平馬の口にすることじゃないし、また、浪人平馬には姫君の品川行きをおよしなさいととめるだけの資格もない」
「困ったなあ。もし姫君が若殿に会わせろといい出したらどうすればいいだろう」
「それよりなあ、茂太郎さん、あんたは今朝の見合いの責任をどうする考えなんだ」
「なにっ」
「じゃじゃ姫は今朝の若殿のために命がけになっている、そうは考えられないかね」
　あっと茂太郎は顔から血の気が引いてくるのを自分でもはっきりと感じた。
　茂太郎とすれば、ただじゃじゃ姫に婚約を承知してもらって、それを力に三佞臣を取りおさえれば目的は達する。そう簡単に考えて、というより目的のほうへばかり心が走って、つい偽

若殿をこしらえてしまった。まさか、その偽若殿に福姫がこうまで命がけになって打ちこんでこようとは思いもかけなかったのだ。
　いや、本心をいえば、今日、土井老中から福姫が伊勢まいりを思い立ったと聞かされた時、これは困ったことになりそうだと、ありがた迷惑さえ感じていたのである。

ずぶとい神経

「平馬さん、福姫さまは今朝の若殿と浪人長谷部平馬とをまだ別々に見ているんだろうか」
　茂太郎は念のために聞いてみた。
「正直にいうと、向こうの家来どもはまだ長谷部平馬は小森家の血筋をひいている者としか見ていない。つまり、今朝の若殿と平馬とは別々だと見ている。しかし、じゃじゃ姫は今朝の若殿は身がわりだとちゃんと知っている」
「というと――」
「じゃじゃ姫はお福さんになって浪人平馬を助け、いっしょに小森家のためにひとはだぬいでやろうという気になっているんだ」
「ふうむ」
　茂太郎は、外からさす薄あかりの中で、平然とそんなことをいいきる平馬のたくましい面構えを、唖然としてながめてしまった。
「それで、この結果はどうなるんだ、平馬さん」
「あんたがた親子は、三佞臣を取りのぞいて、亀之助さまが小森家をつげばそれで目的は達するんじゃないのか」
「それはそうです」
「ぜひ松平福姫さまを亀之助さまの夫人にしなければならないとは考えちゃいないのだろう」
「正直にいえば、そういうことになります」
「それなら、知らん顔をして、目的に向かって突進すればいいんだ。後のことはわしが責任を持つ」
「しかし、そううまくいきますかなあ」
「なにが――」

「せっかくうまく目的を達しても、小森家の家名に傷がついては、あぶはち取らずになります」
「そんな心配はしなくてもいいんだ。また、事ここにいたって、そんな心配をしてももうおそい。我々には知恵と勇気がある。あくまでも協力して、やれるところまでやる、それでいいじゃないか」
　平馬はけろりとしていってのけるのである。まったくずぶとい神経だと茂太郎は思った。
「よろしい。では、わしも度胸をすえますが、一体、じゃじゃ姫はどうして今朝の若殿を身がわりだと見ぬけたんでしょうな」
　茂太郎にはそれがふしぎである。
「いや、わしはお姫さまをだますほどずぶとい度胸はない。おまけに、その前の日に長命寺の境内でじゃじゃ姫と出会って、口まできいているんだ。じゃじゃ姫が見合いの時、わし一人だけを築山へつれていったのは、こいつくさいとにらんだからなんで、それならこっちもその気でいけと、はじめから事情をぶちまけて協力をたのんだんだ」
「もうわかりました。姫君は平馬さんのそのずぶとさにあきれて、ついふらふらとなってしまったんだ。正直にいうと、今日船の中でじゃじゃ姫が同行したがっているとあんたから聞いた時、それが実現すると困ったことになりはしないかと心配していた。しかし、いくらじゃじゃ姫でもまさか一人で抜け出してこられるとは考えられないんで、ついそんなことを忘れていたが、――今夜ばかりはまったくどきりとさせられました」
「少しこっちが意地が悪かったかな。お福さんと平馬のことは、いわば私事なんだから、後で話せばいいと考えていたんだ」
「いや、あの時聞いても、いま聞いても、どきりとする味はおなじです。まさか、こんなことになろうとは、無論思ってもいませんでしたが、こうなってしまった今となってみれば、その舞

台ごしらえをしたのはわしなんですからな」
　茂太郎は苦笑するよりしようがない。
「それは、わしにしても、まさかこんなことになろうと思って身がわりを引きうけたわけじゃないんだ」
「それはそうでしょうとも――しかし、男と女というやつは、まったく油断できませんな」
「皮肉か、茂太郎うじ」
「皮肉じゃありません。わしはむしろその結果がどういうことになるか、そのほうが心配です。成算があるんですか、平馬さん」
「冗談じゃない、はじめから算盤をはじいてこんなことをしたとすれば、それは悪党だ。もっとも、こうなってから、その結果を考えないやつはあほうということになる。恋はわしたちの私事なんだから、まあ、わしたちにまかせておいてもらいたい」
「無論、それはそうするよりしようがありませんが、――ほかの者にはじゃじゃ姫さまをなんといっておきましょうかな。まさか、福姫さまだと発表するわけにもいかないでしょう」
「一同にはじゃじゃ姫の名代といっておけばいい。名前はお福さん、――そのうちには自然にわかってくるだろうが、腰元姿の時はあくまでお福さんで通しておいたほうが無難だ」
「承知しました。今夜はそれですむでしょうが、明日が問題ですな」
「どうしてだね」
「松平家の行列が本陣へ着く、そこで姫君が小憩となると、こっちはどうしても若殿が出てあいさつをしなければなりません。亀之助さまが姿をかえて国もとへ微行するということは、世間へは秘密でも、御老中の内諾を得ています。無論、塚越老人もそれを本当にしているから、姫君の伊勢まいりを本気で計画したんでしょうからな」
「なるほど――。こんどは身がわりというわけにはいかないな。浪人平馬が姫君をあずかって

きたことは、大草源太郎がちゃんと承知している」

「といって、一足先へ逃げるというわけにもいかないでしょう」

「それはまずい。やっぱり、中橋茂太郎と浪人平馬が姫君を本陣まで送っていって塚越老人にわたすのが本当だ」

「その時、当然亀之助さまがいっしょでなければならないはずです」

「まあいい。とにかく、なんとか考えてみよう。あんたは知らんふりをしていればいい。お福さんのことに関する責任は、きっとわしが取る。そっちへは決して迷惑はかけない」

自信ありげにいいきったものの、その実、平馬にもこれという妙案があったわけではないのだ。

御名代さま

茂太郎はともかくも福姫にあいさつをしなければならない。福姫は、十畳の座敷のほうに、楓と小堀孫作にかしずかれて行儀よく座っていた。無論、姫君も楓もお高祖頭巾のままである。

「御名代さまには今宵わざわざ陣中見舞いにお越しくださいまして、まことにかたじけなく存じます。手前はこの度の道中をおあずかりします中橋茂太郎、なにとぞお見知りおきくださいますように——」

茂太郎はそこへ両手をつかえて、丁重にあいさつをした。

「茂太郎、かぶり物のままでごめんなさい。この度の大役、御苦労に存じます」

悪びれた様子は少しもない福姫である。

「楓どのにも、小堀どのにも、この度は御迷惑をかけます」

「いいえ、なんのお役にも立ちませんで」

楓が答えて、これはすでに二人とも今朝顔見知りだから、会釈しただけで簡単にあいさつをすませる。

「平馬どの、松岡先生の御一行は、もう御名代さまにお引きあわせはすんだのですか」

「いや、まだです。ついでにごあいさつをさせましょう」

平馬は気軽に立って次のふすまぎわへ行き、ふすまごしに、

「松岡先生、御名代さま、並びに中橋茂太郎どのがあいさつされるそうです」

と声をかけておいて、左右にふすまをひらく。

「はっ」

松岡を先頭にして、うしろに四人ならんだ剣客組が、慎んでそこへ両手をつく。

「そなたたちとは両国からずっといっしょでしたが、途中ゆえわざと声はかけませんでした。この度は小森家のために働いてくれますそうで、御苦労です」

正面の福姫が如才なくまず声をかける。

松岡はさっき平馬から耳うちをされているからそれが福姫だとわかっているが、後の四人はなんにも知らないはずである。

「ごていねいなるお言葉をいただき、我ら浪人一同、ありがたきしあわせに存じます。手前は本所亀沢町の松岡平助、なにとぞお見知りおき願わしく存じます」

松岡は姫君のほうへ一礼してから、

「茂太郎どの、手前から一同の姓名を披露いたします。右から笹川倉之助、島田重蔵、中野半助、後藤寅次郎、一通り物の役に立つ剛の者ばかりにて、信義にそむかぬ点、手前同様に信用していただけるかと存じます」

と、自負をもって引きあわせる。

「手前は小森家の中橋茂太郎、松岡先生のおかげにて、あなたがたのようなたのもしい味方を得たことは力強いかぎりです。そこで、御名代さまの前を幸い、極秘の一事を御一同に申し上げておきますから、必ず他言は御無用に願いたい」

茂太郎はきっぱりと念を押して一同を見わた

す。さすがにそれだけの貫禄はそなわっている茂太郎のようすだ。
「茂太郎どの、金打しましょうか」
松岡が一同にかわっていう。
「いや、松岡先生の言葉を信用します。金打にはおよびません。極秘の一事というのは、この度の道中について、若殿亀之助さま御微行の警固と申して松岡先生に依頼してあなたがたにきていただいたのですが、実は子細あってこれなる長谷部平馬どのに若殿の身がわりをたのみ、亀之助さまはひそかに江戸へ残ることになりました。もっとも、道中は若殿も近習の一人に変装の予定でしたから、表向きは長谷部平馬どのでかまいませんが、内心は平馬どのを若殿として警固していただくよう、念のために申しあげておきます」
「よく相わかりました」
松岡をのぞく四人の剣客組は、そうわかればそれでもかまわない立場だから神妙にうなずいたが、唖然としたのは楓と小堀孫作である。本物の若殿が江戸に残るくらいなら、姫君はなにも伊勢まいりの必要もなければ、今夜あぶない思いをしてわざわざ品川くんだりまで微行をすることはなかったのだ。まったく人をばかにした話である。
いまにもじゃじゃ姫が憤慨して本性をあらわすのではないかと、二人ともおそるおそる姫君の顔色を見ている。
松岡は松岡で、やっぱりそんなあぶないことに利用されるのかと、思いあたる節があるだけに、平馬のために心配せずにはいられない。
「平馬、そなたは亀之助さまにそっくりですから、きっとお身がわりがつとまります。福が助けてあげますから、立派に悪人どもと闘ってごらんなさい」
福姫の目はむしろたのもしげに平馬を見ながら、微笑さえしているようだ。
「はあ、なにとぞお願い申し上げます」

平馬は至極おっとりと落ち着いている。
楓と小堀はまたしても唖然としたようだ。
「平馬どの、実は近習どもも、後から若殿が手前といっしょにまいられるものと、階下にて心配して待ちかねております。やはり真相を伝えておいたほうがよいと思いますので、松岡組の方々をお引きあわせかたがた、事実を伝えてやりましょう。御名代さまがたにはしばらくお待ちをいただいて、御同行くだされたい」
茂太郎が相談するようにいう。はじめは近習たちにもあくまで平馬を若殿のつもりにして国入りをするつもりだったが、こうなってはそうはいかない。あるいは近習たちの間に多少動揺するものがあるかもしれないが、これも今は覚悟の前だ。
「平馬、行っておあげなさい。福はここで待っています」
福姫の許しが出たので、平馬は松岡たちといっしょに茂太郎の案内で下の近習組の待っている座敷へ出た。
茂太郎が一通り剣客組の引きあわせを終わって、最後に自分とならんで座っている平馬を見ながら、
「実は、この度の決行について、若殿亀之助さまは大事を取って江戸に残り、これなる長谷部平馬どのが若殿お身がわりとして国もとへ乗りこむことに、父茂右衛門とも相談の上きまった。方々にはあくまでも平馬どのを若殿として奉公してくれますように——。なお、今夜は特に平馬どのの案内にて向島から福姫さま御名代が陣中見舞いにまいられ、我々は明朝七ツ（四時）立ちを変更して、福姫さまの行列が品川の本陣へつかれるのを迎え、行列といっしょに出立することになるから、さよう承知おきありたい」
と、一気に発表した。
案の定、近習組は事の意外に顔を見あわせているばかりだ。
そこへ、福姫が楓と小堀をつれて、ふいに座

敷へ入ってきた。こんどは福姫も楓もお高祖頭巾をぬいでいる。

腰元姿ではあるが、たしかに今朝顔を見ている福姫にちがいないので、一同があっと平伏している間に、福姫はすらりと上座に立って、

「一同、この度は御苦労に存ずる。そなたたちは小森家の家中にても忠義の者として選ばれた勇士たちと聞いております。必ず若殿さまをおまもりして侍の道を立てますよう、福も及ばずながら後見いたします故、悪人どもに負けてはいけません」

と、凛然たる言葉をのべた。

――お福さん、なかなかやるぞ。

平馬は感心して福姫の勇ましい顔を見ている。

はっと感激しながら平伏している近習たちは、感激は感激として、目端にかけたそういう平馬の大胆な態度が、だれにもふしぎに思えたようだ。

「平馬、まいりますように」

福姫が平馬をうながして二階へ去っていくと、近習たちはまたしても顔を見あわせて、茂太郎がお礼言上のため早々座を外したのを幸い、

「どうもわからん」

と一人がいい出すと、

「わしにもわからん」

と一人がうけて、みんな小首をかしげていた。

要するに、平馬が本当の若殿でなければ、福姫がわざわざこんなところへ出てくるはずはない。茂太郎があんな発表をしたのは、敵をあざむくにはまず味方からという兵略を用いたのではないかというのが、おおかたの近習たちのその夜の気持ちだったようである。

こうして、品川の第一夜はあけた。

老用人怒る

翌朝――。

松平福姫の行列は予定の時刻よりかなり早目

に品川の本陣へ到着した。

老用人塚越助左衛門が福姫の無謀の先行をどんなに憤り、心配のあまり一晩中疳をたかぶらせていた証拠である。

したがって、本陣へ着いた助左衛門は非常にきげんがよくなかった。

「これ、わしは松平福姫さまの用人塚越助左衛門だが、姫君のお着きを一足先へきて待っている者があるはずだ。小森家の者はまいっているか」

行列が玄関へ着くなり、助左衛門は出迎えた番頭に頭からがんがんわめくように聞いた。

「はい、お腰元さまお二人をおつれになりまして、中橋茂太郎さま長谷部平馬さまとおっしゃるお二方が奥の間で待っておられます」

「よし、すぐそこへ案内せい」

助左衛門はやっとほっとした顔つきで、せかせかとわらじをぬぎはじめる。

いちばん先に玄関式台へ横づけになるはずの姫君の駕籠は、しかたなくそこへ立ち往生をしている。

「源太郎、――源太郎はおらんか」

わらじをぬいで式台へ立った助左衛門は、大きな声で大草源太郎を呼ぶ。

「はっ、ここにおります」

駕籠のそばについていた源太郎が、苦わらいをしながらそれへ進む。

「おぬし、姫君さまを御案内申しあげて、後からすぐこい」

「かしこまりました」

塚越老人は番頭の後からせかせかと奥へいそぐ。

平馬たちはお高祖頭巾のままの福姫を正面にして、奥の休憩の間で待っていた。

「これはこれは御老体、御苦労に存じます」

茂太郎が両手をついて迎えるのにならって、平馬も小堀も楓もそこへ両手をつかえる。

「楓、孫作――」

「はっ」
「おぬしたちはどういう了見なのじゃ、不埒者め」
　福姫をしかるわけにはいかないから、まず楓と小堀に雷がおちる。
「申し訳ございません」
　楓も孫作も冷や汗をかいているようだ。
「爺、もうそれだけにしておいておやりなさい」
　福姫が頭巾の中で微笑しながら、なだめるように口を入れる。
「大体、あなたさまがよろしくございません。ほかのこととは違います」
　塚越老人は正面を切って、福姫の前へ座った。
「わかっています。爺は昨夜また源太郎をいじめたのでしょう」
　やんわりと逆襲する福姫である。
「源太郎には切腹しろといいつけてあります。爺も無論ここで切腹するつもりでした。昨夜は一睡もしておりません」
「そんなことをしては体にさわります。切腹しないですんだのですから、ここからは駕籠でまいるがよい。少しは眠れるでしょう」
「困ったお方じゃ。せっかく爺があなたさまのお望みをかなえようと櫓下へまいって奔走していますのに、それが待ちきれないというのは、少しわがままがすぎます。爺に頭からしかられる源太郎の身にもなって、よく考えてごらんなされ」
「源太郎には後で福があやまります。いけない主人を持って、源太郎も気の毒です。もうあきらめてはいるでしょうけれど」
「さあ、早くお着替えをなさらなければいけません。程なく土井さまの御名代がごあいさつにみえるころです」
　ともかくも無事な福姫の顔を見ているのだから、どうやらこれで老用人の腹の虫もおさまったようだ。
「時に、茂太郎、亀之助さまはどうされたな。

姫君は亀之助さまのためにこうして苦労しておられるのだ。行列がここへ着くまで、おそばを離れるということはないはずだぞ」
　こんどはいよいよ茂太郎が冷や汗をかく番になってきた。
「爺、亀之助さまはそこにおられるではないか」
　福姫がわらいながら平馬のほうを見ていう。
「なに、亀之助さまが――」
　塚越老人はじろりと平馬のほうを見なおして、
「茂太郎、これなる仁が亀之助さまであられるのか」
　と、半信半疑のようである。
「はい、この度の道中はここにおられますのが若殿でございます」
「なにっ、この度の道中だと――」
　老人はもう一度平馬の顔を見て、
「そちは昨夜、姫君をつれ出しにまいった長谷部平馬ではないのか」
　と、直接ぶつかってくる。
「そのとおりです」
　平馬の目が微笑する。
「しからば、亀之助さまはどうなされたのじゃ。どこにおられるのじゃ」
「この度の道中は、平馬が亀之助として福姫さまのおゆるしを得ております」
「すると、道中は長谷部平馬が若殿のお身がわりをつとめるというのか」
「御推察におまかせいたします」
「黙らっしゃい。――茂太郎、これはどうしたことじゃ。姫君さまには亀之助どのが御自身でこの度はお家のために苦労されると聞いた故、わざわざ伊勢まいりをこしらえて、いくぶんなりとお力になろうと思い立たれたのだぞ。それが、今となってお身がわりでは、姫君さまの立場はどうなさるのじゃ。なぜ、それならそれと、昨日のうちに向島へ知らせてよこさぬのじゃ」
　助左衛門の顔にまたしてもむらむらっと怒り

が燃えてきたようだ。
「すると、御老人は、お身がわりならどうなってもよい、助けるには及ばぬというお考えですか」
すかさず平馬がそばから口を入れる。
「黙らっしゃい。もともとこの縁組みは小森家のためにという姫君のおぼしめしから承知されたのだぞ。その姫君を今になってだますのみならず、姫君にはあぶないまねをさせ、自分は身がわりを立てて安閑としているという法があるか。たとえ大名たりと、それで男の一分が立つと思っているのか。こんなことが世間に知れれば天下のものわらいになるばかりではなく、だまされた姫君も、だました亀之助どのも、一生世間に顔向けのできぬことになる。こんなばかげた話がどこにあるのじゃ」
塚越老人のひざの上の両のこぶしが怒りにわなわなとふるえている。

策多し

塚越老用人の激怒があまりにもすさまじいので、さすがの茂太郎も顔があげられないようだ。楓も小堀もどうなることかと不安そうに下を向いている。
福姫は福姫で、自分のほうにわがままのあることをよく承知しているから、当惑したように平馬の顔を見ている。
「御老体、その御立腹はごもっともですが、正直に申しあげますと、若殿亀之助は昨夜突然重態におちいりました」
「なにっ」
平馬は自分が老用人の矢面に立つほかはないと思ったので、冷静に切り出してみる。
「我々ははじめから福姫さまをだますつもりなど毛頭あったわけではございません。事ここにいたって、若殿を重態におちいらせた責任は無論そばについていた者がとらなければなりませ

んが、すでに御老中から内密の書状までいただいておりますので、いまさら国入り決行を中止するわけにはいきません。わしは姫君さまのお供をして昨夜両国橋までまいった時、その知らせをうけましたから、茂太郎には若殿重態はあくまで伏せて予定どおりの決行をうながし、ひそかに福姫さまの御意向をうかがった上、わざと浜町の中屋敷へは入らず、永代から船で当地へまいり、茂太郎と落ちあってかような善後策を講じたのです」
「すると、姫君は昨夜からその事実を承知されていたということになるのだな」
「そうです。姫君のおぼしめしは、我々の窮状に御同情くださいまして、御縁組みの儀は後でまた考えるとして、とにかく乗りかかった船ということもあるから、ここは小森家のために働いてつかわそうというお言葉でございました。我々としましては、そのお言葉をありがたくおうけしたのですが、いま御老体のおしかりをうけてみますと、なるほどこれは世間をも御老中さまをもだますという結果になりそうです。そこで、これは表向きどおり、福姫さまはただの伊勢まいりの御道中、我々とは別ということにしていただいても結構なのです。いずれなりと、改めて御老体の御意見どおりにお任せしたいと思います」
平馬は一歩さがってこう提案してみる。そっちはただの伊勢まいりということにすれば、なにもそうかんかんになって怒らなくてもすむことなのだ。
その実、そうはいかない事実を、平馬は内心ちゃんと用意しているのである。
「そうか、若殿は重態なのか」
「残念ながら、ちょっとしたすきに一服盛られたようです」
「それで、御容体はどうなのじゃ」
「今のところ、たぶんお命にはかかわるまいということですが、まだ正気がつかないそうでご

ざいます」
茂太郎が引きとって答える。
「土井さまのほうへは知らせてあるのか」
「いいえ、知らせてはございません。近習たちにもまだ内密にしてあります。悪人どもに漏れては不利だと存じました」
「しかし、悪人どもは自分でやったことだ、もう知っているだろう」
「いや、若殿はちゃんとここにいるのですから、悪人どもにはわからなくなると思います」
「そうか――。わしにさえわからなかったのだから、あるいはそうかも知れんな」
塚越老人は改めて平馬の顔を見なおしている。激怒はもうすっかりしずまっているようだ。
「爺、福が平馬たちを助けてやっても、身の恥にはなりません。そうは思いませんか」
福姫がすかさずうまい助け船を出す。
「それはそうですが、平馬は亀之助どのではないのですから、後に問題が残りますぞ」
「どんな問題が残るのでしょう」
「人間というものは疑い深いものです。たとえ姫君が善意で平馬を助けても、事がおさまった後では、亀之助どのの心の中に暗い疑いが残らないとはいえません」
「福はぜひ小森家へお輿入れがしたいから平馬たちを助けるのではありません。平馬たちの志が侍として立派だと思いますから、助けてやりたいのです。それではいけないのですか」
「さあ、それがそのとおりに世間にとおればよいのですが、一つ間違うと迷惑が土井さまにまで及びますからな」
「爺はそっちの心配ばかりしていますけれど、たとえ福がここでただの伊勢まいりということにしても、悪人どものほうではそうはとりません。きっと福の命をねらってきます。なまじ世間体などを気にしてひとりで窮地におちいるより、福はあくまでも悪人どもを敵にして平馬たちといっしょに闘ったほうが、かえって生きる

道がひらけると思います。もともと、爺もこんどの縁組みは小森家を助けてやるつもりで承知したのではないのですか」
平馬の考えていた切り札も、実はそこにあった。もうここまできてしまっては、伊勢まいりを中止しないかぎり、共同戦線を張る以外に、福姫がわとしても安全な道はないのである。
しかし、塚越老人としては、ここまで福姫を危険な状態に引っぱりこまれてしまったことは、まんまと小森家に一杯食わされたという感が深いにちがいない。
――御老体なんと出るかな。
平馬は黙って老用人の顔を見ている。
「孫作、源太郎をここへくるように呼んできなさい」
はたして、老用人は苦い顔をして小堀にいいつける。
「はっ」
小堀はすぐに立って、表座敷のほうへ出ていった。表座敷では、まだ源太郎が偽姫を擁して、供侍たちといっしょに休憩しているはずである。
「平馬、源太郎の話では、そちはこんど姫君の希望で、こっちの供に加わることになっているそうだな」
「はあ」
「それがいつの間に小森家のほうへ寝がえりを打ったのじゃ」
「いや、寝がえりは打ちません。拙者はあくまでも福姫さまのお供をする覚悟でおります」
平馬はけろりとして答える。
「しかとさようか」
「しかとさようでございます」
「しからば、なぜ茂太郎とぐるになって、姫君にあぶないことばかりおすすめするのか」
「お言葉ですが、拙者は茂太郎とぐるというわけではありません。ただ、福姫さまのお考えが、姫君さまとしては多少お勇ましすぎるところも

ございますが、あまりにもお立派だと思いますので、お申しつけどおりに忠義をつくしております」
「うまいことをいうやつじゃ。わしは過日、長命寺の境内でそちを見かけた時から、これは油断のならぬ男だとにらんでいたのじゃ。やはり、わしの目に狂いはなかった」
老用人はいかにもいまいましげにいう。
「恐れ入ります」
平馬はおだやかに微笑している。
そこへ、少し手間どって、大草源太郎が小堀といっしょに入ってきた。
源太郎はお高祖頭巾の福姫のほうへ丁重に会釈をしてから、
「御用人さま、手前になにか御用だそうでございますな」
と、老用人のほうへ向きなおる。
「源太郎、亀之助さまは江戸へ残るんだそうだ。平馬や茂太郎は気の毒がって、こっちはただの伊勢まいりにしてもよいといっている。どうするな」
「いま孫作から聞きましたが、亀之助さまは御重態だそうでございますな」
「いや、真偽のほどはわからぬ。小森家には策士が多いでな」
皮肉たっぷりな塚越老人の口ぶりである。
「しかし、ここまできては、初志のとおりに行列をすすめるほかはございますまい」
源太郎は落ち着いてわらっている。
「姫君を悪人どもにねらわれてもよいのか」
「その儀は、昨夜すでに本所河岸で、姫君は敵の浪人どもに取りかこまれ、見事に切りぬけておられますそうですから、まず心配はないかと思います」
「なにっ、昨夜もうねらわれていると申すのか」
老用人はさっと顔色をかえる。
「平馬どの、行列は今夜戸塚泊まりの予定になっています、なにか手段があればうかがっておきましょう」

さすがに源太郎はもうすっかり度胸をきめているようだ。

鈴ガ森

そのころ――。
涙橋をわたって鈴ガ森へかかろうとする海っぷちに、一本松と呼ばれる大きな松の木がある。その下のよしず張りの掛け茶屋へ休みながら、お粂は福姫の行列が通るのを待っていた。平馬はその行列についてくるはずだからである。
相かわらずお粂についている右助は、今朝はちゃんと旅姿になって、道中差しを一本さしていた。
お粂は昨夜寝不足のせいか、今朝はあんまりきげんがよくない。
「右助、おまえゆうべ高輪で、変な人に会って立ち話をしていたようだね。あれだれなの」
お粂は渋茶をのみながら、ふっと思い出したように聞いた。
「おれ、そんなこと知らねえです」
右助も今朝は少しむっつりしているようだ。
「あの風よけ頭巾をかぶった侍、おまえ知らないの」
「知らねえです」
「かくさなくたっていいじゃないか。あれはおまえの御主人だったんだろう」
「なんだ、行者さん知っていたのか」
「おまえ、御主人とどんな話をしたの」
「話なんかしねえです。ただ行ってまいりますってあいさつをしただけです」
「御主人、なんといっていた」
「御苦労だなといったです」
「ふうむ」
たしかにそのくらいのあいさつをかわしたほどの立ち話だった。
お粂はわざと知らんふりをしてすれちがいながら、さようなら、もうお目にかかりませんと、

心の中で別れを告げていた。気のせいか、勘解由(かげゆ)の目がじっとこっちを見ながら通りすぎたのをちゃんと知っている。

——いまさら親子だなんてばからしい。

お粂はそう思いながら、しかし涙が目にあふれそうになってきた。それを、だれが泣くもんかと、意地になってとうとうまぶたの外へは出さなかった。

大木戸の外へ出ると、そこのよしず張りの一軒に人の気配を感じ、ああここで平馬たちを待ち伏せしているんだなと思った。その平馬たちは永代から船に乗ったのを知っているから、ざまあ見ろと、ほっとした気持ちだった。

親にそむいても、平馬が恋しい。その平馬とは一生そわれない仲だのにと思うと、なんという因果をしょって生まれてきたんだろうと、またしても胸がいっぱいになってきた。

そんなことを考えていると、また涙が出そうになるので、

「右助、ゆうべは鬼のやつとうとう出なかったようだね」

と、気をかえるように右助のほうへ話しかける。

「おれ、知らねえです」

「おまえ、なにをそんなに怒っているの。おかしな男だねえ」

「ちっともおかしいことはねえです。行者さんはゆうべ、わしの知らない間にどこかへ消えちまったもんな。その間のことは、鬼が出たか蛇(じゃ)が出たか、おれにはわからねえです」

「なあんだ、そんなことを怒っているのか。あたしには仕事があるんだもの、しようがないじゃないか」

お粂は鶴屋の近くの旅籠(はたご)へつくとすぐ、まだ膳(ぜん)の出ないうちに、黙ってそこを忍び出し、ふたたび旅籠へ帰ってきたのは九ツ（十二時）すぎだった。

右助はもう寝床へ入って眠ったふりをしていたが、床の間にちゃんと握り飯の用意をして上から紙がかぶせてあった。お粂はそれをたべて、朝までひと眠りしたのである。

その黙って旅籠をぬけ出したのが、右助は気に入らないのだろう。

「行者さんは少し水くさいです。おれ、待っていろといわれれば、はいといって待ってるです。行者さんのじゃまはしねえつもりです」

「じゃ。こんどからことわって出ることにするわ」

我にもなくそんな言葉が出たのは、昨夜の握り飯への礼心があるからだった。

「お早う、お二人さん」

ぬっと入ってきたのは、これも旅支度の鬼吉だった。ちょっと見ると、どこの大店(おおだな)の番頭かとも思われるきりっとしたかっこうである。

「お粂、いいことを教えてやる」

鬼吉は無遠慮にお粂とならんで掛けながら、いきなりそんなことをいう。

お粂はわざとそっぽを向いた。

「かわいそうに、好きな男をどこかの姫御前(ひめごぜ)に寝とられて、少し頭へきたかな」

お粂は返事もしない。

「まあいいや。その姫御前のことなんだが、ゆうべ手塚はわざわざ高輪の大木戸まで出張って、茂太郎組と平馬組のくるのを待ち伏せしていたんだが、とうとう一匹も網に引っかからねえ。怒ったのなんのって、もうかまわねえから、じゃじゃ姫、平馬、茂太郎、この三人は見かけ次第殺せ、なるべく箱根を越させるなといって、渋川に短筒までわたしていやあがった。早く平馬に教えてやんな。もうすぐじゃじゃ姫の行列がくる時分だ。じゃ、また会おうぜ」

一気に耳もとへしゃべっておいて、ぷいと風のように街道へ飛び出していく。

「あれまあ、あの人はお客さんがたのおつれじゃなかったんかね」

盆の上へ茶を入れて運んできた茶店の老婆

が、あきれて見送りながらお粂に聞いた。
「おばあさん、お茶代はあたしが払ってあげるわ。あいつは少し気が変なやつかもしれないわ」
お粂がまじめな顔をしていうと、
「なあにね、気ちがいじゃしようがねえです。ねえさんがたに迷惑をかけちゃすまないもん。あんたがたは御夫婦でお伊勢まいりでも行きなさるんかね」
と、ちょいとうらやましそうな顔をする。
「よくわかるわねえ、おばあさん」
「わかりますともさ。御亭主さんはまじめで働き者のようだから、ねえさんはしあわせだねえ」
老婆はわらいながら引っこんでいく。
「すいません、行者さん」
右助は小声であやまって、赤い顔をしていた。
――三人とも殺せ。飛び道具。
お粂はそれどころではなく、頭の中へ火がついたようにがあんと耳鳴りがしてくる。

裏切り者

「下にい、下に」
まもなく、涙橋のほうから下座触れの声がきこえてきた。
「右助、おまえはここにかくれておいで」
お粂は右助にいっておいて、わざと茶店を出ると、すぐそばの一本松の根方へ行って土下座をした。
時刻はすでに五ツ半（九時）をまわったころだから、行列は予定より半刻（一時間）もおくれている。それだけに、品川の本陣では福姫がわと小森家がわとの間に、なにか一悶着あったことが想像される。
――平馬さん、いるかしら。
どうせ悶着の矢面に立つのは平馬にちがいないのだから、お粂はちょっと心配になる。
行列は葵の紋のついた挟箱一対を先頭にして、先供が十人ほど、次が姫君の駕籠で、駕籠

の向こうがわに漆塗りの陣笠をかぶり野袴をはいた立派な侍が一人ついている。駕籠のすぐあとに腰元が四人、その次に陣笠、野袴の年寄りの立派な侍が一人、これに後供の侍が十人ばかりつづき、長持ち一棹、中間小者が七、八人、大名の行列にくらべれば極く簡単なものである。
その後から、これも立派な陣笠、野袴の侍が二人並んでくるのもやっぱり姫君の家来たちかしらと思っていたら、一人は平馬で、一人は茂太郎だった。
すると、これからは小森家の家来たちということになる。近習組が十人二列に並んで、若党米次郎と中間又三がつづき、その後に松岡平助の剣客組が五人、これは五人とも伊賀袴をつけている。
こうして行列はまもなく通りすぎてしまった。
――平馬さんはあたしがここにいるの気がついたかしら。
こっちは前へきてから上目づかいにそれと気がつき、はっとしているうちに、平馬はわき目もふらず通りすぎていた。気がつかなかったんじゃないかと思うと、なんだか心細い。
「右助、出かけるよ」
お粂は茶店の表から右助に声をかけておいて、さっさと歩き出した。歩きながら手ぬぐいをあねさまかむりにする。
平馬に話があるのだから、右助といっしょに歩くのはまずいと思っていると、右助もそれはちゃんと知っているらしく、五、六間後から黙ってついてくる。
こっちだけそんな段取りをつけていても、平馬がどこかで待っていてくれなければなんにもならないのだ。
――あたしに気がつかないようじゃ、この道中は平馬さんに運がないかも知れない。
考えたくないことをそうはっきり考えてしまって、お粂はどきりとした。が、この予感は自

分でももうどうすることもできない。行者としての予感は神ごとなのだ。

――しようがありゃしない。その時はあたしも平馬さんといっしょに死ぬだけのことだわ。

お条は足もとばかり見て歩いていた。

鈴ガ森は十町あまりつづく。鈴ガ森がつきても平馬が待っていてくれなければ、もうあきらめるほかはないのである。

すぐ左がわの磯(いそ)つづきへ寄せてはかえす波の音が、あきらめろう、あきらめろうと耳へ聞こえてくるような気がする。

――あたしはあの人が声をかけてくれるまでもう顔はあげない。

お条はだんだん意地になってきて、だれに突きあたってもかまうもんかと思った。

ふっと、だれか右がわへ肩をならべてきた者がある。

「どうした、お条」

見ると、平馬があの行列の中にいた時のすました顔ではなく、いつもの顔でわらっている。そういえば、あの仰々しい陣笠をかぶっていない顔なのだ。

「ああよかった」

お条は涙が出そうになるほどうれしかった。

「なにを考えこんで歩いていたんだ」

「そうじゃないのよ。もし兄さんがあたしを見つけていなければ運がないんだと考えてしまったら、悲しくなってしまって」

「なあに、わしはすぐ見つけていた。あそこに妙な田舎娘がいるぞと思って」

「ちょいといきなかっこうでしょ」

もう冗談口が出てくるから正直なものである。やがて鈴ガ森を出外れるあたりだった。

「しかし、うまいかっこうを考えるものだなあ。昨夜はどうもありがとう」

「それより、兄さん、今朝、品川の本陣でかなりもめたんじゃない。お立ちがちょいとおくれているようね」

「うむ、だいぶもめた。浪人平馬が昨夜お姫さまを引っぱり出している上に、肝心の若殿がいないんだから、老用人さまが怒るのも無理はないんだ」

そういう当人は一向に気にもしていないような顔つきなのだから憎らしい。

「だってしようがないでしょ、お姫さまは浪人平馬のほうがお好きのようなんだもの」

「昨夜はお姫さま御名代という名目だったんだ」

「だめよ、そんなこと。鬼吉だってちゃんと知っているし、渋川組のほうへだってゆうべのうちにもう知らせが行っているわ」

「知らせっていうと――」

「近習組の中に裏切り者がいるんです。わかってるんですか」

「やっぱりそうか――。たぶんそうだろうとは思っていたんだが、お条はその裏切り者を見たのか」

「見ました。加藤市兵衛って男です。玄関へ出てきて、黙って立って表を見ているんです。ちょっと見ると用心のために見まわりにきた忠義者に見えるでしょう。ところが、その玄関わきの暗いところに手塚の中間左助がかくれているんです」

「なるほどねえ」

「七ツ立ちは中止。明日は本陣立ち。平馬ときた御名代は本物。若殿なし。それだけいうと、さっさと奥へ入って行ったわ。あたしの考えじゃ、相棒がもう一人ぐらいいると思います。一人じゃそううまくいかないもの」

「そうかも知れないな」

「左助の行った先は土蔵相模(どぞうさがみ)という遊女屋、敵のおよその人数ぐらいはわかってるんですか、兄さん」

「二十人ぐらいか」

「渋川組が十五人、手塚組が十五人、手塚組の大将は関谷十三郎という男なんですって」

「そうか、関谷の名は茂太郎も知っていたようだ」
「これは鬼吉のいうことだから当てになるかどうかわかりませんけど、手塚はゆうべ高輪の大木戸まで出張っていて、それが失敗だとわかると、姫君、平馬、茂太郎の三人は命をねらえ、それもなるべく箱根を越えないうちがいいといいつけ、短筒を渋川にわたしたっていってました」
「やっぱりそうか——。短筒はこっちが使ったからな」
平馬は苦わらいをしながら、
「三人のうちだれが一人かけてもこっちはまずいことになる」
と、急に真顔になってくる。
「あたしのいうことはこれでおしまいだけれど、今夜の泊まりが戸塚あたりだとすると、この時刻からいっても行列が程ガ谷をすぎるころには夜になるんじゃないかしら」
お粂は念のためにそうつけ加えることを忘れなかった。

梅の茶屋

「お粂、おまえにはあいかわらず右助がついているようだな」
平馬がわらいながら話しかけてきた。
「しようがないわ。忠義のためだからってどうしても離れないんだもの。でも、あたしのいいつけはきっと守るって約束だから、大丈夫だと思うの」
「手塚にははっきり敵だとことわってきたのか」
「じかには会えなかったけど、船七の親方にそうことづけをたのんできました。それから、右助にもちゃんとそのことはいってあるんです」
「そうか——」
平馬はなにか考えているようである。
「あたし、ゆうべ大木戸で手塚とすれちがったんです。風よけ頭巾はかぶっていたけれど、たしかに手塚だったのよ。右助はちょっと立ち話をしていたようだけど、あたしは黙ってさっさとすれちがってしまいました。向こうもなんにもいわなかったわ」
なんでも正直にいってしまわなくては気のすまないお粂なのである。
「まさか手塚はおまえの命までねらいはしないだろうが、渋川組はそうはいかないかもしれない。おまえがじゃまだとわかれば切る気になる」
「負けやしないから大丈夫よ」
「お粂はどうしても国もとまでいっしょに行く気なのか」
「そうよ。じゃまになるの、兄さん」
「そうじゃない。わしはおまえのことも気をつけていてやりたいが、どうしても行列のほうに責任があるから、場合によっては見殺しにしなければならなくなる。それが心配なんだ」
なまじやさしい言葉をかけられると、やっぱり胸へこたえる。
「兄さん、それはあべこべよ。あたしはいつでも兄さんの身がわりになってあげるつもりでいるんだから、つまらない心配はしないでください。右助にだってそれははっきりいってあるんです」
お粂はわざと明るくやりかえす。
「あの男の目はうそのいえない目だ。手塚はなんの目的で右助をおまえにつけておくんだろうな」
平馬はふしぎそうな顔をする。
「あたしにはわかってます。手塚は、勝っても負けても、勝負がついたら即座に見てきたとおりを江戸へ知らせろといいつけてあるんじゃないかと思うわ」
お粂は冷やりとしながらも、とっさにうまいうそが口から出た。
「なるほど、手塚としてはその必要はあるわけだな」
「だから、おかしいのよ。右助は、あたしを鬼

吉からまもってやるって、一人で力んでいるわ」
「そうか――。ここから帰れといったところで、おまえは強情だから、すなおにうむとはいわないだろう。しかし、渋川組はそのうちに必ずおまえを敵にまわすようになる。油断をしてはいかん」
「気をつけるわ。でも、大丈夫よ。あたしはお姫さまなんかとは育ちがちがうんだもの」
「そういえば、お粂はわしでさえできない芸を持っちゃいるからな」
「それ冷やかしてるの、兄さん」
「そうじゃない、感心しているんだ」
「どうだかなあ。そんなことといえば、あのお姫さまだってすばらしい隠し芸を持ってるじゃありませんか。あたし、ゆうべは本当にびっくりしちまったわ」
「実は、あれにはわしも少し驚いたんだが、しかし、あれはかえってやぶへびの形になった。飛び道具を敵に教えたようなもんだからな」
「本当ねえ。それで、今夜のことは、兄さん、もうちゃんと考えているんでしょうね」
お粂は急にそれが心配になってくる。
「うむ、なんとか考えてみよう」
道はすでに大森の宿へかかろうとしている。この辺は江戸へ青梅を出す産地だから、方々に梅林があって、いまは梅の花盛りである。
「お粂、おまえ一足先へ行け」
「どうして、兄さん」
「向こうの掛け茶屋に敵の物見がいる」
「本当――」
「いいから、知らん顔をして先へ行け」
「じゃ、行ってみるわ」
お粂の足がたちまち早くなる。
と見ているうちに、こっちの左がわを、
「ごめんなさいまし」
と、頭をさげながら右助が足早に通りこして、お粂に追いついていった。
――ことによると、夜までは大丈夫と見たの

は、こっちの油断かも知れないな。
小半町ほど先の右がわに、白梅の古木が見事にいっぱい花をつけている。その下によしず張りの掛け茶屋が一軒あって、梅見の客が出たり入ったりしている。その中の一人が、ちらっとこっちをながめて、すっと引っこんでいったかっこうが、遠見ではあるが、ふっと平馬の目についたのだ。
敵は加藤の内通で今朝の襲撃を中止しているのだから、どこか地をかえて待ち伏せしているはずである。すると、物見を出してこっちの行列の様子をさぐり、それによって作戦を立てようとするのは当然のことだ。
その物見の第一陣があの掛け茶屋の中にあると平馬は見たのである。
十五、六間先を、お粂が右助と肩をならべて、いまは普通の足どりで歩いていく。
平馬はむしろ右助のうしろ姿をじっと見ながら歩いていた。右助が掛け茶屋の前を通りすぎる時どんな様子をするか、それでなにかがわかってくるという計算である。
が、茶屋に近いほうを歩いているお粂は、おそらくちょっと横目をつかったのだろう、顔はそっちを向かなかったようだが、体つきがあきらかに緊張しながら通りすぎた。
右助はなにも知らないらしく通りすぎて、なにかお粂にいわれたらしく、五、六間先へ行ってからびっくりしたように立ちどまろうとして、お粂にひじで小突かれている。
――よし、いることはたしかにいる。
そう思いながら、平馬はゆっくりと茶屋の前へかかっていった。
とたんに、茶屋の中からすっと往来へ出てきたのは、意外にも旅支度の大場鬼七だった。今日はいかにも剣客者らしく伊賀袴（いがばかま）をはいている。
「平馬、とうとう三度目がきたな」
鬼七はいかにもうまくいったといいたげに、得意そうな薄らわらいをうかべている。

「おかしいなあ、貴公一人か」
　平馬は素早く茶屋の中を見まわしたが、連れはないようである。さっき見かけたのは手塚の中間左助らしいとにらんでいたが、これはもうどこかへかくれてしまったようだ。
「おれ一人では不服か、平馬」
「いや、そんなことはない。できれば貴公にも会わないほうがよかった」
「まあそんなところだろうな。おぬしは色気がありすぎるからいけねえ。おとなしく行列について歩いていればいいのに、一人になって行者をくどこうとするから、こんなことになるんだ」
「なんだ、貴公はお条を知っているのか」
「知っているとも。あんまり罪なまねはよせ。片手にじゃ姫、片手に行者、少し欲が深すぎるぞ」
　むだ口をたたきながら、大場はひそかに抜き打ちの機会をねらっているようだ。

作戦

「抜けっ、平馬」
　到底抜き打ちのすきはないと見ると、大場鬼七は急に凶暴な面がまえに変わって、一足さがりながら刀の鯉口を切った。
「ここはまずいだろう」
「なにっ」
「掛け茶屋の者たちが迷惑をする」
「そんな遠慮はいらん。――行くぞ」
　大場がせせらわらって抜刀しようとした時、
「大場先生、お待ちなさい」
と、掛け茶屋の横から声をかけてつかつかと鬼七の背後へ出てきたのは、意外にも松岡平助だった。
「だれだ、貴公は――」
　大場はさすがにさっと道端のほうへ体を移して、松岡のほうへ鋭い目を向ける。
「拙者は本所亀沢町の松岡平助、平馬どのは恩

師の直系ですから、わしがかわってお相手いたす」
「なんだ、隠居の後をついだ松岡平助というのは貴公か」
「そうです」
「つまらんところへ出てきたもんだなあ」
「恐縮です」
「おれはなあ、松岡、手塚組の用心棒なんだから、平馬を討てば大将首になるが、用心棒が用心棒を切ったところで大した手柄にはならねえんだ。道中双六はまだ長い。今日のところは見のがしておくから、平馬をつれてさっさと通りすぎてくれ」
　二人が相手ではちょっと荷が重すぎると見たのだろう、大場はあきらめよく手をひこうとする。
「それはかたじけない。では、お言葉に甘えることにして、――若先生、まいりましょう」
　事を好まない松岡は、鬼七に一礼して平馬をうながす。
「大場うじ、では、いずれまた――」
　平馬は行列のほうが気になるので、そのまま鬼七の前を通りすぎる。
　少し離れた道端に、お条が心配そうにこっちを見て立っていた。
「お条、気をつけるんだぞ」
　前を通りすぎながら声をかけてやると、お条は黙ってうなずいていた。
「若先生、行者のお条ですな」
　松岡が肩をならべてきながらいう。
「うむ」
「あれはどうして旅に出たんでしょうな」
「おじいちゃんに助けられたことがあるから、こんどはわしの身がわりになってやるというんだ。強情っぱりだから、とめてもうむとはいわぬ」
「お条のことは老先生から聞いたことがあります。若先生はお条に会うために行列から離れた

んですか」
「松岡はどうしてあんなところにいたんだね」
「わしはうっかりしていましたが、倉之助が大場鬼七を知っていて、あの掛け茶屋を通りすぎてから教えてくれました。間違いがあってはいけないと思って、あそこまで引きかえして若先生のくるのを待っていました」
「そうか。ありがとう。大場とはもう二度やっているが、あいつは強い」
「若先生が負けるとは思いませんが、けがをしてはつまりません。なるべく一人で行列を離れないほうがいいと思います」
「そのかわり、お条がいいことをさぐり出しておいてくれた。手塚組は、家来組十五人、浪人組が十五人、渋川は短筒を持っていて、福姫、平馬、茂太郎、この三人のうちの一人を箱根の手前で片づけろという命令が出ているんだそうだ。その上、こっちの近習組の中に裏切り者がいる。一人は加藤市兵衛だが、もう一人ぐらい仲間がいるんじゃないかといっていた」
「なるほど――」
「短筒は昨夜じゃ姫さまがそんなものの あるのを敵に教えたようなものだ。これだけはどうも始末が悪い」
「それより、わしの心配なのは福姫さまです。昨夜の姫君を見ていますと、平馬さんだからいっしょに出てきた、そんな風にしか見えません。その点は大丈夫なんでしょうな、若先生」
　さすがに松岡はよく見ている。もっとも、福姫は怖いもの知らずで、あまり自分の感情をおさえようとしないから、少し気をつけている者の目から見れば、だれしもそこへ疑問が行くのだろう。
「松岡、その疑問はもうしばらくそのままにしておいてくれ。福姫さまを引っぱり出した責任の一端は、たしかにわしにある。だから、わしはどうしても姫君の命だけはまもりとおさなくてはならないんだ」

「それは、平馬さん、手段を選ばずにというただし書きがつくんですか」
「まあ、そういうことになるだろう」
「すると、これはいよいよあぶない道中になりますな」
「しょうがない、乗りかかった船だ」
　松岡はそれっきり口をつぐんで、意見がましいことはなにもいわなかった。いまさら意見をしてみたところでどうにもならないことだと覚悟したからだろう。
　品川から川崎へ二里半、川崎で早目に中食（ちゅうじき）をとって、川崎から戸塚までは六里あまりあるから、予定どおりに行っても行列が戸塚の本陣へつくのは暮れ六ツになる。それが品川で半刻（はんとき）の上も手間取っているのだから、今日は程ガ谷を通りぬけてまもなく日が暮れてくることになりそうだ。
　平馬は、川崎で中食の時、大草源太郎を別室へ招き、茂太郎と三人で善後策を協議することにした。
「短筒はそう距離がきかないから、両方の駕籠（かご）わきへ人がつけばまず心配ないとして、問題は日が暮れてから戸塚へつくまでの警固です。どうしたものでしょうな」
　平馬はお条から耳にした情報を一通り説明して、源太郎に意見を求めた。
「まず平馬どのの意見をうかがいましょう」
　福姫がわはそっちのために動いているのだから、たいていのことはそっちの意見どおりにしたがうというのが、源太郎のはじめからの考えのようだ。
「それでは、わしの策を話してみましょう。これから日が暮れるまでの行列は今までどおりにして、一方の駕籠わきへはわしがつきます。日の暮れるのは程ガ谷の宿を出てからと見て、ここでちょうちんの用意のために行列がしばらくとまります。この時、福姫さまに駕籠からおりていただき、腰元たちのうしろへさがってもらう。

同時に、剣客組を姫君のまわりにあつめ、後はそのままで出発する。これでたいてい大丈夫だと思うのですが、どうでしょう」

「すると、姫君のまわりには、平馬どの、塚越老人、茂太郎どの、それに拙者と、大体おもな者はみんな集まるようになりますな」

「そうです。ただ、敵の襲撃は一度でなく、二回か三回に分けてくると思います。三回とすれば、一組み十人ずつ、必ず駕籠をねらって突っこんできます。その場合、こっちはあくまでも行列をとめずに走りながら突破する。おそらく、敵の第一陣は権太坂にはじまって、第三陣は信濃坂あたりでしょうから、うっかり行列がとまると前後から挟撃されるおそれがあります。犠牲者は後で収拾するとして、あくまでも走りぬけることだと思います」

「それでよろしいでしょう。それにきめましょう」

源太郎は異存なく承知してくれたので、この協議はすぐに終わって、おのおの自分の持ち場へもどった。

第一陣

「平馬どの、裏切り者は加藤市兵衛と多田信助のようです」

行列の人数がそれぞれ出発の支度にかかった時、茂太郎がそっと平馬の耳にささやいた。

三人で協議中の小座敷の前を、加藤と多田の二人が別々に二度ほどゆっくり歩いて通ったのを、庭にかくれていた米次郎が見ていたというのである。

「そうか。その二人は程ガ谷で先供のほうへ加わる五人の中へ入れることにしよう」

「承知しました」

小森家の近習組は程ガ谷をすぎるあたりで五人ずつ二組みに分かれ、福姫の先供、後供の中へわりこむことになっている。敵襲はなるべくこっちが引きうけて、福姫がわの家来たちの犠

牲をすくなくしようという腹なのだ。

行列はまもなく今朝とおなじ序列を取って、川崎の宿を出発した。ただ、今朝と違うのは、平馬が福姫の駕籠の左がわへついたことである。

駕籠のすぐ後は腰元たち四人で、次に塚越老人がつづく。老人は、品川で一応話がつくと、一切を大草源太郎にまかせて、まかせた以上不満めいたことは一言も口に出さなかったが、きげんは決してよくないようだ。

その老人の目をこんどは背中に直接うけて歩くのだから、平馬もあまりいい気持ちではない。だいいち、午後からは平馬が左の駕籠わきへつくことは源太郎から耳にしているだろうが、まさか短筒の備えだとは告げてないだろうから、ひょっとするとどんな誤解をしているかも知れないのだ。

そこへいくと、駕籠の右わきについている大草源太郎は、亀之助が重態におちいったのは昨日の夕方ではなく、おそらく一昨日の夕方で、見合いにきた亀之助はすでに身がわりの平馬だったのではないかと、今朝も品川の一幕で見ぬいてしまっているようだ。だから、福姫がどんな目をして平馬を見ても、見ないふりをしている。

――大体、お福さんが少し大胆すぎるから、老人が余計気をもむようになるんだ。

平馬がそんなことを考えて歩いていると、駕籠の戸がすっと半分あいたようである。

思わずそっちを見ると、福姫がこっちを見あげながら、なにか話しかけたそうにわらっている。

平馬は素早く目ばたきをしてみせて、しゃっきりと前を向いてしまう。

「下にい、下に――」

行列は下座触れをかけながら、青麦畑の街道をのどかに進んでいく。

しばらくたつと、また駕籠の戸があく。こんどは知らん顔をして歩いていると、

「平馬、――平馬」

小さな声で呼びはじめる。

しようがないからそっちを向くと、にっとわらって戸をしめる。

――なるほど、根がじゃじゃ姫なんだから、退屈なんだろうなあ。

平馬は苦笑しながら、その実、同情したくもなってくる。いってみれば、こんな危ない道中へ出てきたのも恋というくせ者のいたずらで、その責任はこっちにあるのだ。そうすげなくもできないと考えるのである。

「姫君さま、この辺ならお気晴らしにしばらく駕籠の戸をおあけになってもよろしゅうございます」

かまわず声をかけてやると、すぐにこっちの戸だけあいて、

「平馬、少し歩いてはいけませんか」

と、そんなことをこっちへ聞くのだから正直すぎる。

「それは源太郎どののおかかりですが、まあ、あまり御無理は申さぬほうがよろしいでしょう」

向こうがわの源太郎はまっすぐ正面を見ながら苦わらいをしていた。

川崎から神奈川へ二里半、神奈川から程ガ谷へ一里九町。案の定、新町へかかるころにはすっかりたそがれてきた。

ここで茂太郎は約束どおり、加藤市兵衛、多田信助の二人を含む近習組五人を先供のほうへまわしてよこす。先供の先頭は小堀孫作がつとめているはずだ。

やがて、権太坂へかかろうとする手前で、源太郎はほんのしばらく行列をとめ、それぞれちょうちんに灯を入れさせる。

「姫君、ここからしばらく歩きましょう。掻取(かいど)りをぬいで、お高祖頭巾(こそずきん)をかぶってください」

平馬が駕籠の戸をあけて素早くいう。

「平馬といっしょですか」

「そうです。例の護身用はお持ちでしょうね」

「持っています。敵が出るのですね」

「出るかもしれません」

福姫の顔も動作も急にいきいきとしてくるのだから、まったくたのもしいじゃじゃ姫である。

「陸尺(ろくしゃく)、なるべく姫君が乗っているように歩いてくれ」

「へえ」

平馬は姫君の手を取って、これもすでにお高祖頭巾をかぶっている腰元たちのいちばん後、塚越老人のそばへつれていく。

「お立ちい」

源太郎の声で、もう行列は先頭から何事もなかったように前進し出す。

源太郎はあいかわらず駕籠わきについて歩く。

「平馬、いよいよ出そうか」

老人が小声で聞いた。

「たぶん、出ると思います」

「そうか――。姫君のそばを離れてはならんぞ」

長谷部平左衛門の孫だから、腕前だけは信用していてくれるのだろう。

「大丈夫です。離れません」

じゃじゃ姫は右手を老人に取られ、左手は平馬にあずけている。離れませんと答えたとたんに、その平馬の手をぎゅっと握ってきた。

「下にい、下に」

先供はそのまま権太坂へかかり出したが、後供はいつの間にか序列がかなり変わっていた。姫君のすぐうしろへきているのは茂太郎と松岡平助で、その後に剣客組の四人、小森家の近習組五人がそれにつづき、そのうしろが福姫がわの後供十人という隊列である。

「平馬、腰元どもはこれでいいのか」

老人が心配して聞く。

「いや、くせ者が出ればすぐそっちへ剣客組が出て並びます」

「そうか――」

「くせ者が出ても、行列はそのまま走りながら

突破します」
「よし、わかった」
坂の中ほどへかかるころ、十六日の大きな月が東の空へのぼった。坂道は急にあかるくなって、ちょうちんの灯はもういらないくらいである。
坂の両がわがいつか雑木林になってきた。頂上までは後ほんの一町足らずだろう。出ればこの辺で第一陣が出るはずだ。駕籠の前とうしろを両断して、追い落としがきくからである。
だれにもその考えがあるのだろう。むだ口はきかずに、各自自分のほうのがわの林をじっと見すえながら歩いているようだ。
「出たぞ」
と、だれかの叫ぶのが聞こえたとたん、
「わあっ」
はたして、右がわの林の中から、鬨の声をあげて決起した黒覆面の一隊十人あまりが、駕籠を目がけて黒いつむじ風のように殺到してくる。
「それっ」
松岡を先頭にして、剣客組五人が駕籠の右がわへ突進する。
「行列は止まるな。走れ、走れ」
平馬は叱咤するように叫びながら、素早く左がわの林の中を目でさぐる。

残った二人

敵の襲撃はかなり猛烈で、坂の上のほうからわあっと姫君の駕籠を目がけて、次から次へと殺到してきた。
「えいっ」
「とうっ」
こっちはすでに駕籠わきから後方へ、松岡平助を先頭に剣客組が五人外がわに引きそって剣陣を敷き、敵の切りこみを正確にはねっかえし引っ払って、ぐんぐん坂をのぼっていく。たとえば、松岡に一刀をはねっかえされた敵は、たちまち次の笹川倉之助の前へきて切り払われるという形になるから、双方の白刃が数合火花を散らしたと見るうちに敵の絶叫はもううしろになって、ふたたび林の中を上へ追いぬいて、二度目の切りこみをかけてきたやつは半数の四、五人にしかすぎなかった。
まだうしろでものものしい剣戟の闘争がきこえるのは、近習組か姫君の供侍の中から、何人かが列を離れて敵の中へ逆襲をかけているのだろう。
それもしばらくでやんで、行列は坂をのぼりきる。
「けが人はないか」
塚越老人の後につづく茂太郎がうしろへ聞いた。
「ありません」
近習組の中から答えた者がいて、それがまたうしろへ、
「だれもけが人はないか」
と聞いている。
「ないようです」
「ありません」
そっちから元気な声がかえってきた。
松岡が刀を鞘におさめてうしろへ合図をすると、剣客組はそれにならって、黙ってもとの隊列の位置にかえる。
第一陣の敵の襲撃はこれで終わったのだ。
一時は猛烈な切りこみのように見えたが、その実、敵はこっちの隊列さえ乱せなかったのだから、思いきって突っこみきれなかったのだろう。だから、敵にも重傷者は一人もなかったようだ。
いちばんよかったのは、行列をとめなかったことだ。行列がとまって隊列が乱れると、闘いはこう簡単にはすまなかったろう。
「松岡、そちの組は勇ましかったな」
塚越老人はよっぽどうれしかったらしく、黙っていられないというように、うしろへもどっ

た松岡に声をかけていた。
「恐れ入ります」
さすがに松岡は息一つはずませてはいなかった。
「平馬、敵はまだ出ますか」
福姫が頭巾の顔をこっちへ寄せるようにして聞く。
「必ず出ます」
「出ても、また勝つから大丈夫ですね」
「無論、大丈夫です」
坂は下りにかかって、また両がわが雑木林になってきた。
「松岡、こんどは左らしいぞ」
月かげがもれている左側の林の中にちらっと光の動くのを見て、平馬がいった。
「それっ」
すかさず剣客組が平馬の左側を走りぬけて、外がわをかためる。
――まずいな。
と、平馬はとっさに思った。右がわの敵なら右手がきくからそのまま敵を払って駆けぬけられるが、左がわでは体をそっちへ向けなければ防ぎきれない。こんどは多少乱戦になるかもしれない。
しかも、第一陣の人数が坂の上から追い討ちをかけてくる心配さえある。
「楓どの、女中たちをつれて、駕籠の右がわへ出るんだ」
「はい」
女中たち四人はばらばらっと駕籠の右わきへ走って、源太郎のうしろへつづく。
「御老人、我々も前へ出ましょう」
まだそっちへ走りつかないうちに、わあっと敵の第二陣が喊声をあげてから、左がわの林の中から、こんどは横隊を作って、駕籠を中心に一気に殺到してきた。
案の定、こんどは切り払いながら走る体勢は取りかねるので、

「突っこめ」
松岡はとっさに意を決したらしく、そう叫ぶなり抜刀して、こっちから敵の中へ切りこんでいった。
「えいっ」
「とうっ」
「わあっ」
第二陣の敵も黒覆面の十人ほどで、この中へ剣客組五人が切りこんでいくうちに、道は下りだから駕籠はもうぐんぐんそこを走りぬけていく。
「近習組、駕籠の右へ出ろ」
平馬はうしろへ叫んだが、その近習組五人もいっしょに敵の中へ切りこんでしまったらしく、少し離れて後につづいているのは、福姫がわの供侍たちだ。
「茂太郎さん、姫君をたのむ」
「いけません、平馬。離れないで」
「離れはしません」
平馬は無理に福姫の手を振り切って自分の位置を茂太郎にわたし、一足後へさがってうしろからの追い討ちにそなえる。
その間に、うしろの供侍のうち五人ばかりが駕籠の右がわへ出てきた。
――ことによると、第三陣もこの辺へ出るんじゃないかな。
平馬はひやりとした。敵にすれば、第一陣、第二陣の攻撃で十分こっちの行列を攪乱して、こっちが乱れて走るところを第三陣でとどめを刺す、当然そういう戦法に出るはずなのだ。
ここへ出られるとちょいと事だぞと平馬は思った。
が、考えてみると、こっちはまだ姫君がわの供ぞなえが二十人そのまま残っている上に、近習組五人と源太郎、茂太郎、平馬の三人がいる。敵の第三陣は、お粂の報告に間違いがなければ、十人あまりの人数だ。福姫がわの家来たちさえ闘う気になってくれれば、そう心配することは

ない。
　問題は、敵の第一陣第二陣の人数がこっちの剣客組と近習組の人数を突破して追い討ちをかけてくることだが、その心配はおそらくないだろうと考えているうちに、行列は権太坂を下りきって、左右に青麦畑がひらけてきた。
　そこでほっと一息つくほどの距離を取って、わあっと第三陣の敵の伏兵が、こんどは左右から駕籠を目がけて決起してきたのである。
「前衛は右だ。後衛は左。駕籠はとまるな」
　平馬はとっさに叫んでおいて、塚越老人の右がわへ出ながら抜刀する。
　幸い、左は駕籠で防いでいるから、今のところ心配はない。
「えいっ」
「とうっ」
「わあっ」
　右からかかってきた人数はおよそ七、八人、平馬は殺到してくる三人ばかりの敵を右手で引っぱらいなぎ立て、横なぐりにたたきつけて走る。
　自分の前は源太郎で、源太郎の右手の白刃がきらっきらっとあざやかにきらめき、火花を散らすのをたしかに見たような気がする。
　その間に、わあっと前衛の七、八人が青麦畑の中を敵のほうへ襲いかかっていくのとすれちがって、駕籠はぐんぐん前へ前へと進んでいく。
　うしろを振りかえると、後ろはすぐ長持ちを取りかこんで走る小者たちだけで、その後方の麦畑の中では、敵味方が入り乱れて血闘の最中である。敵勢はおよそ十人あまり、味方はその倍に近いはずである。
　駕籠の前を走っているのは、挟箱（はさみばこ）と士分の者がほんの四、五人、
「小堀孫作はいるか」
　と、前の源太郎が聞いた。
「ここにいます」
「よし、そのままゆっくり走れ、後はだれとだ

れだ」
「戸村定之助」
「加藤市兵衛」
「次は多田信助」
「おなじく横川四郎太」
　いずれも殺気立った声だ。
　――二人とも残っている。
　平馬は思わず苦笑した。

本陣と本陣

「平馬さん、残っているな」
　茂太郎が肩をならべてきて、ささやくようにいう。
「うむ、こんどくせ者が出たら、注意してくれ」
「まだ出る見こみか」
「出れば二、三人、大将渋川の組だ」
　平馬はなんとなくそんな予感がする。
「平馬、行列はこれでよいか」
　前を福姫の手を取っていく塚越老人が、こっちを振りかえって聞く。
「このままでよろしいでしょう」
　平馬は福姫の左がわへ出ながら答えた。さっそく手をさぐってくるじゃじゃ姫である。
「まだ敵は残っているのか」
　老人はこっちの言葉をちゃんと小耳に入れていたらしい。
「出ても、人数は三人か四人、大丈夫です」
　心配させたってしようがないからそうは答えたが、こんど出るとすればそいつがいちばん強敵になるはずだ。渋川一心斎の持っている短筒をどう防ぐか、その上に大場鬼七がこんどこそと手ぐすねひいて待ちうけているに違いない。
「平馬、こんどは福も闘います」
「さあ、そこまでいかなくてもよろしいかと思います」
「平馬はまた福のそばを離れて闘うつもりなのですか」
「いや、こんどはおそばを離れません」

「きっとですよ。福がそばについていれば、平馬も安全なのです」

福姫は自信ありげにぎゅっと手を握りしめてくる。短筒でまもってやるというつもりなのだろう。

しかし、こんどは本陣と本陣との衝突なのだ。味方の戦闘力は、加藤と多田の二人をのぞいて六人しかいない。敵は粒よりの浪人剣客をそろえているだろうから、四人と見ても腕からいえばこっちよりずっと上まわっているだろう。その上、加藤と多田が寝がえりを打てば、人数からいっても六人と六人の勝負になるのだ。こっちのたよりは、早くおくれている味方が一人でも多く追いついてくれることだ。

街道は青麦畑がしばらくつづいて、やがて境木の立て場へ入る。ここまでが武州で、ここを出ると相州へ入るのだ。そして、まもなく信濃(しなの)坂(ざか)へかかるのである。

月が真昼のように明るい。

はたして、信濃坂へかかろうとする右手の森の中から、覆面のくせ者が二人、いきなり前供五人の中へ切りこんできた。

「出たあっ」

「えいっ」

「おうっ」

もう白刃が火花を散らして、敵味方が激しいうずのように前で入り乱れたので、こんどは駕籠もとまらざるをえない。

平馬は前へ声をかけておいて、福姫の手を振り切り、

「楓どの、駕籠の左がわへ移れ」

「平馬、約束がちがいます」

と、じゃじゃ姫が怒って叫んでいる間に、

「御老人とあれへ——」

と、塚越老人の体をそっちへ押しつけるようにして、その右へ出た。

「えいっ」

「おうっ」

駕籠を目がけて切って出た覆面のくせ者も二人、一人は源太郎が引きうけて、がっちりと青眼にうけとめたようだ。

「平馬、覚悟——」

一刀を振りかぶって平馬に向かってきたのは、やっぱり大場鬼七の声だった。

「来い、大場」

平馬はしっかりと青眼にかためる。

どこかに短筒を持った渋川がいるはずだと思ったが、もうそれをさがしている暇はない。

「えいっ」

「とうっ」

なんといっても鬼七は平馬にとって強敵である。こうして出会った以上、これを倒さないかぎり、今夜は福姫をまもりきれないのだ。そう思ったとたん、平馬はみなぎるような闘志を感じて、その闘志の中へすうっと全身がとけこんでいくような気がした。

——くそっ。

今夜こそというきおい立った気持ちが大場にはあるらしく、一気に切りこもうと早くも間合いを詰めてくる。必ず切れと手塚にいわれている福姫、茂太郎、平馬の三人のうちの一人で、これさえ切れば若殿組の国もと入りはほとんど不能になるのだから、大場はここで真っ先に手柄を立てたかったにちがいないのだ。

「えいっ」

「とうっ」

平馬は冷静に鬼七の仕掛けを待っている。あせることはないのだ。一刀一撃の距離まで敵を引きつけておいて、こっちのもろ手突きが早いか、大場が上段から振りおろしてくる太刀のほうが早いか、勝負は一瞬にしてきまるのだ。

今夜は大場も強引だった。じりじりと間合いをつめながら、一度も立ちどまろうとはせず、へびがかえるをねらって進むように、ついに一跳して生死を決するどたん場まできた。とたんに、

だあん。

平馬の背後で短筒が鋭く夜気をつんざいた。

「えいっ」

「おうっ」

同時に平馬と大場の体が双方から火の出るようにぶつかって、

「う、うっ」

大きくのけぞったのは大場鬼七のほうだった。

短筒を撃ったのは福姫だと、平馬は方向でわかったから別におどろきはしなかったが、大場はぎくりとしたらしい。そのほんのわずかな心の動揺が、振りおろす太刀の力をいくぶんそいでいたのだろう。平馬のもろ手突きのほうが一瞬早くのどへきまっていたのである。

ひらりともとの位置へ飛びさがった平馬は、素早く源太郎のほうを見た。

「平馬さん――」

源太郎が引きつったような顔を向けて、ちらっと苦わらいを見せる。

「おお、源太郎うじ」

源太郎の前の敵は福姫の短筒を胸へくらったらしく、森の中へ半身をかくして大の字なりに引っくり返っているのだ。

「茂太郎、無事ですか」

福姫がばたばたと前ぞなえのほうへ走り寄っていく。

「無事です。姫君」

意外なほうに茂太郎が、これも抜刀をさげて、こわばった顔にゆがんだような微笑をうかべている。

平塚の宿へ

その夜、福姫の駕籠がほんの数人の供ぞろえにまもられてまず戸塚の本陣へ着いたのは、すでに五ツ（八時）に近い時刻だった。

まもなく、剣客組の松岡が先頭に立って、後の者も続々と本陣へ入り、多少のけが人はあっ

たが、幸い死者は一人もないとわかった。

いや、二人だけ欠けた者がある。加藤市兵衛と多田信助で、茂太郎の話によると、あの最後の乱闘の時、先供の加藤は一人だけみんなのうしろにさがっていた。それが、急に姫君の立っているほうへ歩き出したのだという。

その時、駕籠のうしろへ難をさけて福姫をまもっていたのは、腰元たち四人と塚越老人だけで、見ようによっては警固が手薄だから駆けつけるのだと考えられないこともないが、それと見た茂太郎はちゅうちょなく福姫のうしろを駆けぬけ、出あい頭に加藤を切りすてたのだという。

「向こうで見ていた多田は、たしかにぎょっとしていたようです」

その多田は、案の定、その場から渋川組のほうへ脱走してしまったらしく、ついに本陣へは姿を見せなかった。

「姫君さま、さきほどは御助勢ありがたく存じます」

本陣へ着くとすぐ、大草源太郎は福姫の前へ出て頭をさげていた。

「いいえ、心配はないとは思いましたが、ぐずぐずしていて敵の人数が追いついてくるといけないと気がつきましたので、余計な手出しをしたのです」

福姫は遠慮そうにそんな言い訳をする。

「いや、なんというやつか存じませんが、あれはなかなかつかい手でした」

「平馬、そちの相手もひどく強いやつのようだったな」

そばから塚越老人が平馬にいう。

「あれは大場鬼七という男で、昨夜二度、今日の昼間一度、今夜の勝負が四度目で、やっとけりがついたようです」

それも福姫の短筒の音が大きな助けになっているとわかってはいるが、わざとそれは口にしなかった。

「平馬、怒っているのですか」
後で、楓が一人の時、福姫はそっと平馬に聞く。
「いや、怒ってはいません」
「きっとですね。――福はわざと肩をねらったのです。だから、大丈夫でしょう、平馬」
福姫は一度いわれた子供のできた時という注意を忘れないでいるらしく、ほおを赤らめていた。
「それなら大丈夫です。その気持ちを必ず忘れてはいけません」
二人だけに通じる話なので、この時も平馬は真顔ではっきりと答えておいた。
翌日は戸塚から小田原へ十里あまりの道中である。箱根を一日で越えるには、少し無理でも小田原泊まりにしなければならないのだ。
だから、戸塚を六ツ半（七時）に立っても、酒匂川を渡ってからは夜道になるはずである。
「平馬、今日の供備えはどうなるんだな」
今朝、平馬が福姫の座敷へ朝のあいさつに出た時、そばにひかえていた塚越老人が聞いた。昨夜の一戦で、老人はすっかり平馬を信用してしまったようである。
「酒匂川までは昨日のままでよろしいと思います」
「そうか――。すると、今日も日が暮れると夜襲があると見ていいんだな」
「はあ。敵はなるべく箱根へかかる前になんとかしてしまいたい希望を持っているようですから、今夜の襲撃は相当なものと思われます」
「これこれ、あまりおおげさなことをいうと女中どもが心配いたすぞ」
「いや、昨夜四度の敵襲にお女中がたは立派に落ち着いた行動をとっていますから、もうその心配はないかと思います。むしろ、それより、旅は二日目、三日目あたりがいちばん足に疲れが出るころです。今日と明日が無事にすみさえすれば、後は必ず楽になるのですから、これも

一つの修業だと思って辛抱なさらなければいけません」
平馬はついでに女中たちのほうへ激励の言葉をかけておいた。
女中たちは案外元気で、疲れた顔をしている者は一人もないようだ。昨夜の乱闘の恐怖が、今となってはかえって気の張りになっているのかもしれない。
「ところで、平馬、敵の人数は昨夜のこっちの力戦で、どのくらい減っているだろうな」
「一同の報告を集めてみますと、半数の十五人ぐらいは戦力を失っているだろうという計算になりますが、内輪に見ても十人は落伍していると思います」
「そうか――。それで、昨夜の敵の人数は、およそのところどのくらいだな」
「三十四、五人というところでしょう」
「すると、十人落伍したとして二十四、五人だな。こっちは二人欠けて三十三人、平馬、茂太郎、源太郎を入れると三十六人ということになる」
「そのとおりです」
「しかしな、平馬、敵の二十五人は昨夜の敗戦を承知の上でふたたび決戦に出るんだ、これは死に物狂いと見なければならない。昨夜の三十五人より以上の力を持っていると覚悟してかからないと失敗するぞ」
さすがに老人は老人らしい行きとどいた注意をしてくれる。
「よくわかりました。その点、一同にも十分覚悟をさせておきます」
行列は予定の時刻にきちんと戸塚の本陣を立った。供備えが昨日と少し違うのは、今日は朝から平馬が姫君の駕籠の左がわについているのと、小森家の近習組の先頭に立つ茂太郎のわきへ松岡平助がついていることである。
平馬がいちばん心配なのは、渋川一心斎が持っている短筒のことだった。昨夜、渋川はつい

に最後まで姿をあらわさなかった。無論、信濃坂口の待ち伏せ組の中に入っていたにちがいないのだが、とうとう短筒は使っていない。
　彼は森の中にかくれていたはずだから、そこからいちばんねらいいいのは大場と切りあっている平馬のはずなのだ。おそらく、彼は、平馬は大場にまかせておけば大丈夫と見たのだろう。
　すると、後は茂太郎と姫君だが、姫君は駕籠を出て向こうにいるし、茂太郎もそっちがわにいる。少し距離が遠すぎて、いい機会を待っているうちに、逆に姫君の短筒で勝敗は案外あっけなくすんでしまった。ついに短筒を撃つ機会がなかったということになるのだろう。
　だから、今日はなんとかして短筒を有効に利用できる作戦をとるに違いない。
　――では、どんな作戦に出るか。
　平馬はそればかり考えて歩いていた。
　第一に考えられることは、たぶん昼間は出ないだろうということである。着弾距離からいっても、昼間はそんな近くへまで出てくることは、自分が死ぬ覚悟にならないかぎり不可能だ。
　やっぱり日が暮れてからとすると、酒匂川をわたってからである。
　ねらわれるのは三人のうちだれだろう。
　そんなことを考えているうちに、姫君の駕籠の戸が静かにあいた。
「平馬、退屈ですから、もう景色をながめてもいいでしょう」
　福姫は堂々と話しかけてくる。
「どうしてです」
「平馬は思ったより冷淡ですね」
「はあ、よろしいでしょう」
「福がさっきから退屈していますのに、いつまでも声をかけてくれませんでした」
「いや、この辺は田んぼばかりで、あまり見ておもしろい景色ではないのです」
「景色がおもしろくありませんでしたら、平馬がおもしろい話をしてくれればいいではありませんか」
「今日はごきげんがよろしくないようですなあ」
　駕籠の姫君と駕籠わきの供侍が口げんかして歩くのはなんとしても行儀が悪すぎるので、平馬はうしろの塚越老人の目を背中に感じながら、ちょっと当惑した。
　行列は藤沢の宿を出て平塚へ向かっているあたりである。考えてみると、戸塚を出てからすでに一刻（二時間）あまりも一人で駕籠にとじこめられていたのだから、福姫がすねたくなるのも無理はなかった。

鉄砲の名人

　その日の中食は、藤沢から三里半歩いて平塚の宿でとることになっていた。
　平塚は町の長さ五町、人家百軒あまりの小さな宿駅で、米屋という旅籠屋が中食所にあてられていた。
「若先生、ちょっと裏へまわってやってください」
　平馬が姫君の駕籠を裏庭のほうへ送りこんで後からくる茂太郎を門口で待っていると、その茂太郎と肩をならべてきた松岡が、素早く平馬のそばへ走り寄ってきて耳うちをした。
「そうか――」
　お粂だなと直感したので、平馬はそのまま米屋の裏手へまわってみた。
　裏の竹やぶの中になにかの堂が祭ってあって、その向こうは海っぷちまで広々とした青麦畑になっている。お粂はその堂の裏に待っていた。右助の姿は見えない。
「どうした、お粂」
「ぜひ、兄さんの耳に入れておきたいことがあったもんだから」
「昨夜は無事だったんだろうな」
「いやな人――。無事だからこうして今日も歩いていられるんじゃありませんか」

「それはまあそうだが、安心して眠れたかという意味なんだ」
わらいながらいってやると、お粂はぷいと麦畑のほうへ目を逃げて、
「右助が見張りをしていてくれるから大丈夫だわ」
と、そっぽを向きながらいう。
「そうか、あれは立派な根性を持っている男のようだ」
「兄さん、渋川は今夜兄さんをねらうらしいわ」
くるりとこっちを向いてお粂はきつい顔になっている。
「ふうむ」
「あたしは、ゆうべ、あの信濃坂の下の森の中にいたんです。兄さんが大場を切った時、渋川はしまったといって短筒を兄さんに向けました。その時、兄さんはちょうどお姫さまのほうへ歩き出したんで、舌打ちをしてやめてしまったんです」
「おまえまた、なんでそんなあぶないところにいたんだ」
「そんなことより、――ゆうべあそこで死んだのは大場鬼七一人だけよ。お姫さまに撃たれた滝川ってやつは、弾が右肩へ当たったけど、命は助かりそうです。後の二人は山根と西野で、あの二人も油断できない腕だわ。その時、渋川がはっきりいってたのよ。平馬という小僧さえやってしまえば、あの行列はばらばらになる、明日は平馬だって」
「そうか――。敵のけが人、つまり、もう戦力を失ったやつは何人ぐらいかわからないか」
「家来組が八人ぐらい。浪人組は大場と滝川の二人その十人ぐらいよ」
「わしもややそのくらいだろうと見当をつけていた」
「それからねえ、兄さん、ゆうべまた江戸から大崎と丸山という浪人者が二人、渋川組へ送られてきたんです。大崎は鬼七より強いって話だ

けれど、それより怖いのは丸山のほうで、こいつは砲術の師範をしていたやつなんですって。だから、鉄砲をござにくるんで持ってきているのよ。――大丈夫かしら、兄さん」
お粂はなんとなく顔色をかえている。
「鉄砲はそうむやみなところでは撃てない。しかも、弾は一発だ。たった一発の弾にあたるようなら、そいつはよっぽど運が悪いということになるんだ」
口ではそう答えたが、平馬もさすがに心中おだやかならぬものがある。
「あたし、手塚が憎い」
じっと歯をくいしばっているお粂だった。
「ありがとう、よく知らせてくれた。とにかく、こっちもできるだけの手を打つことにするから、まあ、そう心配しないでいてくれ」
「兄さん、酒匂川をわたってからが勝負なんですからね。――死んじゃいやだ」
「大丈夫だ。わしには多くの人の命をあずかっている大きな責任がある。お粂、わしはきっと生きてみせるよ」
平馬はきっぱりといって、いつもの明るい顔になり、じっとお粂の目を見かえしてから、ゆっくり表街道のほうへ歩き出した。
米屋へもどっても、平馬はそのことについてはだれにもなにもいわなかった。うっかりしたことを口にするのは、人心を惑わすばかりで、なんの益もないことだからである。
行列はまもなく中食所を立って、平塚の宿を後にした。
「下にい、下に――」
のどかな下座触れの声が、ゆっくりと大磯（おおいそ）の宿を目ざして進んでいく。
平馬は福姫の駕籠わきをしばらく茂太郎にたのんで、自分は松岡平助と肩をならべて中食所を立った。
「若先生、お粂はなにか重大な知らせを持ってきたようですな」

「うむ。お条は自分で松岡のところへきたのかね」
「いや。平塚へ入ろうとするところで、若い男に呼びとめられましてな、――行者の供、右助だといっていました」
「そうか――。あの若者は実意があるやつだと思うんだが、どうだろう」
「お条とは似合いですな。あれは、しりにしかれても、やるべきことはちゃんとやっていく男でしょう」
松岡はにこりとしながら、
「お条をお姫さまにすると、福姫さまのようになります」
と、味なことをつけたす。
「なるほど――」
平馬は感心して思わず苦笑したが、
「そういえば、松岡は丸山という浪人者を知らないかね」
と、ふと思い出したように切り出してみる。
「丸山なんという男なんです」
「いや、丸山としかわからないんだ。鉄砲のほうの師範をしていた男だそうだ」
「それなら丸山蘭右衛門という男でしょう。オランダ流の砲術をおさめて、もと尾州家に仕えていた鉄砲の名人です。それがどうかしたのですか」
「実は、その丸山が、昨夜、大崎という男と二人で、江戸から渋川組へ送られてきたんだそうだ」
「なるほど――」
松岡は太いまゆをちらっと寄せたが、あまり物に動じない男だから、そのまま黙っていつもの足どりで歩いている。

や き も ち

「大崎というのは、たぶん甲源一刀流の大崎郷斎のことでしょう。腕は大体大場鬼七と甲乙はないと思いますが、ただ一つ、秩父の山育ちですから、非常に足の達者な男だということです」

松岡はしばらく歩いてからそう説明してくれた。
「そうか――。すると、そっちは鬼が山男とかわったと思えばいいわけだな」
「まあ、そういうところですな」
松岡は思わず苦わらいをうかべて、
「問題はやはり丸山の鉄砲でしょうな」
と、これはどうにもわらいきれないものがあるようだ。
「運命の矢弾ということもある。飛び道具は論外ということにしておくよりしようがないだろう」
「それはそうです」
「そこで、今日の敵の待ち伏せなんだが、地の理からいって酒匂川をわたると、海手のほうがしばらく松原つづきになる。時刻はちょうど月の出前だし、敵も今夜は一挙に立ってお駕籠へ殺到するんじゃないかと思う。どうだろうな、松岡」
「わしもたぶんそうだろうと見ています」
「敵の人数はおよそ二十七、八人らしい。敵が立ったら、こっちも一度に切って出て、なるべく駕籠を取りまくように陣を敷いて戦ってもらいたいんだ。その間に駕籠はかまわず走るから、味方は昨夜とおなじ戦法で、敵を倒した者から駕籠に追いつく。つまり、一人が一人の敵を引きうけてくれるつもりでかかれば、昨夜とおなじ結果になると思うんだ」
「承知しました。我々は昨夜とおなじで、酒匂川をわたったらすぐお駕籠のうしろまで出ればいいわけですな」
「む、それでいい」
打ち合わせがすんだので、平馬は駕籠のわきへもどり、茂太郎と源太郎にもその旨を告げておいた。
源太郎は供侍たちに、茂太郎は近習組に、それぞれ口送りに作戦をつたえていく。
「平馬――」

平馬が左の駕籠わきへつくと、それを待ちかねていたように、福姫が戸をあけて呼んだ。

「はい」

「おひるの時、そなたはどこへ行っていたのです」

「ああ、あの時は敵の動静を聞きに行っていました」

「きらいです。もう大きらいです」

ぴしゃりと戸をしめてしまう。

——そうか、お粂のことが耳に入ったんだな。だれがそんな告げ口をしたんだろう。

自分の行動をひそかに監視しているやつがあるとすれば、それは裏切り者くさい。油断はできないぞと、平馬はちょいとどきりとしたが、考えてみると、あの時米屋の裏にはだれの目もなかったはずだ。こっちは十分それをたしかめてからお粂に会っている。

——なんだ、お姫さまのやきもちが、勝手にそんなことを想像させたんだな。

たぶんそんなところだろうと、平馬は思わず苦笑したが、それにしても、女というものは敏感なものだなあと感じさせられた。いや、なんとなく空恐ろしい気さえしてくる。ひとつ間違えば、こんな些細(ささい)な疑心暗鬼から、どんな大事がおこらないともかぎらないからである。

また駕籠の戸がすっとあいた。

「平馬、なぜあやまらないのです」

声もとがっているが、見ると、目もとがっている。

「はあ、申し訳ございません」

「どうして福に黙って行者に会いに行ったのです」

「会いに行ったのではありません。聞きに行ったのです」

「なにを聞きに行ったのです。申してごらんなさい」

「昨夜お姫さまが短筒で撃ったのは滝川という剣客で、弾は右肩にあたりましたが、命にかか

わるようなことはないそうです。だから、大丈夫です」

平馬は澄まして、あとの大丈夫に少し力を入れる。

「それで、それから——」

福姫はいきなり大丈夫を切り出されて、たしかにまごつきそうになりながら、いそいで澄ましてあとをうながす。

「渋川一心斎は目の前で大場鬼七を討たれたので、明日は平馬の小僧をねらってやると、非常に悔しがっていたそうです」

「行者はそんなところをどこから見ていたのでしょう」

「たぶん、あの森の木の上にのぼっていたんだと思います」

「そういえば、御厩河岸(おうまやがし)の時も行者は塀(へい)の上にいましたね」

「そうです。それから、昨夜、江戸から渋川組へ、また新手が二人送られてきたそうです」

福姫には話しておいたほうがいいと思ったので、平馬は軽く切り出す。

「その二人は強いのですか」

「一人は大崎郷斎という甲源一刀流のつかい手で、大場鬼七ぐらいの強さだそうです」

「もう一人は——」

「もと尾州家の砲術の指南をしていた丸山蘭右衛門という鉄砲の名人だそうです」

「まあ、鉄砲を持って歩いているのですか」

「ござに包んで、持ってきているということです」

駕籠の右がわについている大草源太郎のほうが緊張して聞き耳を立てているようである。

「平馬をねらうつもりでしょうか」

「たぶんそうでしょう」

「どうして防ぐつもりです、平馬は」

「鉄砲は雷とおなじで、防ぎようがありません。しかし、弾は一発ですから、必ずあたるともかぎらないでしょう。あたるあたらぬは運次第に

まかせて、気にしないことにしています」
「それは、平馬、違います。百発百中だから名人といわれるので、名人の弾は一発でも百発でもおなじです。どうすればいいかしら」
　福姫は気が気ではなくなってきたようだ。
「いや、昼間は撃てないでしょう。山の中なら知らぬこと、発砲した場所がわかれば、自分も切られることを覚悟しなければなりませんからな」
「では、夜ですね。今日はどこで日が暮れるのです」
「酒匂川をわたってからでしょう」
「平馬、酒匂川をわたったら、福がいっしょに歩いてあげます。心配することはありません」
　福姫は身をもって平馬の弾よけになる気でいるらしい。あるいは、死なばもろともという覚悟か。
　――なるほど、やきもちが焼きたくなるのも無理はないな。
と、平馬はここにも女心のふしぎさを発見して、胸あたたまる気持ちがした。
　大磯から小田原へ四里、その途中三里ほど行ったところに酒匂川がある。
　案の定、その酒匂川を川人足の肩で越えたのは、ほとんど暮れ六ツに近い時刻になっている。
　行列は川をわたった河原で、それぞれちょうちんの用意をする。
　ここで先供十人の中へ近習組の三人が加わった。千葉兼之進、矢頭金吾、西村安蔵の三人で、
「よいな、松平家の家来がたより常に一足先へ出て働いてくれ、たのむぞ」
　平馬がわきへ呼んで素早く耳うちをすると、
「はっ、一命にかけましても――」
と、感激して誓っていた。この三人はいまだに亀之助と平馬の区別がはっきりせず、いや、およそこれは平馬だとわかっていながら、その平馬を若殿だと信じたくなっている連中なのである。

銃　火

「お立ちい」
　源太郎の触れ声で、行列は河原を出発した。あたりはもうすっかり暮れきって、宵闇が濃い。
　先供十三人のあとが駕籠で、駕籠はすでに空になっている。福姫は昨夜とおなじように、お高祖頭巾をかぶって、腰元四人の後から、左右を塚越老人と平馬にまもられて歩いている。
　そのすぐうしろが剣客組の五人で、そのあとへ近習組五人がつづく。
　行列の人数は一人残らずこれから月の出までの間に必ず敵の待ち伏せがあると申し渡されているから、めいめいがその心がまえで、おのずから殺気をはらみながら黙々と進んでいく。
「下にい、下に」
　下座触れだけがあいかわらずのんびりと先頭から耳に聞こえてくる。
「平馬、やみ鉄砲という言葉がありますね」
　福姫が平馬の手をぎゅっと握りながら明るい声でいう。
「そうです。やみ鉄砲は大体当たらないと相場のきまったものです」
「でも、ちょうちんが的になりませんか」
「そうですな、ちょうちんで見当のつくのは駕籠ぐらいのものでしょう」
「平馬、その丸山蘭右衛門というやつは、そんなに鉄砲の名人なのか」
　さっきの話を耳にしていたらしく、塚越老人が声をかけてくる。
「はあ、すくなくとも動かぬ的なら百発百中なのかも知れません。それでなければ人は名人といってくれませんからな」
「動かぬ的なら。――しかし、恐るべきやつだな」
　飛び道具ではなんともしようがないという腹が塚越老人にもあるようだ。
「平馬、心配しなくてもいいのですよ、福がつ

いているのですからね」
　それは、母親が子供を安心させようとしていって聞かせる、そういった愛情あふれるような声音に聞こえたので、並んでいる塚越老人も、前の腰元たちと大草源太郎、うしろにつづく茂太郎と松岡も、思わずはっと息をのんだようである。聞きようによっては、平馬へのありったけの愛情を、福姫はうっかり堂々と口にしてしまったことにもなるのである。
「ありがとう、姫君さま」
　平馬はあたらずさわらずにうけておくほかはない。
「平馬は知恵と勇気のある侍ですもの、きっと鉄砲の弾などあたりはしません。そうでしょう、平馬」
「そうです。平馬は知恵と勇気で必ず姫君さまのために立派に闘います」
「福が見ていてあげますからね」
　福姫はあたりの人の気持ちなどまるで忘れてしまっているように、じっと平馬の手を握りしめてくるのだ。
　正直にいえば、次の瞬間には幽明ところを異にする運命になるかもしれない二人なのだ。さすがに平馬も黙って福姫の手を握りかえさずにはいられなかった。
　おなじ気持ちはだれにもある。だから、だれも口はきかなかった。見ぬふりをしているのだろう。
　宵闇の街道は右手に水田がつづき、左手は松原で、松原の向こうは相模(さがみ)の海である。無論、海は見えないが、時々波の音が風に乗ってくるようだ。
「出たあっ」
　だれからともなく味方から声があがった。
「わあっ」
　松原の砂の上へ伏せていた敵が、一度に立ちあがった。
　長い横隊を作って、黒い怒濤(どとう)のように行列目

ざして押しよせてくる。
「それっ、切って出ろ」
「油断するな」
「一人に一人だぞ」
　覚悟の前の味方だった。剣客組と近習組が一体になって、こっちも横隊を作り、一気に怒濤の敵の中へ切りこんでいく。
「えいっ」
「とうっ」
「わあっ」
　たちまち白刃が火花を散らして、怒濤は各所に黒いつむじ風にかわった。
「お女中は駕籠の右へ進め。御老人、姫君をたのみます」
　平馬がすかさず命令を伝えた。
「平馬、福のそばを離れてはいやです」
　しかし、平馬はそれには答えず、福姫の手を振り切って、
「茂太郎、わしにかわれ」
と、自分の場所へ茂太郎を呼ぶ。
「心得た」
　茂太郎が福姫の左へつく。
　そのうしろへはもう小者たちが走り寄ってきていた。
「小堀、――孫作」
「はっ」
　駕籠の前に小堀孫作と、挟箱(はさみばこ)一対、ちょうちん持ちの小者が残っている。
「行列は走れ」
　平馬は叫んでおいて、空駕籠の左へぴったりとつく。
　行列はひたひたと街道を走り出した。
「平馬、そこはあぶない。さがりなさい」
　福姫が叫んだ。
　鉄砲がねらうとすればそこがいちばんねらいいいし、駕籠の中には姫君が乗っていることになる。そのいちばんあぶない位置を、平馬は自分から買って出ているのだ。それが福姫にもわ

かったのだろう。
「平馬、――平馬」
「声を立ててはなりません」
茂太郎がしかった。
「福も、福も平馬のところへ出ます」
「なりません」
福姫は塚越老人と茂太郎に左右からしっかり手をつかまれて、身もがきしているようだ。
幸い、敵は味方がうまく支えているとみえて、叫喚剣戟の乱闘場は次第にうしろになっていく。
駕籠のすぐ前をちょうちんが走っている。そばについているのは小堀孫作だ。
「孫作、ちょうちんを消して――」
福姫が身もがきしながら叫ぶ。ちょうちんが平馬の姿をうつしていると気がついたのだろう。
だあん。
その言葉の終わらぬうちに、松原のやみから鉄砲が火を吹いたのである。

小田原の夜

「あっ、平馬――」
うしろで福姫が金切り声をあげた。てっきりやられたと思ったにちがいない。
「大丈夫です。――駕籠、止まるな。走れ」
平馬はそのまま駕籠わきへついて走る。弾はたしかに頭上一寸とは離れないあたりを飛んだようだ。
上手の手から水が漏れるというより、こっちの運がよかったのかも知れない。
「どこも、なんともありませんか、平馬」
うしろからまた福姫が聞く。
「弾は頭の上でした。大丈夫です」
安心したのは福姫ばかりではないらしく、
「よかったなあ。しかし、まだ安心はできんぞ、平馬」
と、塚越老人がうめくようにいっていた。

まだ渋川の短筒が残っているはずなのである。
が、その夜も渋川の短筒はついに火を吐かなかった。
その夜、小田原の本陣に着いて、後から追いついてきた味方の人数を調べてみると、手傷をうけた者が十人ばかりあって、その中の三人はかなり重傷である。三人とも松平家の家来で、大丈夫だからこのまま供に加えていってくれと申し出たが、これは塚越老人と大草源太郎がなだめて、小田原で傷養生をさせることにした。
「命にかかわるようなことはないでしょうね」
福姫は源太郎に何度も念を押していたが、
「決してその心配はありません」
と、源太郎ははっきり答えていた。
敵の負傷者は十人ぐらいだろうということで、はじめは猛然とこっちの剣陣を突きくずそうとしていたが、鉄砲の音が聞こえるとまもなく、急に酒匂川のほうへ引きあげはじめたというのである。
「若先生、ちょっと――」
いちばん後から一人で帰ってきた松岡平助は、平馬の顔を見るとすぐに玄関わきの小部屋へさそった。
「松岡、顔が見えないんで心配していたんだ。どこもけがはないのか」
「いや、このとおり無事です。それより、わしこそあの鉄砲の音を聞いた時はひやりとしました。あれは若先生をねらったんでしょう」
「そうらしい。弾が一寸ぐらい上だったんで助かった」
「丸山蘭右衛門というやつはやっぱり名人です。あの時、お粂は松の木の上にいたんだそうです」
「ふうむ、お粂がか――」
「はじめはその松の木の下へ蘭右衛門がきた。渋川と大崎郷斎、それに藩士組頭取の関谷十三郎がいっしょだったそうで、駕籠わきのこっち

がわが若先生だとちゃんと知っていた。平馬を倒したら大崎と関谷が切って出て茂太郎を倒し、あわよくば姫君をさらっていこうと相談していたそうです」

「ふうむ」

「いよいよ駕籠がこっちへ走り出して、そのちょうちんの灯を見ると、まずいといって蘭右衛門が五、六間ほど前へ進み、そこへ折り敷きの構えをとったんだそうで、お粂はどきりとしたそうです。そのくらいの距離ならつぶてがきく。幸い、後の三人は左右へ散って砂の上へ腹ばいになった。お粂が思いきって蘭右衛門の背中へつぶてを飛ばしたのと、蘭右衛門が引き金をひいたのと同時で、丸山はしまったといったそうです」

「そうか。すると、こっちの運がよかったんじゃなくて、お粂が加勢してくれたのか」

平馬はいまさらのようにひやりとしなおさずにはいられなかった。

「それで、お粂はどうした」

「左右にいた大崎と関谷は、すぐにつぶてだとわかったらしく、いきなりこっちを見たそうですが、松の木の上とは気がつかない、下ばかりさがして、下手人の立ちあがるのを待っていたそうです」

「あぶないまねをする。もし見つかったらどうする気だったんだろう」

「わしもそういってしかってやりましたが、当人は一向平気で、あのまま松の木の下で平馬さんをねらわれるとあたしの命はなかったかも知れないが、蘭右衛門がその時になって少し前へ出てくれたんで助かった。あたしにはおっかさんとおじいちゃんの魂がついていてくれるから、たいてい大丈夫だといってわらっていました」

「困った娘だなあ」

「お粂は、明日から平馬さんに駕籠わきはやめてくれ、両方へ人をおいて、その真ん中を歩い

てくれるようにと、それをいいにわしを呼びとめたわけです」

「そうか、ありがとう」

「わしはお粂にしかられましてな、あんたがついていて、どうしてあんな危ないまねをさせておくんだと、――まったく一言もない話です。これは若先生にももう一度よく考えておいてもらいたいと思います。明日はいよいよ箱根越えですからな」

松岡も内心、駕籠わきは不賛成のようである。

「よし、もう一度考えてみることにしよう」

平馬は松岡に別れて、福姫の座敷へいそいだ。ごきげんうかがいがあんまりおくれると、またじゃじゃ姫のつむじが曲がりそうだからである。

「平馬、明日は福も今夜のように歩いて箱根をこえますから、そのつもりでいてください」

案の定、福姫は顔を見るなりずばりといい出して、あまりきげんはよくないようだ。

「結構でしょう」

平馬はさからわないことにする。

塚越老人と源太郎は今までそれでいじめられていたらしく、

「しかしな、平馬、箱根峠はこっちからのぼると四里八町の坂道だ、大丈夫かな」

と、老人が心配そうにいう。

「それは、御老人、まるっきり駕籠をおいていくというわけではないのですから――。それに、駕籠は鉄砲にねらわれやすいということもいえます」

「そうか――。なるほど、それもそうだな」

老人は幾度もうなずきながら、

「鉄砲というやつはどうもいかん。明日の箱根越えはよほど気をつけんとな。なにか策はあるのか、平馬」

と急に暗い顔になる。

「策は今夜よく考えてみます」

平馬は自信ありげにいって、

「源太郎どの、明朝は六ツ立ちにしたいのですが、都合はどうでしょうな」
と、源太郎のほうへ聞く。
「よろしいでしょう。少し無理でも、そのほうが安全ですからな。さっそく、一同にもそう申しつけておきましょう」
源太郎は姫君のほうへ会釈をして、静かに座敷を出ていく。
「どれ、わしもけが人の様子を見てやるかな」
老人もそれを思い出したようにそそくさと立ちあがった。
「平馬、そなたにだけ内密に耳に入れておきたいことがあります。こっちへきてください」
この座敷の横に、ふすま一重で姫君の寝所がつながっている。男たちが出ていってしまうと、福姫は腰元たちをそこへ残して、さっさとその寝所の間へ入っていく。
「かしこまりました」
平馬は若い腰元たちにちょっとうしろめたい気はしたが、それはいけませんともいいかねるので、わざと気軽に福姫の後へつづく。
寝所は八畳ほどの座敷を半分にして一段高くなったところに屏風でかこって寝床がのべてあり、その半分の下の座敷のほうへは宿直がつけるように、火ばちの用意をして、絹行燈に灯が入れてある。そして、ふすまをしめきれば二人きりの静かな世界になるのだ。
「平馬――」
掻取り姿の福姫は、そこへすらりと立ってこっちを向いた。燃えるような目が、感情をこめて潤んでいる。
「御用は――、姫君さま」
平馬が一足進むと、
「姫君ではありません、福です」
福姫は急に平馬の胸の中へ身をよせて、
「二人きりになりたかったの」
と、すがりついてきた。
「お福さん――」

平馬はその肩をしっかりと抱いてやりながら、くちびるをかさねていく。向島の屋敷を立ってから、こうして二人きりになれたのは、これがはじめてである。
「うれしい、平馬。死なばもろともですよ」
その情熱があればこそ、福姫はこんなあぶない道中へ自分から出てきたのだと思うと、平馬はその心根がいじらしい。
「わしもそのつもりです、お福さん」
「もう、さっきのように、福のそばから離れてはいやです」
「離れません」
「もっと強く抱いて――」
そんな人目をぬすんでのたわいもない恋のくぜつが、実は明日への希望と勇気を常に支えていてくれるのだと、平馬はその時はじめて気がついて、男と女というものはふしぎなものだなあと、しみじみ感心させられた。

煩悶

翌朝、行列は予定どおり、六ツ少しすぎに小田原の本陣を立った。
箱根の関所は小田原藩があずかっている。ここでうっかり鉄砲などを撃てば、関所の門がしまって山狩りをされるから、敵は間道へ逃げこむほかはない。しかし、その間道は地元の藩士たちのほうがくわしいから、ついには逃げきれなくなる。
「おそらく、敵もそんなばかなことはしないでしょう」
そういう平馬の説がとおって、福姫はおとなしく駕籠で峠を越えることになった。福姫のだだは、昨夜のくちびるの愛撫で、その時すでにすっかりおさまっていたのである。
その日は、平馬の予想どおり、無事に箱根八里をこえて、明るいうちに三島の本陣へ入ることができた。

「若先生、敵は今夜沼津泊まりだと、お粂が知らせてくれました」
宿へ着くとすぐ、松岡が耳うちをしてくれた。
「そうか——。敵の人数は」
「渋川組が十人、関谷組が五人、蘭右衛門は間道をぬけたらしく、まだ鉄砲を持っているそうです」
敵の人数が十五人になったのは、無論、負傷者を残してきたからでもあろうが、それより待ち伏せは二度とも失敗している。こんどは臨機応変の奇襲戦に出る気で、あまり役に立たないやつは負傷者につけておいてきたのだろう。こんどの十五人は一人一人がなにをやるかわからない連中にちがいない。
しかも、敵にはまだ渋川の短筒と蘭右衛門の鉄砲が残っているのだ。
「松岡、お粂はまだこの近所にいるのか」
「裏に待っています。用がなければ自分たちも今夜は沼津泊まりにするといっていますが」
「じゃ、ことづけをたのむ。明日は蒲原泊まりだ。それまでにお粂の着ているような着物を一組みこしらえて、明日の夜、本陣の裏で待っていてもらいたいんだ」
松岡ははっとしたように平馬の顔を見かえして、ちょっとなにかいいたそうにしたが、
「承知しました。そういってやりましょう」
と、思いかえしたようにいって出ていった。
その夜は箱根を越えた山祝いの酒が少し出て、この三日ばかり強行に強行がつづいたのだから、今夜は早目に床に入ってゆっくり体を休めておくようにといいわたしておいた。
翌十九日は三島から蒲原まで九里ほどの道中である。
福姫は駕籠だからいいが、腰元たちにとっては決して楽な道のりではない。しかし、この辺は終日富士をながめて歩く景色のいい道で、山や坂はないから気はまぎれる。
「平馬、少し歩いてはいけませんか」

福姫は何度も平馬に聞いたが、
「今日はゆっくり足を休めておかなくてはいけません」
その度に平馬は答えて、歩かせようとはしなかった。
福姫はなんとなく不服そうだったが、今日の平馬はあまり冗談もいわない。しまいには、どうしたのだろうというように、福姫は平馬の顔色ばかり気にして、ため息さえついていた。
事実、平馬の胸の中には、今夜決行しようとすることについて大きな煩悶があった。
それは、明日蒲原から府中までの道中の間に、薩埵峠がある。蒲原から由井へ一里、由井から興津へ二里十二町、この由井と興津の間の興津寄りのほうにある峠で、道はそうけわしいというほうではないが、蘭右衛門が鉄砲でこっちを狙撃するにはちょうどいい場所なのである。
こんどは昼だから、おそらくその銃口をのがれることはできない。それをのがれるには、蘭右衛門の知らない間に峠を越えてしまうほかはないのだ。
そこで、行列が今夜蒲原の本陣へついたら、だれにも知れないように福姫と茂太郎をつれ、裏口から本陣をぬけ出して、今夜のうちに薩埵峠のふもとの倉沢の立て場まで夜道をかけ、そこへ泊まって、翌朝、夜の白々明けに峠を越えてしまうのである。
これなら十分敵を出し抜くことはできるだろうが、一度そうして敵を出しぬいた以上、あくまでもこっちは行列より先へ先へと出る必要がある。つまり、蘭右衛門の鉄砲と、どこまでも足の競争をしなければならない。
——独断でそんなことをしてもいいだろうか。
平馬としてはまずそれが心配だし、だいいち、ひとつ間違うと人の心配どころか、三人とも命がなくなることを覚悟しなければならないのだ。

それと、もう一つは、わしは策にことよせて、その実、福姫と二人きりになりたがっているのではないかという良心のうずきである。

しかし、いずれにしても、この道中は食うか食われるかのあぶない道中なのだから、勝つためには思いきった策に出るほかはないんじゃないか、——若い平馬の考えはどうしてもそこへおちてくる。

——死なばもろとも、それでいいじゃないか。

一日中そんな煩悶をして歩いていたが、それが蒲原の宿の本陣へ着いたとたん、平馬はなんのちゅうちょもなく鬼になりきっていたのである。

磯づたい

行列が蒲原の本陣へついたのは、もう宵の口に入ってからであった。

亭主の出迎えをうけて姫君の駕籠が玄関式台に横づけになると、姫君は駕籠をおり立って、腰元たちが手早く結いつけ草履をぬぐのを待って、いちばん先に奥の座敷へ案内される。

次に用人塚越助左衛門が小者にわらじをぬがせ、すすぎを取る。以下これにならって、順々にわらじをぬぐのだから、玄関は一時かなりごたごたする。

「松岡、わしは姫君をつれて裏口からそっと抜け出すから、茂太郎にしばらく塚越老人の相手をしているようにいっておいてくれ」

平馬は玄関がごたついているすきに松岡平助をわきへ呼んで耳うちをする。

「承知しました」

「剣客組はそのまま裏口のかためにつかせ、松岡はわしのところへきてもらう」

「わかりました」

「茂太郎には、いずれ脱出の合図をするからと、耳に入れておいたほうが安心するだろう。たのむよ」

平馬は松岡がうなずくのを見て本陣の庭へま

わり、裏口を見に行った。

この辺は東南に海をひかえ、海岸が近いから裏口の外はすぐ砂浜になっている。裏木戸をそっとあけて顔を出すと、

「兄さん——」

そこの塀にぴたりと張りついていたお粂が、すぐに小声で呼んだ。例によって黒々とした忍び姿である。

「おお、きていてくれたか。たのんでおいたものは——」

「用意してきたわ」

「敵の様子はわかっているか」

「今夜は由井泊まりです」

「よし、いま姫君をつれてくるから、待っていてくれ」

「たぶんそうだと思ったわ」

お粂がさびしそうにわらった時は、平馬はもう木戸をしめて、姫君の座敷の廊下のほうへ引きかえしていた。

「楓どの——」

縁先に立って、障子の向こうへ呼んでみる。障子に黒い影がさしたと見る間にそこがあいて、楓が廊下へ出てきた。

「御老人は——」

「あちらで茂太郎さまとなにかお話しのようでございます」

「姫君をこれへ呼んでください」

「はい」

「向島を立った時とおなじことをやるから、替え玉をたのむ」

あっと楓は息をのんだようだが、

「いそぐのだ」

と、平馬が重ねていうと、うなずいて意を決したように座敷へ引きかえしていった。

まもなく、お高祖頭巾の福姫が掻取りをぬぎすてた姿で廊下へ走り出てきた。

「平馬——」

「さあ、いそぎましょう」

平馬はその手を取って、足袋はだしのままの福姫を裏口のほうへ案内する。
「どこへ行くのです、平馬」
「向島の屋敷をぬけ出した時のようにして、これから由井の宿の先まで夜道をかけるのです」
「二人きりでですか」
胸をはずませているような福姫の声音である。
「いや、陰供を数人つけます」
「二人きりでも大丈夫ですのに」
「まあ、わしにまかせておいてください」
裏木戸を出ると、そこに松岡がきて、お粂と二人で待っていた。
「お粂、いそいで姫君の支度をなおしてあげてくれ」
「はい。――お姫さま、失礼いたします」
「どうするのです、お粂」
福姫はちょっとあっけにとられたようだ。
「帯だけといてくださいまし」
お粂はそういいながら、もうさっさと福姫の帯に手をかけている。
「平馬、これを――」
福姫はその帯のうしろへしのばせている短筒を取って平馬に渡す。
濃い宵闇の空に、春の星が美しく、磯打つ波の音がやや遠く聞こえていた。
「松岡、我々が出発したら、剣客四人は二人ずつ陰供につく。松岡は茂太郎を呼び出して、後を追ってくれ」
「承知しました」
「後へ米次郎を残してな、近習組八人も分かれわかれに出発するようにさせるのだ」
「大草どのになにもいいおかなくてもいいのですか」
「そうだな。独断で非常手段をとった、必ず後から連絡はとるからと、松岡から一言耳へ入れておいてもらうか」
「そのほうがよろしいと思います」

こっちがそんな打ち合わせをしている間に、お粂は福姫に着物の上から黒い上着をきせ、もんぺ袴をはかせ、髪をといて櫛まきにして、すっぽりと風よけ頭巾のようなものをかぶせる。
そして、黒足袋にわらじをはかせると、福姫はすっかりお粂とおなじかっこうになった。
お粂は、福姫のとった帯と足袋、その他の小道具をひとまとめにふろしき包みにする。
「さあ、できました、お姫さま」
「ありがとう。――平馬、これでいいのですか」
「結構です。――お粂、おまえ右助をつれて一足先を歩いてくれ」
「はい。――これは兄さんが持ってあげたほうがいいわ」
お粂はふろしき包みにした福姫のものを平馬にわたす。
「よし。じゃ、すぐ出発してくれ」
「はい」
お粂は先に立って、裏道づたいに歩き出す。
いつの間にか右助が出てきて、お粂と肩をならべたようだ。
十間ばかり離れて、平馬が福姫の手をとって後につづく。
「お福さん、これをわたしておこう」
平馬はあずかっていた短筒を福姫にかえした。福姫はちょっと考えてから、それをふところへ差しこんだようだ。
「平馬、これはどういうわけなのです」
「敵は今夜由井の宿に泊まっています。たぶん、明日の朝、行列より早く薩埵峠へのぼって陣を敷き、こっちを鉄砲でねらう策に出るでしょう。それを出しぬくために、こっちは今夜、薩埵峠のふもとの倉沢まで行って、明日は一番で薩埵峠をこえてしまうのです」
「行列とはどこで待ちあわせるのです」
「いや、もう行列へはもどらないつもりです。このまま先へ先へと出て、津山まで行ってしまいましょう」

「まあ」
さすがに福姫ははっとしたようだ。
「いやか、お福さん。あんたはもうお姫さまをよして、このまま平馬のお福さんになってしまうんだ」
平馬はぎゅっと福姫の手を握る。
「福は平馬といっしょなら――」
福姫は急に感情がたぎってきたように肩を平馬の肩へもたれかけてくる。
蒲原から由井まで一里、それはどこまで行っても海岸つづきの暗い夜道である。

由井の灯

福姫組の足がおそいので、旅なれているお粂組はいつの間にか小一町も先を歩いていた。
お粂がそれをうっかりしていたのは、なんとなく胸が重かったからだ。
平馬のことはもうすっかりあきらめているつもりだった。しかし、現在、さっき福姫を身近に見て、支度の世話をしているうちに、あまりにも自分とは育ちの違う姫君のおおらかな気品につい圧倒されてきて、これなら平馬さんをとられたってしようがないと思った。そう思ったとたん、むらむらっと嫉妬を感じてきたのである。
いくらお上品にできていたって、自分で帯ひとつしめられないような、なんの能もない女じゃないか、男ってこんな女が好きなのかしらと思うと、それを姫君姫君とあがめ奉っている平馬をさえけいべつしたくなってくる。
こんな姫君さえあらわれてこなかったら、あたしはきっと平馬さんと結ばれていたんだと、お粂は気が狂いそうになるほど激しい思慕を平馬に感じてきた。
が、自分は手塚勘解由のかくし子、ふっとそう気がついて、水をあびたように一切の感情が冷却していった。酒匂川では、その手塚の一味の丸山蘭右衛門が、あやうく平馬を狙撃するところだったのである。

――あの小僧をねらえ。
信濃坂口の森では、手塚の唯一の親友渋川一心斎が、鬼のような顔をしてじだんだを踏んでいた。
――いやだ、あたしはどうしても平馬さんを殺したくない。
その平馬が成功すれば、無論、手塚は生きていられないだろう。手塚なんか死んだってかまやしない。
本当にそうなのか、お粂。――どこからかそんな声がきこえてきた。
手塚はおまえのことを心配して、おまえは敵の味方だとわかっていながら、ちゃんと右助という男をつけてよこしている。それが親心というものなんだ。だいいち、おまえがいくら平馬を助けたって、平馬は福姫のものなんだ。絶対におまえのものにはならない男だぞ。
――かまやしない。あたしはそれでも平馬さんの身がわりになる。あたしはそれほど平馬さんが好きでたまらないんだ。
お粂は歯をくいしばって歩いていた。
暗い海づたいの道で、絶えず波の音が耳を打っていたが、それさえ耳には入れていなかった。
その海のほうへ右助が肩をならべて、あいかわらず大きなお粂のふろしき包みをかかえながら、これもむっつりと歩いている。
「右助、おまえ今夜はばかにふきげんなんだね」
お粂は思わず右助に突っかかっていた。
「そんなことねえです」
「だって、おまえ、さっきから一言も口をきかないじゃないか、唖ん坊みたいに」
「行者さんが怒っているから、おれ黙っていたです」
「あたしは怒ってなんていやしないよ」
「おれにはちゃんとわかっているです」
「なにがさ――」
「なんでもいいです」
「なんだって、右助、もう一度いってごらん」

お条はかっとなって、いきなり右助の腕をわしづかみにしていた。

ちょうど海手の松原のほうによしず張りの休み茶屋があって、夜は店をしまっているが、そのかげからすっと風よけ頭巾をかぶった男が行く手へ出てきた。

「あっ、鬼吉」

体つきですぐわかる。お条はぎょっとしながら右助の腕を放した。

「下郎、後へさがんな。おれはお条に話があるんだ」

鬼吉は横柄に右助をにらみながらいう。

右助が黙って一足あとへさがると、鬼吉はすっとお条と肩をならべて歩き出す。

「鬼吉、なにか用かえ」

「うむ、用があるからここで待っていたんだ」

「いってごらん、なんだえ」

「平馬はまたうまくじゃじゃ姫を引っぱり出したようだな」

「そうかえ」

「行列といっしょじゃ、おたのしみができねえ。今度はどこかの旅籠へ二人きりで泊まって、だっこでねんねって寸法だろう。うまくやってやがる」

「そうかえ」

「どうだ、おめえもおれと二人っきりで、どこかへしけこんで、ねんねしてみねえか」

「まあ、おことわりだね」

「そうか、それならおれにもちょいと考えがあるぜ。それでもいいか」

「どんな考えだえ」

「知れたことよ。平馬は明日一番で薩埵峠をこえて、丸山の鉄砲をのがれようって腹だ。由井の宿にゃその渋川組が今夜泊まりこんでいる。そこへおれは駆けこんで、実はこれこれだとしゃべってやりゃ、明日まで待つことはねえ、平馬とじゃじゃ姫は二人っきりで歩いているんだ、今夜のうちに片がついてしまう。そうだろう、

お条」

まぼろしの鬼吉は油断なくぴたりとお条の左がわへ身を寄せて、そんな脅迫をしてくる。

その由井の宿はもう程近いらしく、向こうに二つ三つ宿場の灯が見えてきている。

今夜の月の出は四ツ（十時）すぎになるはずである。

死　闘

「どうだ、お条、これでも、おめえ、おれとねんねはいやか」

鬼吉は油断なくお条の腕あたりのそでをつかんで脅迫してくる。

「ごめんだねえ。あたしはそんな手に乗るほど甘くできていやしないのさ」

お条は冷たく突っぱねてやる。こうなれば鬼吉のすきを見て殺してしまうよりほかに手はないと、とっさに決心したのだ。

「ふうむ。じゃ、おめえはおれが渋川組へ御注進に駆けこんでもいいっていうのか」

「鬼吉、あたしのいうことをよく聞いておくがいい。悪党のうちにもいろいろあってね、おまえという悪党は、もとはあたしが平馬さんを助けたいばかりにここでおまえに身をまかせても、おまえは、ざまあみやがれ、とうとうおれの手に乗りゃがったとわらって、やっぱり平馬さんを殺してしまうやつなのさ。そうだろう、鬼吉」

お条はいかにも相手をけいべつしたように高飛車に出る。

「ふうむ、そこまで見ぬいているんか。感心だなあ、ほめてやるぜ」

鬼吉は平気をよそおって、せせらわらいながら、

「それで、どうしようってんだ、お条」

と、ずぶとく挑戦してくる。

「ついでだから、もう一言教えてやろう。本当は、おまえ、十年前に女房を大名に横取りされたのが悔しくて、その大名の家をつぶした上、

取られた女房に面と向かって、ざまあ見やがれといってやりたいんだろう」
「よく知ってるなあ、それがどうしたっていうんだね」
「あたしがその女房なら、おまえにこういってやるな。――あんたはかわいい女房を人に取られて、その男の悔しい無念だの一念を、十年もの長い間、こじきにも劣る煩悩の山犬になって燃やしてきたのかえ。男ならもっとほかに生きようもあったろうに、情けない人なんだねえとね。たぶん、おまえのおかみさんも十年の切ない恋が一度にさめて、涙さえ出ないだろうよ」
鬼吉はさすがにぐっと言葉に詰まったようである。
まさか、お粂の口からこんな痛烈な罵倒が出ようとは、思いもかけなかったのだろう。いちばん痛いところをぐさっと一つえぐられて、次にくるものは気ちがいじみた殺意でしかない。この男はそういう山犬の根性しか持っていない下劣な人間なのである。
「お粂、おめえのいうことはもうそれだけなのか」
案の定、鬼吉の全身に、どうしてくれようかという忿怒が火のようにうずをまいてきたらしく、そでをつかんでいた右手がつとお粂のひじの関節へかかってきた。
お粂がそれを振り切って攻勢に出ようとすれば、無論その関節の手に腕力をこめて痛めつけ、相手のひるむすきに次の技をかけてくる気だろうが、お粂は別に少しも反抗しようとはしなかった。
「ふん、おとなしいんだな、お粂。もっとも、おれは山犬だからな、一度ねらった雌はのがしたことがねえんだ」
ちょっと当てが違って、もう一度鬼吉がせせらわらった時、うっかり忘れていたうしろの右助が、ふいに鬼吉の背後から無言で力いっぱい組みついてきた。

「うぬっ、下郎――」
鬼吉はとっさにのどへからみついた右助の右腕を引っつかみ、身を沈めて前へ背負い投げに出ようとしたが、行者の命があぶないと見た右助は、ちゃんと腰を落として死に物狂いでのどを絞めつけている。多少体術の心得がある上に、人並みにすぐれた腕力を持っている右助だった。
「う、うっ――くそっ」
しかし、鬼吉もまたへびのような強靱な体力と、我流ながらあらゆる手段を身につけている悪鬼なのである。背負い投げがきかぬと見ると、人間技とは思えぬような力で首に力を入れ、じりじりと必死に前かがみになって右助の腰をうかしにかかる。普通の人間なら、もうそろそろ呼吸が詰まって落ちなければならないはずなのだ。
「うぬっ」
右助は躍起になって、のどにからんだ右腕に力を入れなおし、ぐいとうしろへ引きもどそうとした。
その力を利用して、鬼吉は地をけるように逆にうしろへ跳ねかえったのである。意外なこの奇襲に、若い右助は見事に引っかかってしまった。それはしなうだけしなった青竹が跳ねっかえるように、右助と鬼吉の体は一つになって、どっとうしろへ仰向けに引っくりかえっていたのである。
その引っくりかえっていったところが幸い道から砂浜のほうへ外れていたので、下になった右助は後頭部をひどく打たずにすんだが、思わずのどにからんでいた手がほどけたので、敏捷無類の鬼吉は倒れたとたんくるくると体を砂浜のほうへ二つ三つ横転させて、
「さあ来い、下郎」
すっくと立ちあがった時には、もう道中差しを引き抜いてかまえていた。
「うぬっ」

右助が不用意に起きあがれば、その立ちあがろうとするところを一突きにされてしまう。

「立たねえか、下郎」

腹立ちまぎれの鬼吉は、右助の足のほうから切っ先を胸のあたりへつけているから、右助はどうすることもできない。

「不精な野郎だ。立ちたくねえんなら、そのまんま突き殺してやるから、念仏でもとなえろ」

鬼吉は勝ち誇ったようにそんな悪態をつきながら、その目はこんどこそ油断なく往来にぼうぜんと立っているお粂のほうへもちらっちらっとへびのように光っている。

「お粂、おめえ今夜はばかに神妙なんだな」

手も足も出ないと見た鬼吉が、ふふんと鼻の先でわらいながら、ぐいと道中差しの手に力を入れて、一気に右助のほうへ殺到しようと身構えをとったとたん、

「ばかっ」

耳へ跳ねっかえるような一喝(いっかつ)と同時に、お粂の手から鋭いつぶてがやみを切って飛んだ。

「う、うっ、畜生、――やりやがったな」

鬼吉はこめかみのあたりをがあんと金づちで殴りつけられたような激痛を感じ、よろよろとよろけて、たかが石ぐらいと、それでもしぶとく立ちなおろうとしたが、急に目の前が真っ暗になってきて、くそっくそっと思いながら、それっきり意識を失っていた。

お粂が投げたのはつぶてではなく、卵ほどの赤銅の分銅で、それに一丈あまりのナンキン鎖がついているから、鬼吉を倒した分銅はたちまちお粂の手もとへかえり、二尺ばかりの鎖の先でひゅっひゅっと円を描きながら第二の攻撃にそなえている。この鎖鎌(くさりがま)まがいの分銅が、鬼吉を倒すためにお粂が考えついた武器だったのだ。

砂浜へくずれるように倒れていった鬼吉は、それっきり身動きひとつしない。

それを見さだめたお粂は、分銅を振るのをやめて、手早くふところへしまい、ぽかんとそこ

へ起きあがってあぐらをかいている右助のそばへ寄っていった。

「右助、おまえどこもけがをしなかったかえ」

肩へ手をかけて顔をのぞきこむと、

「すまねえです、行者さん」

右助は子供のようにべそをかきながら、ぽろぽろと涙がほおにあふれてくる。

「泣かなくたっていいじゃないか。ばかだねえ」

お粂はそこにころがっている自分のふろしき包みをひろって、

「さあ、行こうよ。もう平馬さんたちがくる時分だわ」

と、右助の腕をつかんで引きおこしてやると、

「すみません。それおれが持っていくです」

右助はお粂の手からふろしき包みをとって、肩をならべてしょんぼりと歩き出す。

あいよる心

「右助、どうしようか。あいつが息を吹きかえすと困るねえ」

しばらく歩いてから、お粂がいった。

「あいつ死んだんじゃないんかね、行者さん」

「たぶん、死にゃしないと思うのよ。やっぱり、とどめをさしてきたほうがいいかしら」

「おれはだめです。おれはあいつに負けたんだ。なんの役にもたたねえ男なんです」

右助はがっかりしているようだ。鬼吉に負けたということが骨身にこたえたのだろう。

「しっかりしておくれよ、右助。おまえにそんなことをいわれると、あたしまで心細くなっちまうじゃないか。おまえはあいつに負けたんじゃないわ。あんなしぶといやつとやるのははじめてなんで、おまえはあそこでもう勝ったと思った、だから失敗したのよ。そうなんだろう、右助」

「おれよくおぼえていねえです」

「あいつに負けたのはあたしのほうよ。左のひじをつかまれて、右手はあいていたけど、うっか

り動くとあいつはあたしを絞め殺す気だった。だから、あたしはじっとしていたのよ。そのうちにおまえがきっと助けてくれると思っていた」
「行者さん、本当にそう思ってくれるかね」
「だって、おまえ本当にあたしを助けてくれたんじゃないか。いやだなあ、そんな浮かない顔ばかりして。あたしはおまえを命の恩人だと思っているのよ」
お粂は我にもなく右助の腕をしっかりとつかんでいる。
「行者さんがそう思ってくれるんなら、おれ、こんど死んでもあいつに負けないです。おれ、こんどどんなことがあっても、行者さんをまもってみせるです」
「きっとだよ、右助。あたしはおまえだけがたよりなんだからね」
「すまねえです。おれ、もう決して油断はしません」
いい男なんだなあと、お粂はしみじみうれしかった。
「ねえ、どうしよう、右助、やっぱり、とどめを刺してきたほうがいいかしら」
「なんなら、おれ行ってきてもいいです」
「でもねえ、あの時とどめを刺してきたんならとにかく、本当は、あたし、人は殺したくないのよ。おまえにもそんなことさせたくないわ。どっちが切るか切られるかの場合ならしようがないけれど」
お粂は迷わずにはいられない。といって、鬼吉は息を吹きかえせば、こんどこそ渋川組のほうへ駆けこむかも知れないのである。
そんなことを考えて、つい足がおそくなっていたのか、
「おい、そこへ行くのはお粂か」
と、ふいにうしろから平馬が呼んで大股に近づいてきた。
「あら、兄さん――」
「おまえたち無事か。どこもけがはなかったのか」
後から、福姫が息をはずませながら、小走りに追いついてくる。
「じゃ、兄さん、鬼吉の倒れているの見てきたんですか」
「うむ。――二人とも無事のようだな。道中差しに血がついていないようだから、たいてい大丈夫だろうとは思ったが、心配になるんでいそいできてみたんだ」
「ありがとう――。あたし、右助のおかげで助かったんです」
思わずそれが口に出るお粂である。
右助は黙っておじぎをして、すっと道端のほうへさがっていた。
「そうか、それはよかった。お粂は鬼吉になにか脅迫されたのか」
「いうことをきかなければ、由井の宿の渋川のほうへ駆けこんでやるっていうんです。ああ、そうそう、あたしあいつのとどめを刺してこなかったけれど、大丈夫でしょうか」
お粂はいそいで聞いてみた。
「いや、それには及ばないだろう。鬼吉が渋川組のほうへ駆けこんでやるといったのはただの脅しで、あいつは我々といっしょに国もとへまぎれこもうというのが、今のところは本当の目的なんだ。――しかし、ああいう人間はいつどう気がかわるかわからないから、用心だけはしておこう」
平馬がそう話しているところへ、後の組の剣客笹川倉之助と島田重蔵の二人が追いついてきた。
「若先生、どうかなさいましたか」
笹川が進み出て心配そうに聞く。
「貴公たち、途中で砂浜に倒れていたやつを見かけなかったか」
「見ました。風よけ頭巾をかぶっているんで、顔はわかりませんでしたが、頭をなにか鈍器で一撃されていたようですな」

「わけは後で話すが、あれはまぼろしの鬼吉と名乗る凶賊なのだ。やっつけたのはこのお粂たちの組なんだが、——由井の宿には渋川組が泊まりこんでいる。まさか見張りを出しているようなこともないだろうが、お粂の組を先行させるから、貴公たちはその後から十分気をつけてついていってやってくれ」
「承知しました」
「お粂は今までどおり、いちばん先頭を切ってくれ。たのむぞ」
「はい」
「お粂、御苦労ですね」
そばからおなじようなかっこうをした福姫が、ねぎらうように声をかける。
「いいえ、お姫さま、なんでもありません」
お粂はあかるくおじぎをかえして、もう由井の宿のほうへ歩き出す。
右助が黙って肩をならべてきた。
——どうしたのかしら。あたしはもう福姫さまがちっともうらやましくなくなっている。
お粂はふっとそう気がついて、我ながらふしぎな気がした。
「右助、人殺しをしないですんで、本当によかったねえ」
「でも、行者さん、あいつ息を吹きかえすだろうか」
「あたしはまさか死んじゃいないと思うけどなあ」
「おれ、変な気がするです。あいつが死んじゃ後味が悪いし、息を吹きかえすと油断ができねえ。これ、どういうんだろうな、行者さん」
「あたしたち、やっぱり人がいいのよ。でも、あいつが息を吹きかえしたって、あたしはもう安心だわ。おまえがついていてくれるんだもの」
お粂は本当に安心した気持ちで、そっと右助の腕につかまっている。
由井の宿は通り抜け四町あまり、人家百軒ほどのほんの小さな宿場町で、二人は事もなくいつの間にか通りすぎていた。

その夜、平馬は鬼吉のことがあったので、あくまでも用心して、倉沢泊まりの予定をかえ、じゃじゃ姫の足では少し無理だったが、思いきって薩埵峠を越え、興津泊まりにしたのである。

極道者

翌朝——。
福姫の行列は予定の時刻に蒲原の本陣を出立した。
無論、駕籠には身代わりの腰元が乗り、行列の人数も半分になっている。
先供の先頭挟箱の次にはあいかわらず小堀孫作がつき、駕籠わきの大草源太郎は、今日はその必要がないから老用人塚越助左衛門と肩をならべて歩いていた。
今日は七里あまり歩いて府中泊まりだから、そう苦しい道中ではない。大体、女づれにしては今までの道中が少し無理すぎたのである。
とにかく、塚越老人は昨夜からひどくふきげんで、むっつりと黙りこんでいる。
——腹が立つというより、むしろ姫君のことが心配でたまらないのだろう。
肩をならべて歩いている源太郎には、よくその気持ちがわかる。
源太郎としては、だいいちこんどの小森家の縁組みからして、本当はあまり賛成ではなかった。福姫はもともとわがままで、下世話な言葉でいえば才気走っている上に強情で跳ねっかえり娘だから、当節の大名の奥方などにおさまっていられる性分ではない。自分でもそれをよく知っているから、十九の年になるまで縁組みなどには耳さえかさずにきた。
塚越老人ももう半分はあきらめていたのだが、こんど土井老中からの橋渡しで小森家からの話があると、そこは孫娘という関係があるから、できれば一度は人並みに福姫の輿入れ姿が見たかったのだろう。

しかも、老人は小森家の中橋家老から若殿の不遇をかこたれ、茂右衛門の苦衷を聞かされると、よし、それなら将軍の娘という格を笠に、小森家の騒動の禍根を断ってやろうという老いの客気にも駆られたのだろう、とうとうこの間の見合いという段取りにまで話が運んでしまったのだ。

　というのは、中橋家老の言葉の中に、この縁組みが進んでいるという名義だけでも借りたいのだという切なる希望があったからで、そうするには見合いだけでもしておかないと名分が立たないからでもあった。

　しかし、塚越老人にしても、源太郎にしても、福姫の颯爽たるわがままぶりを見れば、若殿のほうでたいてい二の足を踏みはしないか、だいいち、じゃじゃ姫がおっとりと育った柔弱な大名のせがれなど、とうてい気に入るはずはあるまいと、この見合いにはほとんど期待はかけていなかった。

　それが、意外にも、見合いの後で、じゃじゃ姫のほうから若殿といっしょに国もとへ行くといい出したのである。

　それをやっと伊勢まいりということにしてここまで事を運んできたのだが、そうと話がきまった時から、老人はどう考えているか知らないが、源太郎はこれはただではすまない道中になると、すでに覚悟はしていた。

　が、事実、道中へ踏み出してみると、いや、向島の屋敷を前夜福姫が平馬にうまく誘い出されたことからして、自分などの覚悟していたことはまったくおめでたい覚悟だったので、小森家の計略に、というより平馬の策にまんまと翻弄されていたのである。

　しかも、見合いにきた亀之助は身がわりの平馬で、姫君はそれをちゃんと知っていて平馬に心をひかれてしまった形跡さえある。それと薄薄わかってから、源太郎は唖然としてしまったが、事態がここまできてしまっては、もう成り

行きにまかせるほかどうしようもないのだ。

　そして、源太郎はひそかに思うのである。

　――じゃじゃ姫だって女なのだ、好きな相手ができて、その相手と苦労するのだから、へたに生きた人形のような大名の奥方にされるより、そのほうがむしろしあわせかもしれない。

　ただ、世間の手前、というより公儀の手前、これをどう収拾したものか、これが問題である。その手段を今から考えておかないと、あの二人を不幸にするばかりでなく、多くの犠牲者が出ることになる。

　そんなことを考えているから、源太郎も老人に話しかけて、なぐさめてやるなどということは、ついうっかりしていた。

　蒲原から由井をすぎて、行列はやがて倉沢の立て場へかかってきた。これから薩埵峠を越えて、興津の宿で中食をとり、昼からは四里足らず歩いて府中泊まりということになるのだが、源太郎は峠にかかる前に小休みをして、ここでひそかに駕籠から身がわりの腰元をおろした。

　塚越老人は万事源太郎まかせで、ぼうぜんと姫君のことばかり考えているらしく、そんなことはまったくうっかりしていたようだ。

　行列はやがて薩埵峠へかかり出した。

　薩埵峠はまた富士見山ともいい、東は駿河湾を一望のうちにながめ、北東に富士の全貌がくっきりと目に近い絶景の地である。

　その峠を八分どおりのぼった時、

だあん。

　向こうの小高いしげみの中から銃声が一発全山にこだまして、弾は見事に姫君の駕籠の屋根から斜めに背へ貫いていた。

「走れ。とまるな。走れ、走れ」

　源太郎がとっさに大声に叱咤して、行列は一気に峠の頂上へのぼり、そこから足を早めて一糸乱れず興津へ下ったのである。

「源太郎、あぶなかったなあ」

　興津で中食を取りながら、塚越老人がはじめ

てロをきいた。もし駕籠に福姫が乗っていれば、おそらく胸から背へ弾丸をうけて即死していたろう。
「敵は丸山蘭右衛門ですからな、まずあの弾はのがれられません」
「どうだろう、あの駕籠は空だと気がつかなかったろうか」
「いや、もう気がついているでしょう。おそらく、はじめは駕籠わきについているはずの平馬どのをねらうつもりだったのでしょう。しかし、平馬どのも茂太郎どのも見あたらず、その上、行列の人数も半分になっている。敵はそれをこっちの計略だと思ったんでしょうな。駕籠は空と見せかけて、その実今日こそ福姫が乗っていると考えて発砲した。しかし、蘭右衛門ほどの名人ですから、その手ごたえで、やっぱり空だとわかった。では、本物は後から平馬どのたちに守られてくると見て、今ごろ場所をかえてまだ待ち伏せしているんでしょう」
「すると、あの極道者が昨夜やったことだけは、あまり小言もいえんな」
「そういうことになります」
「一体、あの極道者はどこで行列を待っている気かな」
「それは、やがて連絡があるでしょう」
まさか、もう当分行列へはもどらないでしょうとはいいかねる源太郎なのだ。
「あの極道者にはかなわぬ」
しようがないというように、老人ははじめて苦わらいをもらしていた。
老人には福姫をさらっていった平馬が本当に極道者に思えるのだろう。

島田の宿

そのころ——。
平馬たちの一行は、その夜行列が泊まるはずの府中の一駅先、鞠子の宿で中食をとっていた。こっちはこれから宇都谷峠を越えて、岡部、藤

枝を通りぬけ、六里あまり歩いて島田の宿泊まりの予定だから、府中泊まりの行列組とは十里あまり先行することになるのである。
平馬たちが昨夜薩埵峠をこえて興津の宿へ入ったのは、やがて夜も四ツ（十時）近かった。
ここも町の通りぬけ五町、人家百五十軒という小さな宿場で、総勢二十人がふいに行っていっしょに泊まれるような大きな旅籠屋はない。そこで、平馬と福姫は松岡たちの剣客組五人にまもられて清水屋という上旅籠へ無理に割りこみ、茂太郎は近習組八人と、若党米次郎、中間又三の十一人で大黒屋という旅籠屋へ泊まった。
お粂と右助は二人で商人宿の相部屋へ泊まったようである。
「お粂、おまえたちは我々のほうといっしょになれ」
平馬はそうすすめたが、
「いいのよ、兄さん、あたしたちのほうのことは心配しないでください」
と、お粂はそっとことわっていた。
お粂は右助の立場を考えているのである。右助は主人勘解由にいいつけられて忠実なお粂の家来にはなっているが、ほかの者とはなるべく顔を合わせないようにして、お粂にいいつけられたことづけ以外は、絶対に口をきこうとしない。あくまでも自分は手塚の家来だという意地をひそかに持っているのだろう。
お粂にはそれがよくわかるので、お粂もまた平馬と松岡以外の者とは、できるだけ近づくことさえさけていた。
いちばんのんきなのは福姫のお福さまで、
「平馬、お粂だけはこっちへ呼んでおあげなさい。一人では心細いでしょう」
と、旅籠についた時もいっていた。
「いや、お粂にはお粂の考えがあるようですから、思うようにさせておくほうがよいのです」
平馬は当たらずさわらずに答えておいた。
その平馬がいちばん心配したのは、今まで腰

元にかしずかれてなに一つ自分でする習慣のない姫君育ちのお福さまが、はたして自分の身の始末が自分でできるかどうか、たとえば旅籠にしても本陣とは違い、特別の寝所があるわけではなく、昨夜もふすま一重の隣座敷は剣客組が寝る次の間で、あまり上等ではない布団を、しかも平馬とまくらをならべて敷かれ、寝まきは洗いざらしの浴衣にどてらという普通の客とおなじあつかいなのである。

　が、平馬がわざと黙って見ないふりをしていると、多心まごついてはいたようだが、やればなんでもできるにはできるらしく、ちゃんと自分で着替えをして、一人で寝床についていた。そして、むしろそんな変わった生活が物珍しいらしく、

「平馬、手を貸してください」

　と、平馬の手を求めて、当然のようにその手をしっかりとつかみながら、朝まで一眠りしていたようである。

「お福さん、やればなんでも一人でできるんだねえ」

　今朝、朝茶をのみながらそういってほめてやると、

「なんでも一人でやらなければ、これから平馬が困るでしょ」

　と、福姫はうれしそうに、そんな味なことをいっていた。

「昨夜は少し無理な夜道をかけているから、今日はお福さんだけ駕籠にしようか」

「いいえ、歩けるから大丈夫です。これからはなんでも平馬といっしょにしてください。だれでもがすることを、福にできないことはありません」

「それはそうですな。お福さんはたのもしい」

　平馬はあかるく答えながら、たのもしいというより、一生懸命に普通の女になろうとしている福姫がむしろいじらしい気さえした。

　その日は六ツ半（七時）立ちにして、昼まで

に五里あまりの道を鞠子（まりこ）まで行き、そこで中食にしないと後の予定が狂ってくる。

　先頭は昨夜とおなじくお粂と右助、二番手は笹川倉之助に島田重蔵、三番手が福姫と平馬、四番手は茂太郎と松岡、以下二人一組みでつづいて、その間隔は大体三、四十間ときめてあった。

　が、どうしても福姫の足がおくれがちになる。こっちがおくれるとそれだけ前との間隔が開き、後との間隔が迫ってくる。

「お福さん、やっぱり駕籠にしたほうがよかったようですな」

「そんなことありません。お粂だって歩いているのですもの」

　福姫は決して弱音は吐かなかったが、わらじになれない足はとうとうわらじずれができたらしく、鞠子の宿へ入るころは平馬の肩につかまり、歯をくいしばってびっこをひいていた。

　足の手当は鞠子で中食をとる間にしてやったが、これ以上歩かせるのは無理である。しかも、鞠子を出るとまもなく上り下り一里の宇都谷峠へかかるのだ。

　さすがに福姫もそこからは我を折って宿場駕籠を雇い、鞠子から島田まで六里あまりの道中はずっと駕籠を乗りついでいくことにした。

　おかげで昼からの道中は思ったよりはかどって、島田の宿へ入ったのはまだ明るい夕方の七ツ半（五時）ごろであった。

　翌日は大井川を越して遠州路へ入り、島田から十二里あまり、浜松まで強行する予定である。行列のほうは藤枝泊まりだから、約十五里ほどの開きができるのだ。

「平馬さん、明日はここへ又三を残して、行列のほうへこっちの無事を伝えておいたほうがいいと思うが、どうだろう」

　その夜、茂太郎は平馬にそう相談した。こっちは無断で福姫をここまで強奪してきてしまったようなものなのだから、茂太郎は責任者としてやっぱり塚越老人に申し訳ない気持ちがする

のだろう。
「それはわしも賛成だ。ついでに、これからはいちいち連絡は取りかねるようになるが、あまり心配しないようにといっておくほうがいいと思う」
　どうせ気やすめにしかなるまいが、こっちはこのまま作州津山まで行くのだから、そうそうは連絡は取りかねる。事がうまく落着するまでは、心を鬼にしてかかるほかはないのだ。
「若先生、敵の追撃のことは考えておく必要はありませんかなあ」
　松岡は二人きりの席でそっと注意してくれた。
「わしの考えでは、敵とはおよそ十里の差がある。夜通し急行しても、今夜は大丈夫だと思うがどうだろう」
「そうですな。それに、大井川があるから、今夜こっちを出しぬいて先へ出るということもないでしょう。できれば、明日は一番で大井川をわたることですな」
　松岡はそれで納得したようだ。
が、そこにわずかながら、こっちの計算ちがいがあったようである。
「平馬、福は明日も駕籠ですか」
　福姫は二人きりの座敷で、足のわらじずれの手当を平馬にさせながら、不服そうにいうのである。もう二人とも寝まき姿になってからであった。

いい気なもの

　福姫のわらじずれは右の足がことにひどい。親指と次の指との間がすっかり赤膚になって、その足の裏にかなり大きなまめさえできている。まめのほうは、今日、鞠子の宿で中食の時、小柄で切り裂いて水を出し、油薬が塗りこんであるから、もう一度薬を塗りなおしておけばいいのだが、これではとても明日歩くのは無理だ。
「明日はもう一日駕籠にしましょう。これでは

痛くて歩けないでしょう」
「いいえ、今夜一晩やすめばなおります」
「さあ、それは少し無理かもしれませんな」
「わらじだからいけないのです。草履ならなれているから大丈夫です」
「駕籠はゆれるから気持ちが悪いんですか」
　平馬がわらいながら聞くと、福姫はかむりを振ってみせて、
「せっかく二人きりで歩けるのに、駕籠ではつまりません」
　と、はっきりというのである。
「では、明日の朝まで様子を見ることにして、今夜はゆっくりやすむことにしましょう」
　平馬は印籠を床の間へおきに行ったついでに、行燈の灯を細くして、まくら屏風の外へ移した。
　今夜は平馬たちは二階座敷で、剣客組はその下の座敷を取っている。そのすぐわきが裏階段になっているから、敵に不意打ちをかけられるという心配はまずない。
「平馬、今夜はおやすみなさいをしてくれないのですか」
　平馬が屏風の中へかえると、福姫はまだ自分の寝床の上へ座っていて、そんな催促をする。昨夜、まくらにつく前に、黙ってくちびるをかさね、ふすま一重の向こうに剣客組が陣取っているのだから、おやすみなさいとそっと耳もとへささやいて寝かせてやった。それを今夜も当然のように待っているのである。
　年だけに成熟した福姫の女体は、いつも燃えあがろう燃えあがろうとしている。小田原の本陣では、平馬もあやうくその福姫の情熱にまきこまれそうな興奮を、やっと自制してきた。
　いわば、平馬はこっちの目的のために福姫を塚越老人の手から無断で強奪してきているのだから、こんど老人に会う時までは、とにかくきれいな体で福姫を老人の手にかえさなければ悪いと考えている。

が、そうはいきそうもない若い血が平馬の体の中にもともすればたぎってくるのを、今まではどうにかおさえてきたにすぎないのだ。しかも、今夜は隣のない座敷なのである。

——あぶないなあ。

平馬は自分でもそう思いながら、福姫とひざを突きあわせるように座って、

「姫君さま、おやすみなさい」

と、わざと軽く福姫の肩へ両手をおいた。

福姫の目が火のように燃えて、次にくるくちびるの愛撫を待っている。

平馬はできるだけ自制して、福姫の肩を静かに引きよせ、くちびるをあわせていった。いつもとは違うよそよそしいくちびるのあわせかたである。

そんなことで満足する福姫ではなかった。

「いやっ、抱いて、平馬」

福姫はたぎってくる情熱にあえぎながら、大胆にも男のひざへ自分のひざをかさねるようにしてすがりつきざま、身をよじらせて平馬のうなじへ両手をからんできた。

平馬は思わずその胸を抱いて女体を支え、強くくちびるを押しつけていく。それがいつものやりかたなのである。そして、激しく舌を吸いあってから、心のこりの愛撫をおわる。

昨夜もそれだけでおやすみなさいをしたのである。

が、今夜はそれだけではどうしても満足しきれないものが、福姫にも平馬にもある。平馬はそれを恐れてはじめは自制していたのだが、燃えるような女体を抱きしめてしまっては、もうくちびるの愛撫だけでは離れがたい。

「平馬——」

福姫もまた、男のくちびるが離れようとすると、切なげに男の名を呼びながら、次第に夢うつつな甘い感情の中へ意識をさそいこまれてあえいでいる。男にどうしてもらえば満足するのか、福姫にもその知識だけはあるらしく、女体

は全身の力をぬいて、とけゆるんだようにそれを待っているのだ。

平馬はその女体の興奮にまきこまれながら、ついにくちびるをかさねたままのしかかるように福姫の体を体で押したおしていた。

そこにはもう一切の理性を失った男と女の火のような愛欲の世界しかなかった。

福姫は、はじめてその夜、女になったのである。すべては男のなすがままに、自分ではどうする力もなく、なにか恥ずかしいような、うれしいような、夢のうちにすぎたひとときではあったが、女体は完全に平馬のものにされた一瞬をはっきりと感じている。

その時から福姫の世界はすっかりかわってしまったのだ。もう平馬という男を別にしてはなにも考えられない。

「平馬、もう一生、福のそばを離れてはいやですよ」

福姫はしっかりと平馬の腕を胸に抱いて、いつまでも離そうとしなかった。

「福は平馬が好きで好きで、どうしていいかわからないの」

そんなことも口走っていた。

「お福さんは平馬といっしょに浪人ぐらしができるかなあ」

「できますとも——。あの植徳の離れでくらすのですか」

「たぶんそうなるでしょう。わしにはほかに家がないんだから」

「福の屋敷へくるわけにはいかないの」

「それは、公儀がゆるさないかもしれない。だいいち、わしは黙ってお福さんを女房にしてしまったんだから、きっと助左老人が怒るだろうと思うんだ」

「そうですかしら。福があやまってもだめですかしら」

「なんといってあやまるつもりです」

「福はもう平馬をだんなさまにしました。いっ

しょに屋敷においてくださいといってみます」
「さあ、世間というものがありますからなあ」
「だめですかしら――だめかもしれませんね」
福姫にも、これは難しいことになりそうだとは、よくわかっている。
「かまいません。津山の仕事が片づいたら、福は平馬とどこへでもいっしょに行きます。江戸へ帰りさえしなければいいのですもの。そうでしょう、平馬」
「お福さんにその覚悟さえあれば、なんにも心配などしなくてもいいんです。後は平馬がきっとうまくやってみせます」
半分は無邪気な福姫をからかいながらの甘い寝物語で、平馬には必ずしも自信があったわけではない。そのくせ、平馬はすでにわがものにした福姫の豊かな乳房を平気でもてあそんだりしていたのだから、我ながら男などというやつはいい気なものだと、ひそかに感心させられる。
その夜、平馬の寝床はとうとうからっぽのまま、朝を迎えたのである。

強情っぱり

翌朝――。
平馬たちの一行が島田の宿を立ったのは、やがて六ツ半（七時）をすぎるころであった。
「できれば明日は一番で大井川をわたることです」
昨夜そういっていた松岡の注意を決して忘れていたわけではないが、それほどまでにしなくてもという気持ちが平馬にはあったし、連日の強行で一同もつかれているだろうからという思いやりもあったのだ。
島田から金谷へは一里の道で、ほぼその中間に大井川がある。その大井川を明け六ツの一番でわたるとすれば、どうしても七ツ半（五時）前に起き出さなければならないのだ。
出発が少しおくれたかわりに、平馬は黙って福姫のために駕籠を一丁たのんでおいた。

「これへ乗るのですか、平馬」
福姫はちょっと不服そうな顔をしたが、平馬がうなずきながら目でわらってみせると、ちゃんとそれがわかるらしく、お福さまはほんのりほおを赤らめて、おとなしく駕籠に乗っていた。
今日も先頭はお糸と右助で、隊列の順序は昨日のとおりである。
大井川を川人足の肩で無事にわたり、福姫は金谷で駕籠を乗りついで、金谷から新坂へ二里、この二里は坂をのぼったりおりたりする道で、金谷の宿を出るとすぐに金谷坂へかかる。
これをのぼっておりたところが菊川村で、ここに立て場があり、ここからまた佐夜の中山へかかるのである。
先頭を歩いているお糸は、今日は朝からきげんがよくなかった。
昨夜も平馬組と茂太郎組は別々の旅籠へついたが、無論お糸は右助と二人で別の安旅籠へ泊まった。旅籠へついた時は、なまじ主従だなどというより、夫婦だといっておいたほうが変に疑われないですむのである。だから、興津へ泊まった時も宿帳にはそう書いておいたのだ。
昨夜も夫婦になって泊まったが、興津の時の相部屋と違って、島田では安旅籠ながら四畳半の一部屋へ入れられた。食事がすんで、まくらをならべて寝床を取られたが、夫婦と名乗っているのだから、その寝床がぴたりとくっつけて敷かれている。
お糸はそう大して気にもしなかったが、右助はなんと思ったか、さて寝る段になると自分の寝床を掛け布団ごと二つに折ってしまって、寝ようとしないのである。
「どうしたのさ、右助。おまえ寝ないの」
先に寝床に入っていたお糸が聞くと、
「おれはこれでいいです」
と、右助は廊下のほうを向いて座っているのだ。
「そんなことをいったって、寝ておかなければ

明日くたびれて歩けやしないよ」
「おれは座っていても、結構寝られるです。それに、おれは行者さんの番についてきているんだから、寝ていては役に立たねえです」
「なにいってるのよう。鬼吉ならもう大丈夫じゃないか、あんなにやっつけてあるんだもの」
「行者さん、それは油断てもんだ。鬼吉は普通の人間じゃないから、どんなことで傷をなおして行者さんをねらいにくるかもしれねえです。それに、敵は鬼吉ばかりではねえです」
「渋川組だって、今夜は十里ぐらいおくれているはずなんだよ。そんなにびくびくすることはないじゃないか。いいからお寝っていうのに」
「行者さん、おれにかまわないでください。九ツ（十二時）がすぎたら、おれ勝手に寝るです」
「じゃ、勝手におしよ。もう知らない」
お条は中っ腹になって、くるりと右助のほうへ背を向け、そのままぐっすり眠ってしまったのである。

そして、今朝目をさましてみると、右助は二つに折った自分の寝床の上へ突っ伏すようにして、座ったまま眠っていた。
しかられて泣き寝入りした子供みたいなかっこうで、いじらしいなあと思うにつけても、お条は右助の強情さがなんだか憎らしい。
——あたしに遠慮しているのか、それとも手塚からやかましくいいつけられてきているのかしら。
自分が気楽に眠りこけていただけに、そんな堅苦しい忠義なんかきらいだと、お条は妙におもしろくないのである。
案の定、右助も今日は寝不足なような顔つきで、朝からろくに口をきこうともせず、むっつりと歩いている。
「右助、おまえやっぱり寝不足なんだろう」
「そんなことないです」
「じゃ、なんだってそんなふきげんな顔をしているのさ」

「おれより行者さんのほうがふきげんな顔をしているです」
「あたりまえじゃないか。女は男に寝顔を見せるもんじゃないっていうことを、おまえ知らないのかえ。夜っぴて寝ず番されていれば、あたしだって窮屈でぐっすり眠れやしない」
「そうでもないです。行者さんはよく眠っていたです」
図星だっただけにお条はむかっときて、
「なにさ、その口のききかたは。おまえ、あたしに恥をかかせる気なんだね。——だから、おまえも寝たほうがいいって、あんなにゆうべいったじゃないか。強情っぱり」
口から出まかせにぽんぽんやっつけながら、自分でもなにをいっているんだか、わからなくなってくる。
ちょうど道は金谷坂のくだりになって、一方は雑木林の崖、一方はあまり深くない松山がだらだらとつづいているあたりへかかっていた。

「わあっ」
「出たあっ」
ふいに、いま自分たちがくだってきた坂の上のほうで、どきりとするような絶叫が耳を突き刺してきたので、思わずお条がふりかえってみると、三十間ばかり上で福姫の駕籠が松山のほうへころがり、駕籠屋が二人松山のほうへどんどん逃げていく。その駕籠の前へ二人の浪人者が抜刀して立ちふさがり、後から一人、つづいてまた二人、崖の林の中から道へ躍りあがってくるのがはっきりと目についた。
自分たちのうしろを十間ばかり離れて歩いていた笹川倉之助と島田重蔵の二人が、これも抜刀して急に駕籠のほうへ坂道を走りのぼっていく。
「右助、渋川組らしいわ」
どうして十里もおくれているはずの渋川組がこんなところへ先まわりをしていたのかわからない。が、崖から次々と躍りあがってくるのは

たしかに渋川組の浪人たちで、駕籠の前へ五人、うしろへも何人か飛び出して、後につづく味方を遮断する戦法に出たようだ。

　つまり、敵は、福姫の駕籠と、その駕籠のすぐ後についている平馬とを、前後から取りかこんだことになるのだ。

「畜生、行くよ、右助」

　お粂はかっとなって、我流の分銅をふところからつかみ出し、いきなりそっちへ走り出そうとした。

「いけねえです、行者さん」

　そのうしろから右助が組みついて、お粂を羽交いじめに抱きとめたのである。

「どうしてさ、右助」

　びっくりしてお粂が聞く。

「行者さんが行っても、今日はなんの役にも立たねえす」

「ばかっ、あたしは平馬さんをまもりにきているんだ。役に立つ立たないじゃない。お放しったら」

「放さねえです。あんなところへ行けば、ただ犬死にするだけのこった」

「あたしは死んだっていいんだってば。放さないか、ばか」

　前へ出てもだめだと思ったお粂は、やにわに力いっぱい地をけってうしろに反りかえったのだ。

　あいにく右助のうしろは崖だった。ふいをくった右助は、先夜の鬼吉の時とおなじ轍で、あっというと、お粂を羽交いじめにしたまま、雑木林の崖下へどどっと転落していったのである。

銃声三度

「お福さん、敵だ」

　駕籠の行く手の崖下から、浪人組らしいやつが二人抜刀してふいに躍りあがってきた時、そんなことは絶対にありえないと思いこんでいただけに、平馬は愕然として叫んだ。

　とたんに、駕籠屋が、わあっ出たあというなり、福姫の駕籠をどすんとそこへ投げおろして、一散に右手の松山の中へ逃げ出す。

　そのはずみに、駕籠は一度道から一尺あまり低くなってそれからゆるい勾配の松山になっていくくぼ地のほうへころげ落ちていく。

――あっ、お福さん。

　平馬はすぐにその駕籠のそばへ走り寄ろうとしたが、そうはいかなかった。

　じゃまな駕籠がなくなった目の前へ、今日は覆面をしていない渋川組の浪人が二人、必死の顔色で抜刀を突きつけてきたのである。

　しかも、そのうしろから一人、また二人、目に入ったのは五人だ。

　この時、うしろの茂太郎組との間隔はそうひらいていなかったらしく、

「あっ、若先生――」

　松岡が悲痛な声で呼んだのを、たしかに耳にしていた。

　その茂太郎組との間へも、浪人組が何人か躍り出してきたのを気配で感じて、しまった、完全に敵の術中へおちいったと見て取った平馬は、

「死なばもろともですよ、平馬」

と、昨夜も甘くささやいていた福姫の言葉を一瞬はっきりと思いうかべ、

「えいっ、――とうっ」

　次の瞬間には猛然と鬼になって、もう二人の敵のほうへ火のように大胆な切りこみを敢行していた。一刻も早く福姫のそばへ行ってやりたい、別々には死にたくないという気持ちしか平馬にはなかったのだ。

「わあっ」

「ううっ」

　先頭の浪人二人は、まさかこんな思いきった切りこみに出るとは思いもかけなかったのだろう。しかも、敵にはいま崖から駆けあがってきたばかりの呼吸のみだれがある。あっとわずかに抜刀を振りまわしただけで、一人は松山のほ

うへ、一人はいまあがってきた崖下へ、手負いになってぶっ倒れていく。
「さすがだなあ、平馬」
　その前に立ってにやりと引きつったような冷笑をうかべながら抜刀したのは、長身、三十七、八とも思われる、ひどく冷たい殺気を持った男だ。
「大崎郷斎だな」
　平馬はそう直感して、とっさにぴたりと青眼につける。図星だったらしく、
「来いっ、小僧」
　すっと相手の顔から冷笑が消えて、敵はややこぶしあがりの高青眼にとる。自分の位置が坂の下にあるからだ。
　大崎郷斎は鉄砲の丸山蘭右衛門といっしょに特に途中から手塚が渋川組へ送ってきた男で、——松岡の話では、甲源一刀流の達人だが、腕前は大場鬼七と甲乙なし、ただ秩父の山育ちだから、ひどく足が達者だと聞いている。
　なるほど、いま崖を駆けあがってきたばかりだが、前の二人とちがって、呼吸のみだれは少しもないようだ。
　大崎のあとからあがってきた二人の敵は、ちょうど前から引きかえしてきた剣客組の笹川と島田をそこで食いとめている。
　自分のうしろでは茂太郎と松岡が浪人組に食いとめられて闘っているようだし、おそらくその茂太郎組の後につづく近習組は、峠の下り口あたりで関谷組を食いとめているにちがいない。
　こっちはまったく敵に三分されてしまったのだ。しかも、いちばん心配なのは、こっちの体の動きが静止すると、敵には蘭右衛門の鉄砲と渋川一心斎の短筒があることだ。
「えいっ」
「とうっ」
　平馬はなんとかして切って出たいが、さすがに大崎の構えにはそのすきがなく、こっちがじ

れるのを待って逆襲してやろうという底力さえ持っているようだ。
　——お福さん。
　平馬は福姫のことが気になって、じりじりと胸を焼かれてくる。
　福姫はあっという間に駕籠もろとも道からくぼ地へころげ落ちて、幸いもんぺ姿の軽装だから、下へ落ちた時はころりと駕籠から外へ体がころがり出していた。
　お福さん、敵だといった平馬の声をたしかに耳にしている。
　すでにわあっという敵味方の必死の喚声が頭の上の道からまきおこっているのだ。
　——平馬、大丈夫かしら。
　福姫の胸の中には平馬のことしかない。
　駕籠にゆられている間中もそうだった。平馬はもう福のだんなさまなのだと思うと、甘くしびれるようなよろこびが体中にあふれて、どうしてこんなにうれしいのかしらと、自分でもふしぎになってくるくらいだった。
　そして、おもいは当然、だれも知らない二人きりの世界で、昨夜はじめて女にされていたあの強烈な感情の興奮の絶頂を夢のようにたどりながら、恥ずかしいような、だからもう平馬は福のだんなさまなのだと安心なような、ついうっとりとそんなことばかり考えているうちに、突然、駕籠からほうり出されていたのだ。
　一瞬にして夢からさめたというより、福姫は頭より先に体へうけた衝撃でまず身の危険を感じ、次の瞬間、平馬はと考えながら、くぼ地の中の草の中へ起きて座った時には、無意識にもうふところから短筒を取り出していた。
　ふだんおもちゃにしつけている短筒だから、武器を持ったという気持ちではなく、それを手にしたから獲物をさがしていたので、思わず松山を見あげた目に、福姫はその松の木の手ごろな枝の上へ足を踏んまえて、鉄砲をかまえている男を見た。

――あっ、蘭右衛門。

銃口はあきらかに道のほうをねらっている。平馬のことしか頭にない福姫は、だんなさまがあぶないと直感したとたん、

だあん。

と、無造作に短筒の引き金をひいていた。

だあん。

同時に、蘭右衛門の銃口からも火を吹いたが、

「わあっ」

その蘭右衛門は銃声といっしょにどっと松の木から下へ地にたたきつけられるように転落したっきり、急には起きあがれないようである。

「平馬――」

福姫は立ちあがるなり道のほうを向いて、夢中で平馬の名を呼ぶ。

「えいっ」

「おうっ」

その福姫の目の前で、平馬と大崎は激しく飛びちがったが、坂の下へ飛んで平馬が颯爽と立ちなおった時、大崎はがくんと両ひざをついて、そのまま前のめりにばったり倒れ伏していく。

「平馬――」

福姫はまたしても金切り声をあげて平馬を呼んだ。

だあん。

こんどは坂の上のほうから一発、銃声が鳴った。なにをねらったのか、無論これは渋川の短筒にちがいない。

「お福さん――」

平馬が目をぎらぎらさせながらこっちへ駆けおりてくるのを見て、

「平馬――」

福姫もまた飛び立つ鳥のように平馬のほうへ走り寄っていく。

男の返事

お粂は、右助にうしろから羽交い締めにされたまま、夢中で地をけった自分の体があっという右助の声と同時に一瞬宙にういた時、しまったと思った。

崖から落ちたのだ。このまま二人とも死ぬかも知れない。はっきりとそう思いながら、その時はもう観念の目を閉じていたらしく、ざ、ざあ、めりめりという雑木林の枝葉のしない折れていくすさまじい音を耳に聞き、たちまちどすんと谷底へたたきつけられた激しい衝撃を体に感じて、意識を失ったようだ。

「う、うっ」

耳もとで異様な右助のうめき声が聞こえ、しかも右助の両腕はまだ必死に自分をうしろから抱きしめている。

――死んだのかしら、あたしも右助も。

真っ暗の夢の中でおずおずとそんなことを考えながら、だあんという銃声を耳にしたようだ。

だあん。

次の銃声は上のほうでもっとはっきり谷間へこだまして、はっと目をあいていた。

木の間の枝葉からもれてくる金色の光がいくつも目に痛いように突きささってきて、その目で見たかぎりは上を雑木林でさえぎられた絶壁の途中に自分たちは引っかかっているようだ。

――まだ命があるのかしら。

こんどは急に怖くなって、そっとあたりを見まわすと、自分たちの体はどうやら急崖の地の瘤のような草むらの中に落ちているようだ。

だあん。

三発目の銃声はもっと坂の上のほうでしたようである。

むくりと右助の胸の中から起きあがって座ったお粂は、歯をくいしばったくちびるの間から少し血を出してまだ正気づかずに目をつぶっている右助の顔を枯れ草の中に見た。

そこはやっと三坪ほどの地の瘤で、右助の体はその突端の若木やぶの根方で支えられてとまったらしい。

その下はまだ二丈あまりの急崖になっている

ようだ。
「若先生、とにかく菊川の立て場までおいそぎください」
すぐ頭の上で松岡の声がいっているが、上はしげみにさえぎられていて顔も姿も見えない。
「いや、お粂の姿が見えないんだ。崖へおちたのかも知れない」
平馬はそこからしきりに崖下をのぞいているような気配である。
「後は拙者が引きうけます。茂太郎どの、お願いいたす」
「心得た。いそぎましょう、平馬さん」
「じゃ、たのむよ、松岡。――歩けるか、お福さん」
福姫の声は聞こえなかったが、数人の足音が急に坂を下っていくようである。
お粂はそれを違った世界でのことのように聞きながら、黙って右助の顔を見ていた。
――右助は死んじまったのかしら。
悲しさで胸が重くなりながら、いや、本当は自分も死んでいるのかも知れないと思った。
「おお、松岡先生」
向こうから叫びながら、数人の足音が坂を駆けおりてきたようだ。
「あなたがたはみんな無事が」
「八人ともみんな無事です。姫君たちは、先生」
「こっちもみんな無事だ。とにかく、菊川までいそいで下ってくれたまえ」
「承知しました」
そういう上の声に、右助がぱっちり目をあいたのである。
「まあ、右助――」
右助はまじまじとお粂の顔を見あげながら、二、三度まばたきをしている。その童顔はなにかを一生懸命に考えようとしているようだ。
「お粂――」
松岡が上から大声に呼ぶ。
「お粂はいないかあ」

次の声は少し坂をおりてからのようだ。
ぎくりとしたように右助はお粂の顔を見なおして、急に起きあがろうとした。
「いやだ、右助――。黙っていて」
どうしてふいにそんな気になったのかお粂にもわからない。お粂はいきなり右助の上へおおいかぶさるように抱きついていって、なにかいおうとする男の口を、激しく自分の口でおさえつけていた。
「お粂――。お粂はいないか」
松岡の声はもっと坂の下になっている。
「松岡さんだろう、行者さん」
右助が目をつぶったままいう。
「いいのよ、そんなこと」
お粂はまたしても男の口を口でふさいでしまう。
「行者さん、おれたち死んだんかね」
右助はきょとんと目をあいて、すぐ自分の顔の上にあるお粂の顔をたしかめるように見ながら聞く。
「そうよ。死んじまったのよ、あたしもおまえも」
お粂は自分にいって聞かせるようにはっきりといいながら、そうだ、あたしはここで死んだんだとおもい、だからもういいんだとなにか安心して、その胸の底から新しく熱い血がたぎってくるのをまざまざと体中に感じた。
「右助は、あたしとここで死ぬの、いやなの」
あえぐようにお粂がいう。
戸惑いしていたような右助の目に、かっとお粂の胸の火が燃えうつったらしく、その返事のかわりに、いきなり両手で痛いほど下からお粂の体を抱きしめてきた。
それを待っていたお粂は、こんどこそしっかりと男のうなじへ両手をからんで、火のようなくちびるをかさねていく。
今はしいんと人声ひとつしない急崖の中途の、しげみにおおわれた深い枯れ草の中だった。

時刻はやがて四ッ（十時）に近いだろう。
この辺ではもううぐいすが谷渡りをはじめている。
「右助、どこも体、痛くないの」
とろんと甘ったるい声が、ふっとくちびるを離して聞く。熱いほおをひたと寄せあって、どっちも抱いた手はゆるめようとしない。
「どこも痛くしていねえようです」
「よかったわ、あたし——。おまえが死んだらどうしようと思った」
「おれ、すまねえです」
「どうしてさ」
「おれは、平馬組でも、渋川組でもねえです。ただ行者さんの家来です。だから、行者さんを死なせたくなかった。そしたら、こんな谷底へおっこっちまって——」
「右助、ここ谷底じゃないのよ。崖の中途へ引っかかっているのよ」
「あれえ」
「いやだ、動いちゃ。——それから、それから、右助はもうあたしの家来じゃないわ」
「それ、どうしてだね、行者さん」
「だって、おまえ、おまえはもう、こんなにあたしを抱いてるじゃないか。——うれしいわ」
とうとう本当のことをいってしまったと思い、お粂はもう興奮がおさえきれずに、体中でじっと男の返事を待っている。

浜松の城下泊まり

平馬たちの一行は、その日、予定のとおり浜松泊まりになった。浜松は老中水野越前守の城下町である。
その夜は伝馬町の大米屋（おおよねや）という旅籠（はたご）へ茂太郎組もいっしょに泊まることにした。
今日の失敗は、平馬が昨夜せっかくの松岡の言を聞き流してしまったことにある。今朝明け六ツの一番で大井川を越していれば、おそらく敵の金谷坂の待ち伏せは不可能だったにちがい

ない。
ということは、昨夜松岡の注意をうけた時、すぐに島田の旅籠の前へ終夜交替の見張りを出しておくべきだったのである。敵より十里はたしかに先行していると考えて油断していたのは大きな間違いで、その十里の距離をこっちが寝ている間に敵に追いつかれ、一足でも先へ出られてしまっては、世間から昼寝をしていてかめに負けたうさぎの愚を地で行ったとわらい話にされても、一言の弁明の余地はないことになる。
しかも、平馬は昨夜、人知れずひそかに福姫を抱いて、甘い一夜をすごしている。なんとも慚愧（ざんき）にたえない気持ちなのだ。
それにしても、今日の襲撃に味方が全員よく命を全うしえたことは、奇跡にも等しい。それほど渋川一心斎の策戦は地の利を得て、こっちの弱点を完全に突いた見事な采配（さいはい）ぶりだった。
前衛と福姫の駕籠との間へ一組み、その駕籠と茂太郎松岡組の間へ一組み、そして茂太郎松岡組と近習組との間へ一組み、しかも松山の中へ丸山蘭右衛門の鉄砲が伏せてあったのだ。
敵は、福姫、平馬、茂太郎の三人の中のだれ一人を倒しても、ほぼ目的は達せられる。それが、今日は三人とも敵の網の中へ追いこまれていた。
——しまった、今日は助からぬ。
一瞬、さすがの平馬も今日だけは絶望した。三人助かるということはほとんど不可能である。むしろ、三人とも無事にはのがれられないだろうと覚悟した。
正直にいえば、福姫が駕籠もろとも松山のほうのくぼ地へころげ落ちていくのを見て、なんとしてもせめて最期は福姫のそばへ行き、福姫を抱いて死にたいと思った。
が、自分の前にいるのはあいにく強敵大崎郷斎である。
今から考えてみると、足に自信のあるこの大崎が、一度薩埵峠（さったとうげ）でこっちに出しぬかれてがっ

かりしている渋川組に、終夜歩けば追いつける、十里ぐらいなんでもないじゃないかという思いきった建策をして、強引に渋川組を金谷坂まで引っぱってきたのだろう。
　敵にはこの強行軍の疲労があったのと、あの時にかぎって姫君の駕籠と茂太郎組との間が偶然にもひどく接近していた、これが思わぬ幸いだった。
　そして、駕籠からころげ出た福姫が、いきなり松の木の上の蘭右衛門を見つけて、なんのちゅうちょもなく一発で蘭右衛門を転落させる、これがまず今日の奇跡的な勝利のきっかけを作ったのだ。この一発によって、勝敗の数はがらりと逆転してしまったのである。
「お福さん、よくやってくれた」
　福姫の肩を抱えるようにして菊川の立て場へ坂を駆けくだりながら平馬が心から感謝すると、
「平馬、福は蘭右衛門の股をねらいました。ですから、大丈夫ですのよ」
　と、福姫はそっと平馬の体へ片手をまわしながら、うれしそうにほおを赤らめていた。
「そうです。それならきっと大丈夫です」
「ですから、平馬、福はもうあんまり駆けないほうがいいかも知れません」
　平馬は実にふしぎな気がした。福姫はもう子供ができているようなことをいうのである。いや、それはできていないとは、平馬にもいいきれない。だから、
「それはそうかも知れませんな」
　といって思わず足をゆるめ、肩を抱えている手についい愛情がこもっている。
　たった今死地を脱してきたばかりだというのに、夫婦というものはこういうものなのだろうかと、なんともいえないあたたかな気持ちなのである。
　その気持ちには、今も変わりはない。が、今日からそれを当分、決して表に出してはならないのだ。
　それに、今日の失敗から考えて、今夜から味方の作戦をもう一度がらりと変えなければならないところへきているのである。
　だから、今夜の食事は大広間を借りて、正面に福姫をおき、みんなでいっしょに取ることにした。その席で、今夜の方針をみんなで協議することにしたのである。
「松岡、幸い味方は多少けがをした者はあっても、全員こうして顔がそろっている。ありがたいことだと思うが、敵の死傷者はどうなんだろう」
　正面福姫の左右に、茂太郎と平馬の膳が並んでいる。平馬はそこから、まず右がわの上席についている松岡に声をかけてみた。
「そうですな、拙者が見たかぎりでは、即死者はないようです。戦闘力を失ったと思われる者をあげてみると、まずお福さまに狙撃された丸山蘭右衛門、若先生が切った大崎郷斎ともう一人、笹川、島田の両君が一人ずつ、これで五人になりますな」
「松岡先生が二人――」
　茂太郎がすかさず口を入れる。
「これで七人――。後は」
　平馬が一同にうながす。
「中野先生と後藤先生が一人ずつ二人」
　これも茂太郎の発言だった。
「計九人、――近習組の方々は」
「千葉兼之進と矢頭金吾が一人ずつ――。ただし、こっちは関谷十三郎のひきいる手塚党の者らしく、みんな覆面をしていました」
　そう答えたのは近習組の西村安蔵だった。
「三発目の銃声は近習組のほうでおこったようだが、あれはだれかをねらったのかな」
　茂太郎が思い出したように聞く。
「いや、我々のほうからいうと、あの銃声はもう少し下に聞こえました。たぶん、引きあげの合図じゃないかと思います。あの銃声といっしょに、覆面組は松山の中へ逃げ出したんです」

これは近習組のいちばん上席についている千葉兼之進の言葉だった。
「すると、こういうことになるようだな。渋川組は一心斎を入れて十一人、関谷組は十三郎を入れて五人、大体この見当として、敵の中で残っているのは、渋川組が四人、関谷組が三人ということになる。計七人だ。このうちから、金谷坂の後始末にだれか残るはずだが、これは考えないことにしよう。どうだろう、江戸から手塚が新しい人数を送ってくる可能性があるだろうか」
「まずそれはないと見ていいでしょうな」
即座に答えたのは松岡である。
「わしもそう思う。浜松はちょうど江戸と京との中間ということになっています。むしろ、これから新手が加わるとすれば国もと組のほうでしょう」
茂太郎が松岡説に賛成する。
「江戸から浜松へは六十五里、浜松から京へ六十里あまり、京から作州津山へ約五十里、わしもここから京都までは敵七人で奇襲をかける策以外にないのではないかと思う。そこで、明日から、京まではお福さまを駕籠におのせして、味方は全員この駕籠の前後をかためていくほうがいいと思うんだが、だれかほかになにかいい意見があったら出してみてもらいたい」
平馬はそう結論を出したが、だれも異存はないようなので、その席の協議はそれでおわった。

乳　房

今夜は浜松へ着いたのがすでに宵をすぎようとする時刻だったので、夜食をおわるとすぐ寝る時刻になる。
明日は八里半ほど歩いて三州吉田泊まりになるから、朝は五ツ（八時）立ちときめておいた。
「さあ、足の療治をしましょう」
平馬は福姫といっしょに自分たちの座敷へ引き取ると、すぐに印籠を取り出した。座敷にはもうちゃんと寝床が並べてのべてある。

考えてみると、だいいちこの部屋割りからして妙なものであった。一昨日興津へ泊まった夜から、福姫を一人でおくわけにいかないから平馬が警固役として一つ座敷へ寝ることにしたのだが、理由はどうあろうと、若い男女が一つ座敷へまくらをならべて寝るということは、どう疑われてもしようのないことだった。
これは後で塚越老人たちのほうへ知れてもただではすまないことになる。しかも、二人は事実もう昨夜ただではすまない仲になってしまっているのだ。
そして、それをいちばん心配しているのは茂太郎ではないかと思うと、平馬はやっぱりうしろめたい気がせずにはいられなかった。
しかし、大胆なのはお福さまで、
「平馬、今夜はここしか座敷がなかったのですか」
と、足の手当をしてもらいながら、いかにも不服そうな顔をするのである。
今夜はふすま一重の隣に剣客組と茂太郎が陣取っている上に、今日の失敗に懲りて交替で寝ず番が一人ずつ朝まで起きていることにきめてある。
「そうです。だから、今日はおやすみなさいだけ――」
平馬は小声で冗談のようにそう念を押しておく。
さすがに福姫はほおを赤らめながら、はっきりいやいやをしてみせて、
「明日駕籠で行くのも退屈です」
と、だだをこね出す。
「宿場駕籠は窮屈でしょうからな。時々は歩いてもいいのです」
「でも、もうもんぺ姿ではいけないのでしょう」
「そうです。百姓娘をこの人数でまもっていってはおかしいですからな。松平福姫さま御名代の腰元お福さまということにしましょう。明日ここへ茂太郎の家来米次郎を残しておいて、お

着替えのほうは行列から取り寄せることにします」

「福は百姓娘のもんぺ姿のほうが好きです。もう松平福姫ではなくて、浪人長谷部平馬のおかみさんなのですもの」

熱ぼったい目をしながら、今夜の福姫は何からなにまで気にいらないようだ。その原因は、二人の座敷を次の間とふすま一重のところに取ったことにあるらしい。

「若先生、おやすみでございますか」

前の廊下へきて、松岡の呼ぶ声がした。

ちょうど福姫の足の手当をおわったところなので、平馬はすぐに立って廊下へ出た。

「なにか用か、松岡」

「いまお条が玄関へたずねてきましてなあ」

「そうか、お条は無事だったか」

今の今までそれだけはどうしたろうとひそかに心配していたので、平馬は思わず目を輝かさずにはいられなかった。

「やはり、あの時、右助といっしょに崖へ落ちたんだそうですが、幸い中途の地の瘤へ引っかかったんで、けが一つしなかったそうです」

「よかったなあ。あれは普通の女とは違って、体がきたえてあるから、たぶん助かってはいるだろうと思ってはいたが、これでまず一安心だ」

「お条は若先生やお福さまの無事な声を聞いているんで、安心していたといっていました。それで、敵のほうで無事だったのは、こっちで計算していたとおり、渋川一心斎組が四人、関谷十三郎組が三人、この七人は今夜浜松へ入って、いま鍋屋という旅籠へ着いたそうです。敵はここへ我々が泊まっているのを調べていったようだから、兄さんに今夜は油断しないようにいってくれと注意していました。感心な女ですなあ」

松岡はお条の女心にすっかり打たれているようである。

そのころ――。

お条は大米屋の表に待たせておいた右助といっしょに、もう夜更けの城下町を自分たちの宿をさがして歩いていた。

「右助、くたびれちまったねえ」

お条は自分の用がすんでしまうと後はもうおまえまかせだというように、まるで右助によりかかるようにして歩いている。

――おかしいなあ。あたしはもうすっかり右助に甘ったれている。

今は胸がうずくようにたのしいお条なのだ。

胸がうずくといえば、今朝二人で金谷坂の崖の中途の枯れ草の中へ落ちこんだ時、ただ口を吸いあっただけではどうしても物足らなくて、どうしてそんな気になったのか、お条はいきなり自分で胸をはだけ、落ちたままのかっこうで仰向けに寝ている右助に、

「右助、これおまえにあげる」

といって、白々とした自分の乳房を男の口へ上から押しつけていった。

右助は黙ってその乳房を口にふくみ、少し痛いと思うくらい乳首を激しく吸い出す。

「痛い、右助」

思わず胸を離そうとしたが、右助はしっかりとこっちの背中へ両手をまわしていて、手をゆるめてくれようともしない。

お条は男の熱い口の中でなぶられている乳首からいつか体中の血がしびれるようなふしぎな興奮を感じ出して、身もだえしながら、次第に歓喜の絶頂へさそいこまれて、気が遠くなりかけてきた。その時、

「残ったのはたったこれだけか」

と、しわがれた渋川の声がいうのを、すぐ崖の上に聞いたのだ。

右助はお条を抱いたままむくりと半身を起こす。

「渋川先生、平馬というやつもなかなかやりますなあ」

相手の声はたしかに関谷十三郎である。

「よし、残ったのはたった七人。しかし、この七人は命運があるんだ。こんどこそ平馬にひとあわ吹かしてやろう」
「無論です。手塚さんはなにも敵を全滅させろといっているわけじゃない。やっつけるのは、福姫、平馬、茂太郎の三人でいいんだ。こっちはまだ七人も残っているんですからな」
やけでいっているのではなく、ちゃんとそういう自負を持っているようなずぶとい関谷の声音だった。
「よかろう。出発」
七人の足音がなにか堂々と坂をおりはじめる。
右助は黙ってひざの上のお粂の着物の襟をあわせて、乳房をしまってくれた。
「右助、おまえあたしをおかみさんにしてくれないと承知しないから」
お粂は男のそのしぐさの中に、なんとなくよそよそしいものを感じたのである。
「もったいないです、行者さん」
「もったいないったって、おまえもうあたしの体をおもちゃにしちまったじゃないか」
「罰があたらねえかなあ」
「空っとぼける気なの、右助」
「おれ、死んでもいいです。行者さんを女房にするです」
右助は着物の上からもう一度大事そうにお粂の乳房をつかんで、それからゆっくりとくちびるへくちびるをかさねてきた。

夫婦の情

福姫と平馬の一行が播州姫路の城下へ入ったのは、遠州浜松を立ってからちょうど九日目の夜だった。
途中、渋川組の襲撃は一回もない。
お粂からの連絡も浜松を最後にして、ばったりと絶えていた。
渋川一心斎も関谷十三郎も、度々の苦い失敗

の経験から、七人の人数ではどう奇襲をかけても勝算なしとあきらめて、むしろ一気に国もとへ急行することにしたのだろう。
お粂はその渋川組を追っているにちがいない。
では、その間こっちはのんきな遊山旅だったかというと、無論、決してそうではなかった。敵はいつどこで奇襲をかけてくるかわからない。どこでどんなことが突発しようとも、これに勝てるだけの万全の備えを取ってその日その日を送り、泊まりをかさねてここまできたのは、だれにしても一人一人が相当以上に気疲れのする不安な道中であったのだ。
しかし、ともかくも無事に姫路まではきた。
明日はいよいよ次第に登り道になる山間の姫津街道へ入り、八里歩いて三日月の城下泊まり、明々日はおなじ山道を六里ほど行くと、目的地の作州津山の領内へ入るのである。
ということは、この姫路から津山へ二十里、二日の道中が、敵にとっても味方にとっても最後の決戦ということになるはずなのだ。ことに、この二日は国もとの敵の勢力範囲の中での闘いになるのだから、地の利からいっても人数からいっても、敵のほうがはるかに優位に立つのは当然で、味方の苦戦は到底まぬがれない。
ただ、こっちのたのみとするところは、ともかくも敵の死角へ飛びこんでしまうことだ。だれでも一人津山の城へ駆けこんで、当主佐渡守高久の耳へこっちの正しい情報が入りさえすれば、高久は事の正邪利害の分別がつかぬほど暗愚な君主ではないはずなのである。
それを途中でさえぎっている側用人鎌田治部、仕置家老大坪兵太夫、江戸では手塚勘解由の三人衆が、この十年来たくみに結託して事の真相を少しも耳に入れないようにしているから、藩政は万事うまくおさまっているものと信じ、高久は愛妾お加世の方を溺愛してのんびりとその日を暮らしているのだ。

しかし、たとえそれが三佞臣の狡智にもせよ、十年の長きにわたってたくみにだまされてくると、尋常の手段ではその迷夢を破ることはできない。それが、中橋茂右衛門をして土井老中を動かし、松平福姫をかつぎ出すという思いきった手段をとらせるに至ったのである。

その夜、淡路屋という旅籠についた平馬は、例のごとくみんなで膳を並べる夜食の席で、これまでの一同の労苦をねぎらい、

「諸子も承知のごとく、事の成否はいよいよ明日、明々日の勝負できまる段階へきたといっても過言ではないと思う。しかし、だからといって、わしはいまさら覚悟を新たにしようなどとここで改めていう必要はない。覚悟は江戸を立った時からすでにきまっているので、諸子は昨日のとおり、そして一昨日のとおり、あくまでも冷静沈着に事にあたってもらえばいいので、わしもまたこの最後の二日を諸子といっしょに必勝を期して生死を共にすることにする。もう一息なのだから、小森家のためにぜひ健闘を祈る」

とあいさつをした。場合によってはこれが最後のあいさつになるかも知れないと考えたからである。

つづいて、こんどの責任者である中橋茂太郎が、

「いま平馬どののいわれるとおりで、わしとしては別になにもいうことはないが、これからの敵の襲撃は相当苛烈なものだろうと思われる。したがって、行列が二つにも三つにも分断される場合がないとはかぎらない。万一、その時、身の処置に迷うようなことがあったら、各自落ち合った者が一つになって、迷うことなく津山へ入り、お城の大手門の手前に上席家老小森土佐の屋敷があるから、そこで落ちあうことにする。――それでいいでしょうな、平馬どの」

と、同意を求めてきた。

「結構だ、そうしよう」

打ち合わせは簡単にそれだけで終わったが、だれの顔にもいよいよ最後の段階に入ったという緊張の色はかくしきれないようだった。

食事が終わってそれぞれの座敷へ引き取ると、後は明日の道中に備えてよく熟睡しておくのが仕事である。部屋割りは浜松の時以来ほぼおなじで、たとえふすま一重でなくとも福姫と平馬の座敷は必ず茂太郎組と隣りあっているか、向かいあわせになるかで、廊下には必ず寝ず番が一人つく。

今夜は廊下を中にして、斜め向かいになっている奥の座敷だった。

福姫は浜松からこっち松平福姫さま御名代の名目で、ずっと駕籠でとおしているから、もう足の手当をする必要はなくなっていた。

「平馬――」

福姫はいつでも身支度をして逃げられるように、このごろは長襦袢姿で横になることにしている。今夜もその姿になってから、平馬を呼んだ。

「おやすみなさいですか、お福さん」

平馬は自分のものの後始末をして、わらいながらまくら屏風のかげへ入る。

「本当のことをいうと、明日は福も平馬も、どうなるかわからないのでしょう」

「そんな不吉なことを口にしてはいけません」

「いいえ、福は平馬といっしょなら、たとえどうなっても後悔などしません。けれど、今夜はおやすみなさいだけではいや」

顔を赤らめながら、はっきりというのである。

「もう御夫婦なのですもの、夫婦はもっと愛情があってもいいと福は思います」

「なるほど――」

島田の宿の一夜以来、平馬はおやすみなさいをするだけで、決して福姫の肌にはふれていなかった。福姫もまたただそれだけで納得して、少しも不満の色は見せずにきたのだ。

しかし、考えてみると、福姫はこの恋一筋の

ために、名も屋敷もすてて平馬といっしょに身を危険にさらしているのである。
　また、それがあるから、茂太郎も松岡も、いや、塚越老人にせよ大草源太郎にせよ、福姫のことは一切平馬にまかせて、余計なことは一言も口にしていないのだろう。
　ことに、夫婦はもっと愛情の深いものという福姫の今夜のうらみごとは、平馬にもはっきりとうなずけるものがある。
「よくわかった、お福さん」
　平馬は福姫の肩を抱きよせながら、
「御夫婦なんだものな、愛情の深いのはだれに遠慮をすることはないんだ」
と、いつものようにくちびるをあわせていく。
　福姫はもう口はきかなかった。男の愛情にかわりさえなければ、それで安心なのである。夫婦とはこういうものということは、島田の宿でよくわかっていた。
　そして、いよいよ生死を目の前にしたその夜のちぎりは、島田の一夜よりはるかに激しい興奮と歓喜に燃えて、
「平馬、死ぬ時もいっしょですよ」
と、何度も男の耳に熱い息吹といっしょにささやいていた。
　その夜も平馬の寝床はついに空のまま翌朝を迎えてしまった。そして、福姫はこんどこそ自分が人妻であることをその女体にはっきりと焼きつけられて、夢のようなしあわせにしみじみと女の生きがいを感じたのである。

ひとり寝

　おなじ夜――。
　お粂と右助は平馬たちより一日早く播州三日月の城下へ入って、いつものとおり町外れに近い木賃宿に泊まっていた。
　二人は浜松からずっと渋川と関谷組七人の後をつけてきたので、途中先へ先へといそいでいた渋川組は、ついにここで国もとの大坪兵太夫

組と合流したのである。
　その連絡は右助と相棒の左助が取ったらしく、左助は今日、姫路から四里、追分の宿で渋川たちを待ちうけていて、夕方この城下町の林屋という上旅籠へ一同を案内していた。
「右助、あたしはちょっと出かけてくるからね、おまえはここを動いちゃいやだよ」
　日の暮れるのを待って、そう右助にいいおいて出かけていったお粂は、それっきりいまだに帰ってこない。
　お粂が出がけに特に今夜右助の外出を禁じたのは、三日月は山間の盆地にある小さな城下町で、ここに国もと組と江戸組とが合流している。どんなことで右助が顔見知りの者とぶつかりでもすると、手塚の関係から向こうへ引っぱりこまれないでもない、それを心配したからだろう。
　――行者さんは情が深いからたのもしいです。
　右助は相宿の座敷のすみのほうへ自分たちの寝床を取り、その一つへ疲れた体を楽々と横にしながら、そうしろといわれたとおりにしてお粂の帰りを待っていた。
　あの金谷坂の乱闘の時、崖から落ちて中途へ引っかかっていた時、いきなりお粂に上から乳房を口の中へ押しつけられ、その時はそのお粂の激情に自分も誘いこまれて、かっとなってその乳房を激しく吸っていたが、さて二人の命が無事に助かったとなると、右助はその夜からすぐお粂の女体をわが物にするというわけにはいかなかった。
　右助には主人勘解由から、この事件が落着するまでお粂のそばについていて、なるべく無事に江戸へつれて帰ってくれるようにという大切ないいつけがあるのだ。主人のいいつけは、お粂の家来になったつもりで身をまもってやってくれというので、夫婦になってもいいとは無論いっていなかった。
　だいいち、道中で主人の娘にそんなふしたら

なまねをするのは、右助の良心がゆるさない。
　だから、右助はその後いつも相客のいる商人の宿のほかへは一切泊まらないように心掛けてきた。
　感情の激しいお粂は、あの金谷坂の時以来いつ男に身をまかせてもいい、もう夫婦なんだとすっかりその気持ちになっているようだが、さすがに女だから自分から二人きりの旅籠へつきたいとはいわなかった。
　口に出してはいわないが、おまえがその気ならと、十分こっちの気持ちはわかっているようである。
　かくして、本当はつらいはずの道中が、いつか二人にはひそかにたのしい道中にかわっていた。
　が、たった一度だけ猛烈なけんかをしたことがある。それは、あの翌日、浜松を立って、元白須賀から白須賀の宿へ出ようとする山道で一休みしている時だった。
　大体、右助はともかくも親にそむいてまでお粂が平馬のために命がけになっていることが不満でたまらなかった。
　平馬に対して、お粂がそういう義理のあることはうなずけないことはない。しかし、お粂のはその義理ということより、むしろ平馬に深い恋慕を感じて、身がわりにまでなろうと思いこんでいる、それが本当なのだ。
　それが、金谷坂の崖から落ちて、死んだと思った時から、急に気が変わってきたのである。その気持ちも右助にはよくわかってはいる。が、自分と夫婦約束をしてまでまだ平馬の身がわりになろうとしているようなお粂の態度は、男としてなんとしてもうれしいことではなかった。
「行者さんはどうしてそう平馬さんのために夢中になっているんだろうな」
　ついそれが口に出てしまってから、右助は内心はっとした。
「それ、なんのこと、右助」

　はたして、お粂は真っ青になって詰め寄ってきた。
「なんのことって、行者さんの胸の中には、まだ平馬さんがいるです。おれと夫婦になるなんて、ただの気まぐれです」
「およしよ、右助のやきもちやき」
「おれ、やくです。あっちがだめだから、こっちにするなんて、おれきらいです」
　騎虎の勢いで、絶対にいってはならないことを右助はうっかり口走ってしまったのだ。いや、うっかりではなく、お粂の乳房をあてがわれた時から、右助は知らず知らずのうちに、事実、平馬に対してなんとなく嫉妬を感じ出していたのだ。
「右助のばか。殺してやる」
　お粂は半狂乱になって右助に武者ぶりつき、ぽかぽかげんこで男の頭といわず顔といわず力いっぱい殴りつけてきた。
「おまえなんか死んじまえ」
　こんどは襟がみをつかんで崖のほうへ引きずっていこうとしたが、右助はじっと顔を両腕の中へうずめて石のようにうずくまってしまったので、女の力ではどうにもならない。
「殺してやる、畜生。――殺してやる」
　崖へ突き落とせないとわかると、またところきらわず散々に殴りつけて、せいせい息をはずませていた。
　――殺すというんなら殺されてやってもいい。
　右助は黙ってお粂のするなりになっていた。おれはお粂が好きなんだ。だから、ついやきもちをやいたんだ。そう気がついてくると、女のいちばん痛いところを突いた心ない放言が男として恥ずかしくもあり、おれはこんな男だったのかと情けなくなって、ぼろぼろ涙が流れてきた。
　いつか、お粂の乱打、狂乱がやんで、せいせい肩で息を切りながら、黙ってもとのところへ

並んで腰をおろしていた。
ここでもうぐいすがしきりに谷渡りを鳴いていた。
「右助、出かけようよ」
ずいぶんたってから、お粂がいつもの声でいって立ち上がった。
「あたしおなかがすいちまった」
山を下った白須賀で中食をとる約束になっていたのである。
右助はすなおに立って、お粂と肩をならべた。
「おまえ、まだ怒っているの」
きげんをとるようにお粂がいう。
「違うです。おれ、男のくせに、恥ずかしいことをいってしまって、情けねえです」
「もういいわ、そんなこと。忘れちまおうよ。ね、忘れてくれる」
「忘れるです」
「人間て、みんな勝手なもんなのね」
お粂はさびしそうにわらっていた。
お粂もまた心に恥じるものがどこかにあったのだと思うと、右助はそれで満足して、おれはもう二度と平馬さんのことでやきもちはやくまいと、かたく心に誓った。
——かわいそうなお粂。そして、少し跳ねっかえりではあるが、情の深いお粂。
右助はそんなことを考えながら、お粂の帰りを待ちかねているうちに、うつらうつらと寝入っていたようである。
この山間の城下町は夜の更けるのも早い。もうあたりはしいんと寝しずまっているようだった。

水車小屋

翌日は三月一日であった。
その朝の五ツ（八時）ごろ、渋川組は国もとの仕置家老大坪兵太夫のひきいる一味七、八人といっしょに、津山のほうへ立っていった。
三日月の城下から上月（こうづき）へ五里、上月から土居

へ一里足らず、土居はすでに作州のうちへ入り、津山の領内になっている。
土居から勝又へ四里、勝又から津山の城下へ三里、播州三日月から作州津山までは十三里ほどの行程ということになるのである。
——敵は津山の領分内へ入ってから仕事をする気だな。
大坪兵太夫の一行が上月のほうへ引きあげていくのを見とどけて、お粂はそう見当をつけた。おそらく、はじめからその考えだから、兵太夫はわざとここへは七、八人の供しかつれてこなかったのだろう。
では、敵はどこへ本陣をおいているのか、それをうまく探り出せばおよその作戦はわかってくるはずだ。
——つけてみようかしら。
お粂は何度もそう考えたが、どうしてもその決心がつかない。右助をここへ一人残していく気になれないからだった。
といって、真っ昼間右助をつれて津山の領分内へ入っては、いつ敵の目につかないとはかぎらない。たとえば、左助に見つかったとしても、こんどはこの事件が落着するまで、敵の手でどこかへ監禁されてしまうおそれがたぶんにある。
それに、敵味方の衝突は今日ではなく、明日と見てさしつかえない。それなら、今日はこれから姫路を立ってくる平馬の一行を途中まで出迎え、そこでこっちの事情を耳に入れてやれば、平馬としてはそれから取るべき手段を取っても十分間にあうはずなのである。
「そうしよう、あたし」
お粂はやっとそう腹をきめて、ほっとしながらそこの小川へおりていき、冷たい清水で顔を洗い、口をすすいだ。昨夜はとうとう旅籠へは帰らなかったのである。
——女の朝がえりなんてあるかしら。
考えてみると、我ながらおかしくなる。そし

て、右助は怒っていやしないかしらと思うと、急に体中で男が恋しくなってきて、わくわくしながら城下外れの安旅籠のほうへ走り出していた。

　木賃宿の客はほとんど行商だから、みんな朝が早い。右助は八畳ほどの座敷が三つつづくいちばん外れの一間に、一人で火ばちにあたりながらぽつねんとお粂の帰りを待っていた。

　山国の朝はまだかなり冷えこむが、ここは東の障子に朝日がいっぱいさしてくれるから、ふすま障子をしめきっているとそう寒さは苦にならなかった。

「ただいま――。右助、おまえ怒ってる」

　お粂は座敷へ入るなり、男のひざの横へ行ってぺたりと座りながら、顔をのぞきこむようにした。外気にふれてきたお粂のほおはいきいきとして、花が咲いたように血色がよかった。

「おれ、怒っているです」

　右助はわざとしゃちほこばって座りなおしながら、

「行者さんはゆうべどこへ泊まったんだね」

　と、なにかを探るような怖い目をした。半分は本気なのである。

「このお城下の向こうの外れに、水車小屋があるのよ。ゆうべはそこへ泊まったわ」

「どうしてここへ帰ってこなかったんだね」

「だって、ここへきて寝ちまうとつい寝すごしちまう心配があるし、敵はいつ津山と連絡をとるかしれないでしょ。水車小屋はちょうど街道端にあるから、そこで居眠りをしながら一晩中見張っていたんだわ」

「それで、なにか引っかかったんかね」

「ええ、今朝引っかかったわ」

「今朝――」

「ゆうべね、なんとかして林屋へ忍びこもうとしたんだけれど、この辺は寒いから夜はすっかり廊下の雨戸をしめてしまってだめなの。それに、あたしつかまるのがこのごろ怖くて、あんまり思いきったまねはできなくなっちまった」

　おまえというものがいるからだわといいたげに、お粂は男のひざを小突いて目でわらいながら、

「でも、そんなあぶないまねはしなくても、敵のやりそうなことはちゃんとわかったからもう大丈夫だわ」

　と、はっきりいう。

「どうわかったんだろうな」

「大坪兵太夫は七人しか味方をつれてきていないんです。そして、今朝早く渋川組といっしょに津山のほうへ立っていきました。だれの顔ものんきそうで、みんな安心して歩いているんです。だから、仕事は明日江戸組が津山領へ入ってからやる気なんだとあたしは見ました。どう思う、右助」

「それなら、そうかも知れねえです」

「大坪兵太夫っていう男は、怖い冷たい顔つきで、どんな思いきったことをたくらむかわからない、あたしにはそんな風に見えたわ」

「あの人は、腕も一刀流の免許皆伝だし、一度こうと思ったらなんでもやってのける、そんな強情な男だと、江戸の人はいっていたです」

　手塚の名はお粂の前では決して口にしない右助なのである。

「怖いなあ。しかも、明日はあっちの領分内の戦だし」

　右助はなにかいおうとしたが、ふっと悲しい目つきになって黙ってしまう。こんど大坪が勝ってくれなければ、主人手塚は生きる道がなくなる。が、お粂が苦労しているのは、あくまでも平馬組に勝たせたいからだとわかりきっているので、うっかり口がきけないのだろう。

　ふっとそこへ気がつくと、お粂もつい後の言葉がつづかなくなってくる。

「おれ、ゆうべはよく眠れなかったです」

「どうしてさ――」

「行者さん、ゆうべは水車小屋で、本当に一人

だったんかなあ」

「右助、もう一度いってごらん」

別に悲しいことがあって、それをまぎらかそうとするいやがらせだとはわかっていても、睡眠不足のお粂もまた気がいらいらしているから、ついかっとならずにはいられない。

「おれ、やきもちやきだもんな。行者さんといっしょになるの、無理かもしれねえ」

「うまいことばかしいって、おまえこそ、おまえこそ薄情だわ。おまえがそんなに冷たい男だとは思わなかった」

「どうして、なんでおれが薄情なんだろうな」

「おまえ、あたしが一晩中苦労して帰ってきたって、やさしい言葉ひとつかけてくれようとしなかったじゃないか。今日ばかりじゃないわ。おまえはあたしのほうから肩を抱いていかなければ、自分からはほおずりひとつしてはくれなかった。おまえにはあたしへの愛情なんてかけらほどもないんだわ」

「そうかも知れねえです」

右助は顔を真っ赤に充血させて、底意地悪くこっちをにらみつける。

「右助。あたしはちゃんと知っているのよ」

お粂はたまらなく悲しくなってきて、

「おまえ、あの人から、江戸の人から、もしもの時は味方のじゃまだからお粂を殺してこいと申しわたされてきているんだろう。本当のことをいってごらんよ。あたし、おまえに迷惑なんかかけないで、ここで一人で死んであげるから」

と、実は一度はそんなことも考えていたことがあるのだ。

「違う、それはあんまりだ、行者さん。そんなことといわれちゃ、おれ、江戸の人に申し訳ないです。おれこそ、おれこそ死ぬほかはねえです」

右助の顔からみるみる血の気がひいてきて、がくりとうなだれてしまう。

お粂はどきりとした。一本気な男だから、ひょっとすると右助は本当に死ぬ気になるかも知

れないのである。

女体解脱

「右助のばかっ。——あたしが殺してやる」

いまさらあやまるのは勝ち気が許さないし、本当に死ぬ気になられては大変だし、お粂はかっと頭の中で血が逆上してきて、いきなり男の首っ玉へ両手でしがみついていき、力いっぱい押し倒そうとした。

が、がっしりとした男の体は、左手一本で身を支えると、それ以上はびくとも動こうとしない。

「悔しいっ、あたし、——右助のばか」

お粂は夢中で男の胸へ体ごとのしかかりながら耳へかみついていったが、無論、本気でかんではいなかった。

そういえば、お粂も右助もそんなに興奮しておたがいに怒っていながら、はじめからそう大きな声は決して立てていないのである。

お粂はいつか悲しくなって、ぴったり男のほおへほおを寄せて泣き出している。

右助はいつもの手で、牛のように黙りこんで、じっと身動きひとつしない。

泣きたいだけ泣いて、やっと気がしずまってくると、お粂はゆっくり顔をあげて、自分の涙でよごれた男のほおをそでふいてやった。

「ありがとうっておいいよ、右助」

「いわねえです」

右助ももうわざと怒った声を出しているだけのようだ。

「強情っぱり——」

「ばかだから、しょうがねえです」

「殺してやるから」

「もう半分、死んでいるです」

「まだ半分生きているんなら、目ぐらいあけたらどうなの」

「目はつぶれたです」

「じゃ、あけてあげる」

お粂はつぶっている男の目をなめにいって、
「きたないなあ」
と、おおげさに顔をしかめた。
とたんに、男がむくりと上体を起こして、力いっぱいお粂の胸を抱きしめると、こんどはのしかかるようにくちびるをくちびるへ押しつけてきた。
お粂は体中が甘ったるくなって息苦しい。
右助の興奮はそれだけではおさまらなかった。これまで辛抱強く押さえつけてきた情欲がむらむらっと燃えあがってきたらしく、女の襟を手荒くはだけて、白々とこぼれ落ちる白桃のような乳房を見ると、むさぼるようにその乳首へ吸いついている。
「くすぐったい、右助」
そこから全身にたぎってくる甘い興奮にお粂は身もだえしながら、女体は次にくる男の暴逆をひそかに求めていたようである。
お粂が右助といっしょにひとまずその木賃宿を立ったのは、やがて四ツ（十時）少しまわるころであった。
こっちは姫路のほうへ山道を下って行けるところまで行き、平馬の一行と出会うことにしたのだ。
「行者さん、おれ目がつぶれるかもしれないな」
右助は三日月の城下を出外れて、両側が若葉の林つづきの下り坂へかかると、まじめな顔をしていった。
「どうしてさ、右助」
お粂はしっかりと男の腕につかまって歩きながら、とうとう女にされた時のあの激しい歓喜がまだ甘い余燼となって体中にはっきり残っているような感じで、我ながら言葉つきまでとろんとしている。
「でもなあ、行者さん、おれもう目がつぶれてもいいと思うです」
「どうしてそんなことというの」
「だって、おれ、行者さんにあんなことして、すまないもんな」
「いくらすまないといったって、目がつぶれちゃあたしが困るじゃないか」
「けど、罰が当たれば目がつぶれるです」
「罰なんか当たるはずないじゃないか。あたしだってこうしてよろこんでいるんだもの。いやだわ、そんなこといわせちゃ」
お粂はちょっと顔が赤くなる。
「そうらね、おれ行者さんにいやなことしちまったもんな。でもねえ、行者さん、おれ考えたです。たとえ目がつぶれたって、おれはもう行者さんのどこからどこまで自分のものにして、ちゃんとこの目で見てしまったんだから、もういいんだ。いっそこのまま目がつぶれたほうがしあわせかも知れないもんな」
「いやな人――。そんなことというと、本当にめくらにしてやるから」
「おれ、行者さんになら、殺されてもいいな」
「本当、右助」
「本当です。こんなことというと、行者さんまた怒るかな」
「いってごらんよ。もう怒りゃしないわ」
「おれ、行者さんの身がわりにいつでも死ねると思ったら、やっと行者さんの気持ちわかったです」
「いやっ。それだけはもういわないで」
「違うです。いまのおれは、もうやきもちなんかやかねえです。ただ行者さんが好きだから、なんでも行者さんの気持ちがわかるような気がしてきたんだ」
「右助、ちょっと待ってね」
お粂はふいにくらくらっとめまいを感じてきたのだ。
思わず道端へ行って両ひざをつき、夢中で胸のところで合掌している。滝に打たれて行をする時のかっこうなのである。
どうどうと滝の音が耳に聞こえ、激しい悪寒にがたがたと全身がふるえてくる。急にどうし

たんだろう、たった今までなんでもなかったのにと、必死に歯をくいしばっていると、さっと目の前へ不動明王の立ち姿が火炎につつまれてあらわれ、かっとにらまれたと思ったとたん、
「行者さん、どうしたんだ。しっかりしてくれ、行者さん」
　耳もとで右助の呼ぶ声が聞こえ、はっと我にかえると、いつかお粂はしっかりと右助にうしろから抱きかかえられていた。
　めまいも悪寒もすでにやんで、体中にじっとりと脂汗をかいているのが自分でもわかる。
「もういいのよ、右助」
「本当かね。もう大丈夫かね」
「ただめまいがしただけなの」
「ああ、びっくりした。すまねえです。行者さんね、寝不足の行者さんを、おれがつい、あんなことしちまったもんだから」
「いやだわ、恥ずかしい」
　お粂は男の顔を見あげて微笑しながら、はっと思いあたることがあった。
　たしかに体の疲れがあったのかも知れない。が、それより、これはたしかに不動明王のなにかのお告げにちがいないのだ。
　自分の恋心が平馬から右助に移った。しかも、右助に身をまかせて、女体の中にあった煩悩が平らかになった。いままではその煩悩のために行の力が通じなくなっていたのが、右助によって女体が解脱すると同時に、行の力がよみがえってきたにちがいない。
　すると、不動明王のお告げは、たぶん平馬たちの異変を暗示してくれたのだ。
　お粂はどきりと立ちあがった。
「右助、いそいでみよう」
「どうしたんだね、行者さん」
「おまえねえ、あたしはもうおまえのおかみさんなんだから、きっとそのつもりでいてくれなくちゃいやだわ」
　お粂はしっかりと右助の手を握りながら、ぐ

んぐん坂道を下りはじめる。

敵　近　し

　福姫と平馬の一行が三日月城下へ入って林屋へ着いたのは、もう宵に入ってからであった。
　今朝は姫路を六ツ（六時）立ちにして、無論、福姫はずっと駕籠だったが、姫津街道は津山までほとんど上り坂ばかりだから、江戸育ちの侍の足にはやっぱりこたえる。とうとう城下へ入るころには日が暮れてしまったのである。
　しかも、平馬はここから三里ほど下った橋崎で、自分は直接会わなかったが、例によって松岡をとおしてお粂の情報をうけとっている。
「お粂の話では、とにかく大坪兵太夫は今朝津山のほうへ引きあげているんで、敵はおそらく明日津山領へ入ってから襲撃すると読んだんだそうです。ところが、お粂はその後どうも胸さわぎがしてしようがない。今日中にきっとなにか思いもかけない異変がおこりそうな気がする。そのことをくれぐれもあなたの耳へ入れておいてくれといっていました」
「ふうむ。それで、お粂はどうしたね」
「自分はもう一度、行列より一足早く三日月へ引きかえしてみる。そして、もしなにか怪しい節があったらすぐに知らせるからといって、そのまま引きかえしていきました」
「そうか――。渋川組が昨夜国もと組と合流したとなると、お粂が心配するまでもなく、いよいよ決戦の時が近づいているんだ。だからといって、いまさらあわてることはない。こっちは今までどおり十分注意するようにと、一同の耳へも入れておいてもらいたい」
「心得ました」
　こうして三日月の城下町へ入ってきたが、途中別にかわったこともなく、その後お粂からもまだなんの知らせもない。
　が、油断は絶対に禁物だし、今夜泊まる林屋は、昨夜敵が泊まったところだ。この城下町に

は林屋のほかに上旅籠はないから、泊まりはどうしてもここということになる。
　もし敵がなにかたくらむとすれば、この林屋の中になにか細工をしているかも知れない。
「茂太郎さん、わしは外まわりを一通り見ておくから、あんたは松岡にいいつけて、昨夜の部屋割りをそれとなく調べておいてもらってくれ」
　林屋へつくとすぐ、平馬は茂太郎にそうたのんでおいて、自分はわらじをぬぐ前に一応外まわりをまわってみることにした。空にはまだ淡い新月があって、ほのかな光をただよわせている。
　林屋は町通りにそって、町人たちの泊まり客が出入りする油障子を入れた店がまえを作り、それから板塀になってそこに御用宿の門をかまえ、門を入った正面が式台つきの玄関になっている。
　表の板塀は西の角で横町を作り、ぐるりと南の裏までまわされて、南は小広い空き地になっていた。その南の塀に裏木戸があって、そこから庭へ入ると、南から東へ鉤形の廊下が見られ、その廊下にそった各座敷が上等の間とされているようだ。
　つまり、大づかみにいえば、東の路地にそったほうが普通の町人宿で、西の横町にそったほうが本陣なみの御用宿をかねていると見ればいいのである。
　平馬はそれらを一通り頭に入れてから、玄関へまわってわらじをぬいだ。
　福姫は玄関から廊下をまっすぐ南へ行ったいちばん外れの上の間に、茂太郎と松岡につきそわれて待っていた。
「おそくなりました」
　まず正面の姫君にあいさつをすると、駕籠でも坂道はあまり楽ではなかったらしく、福姫はなんとなくげっそりした顔に黙って寂しい微笑をうかべる。ただ二人の間だけにしかわからな

い目の色が、とても疲れたのと訴えているようである。
「茂太郎さん、昨夜の部屋割りはわかったろうか」
　平馬はすぐに茂太郎に聞く。
「大体わかりました。この座敷に大坪兵太夫、壁一重の八畳二間に国もと組、そこの廊下を鉤形に曲がった十畳と八畳の間に江戸組が泊まったようです」
「やっぱりここがいちばん上座敷なんだろうな」
　ここは西から南へ廊下をまわして、十畳に八畳の控えの間がついているのだ。
「そうのようです」
「姫君は用心のためこの座敷を寝所にするのは避けたほうがいいと思うが、どうだろう」
「わしもそう思います。一応、松岡先生とすっかり調べてはみましたが、もし敵が押しこむとすれば、いちばんここをねらうでしょうからな」
「そのとおりです」
　茂太郎の言葉に、松岡も即座に賛成する。
「向こう十畳の座敷のほうへ支度をさせてはどうでしょう」
「いや、あっちへは今女中どもが膳をならべている。我々がそっちで食事をとっている間に、こっちの寝支度をすることになるだろう。それはそのままにさせておいて、いざ寝る時になってから、ここの十畳と八畳へは近習組八人、次の八畳の間へ剣客組の四人、その次の八畳の間へ姫君、次の六畳へ茂太郎さんと松岡、――寝ず番は鉤形の廊下の角とここの廊下の角、今夜は二人つけることにしよう」
　平馬の腹はここの間取りを見た時からきまっていたのだ。
「寝るまぎわになって、ひそかに模様変えをするわけですな」
　茂太郎が念を押す。
「なるべく宿の者にも悟られないほうがいいと

思う」

「結構です」

「それから、各自に握り飯二個ずつと、新しいわらじを一足ずつ用意させておいてくれ。無論、今夜は着のみ着のまま寝ること。なお、迷子になった者はかまわず先に津山へ行くという昨夜の茂太郎さんの注意を、今夜は口から口へ伝えておいてもらいたい」

「承知しました」

そう答えながら、茂太郎はじっと平馬の顔を見ている。まるで今夜敵襲があるようなことをいうといいたげな目である。

「松岡、剣客組はどんなことがあってもまず我我三人のところへ集まるのは今までどおりだが、今夜は特に姫君づき二人、茂太郎づき二人をきめておいて、わしは姫君につくから、松岡は茂太郎さんのほうをたのむ」

「かしこまりました」

「もう一つ、今夜はやみ夜だ。できれば各自あかりの用意をしておくといいな。山道は暗いと一足も歩けないぞ。だいいち、あぶないしな」

「平馬どの、あなたはどうしても今夜なにかおこりそうな予感がするのですか」

たまりかねたように茂太郎が聞く。

「うむ、だんだんそんな気がしてくるんだ。というのは、三日月から上月へざっと五里、上月から作州土居へ半里あまり、今夜なにか計画がなければ、大坪がわざわざ昨日こんなところまで江戸組を迎えにくるはずはない。出迎えなら名代でいいはずだからな」

「そういえばそうですなあ」

口ではそういったが、茂太郎は心から納得したような顔ではなかった。

その茂太郎と松岡がそれぞれ自分の組へ今夜のことを伝達に立ってしまうと、それを待ちかねていたように、

「平馬、今夜はおやすみなさいはだめなのですね」

と、福姫はそんな大胆なことをはっきりいって、寂しそうな顔をする。

「今日明日がのるかそるかの勝負です。福姫は我慢なさい」

平馬は手あぶりのそばへ寄って手をかざしながら、なにか胸が重い。

「そんな冷たい顔をしてはいや。福は悲しくなります」

「いや、冷たい顔をしているわけじゃありません。どうしても勝たなくちゃ、お福さんと御夫婦になれないからなあ」

「本当ですよ、平馬。どうしても勝ってくださいね。きっとですよ」

福姫は手あぶりの上の男の手をつかんでにじり寄ってくる。

「勝ちます。わしはきっと勝ってみせる」

「うれしい。平馬は福のだんなさま」

それだけが今の福姫の唯一の夢らしく、かっと感情的になって男の胸へすがりつきながら、おやすみなさいを求めてくる。

それは今日一日の旅の疲れを忘れたような、いきいきとして美しい福姫の顔であった。

煙硝

その夜の膳には銚子がついていなかった。剣客組も近習組も、もうさっきの伝達を口から口へ耳にしているらしく、さすがに言葉すくなに食事を終わった。

そして、ひと休みしてから、こんどは黙々と寝所替えをはじめたのである。

一同がそれぞれまくらについたのは、五ツ（八時）少しすぎたころだった。

平馬が心待ちにしていたお粂からは、ついになんのたよりもなかった。

平馬たちの寝所は、玄関に近いほうへふすま一重で茂太郎と松岡、その反対がわへこれもふすま一重で剣客組の四人、その間にはさまれているから、今夜は甘い言葉ひとつさえうっかり

口にできない。
「お福さん、今夜はお粂がこしらえてくれた忍び装束を着て横になってください」
「はい」
お福さんと呼ばれると福姫は急にすなおになるからいじらしい。
「ここへ握り飯と草履をおきますから、いざという時に忘れないように」
「はい」
平馬も自分の握り飯とわらじを大小とならべてまくらもとへおき、着のみ着のままで寝床へ入った。
「平馬――」
まくらをならべている福姫がそっと呼んで、こっちの手をさぐってくる。
黙って左手を出してやると、それをしっかりと自分の胸へ持っていって、
「福はこうしなければ、もう寂しくて眠れなくなりました」
とつぶやくようにいいながら、胸乳の間へ抱きしめていた。
平馬は返事のかわりにぎゅっと豊かな乳房をつかんでやる。
「ふ、ふ」
福姫はその男の手を上からまた両手で押えつけながら、いつまでも放そうとしなかった。
が、そのうちに疲れきっている福姫は、そんなたわいのないたわむれで満足したか、いつか軽い寝息を立てはじめていた。
そういえば、隣の座敷からももうだれかのいびきが耳についてくる。
――おかしい。
平馬はどうにも寝つかれなかった。
あの特別な勘を持っているお粂のことだから、この城下町へ敵が入りこんでいるようなら、きっとかぎつけて知らせにきてくれるはずである。そんな様子がないところを見ると、まだここへは敵は入っていないのだ。

もっとも、刺客という手がないではない。それだと、姿をかえているうえに一人か二人だろうから、お粂もうっかり見のがすかも知れない。
一人か二人の刺客なら、たとえ忍びの名人でも、こっちはそう恐れることはないのだ。
にもかかわらず、平馬の胸はなんとしても今夜はおだやかならぬものを感じて落ち着けないのだ。
――お粂の神がかりがうつってきたかな。
平馬はなんとなく苦わらいが出てくる。
この不安は神がかりのせいばかりではない。その大根は死にたくないという本心があるからだ。原因はいま自分の左の手がそっとつかんでいるこの豊かなあたたかい乳房にある。
「死なばもろとも――」
福姫も平馬も口ではそういってきたが、それがいつの間にか、
――生きてこのしあわせをいつまでも。
という欲望にかわってきて、それが日ごとに強くなっている。つまり、未練からくる死にたくないが、不安を大きくしているにちがいない。
おれのせいじゃない、お福さんの熱が高すぎるもんだから、ついおれまで未練にまきこまれてしまったんだ。
そんなことを考えながら、平馬は男の手に自分の乳房をまかせたまま安心しきったように熟睡している福姫が、かわいくてたまらなくなってくる。
――茂太郎、勘弁しろ。寝ている時ぐらいは、甘くなったっていいじゃないか。
茂右衛門や助左衛門がどんなに苦い顔をしたって、こっちはもうこういう仲になってしまっているんだからどうしようもないだろうと思うと、平馬は一人でわらい出したくなってくる。
胸が甘くなってくると、いつか気がゆるんで、平馬もまたかわいい愛人の乳房をつかんだま

ま、うとうとと甘い眠りにさそいこまれていったらしい。
しゅ、しゅしゅう。
ばあん。
それはそう大きな音ではなかったようだが、まったく異様な音だった。子供がよくおもちゃにするねずみ花火、あれのもっと激しい音に似ていたようだ。
後でわかったのだが、それが剣客組の座敷の押入の下と、その隣の福姫が寝所にするはずだった十畳の間の押入の中と、二ヵ所でほとんど同時に爆発したのだそうで、おそらく丸山蘭右衛門から渋川が伝授されてきた火薬の放火術、そんなたぐいのものだったにちがいない。
「くせ者だあ、御一同、一大事」
こっちの寝ず番がうろたえたように絶叫すると、
「火事だ、一同起きろ」
向こうの寝ず番も同時に大声を張りあげていた。
「お福さん、あわてなくてもいいよ」
平馬はむくりと起きあがると、もう福姫を抱きおこしていた。
「平馬、大きな音がしたようですね」
福姫はまだきょとんとした顔をしている。
「火事のようです。さあ、これとこれを持って、とにかく玄関へ出ましょう」
すでにどこからともなく煙硝くさい煙がこの座敷へも吹き出してきている。
「松岡、表玄関へ出るぞ」
隣へ叫ぶと、
「心得ました」
松岡はもう廊下へ出たようである。
「敵がいるかも知れぬ。見てくれ」
そういいつけながら、平馬は福姫の手をとって廊下へ出た。

強　襲

「平馬、福はお布団の下へ短筒を忘れてきました」
煙硝の煙に追われて玄関までのがれ出たとたん、はっとしたように福姫がいって立ちどまった。
「よろしい、すぐ取ってきます」
「大丈夫ですか、平馬」
「まだ大丈夫でしょう」
平馬は決断よくいってから、そこに先へ出て待っている茂太郎と松岡に、
「お福さんをたのむ。玄関前へ出て待っていてくれ」
そういいおくなり、もうくるりときびすをかえして元の廊下へ引きかえしていた。
「おお、平馬さん、どこへ――」
煙に追われてどかどかと出てきた剣客組四人の先頭が、びっくりしたように聞く。
「忘れ物だ。貴公たちは早く玄関へ出ていてくれ」
かまわずすれ違って、一気に寝所へ進む。そこはもういっぱいの煙で、うっかり呼吸ができない。この煙を吸いこむと昏倒するおそれがあるのだ。
――落ち着け、平馬。
息をとめて目をつむり、たいてい見当はついているからつかつかと福姫の寝所へ進み、手さぐりでまくらの下をさぐると、たしかにそこに短筒はあった。
しっかりそれをつかんで廊下へ出る。かすかに目をあいて、これは煙が目に痛いだけですんだが、玄関のほうへ走りながら、思わず呼吸をしていたらしい。たちまち煙硝の煙にむせてせきこみそうになると、もう一度ぐっと息をとめて、ころげ出すように玄関から表へのがれた。
廊下からここまでものの十間とはあるまい。その半ばでうしろから急に赤い光がさしてきた

のは、書院の戸障子に火が移って燃え出したのだろう。
「火事だあ」
「火事だぞう」
母屋のほうから人々がけたたましく叫びわめいているのを耳にして、いちばん火元に近い近習組はみんな無事だろうかとちょっと考えたが、そこからこの玄関前まではもうほとんど夢中だった。
地へ片手をついて、せき入りながら、とにかく助かったとほっとしたとたん、その耳へ、
「平馬、——平馬」
福姫のただならぬ金切り声がびいんと突きささってきた。どうやら門の外だ。
「えいっ」
「とうっ」
ぎょっと顔をあげてみると、そこの暗い庭ですでに二組みばかり切りあいがはじまっている。
「うぬっ」
敵はもうこの旅籠を取りまいているに違いない。考えてみると、煙硝をつかって焼き打ちをかけるくらいだから、そのくらいの手配りは当然なことだった。
それにしても、小藩とはいえ他藩城下町へきてこんな思いきった暴挙に出るからには、敵もこの一戦に最後の生死をかけているにちがいあるまい。
平馬は福姫の短筒をふところへしっかりとしまって、憤然と立ちあがった。
玄関の庭で二組み、いや三組みか、人数にして七、八人、激しくにらみあっているのは、暗いからまだだれだかわからない。が、いちばん先に庭へ出たのは茂太郎と松岡だから、二人がこの中にいることだけは間違いないだろう。敵はいきなり二人を取り囲んで、その間に一人になった福姫をさらっていったのだ。
あいにく短筒を忘れて庭へのがれた福姫は、

どう身の防ぎようもなかったろう。
だあん。
この時、門の外で一発、銃声がした。
——渋川の短筒だ。
すると、この第一陣は、渋川、関谷の江戸組が中心になっているのだ。
「茂太郎、松岡、しっかりやれ、負けるなよ」
平馬は切りあいのほうへ大声で激励しながら、一気に庭を突っ切って門の外へ出た。
「平馬さん、姫君の駕籠をたのむ」
その声は笹川倉之助のようだが、これも二人の覆面を相手に白刃をかまえている。
「心得た」
見ると、十数間先にちらっとちょうちんの灯が見えて、どんどん城下外れのほうへ走り去っていくところだ。のがさじと走り出したとたん、
「えいっ」
林屋の塀のつきる左の横町から、ふいに一人の覆面が切って出た。
「おうっ」
平馬は右手の一刀を上体をひねってそっちへたたきつけて、
「あっ」
とくせ者がひるむすきにそこを走りぬけたが、
「平馬、来い」
その行く手へまた二人、右手から躍り出してぴたりと剣陣を敷く。こっちの名を呼んだからには、江戸組のやつらにちがいない。
——くそっ。
平馬はちょっと立ちどまって呼吸をととのえ、敵は少しでも先へ駕籠を走らせれば目的が足りるのだろうから、しめたと一息つくところを、
「えいっ、——とうっ」
右を払って、かえす二の太刀を左へたたきつける、切っても、かわされても、こっちの命のあるかぎりは前へ前へと進む思いきった戦法で、

「わあっ」
「くそっ」
その二人が左右へしりもちをつく間に、平馬はもうそこを突破している。
たったそれだけの間でも、駕籠との距離はまた数間離れたらしく、それだけちょうちんの灯が遠くなっている。
そのころになって、道も家も林もかっと赤く染まってきたのは、火事の火がいよいよ外へ吹き出したのだろう。
もう町の人たちはみんな表へ出て、何人となく現場のほうへ走り出したから、その流れに逆らって走るのはひどく走りにくい。
――そうか、敵はこれも計算のうちに入れていたかも知れない。
うっかりと後からくる者は、野次馬に道をふさがれてしまうおそれが十分ある。しかも、そのうちには、城内から、侍、足軽たちが駆けつけるだろう。この網にかかったら万事休すだ。場合によっては、調べがつくまで二、三日城内へ監禁ということになりかねない。
幸い、平馬はそんなことにならないうちに、どうやら城下外れへかかってきたようだ。
時刻はやがて四ツ半（十一時）をまわったころだろう。
どん、どん、どんと城のほうで急を知らせる太鼓の音がはるかに聞こえ出している。そういえば、さっきから遠く近く寺々でも早鐘をつき出しているのだ。

閉じこめられる

そのころ――。
お粂と右助は、昨夜お粂が一夜を明かした城下外れの水車小屋の中にいた。
行列より一足先に三日月の城下へ引きかえしたお粂は、それとなく数軒しかない旅籠を聞いてまわったが、怪しいと思うような人間はどこにも泊まっていないようだ。

そこで、街道端のあまりきれいでない飯屋で夕飯をすませて、日の暮れるのを待って、そっとこの水車小屋へ忍びこんだのだ。もし今夜なにかあるとすれば、敵は必ずこの前の道を通って城下町へ入りこむはずだからである。
「右助、今夜はあたしたちおこもさんよ」
お粂は空き俵で寝床をこしらえながら、くすくすとたのしそうにわらった。
「夜は冷えこむぞ、行者さん」
「大丈夫よ。あたしはゆうべ一人でさえしのげたんだもの。今夜は二人なんだからよっぽど楽だわ」
「どうしてだね」
空き俵の上へ並んで座りながら、右助が空っとぼけて聞く。
「さあ、どうしてだか」
お粂はいきなり横から男のひざへ身をのせて、首っ玉へ抱きついていく。
「ああ、そうか――。こうやればあったかいなあ」
右助はしっかりと女の背中へ両手をまわして抱きしめながらいう。
真っ暗な小屋の中の、二人きりの世界なのだ。
「行者さん、また昼間のようにめまいがおこると困るぞ」
「いいのよ。そしたらおまえに看病してもらうから」
「なあ、行者さん、おれまだなんだか夢を見ているような気がしてしようがないんだ」
「どうして――」
「どうしてって、おれ、御主人同様の行者さんをこんな風に抱いているなんて、少し果報すぎるもんな。罰があたらねえかなあ」
右助はむらがるような女体の甘いにおいに酔いながら、本当にふしぎな気がしてしようがないのである。こんな風にしてお粂を抱いている。道中へ出てから、夢には何度か見た。その度に、人一倍気が強くて、意地っぱりで、女にしては

ひどく荒っぽすぎるお粂が、まぶしくてしようがなかった。
　こっちはなんといっても下郎だし、お粂は内密ではあるが主人の娘なのである。とてもこんな仲になれるはずはないと胸の中であきらめ、自分の男心をいつもしっかりとおさえつけてきた。
――おれは行者さんに忠義さえつくせばいいんだ。
　そうかたく自分で自分をいましめてもきた。それが、あの金谷坂で崖から落ちて、ふいにお粂の白々とした乳房を口へあてがわれた時からは、もうだめだった。それでも男と女の関は越えまいとして一生懸命になっていたが、心の中ではもう平気でやきもちさえやいているのだ。おれはお粂のために死んでもいいから、お粂を女房にしたい、そういう大それた欲望が日に日につのっていく。
　そして、今朝、心にもない痴話げんかから、とうとうお粂の肌をわがものにしてしまった。この気の強いお粂が、いざとなるとこっちのするなりになって、女体は媚さえふくんで歓喜に燃えていた。
――女ってこんなもんかなあ。
　右助は案外な気がしながら、しかし、右助もまたその時から自分の世界がすっかり変わってしまったような気がする。
　もうお粂という女を別にしてはなにも考えられない。この体も、この心も、自分一人の存在ではなくて、お粂と二人の存在になっている。お粂がめまいがするといえば、自分までめまいがしてくるのだからふしぎである。
「右助、なにをそんなに黙っているのさ」
　お粂は男のほおへぴったりと熱い自分のほおを押しつけて、甘ったるい声を出す。
「おれ、いま、罰があたるんなら今だぞと思って、待っていたです」
「大丈夫よ、もし罰が当たればいっしょに罰が

あたるんだもの、あたしはおまえとなら地獄でもどこへでも行くわよ」
「それなら、おれもう安心していいかね」
「いいわ。――こうしているとあったかいだろう、右助」
「あったかいです」
　事実、二人の体はすでに体温以上に熱をおびて燃えてきている。
「あたしこのまま眠っちまおうかなあ」
「眠ってもいいとも――。行者さんが眠ったら、おれいたずらしてやるです」
「どんないたずらする気」
「こうしてやるです」
　右助は片手で女の胸をはだけ、ゆっくりとその乳房に吸いついていく。
「くすぐったいったら、右助」
　女体はたわいなく身もだえしている。
　若い男と女の二人きりの世界には、寒さも、時の退屈もなかった。話すことだっていくらもあるからだ。これから江戸へ帰ったら、どこへ所帯を持とうか、二人で商いをするとしたらどういう商売がいいだろう、子供ができたらなんという名にしようかとか、それは今まで考えてもいなかった話題ばかりなのである。
「行者さん、赤ん坊の名はまだ早いようだ」
「どうして――」
「だいいち、男が生まれるか女が生まれるかわからないもんな」
「だから、両方考えておくのよ」
「あれえ、行者さん双子を生む気かね」
「ばかばっかし――」
　それは何刻ごろだったか、二人ははっと口をつぐんで、表へ耳を澄ました。
　街道を上月のほうからこっちへ近づいてくる足音がして、それが二人や三人ではないと耳を澄ましているうちに、何人かがふっとこの水車小屋の前で立ちどまった。
「おい、貴公たち五人はここを受け持ってくれ」

そう命令している声は江戸弁で、どうやら関谷十三郎らしい。
「はっ」
「ここは我々切り込み隊を別にして、第一陣になるんだ。敵の追撃をできるだけここで食いとめる大切な関門なんだから、しっかりたのむよ」
「心得ました」
　申し渡しがすむと、五人だけ小屋の前へ残って、後の者はぞろぞろ城下町のほうへ進んでいく。足音はすくなくとも十五、六人からの人数である。
　――しまった。
　お条は思わず立ちあがろうとした。
とっさにその体を右助がしっかりと抱きとめる。
「あわてちゃいけねえ。いま出ると犬死にだぞ」
「だって、あの連中、どうせここへ入ってくるわよ」
「戸に心張り棒がかってあるから大丈夫だ。それでもし入ってきたら、おれにまかせておけばいい」
　右助はさすがに男だった。じっとお条の肩を抱いて少しもあわてた様子は見せない。
「おい、この小屋へ入って少し休もうじゃないか」
　案の定、もう一人の男が戸口へ手をかけて、がたがたやり出す。
「あかないようだな」
「やめとけ、野村。戸があかないのは、中へ入るなという天の暗示だろう」
「暗示――」
「うむ。中へ入ってうっかり居眠りでもしていると、思わぬ不覚をとる。今夜軍律に背いた者は切る。また、そんな不覚者は一人も今夜は選んでいないつもりだと、出陣の時大坪さまが特に念を押していた。諸君も知っているだろう、大坪さまは賞罰のきびしいお方だ。いいか、出世するか、しからずんば死あるのみ、この意気を忘れちゃいかん」
　おそらくこの組の組頭なのだろう、若々しい声がきっぱりと味方を説き伏せていた。

追　撃

「それっ、火の手があがり出した。もうすぐぐるぞ」
　水車小屋の前の伏勢が活気づいてどかどかと往来へ出ていったのは、中に息をこらしてかくれているお条と右助にはじりじりするほど長い時間のように思えたが、事実はそうたいして時はたっていなかったようである。
　そして、小屋の中までほんのりと赤いあかるみがさしてきたのは、たぶん敵が林屋へ火をかけたのだろう。
「右助、火事だね」
「そのようです」
「しまった。あたしが今朝お不動さまを見たのは、焼き打ちの前じらせだったんだね」
　一言火に気をつけるようにと注意しておくんだったと思ったが、もう後の祭りである。
　寝入りばなをふいに火をかけられたのでは、平馬たちもまさかと思って油断しているだろうから、きっとあわてているだろうと、お条がおもわずくちびるをかみしめていると、
　えっさ、えっさ、よいさ、よいさ。
と、城下町のほうから数人でかついでいるらしい駕籠（かご）が走ってきたようだ。
「おお、来たぞ」
「うまくいったらしいな」
　はずんだ声が表でいっているうちに、駕籠は前へかかりながら、
「一同、すぐ後から平馬が追いかけてくる。しっかり食いとめるんだ。たのむぞ」
　さっきの関谷十三郎の殺気立った声がわめきながら通りすぎていく。
「心得ました」

「御苦労です」
こっちの声がそれを見送っているようだ。
駕籠についている五、六人の人数が黙々と通りすぎる。
「もうこっちのもんだ」
「しかし、大坪さまは姫君をさらってどうされるつもりなんだろうな」
「知れたこと、お味方になってもらうのさ」
「お味方に――」
「大坪さまはまだひとり者だ。姫君を奥方にしてしまえば、いやでもお味方になる」
「なに様の姫君だって、姫君は女だからな。男は知恵と才覚次第だ」
「まさか、福姫さまは将軍家の姫君だぞ」
「むだ話はやめろ。――来たらしいぞ」
組頭らしい鋭い一喝に、雑談はぴたりとやんだ。
「お条、どこへ行くんだ」
「のぞいてみるだけよ。兄さんはあんなやつらに負けやしないわ」
お条はそっと右助のそばを立って、心張り棒のかってある戸口へ寄っていく。口ではそういっていても、今は色恋は別として、平馬に万一のことがあれば無論飛び出していく気のお条である。
――おじいちゃんへの恩がえしなんだもの、しようがありゃしない。
お条はそっとふところのナンキン鎖づきの分胴を握りしめていた。
「そら来たぞ」
「油断するな」
覆面、わらじばきの五人は、前に三人、六尺ほどさがったうしろに二人、すきのない隊形をとっていっせいに抜刀した。
視界は空をこがす火事の反射で、赤いあかるみを作っている。
「おうっ」
一気に敵の剣陣を切りぬけようとした平馬は、三人のうしろにまた二人抜刀を構えている隊形を早くも見てとって、気はあせるがさすがにちょっとちゅうちょした。
第一線を左右へ切りぬけて前へ出たところを、後詰めの二人にすかさず殺到されると、一人は切っても残る一人の切りこみはまずさけられない。
しかも、この五人は金で雇われている浪人者とちがって、敵にいわせれば主君のためにお家をみだす謀反人を切るのだという田舎侍の律儀さを五人とも持っている。つまり、五人が五人とも死に物狂いなのだ。
「えいっ」
「とうっ」
むしろ、敵から仕掛けてくれれば、そこに五人の呼吸の乱れが生じるから、その虚をついて一気に切りこめる。
が、敵の目的は、平馬を切るより、ここでがっちりと食いとめて、その間に駕籠を少しでも早く領分内へ送り、できるだけ時をかせいでいればいいのだという腹があるらしいから始末に困る。
――くそっ、ここで手間取って駕籠を見失ってしまっては、生死もなにもないじゃないか。
平馬が憤然として意を決した時、
「平馬さん、ここは島田重蔵が引きうけた」
うしろから追いついてきた剣客組の島田が声をかけるなり、
「えいっ、――とうっ」
平馬を追いぬけて、もう敵の剣陣の中へ火のように切りこんでいった。
「わあっ」
「おうっ」
剣陣の一角がくずれてたちまち乱刃になったから、
「えいっ、――とうっ」
平馬は一刀を左右にたたきつけて、
「わあっ」

後詰めの一人がのけぞり、一人があわてて飛びのく間に、だっと前へ走りぬける。

駕籠のちょうちんの灯はもう見えない。両側は水田だが、走るにつれて火事の火は次第に暗くなり、やがて一部落の森へかかったころは足もとがあぶなくてどうにも走りきれなくなってきた。

——上月の町までは五里あまり、いそぐことはない。道は一本道なのだ。

そうは思っても気がせいて、せめて敵のちょうちんの灯なりと見えないかと前ばかり見て走るから、つい何度かつまずきそうになる。

今になって、お福さんさえあの時短筒を忘れなかったら、お福さんもむざむざ敵につかまらなかったろうし、自分もまたお福さんのそばを離れずにすんだのだと、それが悔しい。

「えいっ」

その森がつきようとする左手から、突然さっと流星のように槍を突き出してきたやつがある。

おなじ走るにしても、暗くて足がおそかったのが幸いだった。あやうく踏みとまって、わずかに右へ腰をひねった袴のひものあたりをかすって流れる穂先、平馬はあいた左手でとっさに千段巻きを引っつかみ、力まかせにぐいと引きつける。

「あっ」

くせ者が思わず前のめりに往来へ泳いできたのを、

「えいっ」

だっと右手の一刀を肩先へたたきつける。

「う、うっ」

そいつが槍を取り落として大きくのけぞる間に、

「平馬、命はもらったぞ」

すっと前へ立った人影が、いきなり抜刀を上段にふりかぶってきた。

「渋川一心斎だな」

ひらりと飛びさがった平馬は、すかさず血刀を青眼につけながら、ここに一心斎がいるくらいなら福姫の駕籠もそう遠くはないはずだと、たちまちみなぎるような闘志が全身にたぎってきた。

お灸の声

「えいっ」

「おうっ」

渋川一心斎はさすがに江戸の剣客仲間で久しく悪名を売ってきた念流の達人だった。しかも、信濃坂の下でわが片腕ともたのむ盟友大場鬼七を目の前で平馬に討たれ、その無念もさることながら、平馬の尋常でない手腕は十分知っている。したがって、彼のこの上段は心おごって思わず振りかぶった上段ではなく、おそらく彼は上段を得意にして、そこになにか秘剣を自得しているのだろう。

油断はできないと平馬は思った。

一つには、渋川はこんど手塚勘解由からこの事件をくれぐれも依頼され、必勝を期して江戸を立った時は、十五人に余る浪人剣客をしたがえてきた。そして、箱根を越す前に必ず勝負をつけてみせると豪語して品川で手塚と別れてきたのが、ついに江戸から百七十里、津山領の近くまで引っぱられ、その間度々平馬に策の裏をかかれて、浪人組はほとんど全滅している。

いまここで平馬を倒さなくては、生きて江戸へかえれぬばかりではなく、男の面目にかけて津山領の土を踏むことさえできぬどたん場へきているのだ。

「おうっ」

「えいっ」

平馬もこの強敵は一気に倒すというわけにはいかなかった。

力量からいえば大場鬼七、大崎郷斎などとほぼ伯仲したものだろうが、その鬼七、郷斎からしてすでに平馬よりは一枚上の腕だったのだ。

それが今夜はいわば命をかけて最後の勝負に出ているのである。
——到底相打ちはまぬがれない。
平馬もそう腹をすえるほかはないようだ。
「えいっ」
一心斎はじりじりと間合いを詰め出す。捨て身の上段だからすさまじい気魄がみなぎっている。
「おうっ」
平馬は一歩もさがろうとしない。さがって間合いを保っているうちに勝機がつかめるような、そんな甘い相手ではないのだ。むしろ、敵の仕掛けを待って一気に勝負に出る、そのなにものをも恐れぬ度胸の中に、一縷の勝機があるとすればあるくらいのものだ。
だから、平馬は無念無想の境に入って、ぴたりと渋川の呼吸にこっちの呼吸をあわせながら、相手の仕掛けを待っている。
この時、一心斎の背後で、意外な声がした。
「兄さん、お福さんの駕籠はあたしが追います」
いつの間にここを通りぬけたか、たしかにお粂の声だ。そして、黒々とした人影はそのまま向こうのやみへたちまち吸いこまれていったようだ。
——お粂だな。
そういうお粂の敏捷さに慣れている平馬は、ただそうちょっと思っただけだが、
——うぬっ。
一心斎は背後の声だけに、一瞬ぎくりとしたらしい。思わず前進がぴたりととまった。そのわずかな呼吸の狂いに、
「えいっ」
平馬の激しいもろ手突きが誘われたように、さっと地をけって殺到した。
「おうっ」
渋川は右半身になりながら、同時にその位置で一刀を振りおろしてきたが、そこに一瞬の遅速はまぬがれず、平馬は相手の左肩の下あたり

を突いて、手ごたえがあったからひらりと飛びさがって元の青眼になおる。
「う、うっ。——くそっ」
左手の自由を失った一心斎はよろよろと二足ほどうしろへさがったが、とっさに右片手上段に構えを取って、まだ少しも闘志は失っていないようだ。
「えいっ」
「とうっ」
しかし、夜だからはっきり見えないが、肩の傷は相当深いらしく、出血がひどいのだろう。渋川はまたしてもうしろへ少しよろめきながらどっとそこへしりもちをついて、
「平馬、わしの負けだ。切れ」
と、刀を捨てた。
「いや、命がないほどの傷じゃない。後日、改めて勝負をしよう」
しかし、渋川は右手を地について、がくりと総髪の首をうなだれてしまう。
「おう、平馬さんだ」
うしろからちょうちんの灯がどんどん近づいてきたので、平馬がほっとしながら振りかえってみると、小田原ぢょうちんをかざして先頭を走ってくるのは剣客組の中野半助だった。後につづいているのは、茂太郎と松岡の二人である。
「半助、御苦労だった」
「いや、——そこにおじぎをしているのは一心斎のようですな、平馬さん」
中野ははっとしたように、そっちへちょうちんをかざしている。
「平馬どの——」
「おお、茂太郎さん、無事だったか」
「若先生、駕籠は」
松岡がまずそれを聞く。
「いまお粂が追っている」
「じゃ、いそぎましょう。半助、たのむ」
「心得た」
ちょうちん持ちの中野半助は、言下に先頭に

立って走り出す。
こんどは足もとがあかるいから、平馬も走りいい。
「若先生、いまの一人は槍のようでしたな」
平馬と茂太郎が肩をならべて走るうしろから松岡がいう。
「うむ、袴をかすられたようだ。そうそう、水車小屋の前で島田に別れたが、重蔵はどうしたろう」
「二、三ヵ所薄手を負ったようです。手当をして、後からすぐ追いつくでしょう」
「笹川と後藤の様子はわからないか」
「これも負傷でしょうが、大したことはありません。それより、みんな姫君をさらわれて、申し訳ながっています」
「暗いのと、煙にまかれていたのと、――申し訳ないことをした、平馬さん」
茂太郎はそれが自分の責任のように頭をさげてわびる。
「いや、お福さんはきっと取りかえすからいい。――近習組の様子はわからないかね」
「あれたちは裏へ出た。無論、裏にも敵はいたろうし、それに火のまわりが早かったから、あの横町から街道へ出られなかったんだろう。まだ一人にも会っていないんだ」
「わしはまず心配あるまいと思います。火事はふいだったが、なにかあることはみんな覚悟して、その支度をして寝ているんですからな。いまにきっと追いつきます」
松岡は気休めばかりではなく、そういう自信があるようだ。
「若先生、お粂と右助はあの水車小屋へかくれていたようですな」
「そうか」
「我々がその前を通った時、右助は敵も味方もなくけが人の世話をしていました。お粂もはじめちょっと手伝っていたそうですが、若先生のことが気になるといって、後を右助にまかせて

追いかけたんだといっていました」
「ふうむ、けがをして戦闘力を失ってしまえば、敵も味方もないからなあ」
平馬は走りつづけながら、なんとなく胸あたたまる気がした。

土居の新関

福姫の駕籠はあらかじめ一里ごとに用意しておいた新手の人足の肩へ次々にかつぎつがれて無事に津山領へ入り、土居の新関へかかったのはまだ夜明け前七ツ（四時）をすこしすぎた時刻だった。
駕籠についているのは、江戸組頭の関谷十三郎、おなじく江戸組生き残りの河田伝蔵、最上十内、これに案内役として国もとの大坪組の橋田十平次、杉山市郎太、堀内要三の三人が先に立っていた。
この土居の新関は、大坪兵太夫の指図でつい三日前に半農の茶店を利用してその外がわへ柵をめぐらし、柵門をつけた急ごしらえのもので、足軽二十人を四組みに分け、これに士分一人を組頭としておき、総指揮は徒士組頭波川彦兵衛がとっていた。
無論、こんどの若殿組の潜入をふせぐために造られたことはいうまでもない。
「やあ、関谷さん、御苦労でしたな」
関守頭波川彦兵衛に迎えられて、駕籠が柵門の中へ入ると、さすがに関谷もほっとした。ここまできてしまえば、もう福姫を敵に奪いかえされる心配は絶対にないし、昨夜三日月の城下を立ってから二刻半（五時間）あまり山坂の多い道をほとんど休みなしに走りつづけてきたのだから、江戸育ちの者の足にはまったくこたえた。
「波川さん、白湯はわいているだろうか」
「うむ、わいている。いま茶を入れさせよう」
「ぜひたのむ」
関谷はそうたのんでおいて、茶店の軒下におりている福姫の駕籠の前へ進んだ。

「姫君、お疲れでございましょう。申し訳ありませんでした」
駕籠の中へ声をかけておいてとびらをあけると、福姫はうしろ手に縛られたまま、案外毅然（きぜん）としてそこに座っている。しかし、長い間駕籠にもまれてきたのだから、さすがに蒼白（そうはく）な顔にげっそりとした疲労の色はかくしきれないようである。
「失礼ですが、もう津山領へ入りましたので、おなわをとかせていただきます。御所望なれば白湯もわいておりますそうですし、しばらくお駕籠を出て休まれても結構なのですが」
関谷は福姫のなわをといてやって、同情するようにいう。
福姫は自由になった手のなわめのあとをさすりながら、はっきりと首を振ってみせる。
「それでは、お休みにならなくてもよろしいのでございますな」
それとなくもう一度念をおしてみると、その意味は通じたらしく、うなずいてみせながらふっと目をひざへおとしている。
「これからまだ四里ほどまいらなければなりません。御用の折はいつなりとお手をたたいていただきます」
この分では、どうせなにをいっても口はきかないと見たので、関谷はそのままとびらをしめて立ちあがる。
「福姫さまだそうだな、関谷さん」
茶店の土間へ入ると、波川が生まじめな顔をしてそっと聞く。
「うむ」
「後のたたりは大丈夫かね」
「そいつは大坪さまに聞いてくれ」
関谷は苦わらいをしながら、
「それより、すぐ後から、長谷部平馬、中橋茂太郎、松岡平助の三人が追ってくるそうだ。明け六ツまでは絶対にこの関門はひらかぬこと、明け六ツになったら、敵は一人ずつ中へ入れて

引っとらえ、勝又へ早馬を飛ばして大坪さまの指図を待つこと、——ここがおたがいに乗るか反るかのどたん場なんだ。たのむよ、波川さん」
と、もう一度活を入れておく。
松平福姫の名に多少でも恐れをなすようでは、なんとなく心もとない気がしたからである。
「それは十分心得ている」
「そうだ、波川さんは江戸詰めの者の顔はよく知るまいから、相談相手に最上十内を残していこう」
「そうか、こっちはありがたいが、そっちは大丈夫かね」
「それはここの関門がしっかりしているかぎり大丈夫ということになりはしないか」
「なるほど——。よし、ここは引きうけた」
腕は立つし、人物もしっかりしていると聞いてはいるが、国侍は世間が狭いからどうもたよりない。
関谷は組下の最上十内をかげへ呼んで、その点おまえが十分注意してくれるようにとよくいい含めて、ふたたび福姫の駕籠をまもって土居を出発したのである。
土居から勝又へ四里、勝又から津山へ三里、その勝又の町の大庄屋（おおしょうや）栗田喜兵衛（くりたきへえ）の屋敷に大坪兵太夫が本陣をおいて、福姫の駕籠のつくのを待ちかねているのだ。
駕籠の中の福姫は、三日月の城下の林屋の玄関前でいきなりくせ者に組みつかれ、なわめの恥辱をうけた時は、全身がふるえるほどの怒りを感じたが、敵と味方にわかれればこれが戦の常なのだとようやく冷静にかえり、たとえどこへつれていかれようと、
——福は大御所の娘なのだ。
という大きな自負があるから、怖いなどとは少しも思わない。
ただ心配なのは、ひょっとして平馬の身になにか間違いでもあったらどうしようと、それだけが気になる。

正直にいえば、平馬がそばにいてくれないのだと思うと、妙に夜風が身にしみて肌寂しい。いまにも狂い出したくなるほど、平馬が恋しい。

――昨夜も平馬の手がこの胸をつかんでいてくれたのに。

泊まり泊まりのあのことこのことが、ありありと肌におもいおこされて、かっと体中が熱くなってきた後では、泣きたくなるほど悲しくなってしまう。

「平馬、きっと死んではいやですよ」

我にもなく身もだえしてつぶやいている時の福姫は、もう大御所の娘ではなく、ただ平馬が恋しいあわれな恋娘お福さんになっているのである。

その福姫の駕籠が土居を出て小一里も進んだころ、平馬の一行はやっと土居の新関の柵門の前へたどりついていた。

途中、要所要所に何人かの伏勢がいて、こっちのちょうちんを目当てに、坂の上からふいに大きな石をころがしてきたり、遠矢を射かけてきたり、どうにもあぶなくて思うように道がはかどらなかったのだ。といって、不慣れな山間の夜道は、ちょうちんがなくてはとても足もとがあぶなくて歩けそうもない。

一計を案じたちょうちん持ちの中野半助は、小田原ぢょうちんを竹の棒の先にくくりつけ、それをなるべく横のほうへさし出すようにして歩き出した。

「宮本武蔵先生がこうして山賊の鉄砲をのがれたという故事があるんです」

なんでも学問はしておくべきですなあと半助はつけ加えて、呵々大笑していた。

とにかく、見えない敵のいたずらと始終闘いながらの夜道は、決して楽ではなかったのである。

勝又へ四里

「茂太郎、この関所は新しくこしらえたものらしいな。まだ木の香がする」

ついに土居の柵門に突き当たった平馬は、新しい木の香をかいで、小声で茂太郎にいった。

「そうのようです。おそらく、大坪兵太夫が我我に備える目的で、こんなものを急造したのでしょう」

茂太郎はそういいながら、かまわずどんどんと柵門をたたき、

「これ、だれかいるか。この柵門の番人はおらんか」

と、中へ大声で叫ぶ。

番人は番小屋にしている茶店の軒下にかくれてこっちの出ようを待っていたらしく、

「そういうおまえさんがたは何者だ」

と、こっちへ出てきて聞く。

「わしは江戸家老中橋茂右衛門の名代茂太郎、火急の御用でお城へ駆けつける者である。番人では話がわかるまい。早々組頭を呼びなさい」

茂太郎は高飛車に出る。津山領へ入ればこっちは江戸の家老格を持っているのだから、なにも恐れることはないのである。

「しばらく待たっしゃい」

当番の足軽も相手が家老では位負けがするので、すぐに番小屋へ入っていった。

この時、波川の相談役として残された最上十内は、

「お組頭、あれはたしかに中橋茂右衛門のせがれ茂太郎の声です。ここはなまじ応対に出るより、明け六ツまで知らん顔をしておくほうが無事でしょう」

と、波川に進言した。

たかが徒士組頭では、結局位負けがすると見たからである。しかし、彦兵衛は、

「なあに、門さえあけなければいいんだから」

と、たかをくくって応対に出ていった。

「わしは当土居の関守頭波川彦兵衛だが、なんの用かな」

「当方は江戸家老中橋茂右衛門名代一子茂太

郎、老中土井大炊頭（おおいのかみ）さまより御当主さまへ火急の書状をあずかりお城へ急行する者、早々この門を開きなさい」

「それはなりかねます。関門は暮れ六ツにしまって、明け六ツに開くのが天下の御定法、時刻がまいるまではどなたなりともお通しすることはできません」

　敵の人数はたった四人なのだから、彦兵衛はそれで押し切ってしまう腹だ。

「それでは聞くが、この土居の関門は公儀のおゆるしを得て建てたものか。この儀はどうだ」

「当地はすでに津山の御領分内、御当主さまおいつけにてここに関を設けましたもの、その他のことはくわしくは存じません」

「黙れ、彦兵衛。たとえ諸侯の領分内といえども、街道筋に公儀の許可なくみだりに関門を造ることはかたく禁じられている。かようなことが江戸表へ知れると、小森家は謀反の嫌疑（けんぎ）をかけられて家名が断絶するぞ。存じているか」

　あっと彦兵衛は急所を突かれて顔色をかえた。この関門は大坪兵太夫が一存でこしらえたことを、ちゃんと承知しているからだ。

「それ見ろ、公儀に無断でかような関門を急造した上、いままた御老中より御領主さまへの大切な書状をここで手間取らせたとあっては、その方が切腹しただけでは事はすまぬぞ。早々に開門して我らを通し、その上で至急この関を取り払う手段を講じるのだ。一部の者の不心得から主家の家名が断絶したら、その方どもはなんとする気だ」

　事があまりにも重大なので、こうなると彦兵衛にはどう処置をしていいかわからない。

「中橋さまにお願いの儀がございます」

　そばにいた最上十内が口を入れる。

「その方は何者か」

「御当所番人を仰せつけられている最上十内と申す者ですが、ただいまの中橋さまのおさとしはよく相わかりましたのでさっそく開門はいた

しますが、その儀についてこちらにもお願いがございます」

「なんだ、申してみろ」

　江戸から関谷十三郎についてきた徒士組の者だなと茂太郎にもすぐわかったが、それはわざと不問に付しておく。

「手前どもはこの新関にさような重大な問題があることはよく知らず、ただ国家老大坪さまの仰せつけにてかように関守を相つとめております。したがって、手前ども一存にては今後の処置もつきかねますので、当所より四里、勝又の宿に大坪兵太夫さまが御出役になっております。そこへ中橋さまを御案内いたしますから、ただいまの儀を直接中橋さまから大坪さまにお掛け合いくださいますよう、お願いいたしたく存じます」

　小才のきくやつとみえて、これはうまい答弁だ。

　どうしようというように、茂太郎がちらっと平馬のほうを見る。うっかりすると、せっかくここを通っても、勝又でまた大坪のとりこになるおそれがあるのだ。

「茂太郎、それでいいだろう」

　平馬がそっとささやく。平馬としては、大坪が勝又に本陣を敷いているからには、福姫の駕籠もそこへ運ばれているに違いないと見たのだ。

「十内、その儀しかと承知した。さっそく開門せよ」

「もう一つお願いがございます」

「なにっ」

「この関門は、ともかくも明け六ツまでは開いてはならんと大坪さまからかたく申しつけられております。それを手前一存にて開きますので、勝又へお通りの儀は中橋さまお一人と供の方一人、後の方々は勝又からなにぶんの沙汰（さた）がございますまで当番小屋へ御休息を御願いいたしたく存じます」

　微禄者（びろくもの）ながら、これは物の役に立つ男だと、

平馬は感心して、
「その儀もさしつかえない。門をあけなさい」
と、茂太郎にかわって答える。
茂太郎はむっとしているようなので、へたなことをいい出されては機会を逃すと見たからだ。
「あなたさまはどなたさまでございましょう」
すかさずぬけぬけと十内が聞いてくる。
「向島の長谷部平馬だ。くわしくいわなくても、その方はよく存じているだろう」
平馬は軽くやりかえす。
「恐れ入りました。ただいま開門いたします」
十内は不敵なおじぎを一つしてから、そばにぼうぜんと立っている彦兵衛に、素早く二言三言耳うちをする。
彦兵衛はうなずいて、そそくさと番小屋へ駆けこんでいった。
「平馬どの、お二人きりで大丈夫ですか」
松岡が心配そうにそっと聞く。
「なあに、こうなれば腕ずくより頭の問題だ。大坪にしたって、領内でこっちの命をねらってはかえって後始末が困るぐらいのことは知っている」
「なるほど——」
「松岡はひとまずここへ残って、後の者が追いついてきたら、いい折を見て、それぞれ小森土佐の屋敷へ落ち合うように采配を取ってやってくれ」
「心得ました」
こっちがそんな相談をしているうちに、敵も取るべき手段を講じたのだろう。
番小屋の裏庭から乗馬を一頭引き出した侍が、ひらりとそれにまたがると、たちまち勝又のほうへ一鞭当てる。
「お待たせいたしました。どうぞ、お一人ずつお入り願います」
その間に十内が足軽二人に指図して、一人が通れるだけ門をあける。

まず平馬が中へ入ると、足軽五人がこれを取りまいて、
「どうぞこちらへ——」
と、少し番小屋の方へ進む。
その後へ五人の足軽が進んで、茂太郎の入ってくるのを待っている。

大庄屋の妻女

土居の関門を入ってからの駕籠は、もう普通の足取りになっていたので、さすがに心身ともに疲れきっている福姫は、駕籠のうしろへ背をもたせながらうつらうつらと眠っていた。
夢うつつの中で、福姫はいつか平馬がうしろからしっかりと抱いていてくれるような気がしてきて、とても心たのしい。
まわりは若葉の林で、春の日がさんさんと明るい。遠くに筑波山が紫色にかすんでいた。向島の屋敷の築山である。福姫は偽若殿の平馬の胸へしっかりと抱かれ、激しくくちびるを吸われている。
男にそんなまねをされるのははじめてなので、福姫はどうしていいかわからない。平馬の目は火のように燃えて、いつまでもくちびるを離そうとしない。息がはずんで、切なくて、そのくせ甘くたぎっている体中の血が、もっときつく抱いてと訴えもだえながら、自分からもしっかりと男の背中を抱きしめている。
離れるのはいやだったし、平馬も離そうとしはしなかった。
「これだけではいや、平馬」
福姫はあえぎながら訴える。
次の瞬間、平馬は手をとって、一散に走り出した。
「どこへ行く——」
しかし、平馬はにっとわらっただけで答えない。平馬が教えてくれなくても、福姫はちゃんと行く先を知っている。いや、なんのために平馬が追っ手に追われながらもこんなに走ってい

るのか、その目的もわかっている。息は苦しいが、なにかとてもたのしい。

「追っ手は大丈夫かしら」

それだけが気になる。

が、とうとう二人は薄暗い部屋へかくれていた。胸をどきどきさせながら、もう大丈夫だと思った時、平馬の顔がすぐ自分の目の上にあった。少しどきりとした時、恥ずかしいけれど、それを待ち望んでいたとおり、女体がはっきりと男を感じていた。

全身が酔ったようにうっとりとなりかけたとたん、意地悪くふいに、かっ、かっと馬の蹄の音が耳についてきた。

「平馬、追っ手です」

ぞっとして、福姫は我にかえった。

自分は寒々と一人で駕籠にゆられながら、しかし、蹄の音だけは事実で、うしろから火のように疾駆してくるようだ。

「早馬らしいな。駕籠、道端へ寄れ」

駕籠のうしろからいったのは関谷十三郎の声だ。

——今のは夢だった。

福姫は味気ない気持ちで、その夢を惜しむようにもう一度そっと目をつむってみる。

あたりはすでに白々と夜があけてきていた。

「関谷さん——」

馬はたちまち近くへきて疾駆をやめ、並み足になって進んでくるようだった。

「やあ、近藤か。なにかあったのか」

「中橋茂太郎と長谷部平馬がさっき土居の関所へかかりましてな、波川どのが問答でやりこめられたんです」

「やりこめられた——?」

「つまり、街道筋の新関は、公儀に無断でこしらえると、たとえ領分内といえど謀反の疑いをうけて家名断絶だというんです」

「それで——」

「こっちは老中土井大炊頭から殿さまへの書状

をあずかって城内へいそぐんだから、すぐに門をあけろというんです」

「波川さんはすぐに門をあけたのかね」

「いや、波川さんは返事に困って、どうしていいかわからんのです。そこで、そばにいた最上うじがかわって、この門は大坪さまがこしらえたので、我々一存ではどうしようもない。大坪さまは勝又まできておられるから、あなたがたが行って直接に話をしてくれと掛け合いましてな、一人ずつ門の中へ通し、一番組五人が平馬、二番組五人が茂太郎、これに組頭が一人ずつ、最上うじが指揮をとって勝又へ出発したところです」

「向こうは二人きりだったのかね」

「いや、松岡平助と中野半助という浪人がついていましたが、これは番小屋で勝又からの指図を待つことにしてあります」

「すると、土居の関所には足軽二組み、波川うじを入れても十三人しか味方は残っていないことになるな」

「いや、関谷さんが立ってから、途中においた伏勢十人ばかり無事に引きあげてきていますから、総勢二十人あまりになっています」

「よし、わかった。御苦労だが、そのとおりをすぐ勝又へ早打ちしてくれ」

「心得ました。——ごめん」

騎馬は駕籠を並み足で追い越すと、ぴしりと一鞭当てる音がして、ふたたび勝又のほうへ疾駆して去る。

「頭取、さすがに最上ですな。平馬と茂太郎どのをとりこにすれば、もうこっちのものじゃありませんか」

だれかが小さな声で関谷にいっている。

「うむ」

それっきり話がとぎれたのは、駕籠の中をはばかって、関谷がたぶん相手に目くばせをしたのだろう。

——平馬がすぐ後からきてくれる。

福姫はうれしくて、一度に勇気が出てきた。たとえ足軽組何人に取りかこまれて今はとりこになっていても、そんなことぐらいに負けてしまう平馬ではない。あの夜道を無事に生きてきてくれさえすれば、きっといまに勝って、

「お福さん、来たぞ」

と、迎えにきてくれるにちがいないのだ。

平馬はだれにも負けない日本一の知恵と勇気を持っている男なのだと、福姫は無邪気に信じきっているのである。

こうして、福姫の駕籠が勝又の大庄屋栗田喜兵衛の屋敷へついたのは、やがて朝の七ツ（八時）を少しまわるころであった。

大庄屋の屋敷は茅ぶきながら長屋門をかまえ、土塀をめぐらした大きな屋敷で、門を入って小一町も行ったところに母屋があり、母屋と並んだ一段高いところに別棟の客殿が造ってある。

客殿は山から清流を引きこんだ庭に面して、十畳三間に六尺の廊下をめぐらし、その裏がわには風雅な茶室などもこしらえてある。ふだんは領内見まわりの役人などを泊めて接待するところに使っているが、本来はいつ城主を迎えてもさしつかえないように造ってあるのだ。

駕籠はその客殿の廊下へ横づけになったが、福姫がどろ足袋のまま沓脱石の上へおり立ってみると、侍たちの姿はどこにもなく、廊下へ出迎えているのは大庄屋の内儀らしい、福姫から見れば母親ほどの年配の品のいい婦人が一人きりである。

「お疲れでございましょう。喜兵衛の家内、さよと申します。ただいまおすすぎをさしあげます」

さよは自分ですすぎ盥を持ってきて、福姫のどろ足袋をぬがせ、すすぎがすむと廊下づたいにすぐ奥の茶室へ案内してくれた。

山国の春はまだ寒い。茶室にはちゃんと置きごたつの用意がしてあって、さよがそばを離れ

ず親切になにくれと面倒をみてくれる。

――敵の計略かもしれないから油断はできぬ。

そうは思っても、母親のような女の行きとどいた世話に、福姫はなんとなく気持ちがほぐれてきて、いつかさよのいうなりになっていた。

小僧呼ばわり

平馬と茂太郎が二組みの足軽組に別々に取りまかれてこの大庄屋の門をくぐったのは、それから半刻（一時間）ほどたってからであった。

この時は福姫のついた時とはがらりと様子がかわって、客殿の庭は徒士組と足軽たちですっかり固め、正面の廊下へ座った大坪兵太夫の左右にも関谷十三郎をはじめ士分の者が三人ずつ六人、手向かいをすればいつでも切って出ようという面構えで、油断なく控えていた。

要するに、平馬と茂太郎は、帯刀こそゆるされて自由な体ではあるが、完全に大坪のとりことして彼の前へ立たされたのである。

兵太夫はやがて五十に近い年配で、いかにも鷹揚にかまえてはいるが、あごの角ばった造作の大きな顔に、冷酷さが露骨に出ているような、すこぶる威圧のきく面構えにできている。事実、腕のほうも小野派一刀流の皆伝の実力を持っているという男だ。

「茂太郎さん、久しぶりだな」

大坪はまず茂太郎のほうへ心やすげに声をかける。

茂太郎は黙って兵太夫の顔を見ているようだ。いよいよ国もとの大物とぶつかったのだから、ここでこんな成り上がり者に器量負けがしては、他日父茂右衛門の後をついで江戸家老の座につけなくなると腹をすえているのだろう。

「話ははっきりとつけたほうがいいから、率直にいうが、こんど茂右衛門どのの打った手は、せっかく無事におさまっている津山十万石の家中に、わざわざ風波をおこす陰謀だとわしは断

定する。茂右衛門どのが御当主さまにも無断で老中土井大炊頭さまと手を握り、若殿亀之助さまの夫人に大御所さま御息女松平福姫さまを迎えようとする意思は、福姫さまの背後の勢力をかりて茂右衛門どのが藩政の実権をわがものにしようというおのれ一個の利欲から出ているのだ。一藩の藩政はなにもいまさら茂右衛門どのが乗り出さなくても、ここ十年無事におさまってきている。なにもわざわざ金のかかる福姫さまを若殿の夫人に迎える必要は毫もない。あえてそういう余計なまねをして、この度家中の者の中から多くの死傷者を出した罪は、一切、江戸家老中橋茂右衛門どのにある。――茂太郎さん、わしの今の意見に、なにか異論がありますかな」

「まずそっちの条件から聞こう」

茂太郎はおだやかにうながす。

別に打ち合わせをしておいたのではないが、これはうまい出方だと平馬は感心した。ここで事の善悪をいくら論じあってみても結局は水かけ論に終わる上に、こっちはとりこになっているという不利な立場に立っているのだ。

「条件というと、茂太郎さんはこっちと和解をしようという意思があるのかな」

「無論、おだやかにすむものなら、おだやかにすませたほうが一藩のためなのだ」

「よろしい、そっちが一藩のためにおだやかに事をまとめたいという気持ちがあるなら、こっちから条件を出してみよう」

兵太夫はもっともらしくうなずいてから、

「第一は、茂太郎さんが所持しているという老中の書状をここで焼きすてることだ。第二は、殿さまの御前へ出て、若殿亀之助様は御病弱の故に隠居されたい意思のあることを申し上げ、中橋茂右衛門どのの希望として、改めて国もとの千代五郎さまを御世子に推挙すること、この二ヵ条承知ならば、この度の責任うんぬんの儀は当方においても大目に見ることにいたそう」

と、ずばりと切り出してきた。

「その二ヵ条、当方において不承知ならば――」

「なにっ」

「いまの二ヵ条は、二ヵ条とも当方においては承知しかねるのだ」

「そうか――。不承知ならしようがないな」

兵太夫は冷酷な顔にちらっと不敵な微笑をうかべた。

「茂太郎さんは昨夜、過って谷へ落ちて死んだ。若殿亀之助どのは江戸で御発病中である。御老中の書状未開封のまま、福姫さま御名代のお福さまにあずけて、当方から丁重に江戸へ送りとどける。それで一切はきれいに片づくな」

と、冗談のようにいってのける。

「それはだめだろう」

間髪を入れず、そばから平馬が冷笑するようにいった。これからのけんかは世間知らずの茂太郎ではちょっと難しいと見たからである。

「その方は何者だ」

兵太夫ははじろりと平馬のほうを見て、頭からおさえつけようとする。

「江戸向島の浪人長谷部平馬、くわしいことはその方どものほうでもうすっかり調べあげているはずだ」

「ふうむ。その方か、なにか御当主さまのお胤だとかいいふらしているという不埒な浪人者は――」

「血筋などはこの際どっちでもよい。兵太夫、その方は津山の三佞臣、三人衆という言葉がすでに将軍家のお耳にまで入っているのを存じているのか」

「たわけめ、さようなうわさなどをいちいち気にしていて十万石の藩政がとれると思うか」

「それは少し迂闊だな。読みが浅すぎる」

「なにっ」

「さようなことが公儀に知れていくのは、公儀に隠密という組織があるからだ。老中ともあろう者が一家老の政権欲のために御当主さまに直

接書状などを書くと思っているのからして、井の中のかわずの分別だ。茂右衛門の言い分が正しいと思えばこそ、茂右衛門の請いを入れてこの度の縁組みの斡旋となったのだ。いいか、兵太夫、それほど津山家の内情にくわしい老中が、茂太郎が当地へ入ってどういうことになるか、およその目安がつかぬはずはあるまい。その方が茂太郎を谷底へ落とせば、即日、公儀の目が江戸へ走る。十万石の家名が断絶するぞ」

「黙れ、小僧。隠密はあくまでも裏のこと、表に証拠を残さなければ、証人には立てぬ。そんなことでおどろく甘い兵太夫と思っているのか、笑止なやつだ」

「その方はただずぶといばかりで、案外頭の働きはにぶいようだな。動かぬ証拠が一つ一つ、いくつも残っているのに気がつかぬとみえる」

「土居の関門のことか、小僧」

「取りこわせばわかるまい、あれは関門ではなく木戸のつもりで造ったのだといえば、申し訳が立つ。その方の考えているのは、おそらくそのくらいのところだろう」

平馬は先まわりをして、あっさり先手を取ってから、

「兵太夫、わしはここで断言しておく。明日の今ごろ、その方は青くなって、わしにすがらなければならぬ事態が突発する。よく考えてみるがいい。わかるか」

と、なぞのようなことをいう。

「たわごとをいうな。明日まで貴様の首がつながっていると思っているのか」

「なるほど、その手はあるなあ、津山十万石を棒に振る気ならなあ」

「おい、この小僧二人をお屋敷へおつれ申せ。少しのぼせているようだから、ひと休みさせてくれよう」

兵太夫はあくまでも傲岸にかまえながら、庭先に立っている最上十内にいいつける。

殺す手段

諸侯の領内へ公儀の隠密が入りこんでいるのは、それが当時の常識なのだから、大坪兵太夫もちゃんと計算に入れていた。

だからこそ、平馬と茂太郎は領内へ入らないうちに道中で始末をつけ、その罪を浪人者の遺恨か、夜盗の仕業ということにしてしまえば、いちばん簡単にすんだのである。

が、それに失敗して、どうしても領内で片づけなければならないとすると、いま平馬がこざかしげにいっていたように、茂太郎には特に土井老中の隠密がついているかも知れないと、それを考慮に入れておく必要が出てくるのだ。

すると、隠密にしっぽをつかまれるような殺し方は、極力避けなければならないことになってくる。

「御家老、あの二人はどう始末したもんでしょうな」

平馬と茂太郎を庄屋の外蔵へ監禁してきた関谷十三郎は、兵太夫の前へ出て意見を求めた。

関谷としては、途中で散々てこずらされた平馬と茂太郎と、福姫まで今は完全にこっちのものにしたのだから、もうこっちの勝利は動かないと内心の得意をかくしきれないようだ。

「そちならどう始末するな」

兵太夫は相手を試すように聞いてみた。

「どうでしょうな、蔵の中で一服盛って、日が暮れてからわざと檻のふたをあけて逃がしてやる、これがいちばん簡単でしょう、死因は食当たりということにする」

「いや、二人ともこっちから入れてやるものは、たぶん口にすまい」

「なるほど――。それなら、三日ほど断食させておいてから、夜だれにも知れないようにつれ出して切る。死骸は裏山へ埋めてしまい、二人は土蔵を破って逃げたが、そのまま行方不明ということにする」

「蔵から逃亡させて始末をするという手はいいんだが、三日は待てぬ。なるべく今夜のうちに始末してしまわないと、好事魔多しのたとえで、どんな不測の変がおこらぬとはかぎらぬからな」
「拙者もその今夜やるという御家老の決意は賛成なんです。なんとかうまい手はありませんかなあ」
　闘将にはなれるが、到底知将の柄ではないと自分でも承知しているらしく、関谷はあっさりさじを投げてしまう。
「どうだ、十三郎、あの二人だけなら、おまえ今夜途中で待ち伏せをして必ず討てるという自信があるか」
「それはあります」
「人数は何人ぐらいいるな」
「江戸組は拙者がつれてきた最上十内と河田伝蔵の二人、後の二人は国もと組から御家老に選んでもらって、人数は拙者を入れて五人、どうせ二人とも今日一日は絶食ということになるでしょうから、五人で大丈夫です」
「うむ、よかろう。人数はあまり多すぎてもかえってじゃまになるからな」
「今夜、二人を逃亡させるのですか」
「そうだ。あらかじめ二人の耳へ、夕方わしが御名代お福さまの駕籠(かご)について津山へ向かったことを入れておく。土蔵の戸さえあければ、二人は必ず津山へ走るだろう。ちょうどその時刻にな、土居の関所にとめてある江戸組を自由にしてやるのだ。これも無論みんな城下へ夜道をかけるだろう」
「彼らは小森土佐の屋敷へ入ることになっているそうです」
「江戸の近習組にせよ、剣客組にせよ、長谷部平馬とは若殿亀之助さまの変装だと信じているはずだ。いいか、十三郎、それでなければ福姫さまが動くはずはない。素浪人長谷部平馬に動かされたとなっては、公儀へも世間へも面目が立たなくなるのだ」

「それはたしかにそうですな」
「若殿亀之助さまの変装だとばかり信じていた近習組が、ここへきてはじめてそれが天一坊の平馬だとわかった。近習組は中橋親子の陰謀に引っかけられたと憤慨して、謀反人たる茂太郎と平馬を切って殿さまにおわびをする。こっちは福姫の御名代お福さまを丁重にあつかい、しかも内密に江戸へ送りとどけて、一切の真相を告げてやる。そして、老中の書状は福姫の手からひとまず土井さまにかえしてもらう。これはこっちの手段ではなくて、事実真相がそうなのだから、たとえ隠密がどう働いたところで、土井老中にしても、福姫がわにしても、絶対に表ざたにはできないのだ。そうだろう、関谷」
　にこりともしないで兵太夫はいってのけるのである。
「恐れ入りました。御家老のいわれるとおりです」
　十三郎は本当に恐れ入ったようである。
「それではな、こっちからは今朝平馬と茂太郎を護送してきた徒士組の橋田十平次と杉山市郎太の二人をつけるから、一応地の利を見て、待ち伏せの場所と手順をよく相談しておくことだ」
「承知しました」
「二人の逃亡は暮れ六ツすぎときめておこう」
「土居の関所の江戸組も、その時刻に切り放すことになるんでしょうな」
「それでいいだろう」
「一つだけ念のためにうかがっておきますが、御家老は御名代さまをつれて、本当に今日ここをお立ちになるんですか」
「それはその時に返事をしよう。おまえに黙ってここを立つようなことはせぬから、安心していなさい」
　兵太夫の陰険な目に、はじめてちらっと微笑がうかんで消える。
「では、御家老、拙者はこれからすぐ一同をつれて、地の利を調べてまいります」

「そうだな、何事も手まわしは早いに越したことはない」
まもなく、関谷十三郎は最上たち四人をつれて屋敷を出ていったようである。
――まずこれで大体うまくいくだろう。
兵太夫は一人になって、もう一度今の計画を吟味してみながら、ふっと福姫は平馬や茂太郎にどんなだまされ方をしているのか、それがちょっと疑問になってきた。短筒などを振りまわして、かなり思いきったまねの好きなお姫さまらしいが、結局は世間知らずだからだましやすい、それだとこっちもだましいいから都合がいいことになる。
ただ世間知らずというだけではなく、知能の程度がいくらか低いようなら、こっちとしてはなお好都合なのだ。
とにかく、もういくらか落ち着いたろうから、ひとつ対面しておこうと、兵太夫は急に興味を感じながら、次の間のほうへ手をたたいた。
「お呼びでございますか」
ふすまを一枚あけて顔を出したのは、腹心の堀内要蔵である。これも微禄者で、まだ年は若いが、口が堅い上に剃刀のような才気を持っているから、この男だけはどんな場合でも近くにおいて目をかけているのだ。
「さよにな、御名代さまを丁重にここへ案内してくれるように申しつけてくれ」
「はい」
要蔵はふすまをしめてすぐに座を立ったようだ。
この表座敷の三間には、いまは要蔵一人しかいない。その場の空気では、要蔵はちゃんとこっちの気持ちを読んで、うまくさよをつれてさがることを知っている男なのだ。
――さて、御対面の結果、どういうことになるかな。
そのほうにかけても、食指が動けば決して遠慮などはしないずぶとさを持っている兵太夫な

のである。

肩すかし

まもなく廊下に軽い足音がして、さよがそこへひざまずき、障子を一枚あけた。
「御名代さまを御案内いたしました」
その御名代さまはもんぺの田舎娘姿で、すらりと廊下へ突っ立ったままである。のびのびとした健康そうな体つきで、大まかな目鼻立ちにも自然と高貴の相が備わり、これはまたその名のとおりすばらしいじゃじゃ姫のようだ。いきいきとした目が恐れげもなくじっと兵太夫を見おろしたままみじろぎひとつしようとしない。
「これはこれは御名代さま、どうぞお入りください。そこではごあいさつもなりません」
兵太夫はにこやかに座敷へ招じようとする。
たとえ大御所の娘であろうと、このかっこうで、自分から名代と名乗っているからは、あくまでも名代あつかいでいいのだという腹が兵太夫にはある。
さよはもう如才なく席を外していた。
「そちは津山の国家老大坪兵太夫か」
福姫はまだ立ったままで、頭から高飛車である。
「さよう、その兵太夫です」
「ここへ平馬と茂太郎が着いているはずです。呼んでください」
「あの両人はいま別座敷で休息中でしてな、それについて申し上げたいことがあります。まあ、こっちへお入りになってはどうですな」
しかし、福姫はその誘いに乗ろうともしない。
「なるほど、御名代さまは、まだ男が怖い、そういうお年ごろのようだ」
兵太夫はいくぶんからかうようにいって目でわらいながら、
「あの平馬という男は、江戸の若殿亀之助さまではない。よく似てはいるが、いわゆる他人の空似というやつで、あれはただの素浪人長谷部

平馬だ。御名代さまはそれを存じておられますかな」

と、相手の顔色をじっと見すえる。

福姫は冷たくこっちの目を見かえしている。少しも動じた色はない。

すると、これはちゃんと浪人長谷部平馬と承知していて、津山までついてきたことになる。福姫の身分として、そんなことがありうるだろうかと、かえって兵太夫のほうがなにか解せない気持ちになってくる。

「これはおかしい。御名代さまは平馬の身分をちゃんと知っておられるようだ。どうして素浪人などにだまされてこんなところまでついてきたんでしょうな」

「もうよいから、平馬と茂太郎をここへお呼びなさい」

「そうはまいらぬのです。素浪人平馬と茂太郎は、御名代さまをだましたばかりでなく、これをかつぎあげて小森家十万石のお家を乗っ取ろうとたくらみました不埒な謀反人ですからな、その罪は死罪にあたります。さっそく城内へ護送して、きびしい吟味にかけなくてはなりません」

兵太夫は不敵な微笑をうかべながら、こんどは脅しにかけてみる。命ごいでもしたらという下心が、ちらっと胸をかすめる。

が、福姫は黙ってこっちを見おろしているだけだ。

この顔は決して知能が低いなどという顔ではない。むしろ、こっちの腹をちゃんと読んでいて、あくまでもけいべつしているような、こっちからいえばひどく高慢ちきな小面憎い顔なのである。

「どうもおかしい。この分では、御名代さまというのも、素浪人どもと茂太郎一味がこしらえあげたものかも知れないな。それならそれで、こっちにもまた考えようがある」

ひとつ怒らせてみてやろうかと思い、わざと

底意地の悪い目をしてみせると、福姫ははじめていかにもさげすんだような冷たい微笑をうかべてから、

「さよ、茶室へもどります」

廊下の下手のほうへ呼んで、すっとそっちへきびすをかえしていく。

――小癪な。

あまりにも人をこばかにした超然たる態度に、兵太夫は思わずむらむらっと怒りがこみあげてきて、我にもなく腰をうかせていた。一瞬、追いかけていって引きもどし、横っ面を張り飛ばしてやりたいような衝動に駆られたからである。

しかし、さすがにそれだけはおとなげないとすぐに気がついて苦笑した。

――今日は小娘に一本やられた。

が、このままですませてたまるかと思う。たとえ何者の娘であろうと、裸にむいてしまえば女なのだ。日の暮れるまでそっとしておいて、平馬と茂太郎を逃亡させてから、ゆっくり料理をしてやろう。

そうだ、むしろあの小娘の弱みをつかんでしまったほうが、案外こっちの役に立つかも知れない。たとえばそれをどんなに悔しがって恨んでも、小娘の口からは絶対に人にはいえないことだし、また人に知られたくない弱みになるだろうから、ねじ伏せるだけこっちの得ということになる。

そこまで考えてから、兵太夫はふっと、

――はてな、ひょっとすると、あの平馬小僧め、一足先に小女郎をうまくくどき落としているんじゃないかな。

と、なんとなくそんな気がしてきた。

長い道中のことだから、そんな機会はいくらもあるはずだ。いや、そういう関係でもなければ、あの気位の高そうな福姫が、平馬や茂太郎といっしょにわざわざこんな危険までおかす気にはなれないだろう。

「そうか、なんのことだ。いたずら小娘のくせに、高慢な面をしくさって」
兵太夫はにやりとしながら、急にずぶとい野獣になってくる。
そのころ——。
外蔵の中へ監禁された平馬と茂太郎は、わざと観音びらきをあけ放した中格子の前から絶えず足軽どもに監視されながら、交替でぐっすりひと眠りすることにしていた。
無論、敵が差し入れてくれた握り飯や湯茶には、うっかり手はつけられない。しかし、幸い二人とも昨夜三日月の城下の林屋から腰につけてきた握り飯をそのまま二個ずつ持っている。
「茂太郎、いまは一つで我慢しておくんだ。仕事はいずれ夜になる。その時になって、腹が減っていては戦はできないからな」
平馬はそう注意して、見張りの目をぬすみながら、そっと自前の兵糧をつかった。
「平馬さんはこの蔵をぬけ出せる自信があるんですか」
形からいえば、二人とも帯刀はそのままでなわめにこそかかってはいないが、生殺与奪の権を敵に握られている完全なとりこなのだ。茂太郎は内心だいぶまいっているようである。
「心配するな。日が暮れれば必ず道はひらける」
「そうでしょうかなあ」
「兵太夫は、我々を殺すにしても、このままでは殺せない立場に立っている。なんとか手段を講じなければならない。そこに必ず活路がひらけるとわしは信じているんだ」
平馬は少しも悲観はしていなかった。なんでもかんでも殺してしまえという気が敵にあるなら、こうしてここへ監禁などする手数はかけないはずだからである。

思いはおなじ

福姫は兵太夫に肩すかしをくわせてさっさと茶室へ引きあげてくると、そこの置きごたつの

中へ横になって、終日、うつらうつらと眠ってはさめ、さめては眠りして暮らしてしまった。
この屋敷のどこかに平馬と茂太郎が閉じこめられているとわかっているから、それだけは安心していられるし、心丈夫でもある。
そして、こんど兵太夫が自分になにかしようとたくらむのはたぶん日が暮れてからだろうし、夜になればこっちにもまた考えがあると、福姫は福姫なりにちゃんと度胸をきめていた。
怖いなどと思ったことは一度もない。
ただ時々かっと平馬に会いたくなって、体中の血がふいに燃えたぎってくる。その時だけは、自分でもどうしていいかわからないほど切なくて、悲しいと思った。
目がさめている時はたいてい平馬のことばかり考えていたし、うつらうつらし出すと、いつの間にか自分の体はしっかりと平馬のたくましい胸の中に抱きしめられている。それは人には話せない二人きりの世界の、むせるように甘美な欲情の夢ばかりだったが、なんとなく惜しいところできっと目がさめている。だから、余計狂い出しそうに平馬が恋しくてたまらなくなってくるのである。
とにかく、疲れきっている体なので、監視かたがたずっとつきそっているさよが心配するほど、福姫はおとなしく寝たきりで、夕食の時を迎えた。
夕食がすめばやがて日が暮れる。さあこれからだと、福姫は気にも張りが出てきた。
「さよ、平馬と茂太郎はどこに閉じこめられているのです」
軽く食事をすませてから、福姫は何気なく切り出した。
「はい、母屋のほうの庭の外蔵の中に入れられていますそうです」
さよは気の毒そうに答える。
「ここの庭からそこへ行くには、どうまいればよいのです」

「それは、あの、ここの庭の木戸を出まして、母屋の裏をまわっていくのでございます」

「ここの庭には番人がついているのですか」

「はい、木戸の外に足軽さんが二人ついていますし、すぐそのそばが母屋の座敷の裏になっていて、座敷にはいつもお侍衆と足軽さんがたが十人ぐらい休んでおります」

ここを抜け出すのはとても無理ですといいたげなさよの口振りである。

「外蔵にも番人がついていますね」

「いつも二人ずつついているようでございます」

「さよ、気の毒ですが、福にしばらく縛られてください」

ずばりと福姫がいうと、

「あの、縛られるのでございますか」

と、さよは一瞬わが耳を疑うように聞きかえす。

「そうです。福はここにいると匹夫兵太夫に手ごめにされます。ですから、平馬のところへ行きます。ただ逃げられたではさよが後で迷惑するでしょうから、福がふいに当て身を入れて、縛って逃げたことにするのです」

「でも、御名代さま、木戸にも外蔵にも番人がついております」

「大事ありません。福は江戸の大御所さまの娘です。足軽などなんでもありません」

すっと福姫が立ちあがるのを見て、さよは真っ青になりながら、体中がすくんでしまったようである。

「ああ、おゆるしを――どうぞ、おゆるしくださいまし」

「声を立ててはいけません。しばらくの辛抱です。この礼は江戸へ帰ってからかならずします」

福姫はさよの細ひもを解いて、ほんの簡単にうしろ手に縛りつけ、手ぬぐいでさるぐつわまでしておく。

「ごめんなさい、さよ。さよの親切は忘れません」

福姫がさよの耳もとへそういうと、さよはさすがに心うたれたように、もう身動きひとつしなかった。

福姫はそのまま廊下へ出ると、足袋はだしのまま庭へおり、素早く木戸口のほうへ走り寄った。

日はもうすっかり暮れきって、空にはかぼそい二日月がほのかに青い光を地上にただよわせている。

――平馬、もうすぐ会えますよ。

胸をわくわくさせながら、ほかのことはなにも考えていない福姫だった。

――輪かぎを外して木戸をあけ、するりと母屋のほうの庭へ出る。なるほど、少し離れた右手に母屋の客間の灯が見える。

「だれだ。――あっ」

左手の木かげから六尺棒を持ってつかつかと出てきて足軽が、こっちをたしかに御名代さまと見たのだろう、びっくりして思わず棒立ちになっている。

「これ、声を立ててはいけません」

「あ、あなたさまは、どちらへ――」

「福は外蔵へまいりたいのです。これをまっすぐまいればよいのですね」

あまりにも親しげに話しかけられて、その足軽があっけにとられているすきを見すまし、だっと福姫の白いこぶしが相手のみぞおちを一突きにする。

「う、うっ」

足軽はたわいもなく体を二つに折って、がくんとそこへ両ひざをついてしまう。

「お福さま――」

ふっとそこの茂みのかげから走り寄ってきたのは、意外にもおなじ忍び姿のお糸であった。

「まあ、お糸」

「ああ、よかった。いそぎましょう」

お糸はいきなり福姫の手を取って、有無をい

わせずもとの茂みの中へ走りこむ。
「もう大丈夫ですね、お粂」
福姫は本当にうれしかった。そして、お粂さえいてくれればもう大丈夫だとすっかり安心する。
「ええ、もう大丈夫です」
お粂は植え込みの中をたくみにくぐりぬけて、だんだん母屋から離れていくようである。
「お粂、こっちへ行って、平馬たちのいる外蔵へ出られるのですか」
「いいえ、ひとまず裏口のほうへ出てかくれるのです」
「平馬は大丈夫ですか」
「だって、あの人は男ですもの」
「ふふ、そうでしたね」
大丈夫かを心配するより、本当は早く会いたいのである。
「お福さまは運がよかったのです」
「どうして——」
「あたしもたった今あの木戸のところへ行ったばかりなんですが、足軽が二人番をしていて、どうしても木戸へ近づけないんです。すると、一人のほうが、交替を催促してくるといって、母屋のほうへ出かけたんで、今だと思っているところへ、ちょうどお福さんが出てきたんです」
「お粂は今までどこにいたのです」
「あたしは昼間は歩けないと思って、今朝お福さんの駕籠が土居の関所を出る前に、一足さきへ走り出して夜のあけるころにはもうこの屋敷へ忍びこんで、納戸のそばの薪小屋の中へ入って、いままでやもりみたいにじっと日の暮れるのを待っていたんですのよ」
「右助はどうしました」
「三日月の城下の水車小屋へおいてきましたのよ。別れも少しつらかったけれど」
別にのろけるつもりはなかった。それが本音のお粂なのである。
「福も早く平馬に会いたくて——」

思いはおなじ福姫なのであった。

裏門の外

そのころ——。
外蔵の中では、平馬と茂太郎が最後の握り飯一つをゆっくりと平らげて、時のくるのを待っていた。
握り飯はほんの空腹をしのぐという程度だが、それでもまるっきりなにも腹に入れないよりは力になる。しかも、今日は一日中ぐっすりと眠っておいたから、若い体力はもうすっかり元気を回復していた。
「平馬どの、本当にこっちが待っている機会はくるでしょうかね」
茂太郎はまたしてもそれを心配し出す。
「大丈夫、きっとくる」
平馬は自信があった。
「しかし、万一当てが外れるようなら、ほかに最後の手段がもう一つ残っている」
「というと——」
「夕飯を運んできて、そいつが格子戸をあけたら、わしはお福さんの短筒をあずかっているから、そいつを一発ぶっ放してここを出るんだ」
「なるほど」
茂太郎はやっとそれで安心したようだった。
それからまもなくだった。淡い新月の光が蔵の格子戸の前へただよい出したころ、そっとこっちへ忍び寄ってくる足音が耳についた。
「飯番のやつ、どうしやがったんだろうな」
一人で後へ残っていた足軽が、聞こえよがしにそんなことをつぶやきながら、ぶらぶらと母屋のほうへ歩き出した。
外蔵の前は農家の広場になっていて、向こうの右手に母屋の灯が見えていた。当番足軽の姿が黒々とそっちへ小さくなっていくのを待っていたように、
「お客さまがた、当家のあるじ喜兵衛でございます。いま格子戸をあけますで、そっとわしに

ついてきてくださいまし。訳は走りながら話しますです」

と、格子の外から早口にいって、大庄屋が自分で戸の錠をあけてくれた。

「かたじけない」

平馬は先に立って、するりと外へ出た。

「こっちです」

喜兵衛は早足に母屋の背戸の横手へ入りこむ。

そのまま母屋の裏へ出て、屋敷の裏門口のほうへ案内していくようだ。

「待ってくれ、おやじ」

小道の両側が林になってから、平馬はそう声をかけて立ちどまった。

「どうかなさいましたか」

「いや、我々はお福さまを助け出していかなければならないのだ」

「ああ、御名代さまなら家内が案内して、一足先にまいっております。実は、御名代さまがお姫さまだとわかりましたんで、そのおたのみもあり、かように取り計らったのでございます」

大庄屋はどうやら冷や汗をかいているようだ。

「かたじけない。では、すぐに後を追うことにします」

ここは敵の手に乗ってやらなければ不利だと見たので、平馬はおとなしく裏門口まで走ることにした。

裏は柵門になっていて、そこのくぐりから外へ出てもまだこの屋敷の林道はしばらくつづいているようだ。

「この道をまっすぐ行きますと、裏の田んぼ道へ出ます。そこの生け垣にそって左へ行きますと、自然に街道へ出られますで、――わしはこれで失礼させてもらいます」

「そうか、ありがとう。恩にきる」

「どういたしまして。お大事においでなさいまし」

二人がくぐりから外へ出ると、大庄屋はくぐりをしめて、そこからそわそわと母屋のほうへ引きかえしていったようだ。

平馬はあたりへ鋭い目をくばりながら、

「茂太郎、わしはもう一度母屋へ引きかえすからな、おまえは一足先へ津山へ走ってくれ」

と、そっと耳もとへいう。

「いや、わしもいっしょに引きかえします」

「それはいかん。命の無事な者は一足でも先に土佐の屋敷へ入って待つというのが我々の約束だ」

「しかし、肝心のお福さまをここへ残して、わし一人津山へ入っても意味はありません」

「そんなことはない。お福さんはきっとわしが引きうける。茂太郎はできるだけ早く土佐の屋敷へ入って、まだ土居でつかまっている味方を救う善後策を講じてもらいたいんだ。この屋敷のことも、いま茂太郎が一人で協力してくれるより、土佐の力を借りてくれたほうが、仕事は早いことになる」

「なるほど」

「ただし、途中にきっと待ち伏せがある。それが目的で敵は我々をわざと檻から放したんだからな。それだけは十分気をつけろよ。ひょっとして、運がよければ、だれか味方がおなじ道を歩いているかも知れぬ。その辺のことも考えのうちに入れておくほうがいい」

「では、そうします」

そうはいったが、茂太郎はなんとなく去りがたいらしい。

この時、ことりという音がして、そこのくぐりがあいた。

しまったと思いながら、平馬が思わず柄に手をかけた時、するりとくぐりから出てきたもんぺ姿の女が、向こうもぎょっとしたようにこっちを見た。

「まあ、平馬――」

「お福さん」

平馬があっと目をみはった時には、もう福姫が子犬のように平馬の胸の中へ飛びこんできて、両手をしっかりと男の首にからんで、人前もなくいきなりくちびるへ吸いついていたのである。

「お福さん――」

「平馬」

涙がにじみ出るほど平馬はうれしかった。ついしっかりとその胸を抱きしめて、どうにも放しがたい。

「いいかげんにしてよ、兄さん。まだここは敵の中なのよ」

お粂が怒ったようにそばへ来て、小声でたしなめる。

「そうか――。お粂がいっしょだったのか」

平馬はそれで一切が納得いったような気がする。

「話は歩きながらでもできますのよ。――茂太郎さん、さあ、行きましょう」

「心得た」

つとお粂と肩をならべて大股に歩き出す茂太郎の肩幅も、急に大きく勇み立っているように見える。

「さあ、お福さん」

平馬は福姫の体を放して、わらいながらうながす。

「平馬、福は今日一日中、こんな夢ばかり見ていました」

福姫はまるで平馬の右腕を胸へかかえこむようにして、いそいそと歩き出す。

執　念

表座敷の大坪兵太夫は、ふところ刀の堀内要蔵を相手に酒をのんでいた。

要蔵は無口だから酒の相手としては決しておもしろい男ではないが、そのかわりじゃまにもならない。

座敷には灯があかるく入って、障子によどん

でいた外からのたそがれの色はもうすっかり消えていた。ここは表座敷三間のいちばん奥の間で、この広い表座敷にいる人間は要蔵と二人きりだから、あたりは深夜のようにしいんとして、庭を流れる小川のせせらぎだけが涼しげに耳につく。

「要蔵、すっかり暮れたな」

兵太夫はなんとなく濁った目をふっと障子のほうへ向けながらいう。声まで濁っているようだ。

「はあ」

要蔵は冷たく答えただけである。

「もう外蔵のあく時刻だ」

兵太夫はそれを待っているのである。

外蔵は日が暮れてから半刻（一時間）ほどしてあけることになっていた。平馬と茂太郎が小一里ほど歩いたころ、新月が入る。そのあたりに関谷組の待ち伏せがあるのを計算に入れてのことだった。

それを日が暮れてすぐと時刻を変更したのは、一度あの小生意気な福姫を裸にしてやろうと思いたつと、どうにも待ちきれない気持ちがしてきたからだ。

それに、好事魔多しというたとえもある。じゃまの入らぬうちに、たのしむだけたのしんでしまいたい。

まもなく、平馬と茂太郎を屋敷の裏門口から送り出した大庄屋が、うまくいきましたと報告にくるだろう。

喜兵衛が母屋のほうへさがると、要蔵が福姫を茶室へ迎えに行く。口実は平馬がここへきて密談をしているからといわせるのだから、おそらく福姫はわくわくとここへ走りこんでくるだろう。

母屋と客殿をつなぐ廊下には、要蔵が見張りに立つ。

こっちは有無をいわせず福姫に躍りかかって押さえつけ、まず素っ裸に衣類を引んむいてし

まうのだ。どう勇ましいじゃじゃ姫でも、素っ裸では逃げ出すわけにはいくまい。

たぶん声ひとつ立てられずにうずくまってしまうだろう。

そこをいいようにゆっくりと体中をなでまわして、女の本能を呼びさまさせ、あくまで自分からその気になってくるのを待ってやるのだ。

――なあに、本能というやつにはかなわない。案外たわいなくあらぬことを口走り出すものなのだ。

兵太夫はそれに似た経験を何度か持っているので、そういう秘術には自信がある。どんなに情のこわい娘でも、女体は自然に興奮してきて、必ずあやしい泣き声をあげ出すものなのである。

しかも、福姫をそうして手に入れてしまえば、それをうまく利用して、どんな出世が待っていないとはかぎらないのだ。

兵太夫が一人で悦に入ってにやりとしかけた時、だれか庭へ駆けこんでくるあわただしい足音が耳についた。

「御家老さま、申しあげます」

「だれだ」

とっさに不吉な予感がしながら、要蔵に目くばせすると、要蔵がすっと立っていって廊下の障子をあけた。

「足軽飯田市兵衛でございます」

市兵衛が沓脱の上へ両手をついている。

「どうした、何事がおこったのか」

「はい、裏の中木戸番の弥次郎が当て身で倒され、中木戸のしまりがあいております。すぐにお茶室をお調べ願います」

「なにっ」

ぎょっとして兵太夫は立ちあがった。

中木戸のしまりは内がわにあるのだから、まさか外から福姫を助けに入ったのではあるまい。福姫が自分から逃げ出したのだろう。

「要蔵、来い」

兵太夫は刀架けの刀を取るなり、廊下へ走った。

ぐるりと廊下をまわって裏の茶室の前へ出ると、そこの庭先に足軽が三、四人立っていて、

「申し訳ございません。御名代さまが逃げました。つい油断しておりますところを、当て身をくわされまして」

当番足軽の森川弥次郎が面目なさそうに進み出て告げる。

「たわけめ」

一喝しておいて、茶室の障子をがらりと引きあけると、そこに庄屋の女房のさよが、両手を縛られ、さるぐつわをされてころがされている。

要蔵が素早くさよのそばへ寄っていましめを解いてやる。

「さよ、どうしたのだ」

「なんとも申し訳ございません」

さよは自分でさるぐつわを取り、いそいでひざ前をなおしながらそこへ両手をつかえて、

「お膳がすみますと、御名代が何気なくそばへ寄ってまいりまして、ふいに当て身を入れられました」

と、顔があげられないようである。

さよは女だからしようがないにしても、弥次郎がたかが小娘一人に当て身をくわされたのは不覚この上もない。

「弥次郎――」

どうしてくれようと思わずにらみつけた時、喜兵衛が中木戸口から走りこんできた。

「御家老さま、これは何事がおこったのでございます」

「喜兵衛、平馬と茂太郎はどうした」

「はい、ただいまお申しつけどおり、裏門口から送り出しましてございます」

「そうか――。こっちは、御名代がさよを縛って、ここから逃げ出したのだ。途中で見かけなかったか」

あほうなことを聞いたものだと、兵太夫は我ながら苦わらいが出る。

「あの、御名代さまが逃げましたので――」
大庄屋は唖然とした顔つきである。
「まあよい。まだそう遠くへは行くまい」
そう気がつくと、兵太夫は少し落ち着いてきた。
無論、時刻が偶然にもかちあっているから、福姫はどこかその辺で平馬たちと出会っているにちがいない。三人は思わぬその偶然に勇み立って、いまごろ津山のほうへ走り出しているだろう。
「要蔵、追っ手をつれて後を追ってくれ」
「はい」
「平馬は手ごわいそうだからな、必要な人数だけつれていくがよい」
「かしこまりました」
「なるべく三人をばらばらにして、御名代をつかまえるのだ。平馬と茂太郎はたとえ逃がしても行く手に関谷組が待っている。万一、二人がどうしても御名代を奪いかえそうとするようなら、御名代を枷に使って刀を捨てさせろ。とにかく、いちばん先に御名代をつかまえてしまうことだ」
「よくわかりました」
要蔵はおじぎをして、
「おまえたち、早く支度をしろ」
と、庭の足軽たちに命じ、自分は落ち着いた足どりで廊下を母屋のほうへ去っていく。
――せっかくの名花を、のがしてたまるか。
兵太夫は、いつでも手のとどくところにあった名花だけに、逃げられたとなるとたまらない執念に駆り立てられてくる。

追っ手

そのころ――。
平馬たちはすでに勝又の宿を出外れて、田んぼ道を津山のほうへいそいでいた。
空に新月があるから、足もとには困らない。が、この新月はやがて一刻足らずで西の山へ沈

むはずである。勝又から津山へは三里、どういそいでも途中でやみ夜になる。
前の組は茂太郎とお糸で、お糸は足が早いから後の組の平馬と福姫にはおかまいなく、もう小半町も先になっている。
「お福さん、もう少しいそごう」
平馬は何度もうながすのだが、
「福はこんなにいそいでいますのに」
と、その度に福姫はいって、少しも平馬の体から離れて歩こうとはしないのだ。
「平馬、福は今日一日中、本当に気が狂いそうでしたのよ。平馬が恋しくて恋しくて、胸が痛くなってくるのです。本当ですのよ。福はもう一日も平馬と離れては生きていられなくなりました。どうしてこんなに平馬が死ぬほど好きになってしまったのでしょう」
福姫はうれしくてうれしくてたまらないというように口走りながら、うなじから肩へまわしている平馬の手を乳房の上へおさえつけて、何度も身もだえしてみせる。
「それはわしだっておなじなんだ、お福さん」
平馬もつい現在のあぶない立場を忘れがちになって、与えられた乳房をしっかりつかんでいる。それは白桃のようなむっちりとした豊かな乳房で、平馬はそれを目で見てもいるし、たわむれに吸ってみたことさえある。その手のひらの重くはずむような感触から、甘美な感情が胸いっぱいにひろがってきて、足がおそいのはあながち福姫のせいばかりではないのだ。
「平馬も福の夢を見ましたか」
「夢というと――」
「福は今日一日中、茶室へとじこめられて、おこたの中で横になっていたのです。うとうとすると、いつも平馬がきて福をしっかり抱いてくれるのです。お嫁でなければわからない恥ずかしい夢もみましたのよ」
福姫は正直である。そして、急に体中が燃えてきたように、男の手を素肌へさそっていく。

「これ、わしにくれるのか、お福さん」
誘われるように、平馬も甘い声になっていた。
「平馬、まだ一度も福におやすみなさいをしてくれませんね」
福姫はくちびるをねだりはじめる。
「ここではだめだ。それに、いつ追っ手がくるかわからないし」
並木のかげになって前の組の姿は見えないが、まさかこんなところで肩を抱いて口も吸いかねる。それに、追っ手がかかっているとすれば、もうそろそろ追いついてくるころなのである。
「では、平馬、あの森の中まで行ったら、一度だけ福を抱いてくれますか」
行く手に黒々と森が見え出して、そこが一部落になっているようだ。
「そうだ、あの森までいそぎましょう」
とにかく、一足でも早く津山へ近づいておくほうがいいのである。平馬は福姫の手をとって森のほうへ走り出した。無論、肩を抱きながら歩くより、このほうがよっぽど走りいい。
が、その部落の森へかかろうとした時、案の定、うしろから追ってくる追っ手らしい数人の足音が耳につき出したのである。
「お福さん、追っ手がきたようだ」
「どうします、平馬」
「さあ、お福さん、この短筒を持って、あなたは茂太郎のところへ走るんだ」
平馬はあずかっていた短筒を福姫の手に握らせてやる。
「平馬は、平馬はどうするのです」
「わしはここで、できるだけ追っ手を防いでいる」
「では、福もここへ残ります。この短筒さえあれば、敵になど負けません」
いざとなるとすぐ怖いもの知らずになれる気の強い福姫なのである。
「お福さんは忘れちまったんだな」

「なにをです、平馬」
平馬はひょいと両手で福姫の肩を引きよせ、その耳もとへ、
「お福さんのおなかの中には、もう平馬の赤ん坊が入っているかも知れないんだ」
とささやいてやる。
「まあ、本当ですか、平馬」
「体を大切にしないと、赤ん坊がおりてしまうし、女は母親になったら人を殺すようなまねは慎まなければいけません。因果が赤ん坊にたたると大変ですからね」
「でも、福は平馬と別れるのはいや」
「いや、平馬は強いから、追っ手を説得して、すぐ後から追いつきます」
「本当ですか、平馬」
「平馬はまだ負けたことはありません。知ってるでしょう、あなたは」
「それは知っていますけれど――」
「さあ、だんなさまのいうことをきかなければいけません」
「はい」
福姫がやっとうなずいたのを見て、平馬は素早く肩の手に力をこめてくちびるをかさねてやり、
「これでいい、早く」
と、その肩を押しやる。
「平馬、きっと後からきてくれなくてはいやですよ」
「きっと追いつきます」
「では、福は行きます」
走るには走りいいもんぺ姿の軽装だから、福姫はたちまち森のほうへ走り去っていく。
――赤ん坊の一言がきいた。
平馬は無邪気な福姫がなんとなくほほえましい。
追っ手の姿が並木道の向こうへ見えはじめた。人数にしておよそ十二、三人だろうか、あまりいそいで走っていないのは、必ず追いつけ

るとわかっているし、こっちの行く手に伏勢のいることを計算に入れているのだろう。
追っ手の姿はいよいよ近くなって、先頭は士分三人、後は六尺棒を持った足軽らしいと、はっきりわかってきた。
――よし、刀を抜く前に、舌刀をつかってみてやろう。
こっちはなるべく時をかせいでおく必要があるから、平馬はそう腹をきめて、大胆にもつかつかと追っ手のほうへ自分から出ていった。
「そこへきたのは何者だ」
大声に一喝くわせてやると、
「あっ」
不意をくらった追っ手は、ぎょっとしたようにそこへ立ち止まる。
「おまえたちは大坪兵太夫の組下の者どもらしいな」
平馬はすかさず頭から高飛車に出る。

「一同、かかれっ」
先頭に立ってじっと平馬の顔をにらんでいた堀内要蔵が冷たく叱咤するように叫んで、自分はすっと道端のほうへ身をひいた。
長谷部平馬が主君の胤らしいということは、もうみんな薄々承知している。これ以上口をきかせては結局貫禄負けがしてきて、味方の闘志がにぶるばかりだと見たからだ。
が、はじめから有無をいわせず乱戦に出ていればともかく、相手のほうからふいに道をさえぎられて、はっと立ち止まったのが誤算の第一歩。次の誤算は、一同かかれで要蔵が道端へ身をひいたことである。この時、自分から切って出ていれば、まだ乱戦に持っていける可能性があったはずなのだ。
「待てっ」
はたして、平馬はすかさずもう一度一同を制

止しておいて、
「わしは逃げもかくれもせぬから、一応わしの申すことを聞け。その方どもは大坪兵太夫の申しつけで、おそらく御名代さまを追ってきたのだろうが、御名代さまならびに茂太郎所持の御老中の書状に万一のことでもあると、津山十万石の家名が断絶するぞ」
と、鋭く急所を突いてきた。
「うそだ、そんなものは両方とも偽物だ」
要蔵は必死にやりかえす。
「黙れっ。偽物にして抹殺してしまえばなんとかなると、その方は下司の知恵で考えているのだろうが、兵太夫がそれよりもっと大きな過ちをおかしているのを気がつかずにいるのか、うろたえ者め。昨夜、三日月の城下を荒らして林屋へ放火したのはだれだ。その節、われらが切った重傷者を、その方どもは残らず収容してきたのか。二人でも三人でも三日月藩で手当を加え、これを証人として当家の不法を公儀へ訴え出られたらなんとする。たとえここでわれらを抹殺しても、小森の家名は立たぬ。その方どもは一体だれのために、なんのために命がけで働いているのだ。もう一度、冷静によく考えてみろ」
あっとさすがの要蔵も思わず息をのむ。
負傷者はおいおい引きあげ中と、土居の関所から知らせてきている。自分で引きあげてこられない者は死骸になっているだろう。そういう場合のために、津山の藩士とわかるようなものは一切身につけていかぬようにとあらかじめ注意しておいたが、重傷者を人質にとられることまでは、ついうっかりしていた。その点、家老もおそらく自分とおなじだろう。
よし、平馬を切っていそいで勝又へ引きかえそう。とっさにそう腹をきめた要蔵は、
「こざかしいぞ、素浪人」
事実、そんな激しい反感を爆発させて、だっと地をけって踏みこみながら火のような抜き打

ちをかけた。
が、一気に踏んごむにはやや間合いが遠い位置を絶えず心においている平馬だから、すっと一足さがっただけで、要蔵の切っ先は空を払い、しまったと思った時はすでにおそく、
「えいっ」
後の先を取った平馬の一刀をきらっと目に感じたとたん、要蔵は右肩へひやりとした不気味な衝撃をうけ、
「う、うっ」
思わずうめき声をもらしながら、急に目の前が真っ暗になって、それっきり暗黒の中へ意識を失っていった。
「騒ぐな」
ひらりと飛びさがった平馬は、血刀を引っさげ、
「無益の血を流してはいかん。その方ども、一刻も早く勝又へ引きかえして、兵太夫に至急善後策を講じるように進言してはどうか」
と、唖然としている一同のほうへさとすようにいう。
要蔵が倒れて先頭になった徒士組の侍二人は、ちらっと顔を見あわせながら、年上のほうが、
「平馬さまにお願いがございます」
と、思いきったように一足前へ出た。
「願い――」
「はい。手前は徒士組の小田作兵衛と申しますが、微禄者にて、御家老は手前どもの進言などお取りあげになるかどうか心配です。願わくば、平馬さまに一応勝又までお引きかえしをねがい、平馬さまから御家老を説得していただきたいと思うのですが、いかがでございましょう」
疑えば、彼らは平馬をとりこにして帰れば責任の一半だけはすむ。平馬としては、家名断絶を口にしている手前、それは困るとはいえないのだ。うまいところをねらったものだと、平馬は内心苦笑はしたが、

「その方どもの心配ももっともである。しからば、わしから兵太夫に注意してつかわすから、案内いたせ」
と、彼らの請いをいれることにした。
実際問題としても、もうここまでくれば、福姫と茂太郎が無事に小森土佐の屋敷へ入りさえすればほとんど目的は達成したも同様だし、たとえば自分はもう一度あの外蔵の中へ逆もどりをさせられても、それはもう時間の問題だと平馬は考えたのだ。
無論、この先まだ関谷組の待ち伏せがあるだろう。しかし、こんどは福姫が短筒を持っている。これが必ずものをいってくれると、平馬は信じている。
そのころ――。
福姫はこの部落を出外れるあたりで茂太郎とお粂に追いついていた。
「まあ、お福さま、兄さんはどうしたんです」
お粂がすぐに肩をならべてきながら、不審そうに聞いた。
「追っ手がきたようなので、それを防いでからきます」
「一人で大丈夫かしら」
追っ手のかかるのは覚悟の前だが、さすがにお粂はどきりとして足をとめようとした。
「福もそれを心配したのですが、一人で大丈夫だから先へ行かなければいけないとしかられました」
福姫はいかにも不平そうである。
「そうです。我々はたとえ一人になっても、先へ先へと出て、ともかくも早く小森土佐の屋敷へ入る、決して途中で迷ったり、逡巡したりしてはいけないという約束です。土佐との連絡さえつけば、そこに必ず善後策の手段が生じるのです」
先頭の茂太郎ははげますようにいいながら、少しも足をゆるめようとはしない。
福姫もお粂もそれがこういう場合の最善の道

なのだとはわかっているが、平馬一人に追っ手をまかせて走るということは、やっぱり冷淡のような気がして、しのびない情が胸にうずく。
「兄さんは強いから、心配はありません」
　お粂は、そういう弱気をたたきつぶすように、きっぱりと口に出していった。
「そうです。平馬にはすばらしい勇気と知恵があります。だれにも負けはしません。福はよく知っています」
　あの見合いの日、二人きりで屋敷の築山の上で会った時のことを福姫はちらっと思い出して、急に胸が熱くなってくる。あの時はじめて、勇気と知恵という言葉を、平馬の口から聞いたのだった。
「お福さまはいつごろから兄さんとあんなことをするようになったのかしら」
　福姫の声があまりにも甘く耳についたので、お粂はついそっとそんなことが聞いてみたくなる。
　福姫の足がおそいので、前の茂太郎とはもう三間ばかり間が離れていた。

たった一発

「お粂、あんなことって、どんなことです」
　福姫は無邪気に聞きかえしている。
「大庄屋の裏門のところで、お福さまはどんなことをしたか。夢中だったのかしら」
　お粂はわざと福姫の手をつかんで、くすりとわらってみせる。
「ああ、福は平馬に抱いてもらいましたね」
「いいえ、お福さまのほうが兄さんの首っ玉へしがみついていったようでしたわ」
「そうでしたね。福はうれしくて、どうすればいいかわからなかったのです」
　福姫は少しも恥ずかしがる様子はない。
　姫君なんてこういうものなのかしらと、お粂はふしぎな気がして、
「じゃ、お福さまはもう兄さんに口を吸われた

ことがあるんでしょう」
　と、ついからかってみたくなってくる。
「あります、もうなんべんも」
「おっぱいは――」
「お乳ですか。それはまだありません。お粂は――」
　見事な逆襲だった。
「あたし、いやだなあ。あたしはありますのよ」
　逃げるのはひきょうだから、お粂は小さな声で白状して、ひとりでに顔が赤くなってくる。
「平馬はどうして吸ってくれないのでしょう。知らないのかも知れませんね」
「こんど教えておあげになったら――」
「そうします。もう御夫婦なのですから、平馬はなんでもしてくれます」
　顔負けがするほど、福姫の声はうれしそうであけっ放しである。
「あらあら、もう御夫婦にまでなっているのですか」
「ええ。あの、平馬は福に――」
　そこで急に口ごもったのは、なんとなく恥ずかしくなってきたのだろう。
「兄さんがどうしたんです」
「あの、平馬は福に、――お粂、だれにもいってはいけませんよ」
「だれにもいいません」
「さっき一人でこっちへくる時、福のおなかの中にもう子供がいるかも知れないから、乱暴をしてはいけない、どうしてもお粂たちのほうへ行けといいました。子供はそんなに早くできるものですか、お粂」
「さあ――」
　お粂はちょっと返事に困って、
「それは、できていないとはいいきれないかも知れませんね」
　と、妙に冗談ごとではなくなってきたような気持ちである。
「では、お粂のおなかの中にも、子供がいるか

も知れませんね」
「そういえば、そうかも知れません。でも、あたしはそれを承知なんだからかまいませんけれど、お福さまはおなかが大きくなってもかまわないのかしら。だれかにしかられる、そんなことはないんですか」
「しかられてもかまいません。福は屋敷を出て、平馬のところへ行くことにきめているのですから」
　それがそう簡単にいくだろうかと、お粂は人ごとながらひどく心配になってくる。
　先頭の茂太郎がその橋の上へかかった時、林の中から向こうの橋だもとへ、抜刀した三人のくせ者がばらばらっと躍り出してきて立ちふさがったのである。関谷十三郎を真ん中にして、右に河田伝蔵、左は最上十内だ。
　新月はもうほとんど西へ傾いて、彼らの背中のほうにある。
「くせ者――」
　橋上の茂太郎は一喝しながらすかさず抜刀はしたが、橋の上では左右の変化がきかない。一度こっちへもどろうか、前へ切って出ようかと、一瞬戸惑った風に見えた。その心気の動揺を見のがさず、
「茂太郎、命はもらったぞ」
　腕に十分自信のある十三郎が、一刀を青眼につけてぐいぐいと間合いを詰め出した。敵を弱いとみくびったすさまじい殺気が全身からむらがり立っている、そんな悪鬼のような形相だった。
　茂太郎は思わずじりじりと後へさがり出したが、関谷の前進はそれより早く、このままでは到底茂太郎は逃げきれない。
　あっと思わずお粂がナンキン鎖の分銅を握りしめた時、
　だあん。

　福姫が短筒を取り出すなり、よくねらいもせず一発ぶっ放した。
「う、うっ」
　弾丸は関谷の右肩へ命中したらしい。
　その衝撃にがくんと一つ上体をのけぞらせた関谷は、両手を空へのばしてよろよろとよろめき、次の瞬間ばしゃあんと小川の清流の中へ水しぶきをあげていた。
　思わぬ銃声に、橋だもとの河田と最上はぎょっと立ちすくんでいる。
　九死に一生を得た茂太郎の忿怒は、この時一度に爆発したらしく、
「えいっ――とうっ」
　一気に二人のほうへ切って出たのである。
「おうっ」
「えいっ」
　二人は夢中で刀を振りまわしたが、その時はすでに最上は左腕を、河田は右の高股へ深く切りこまれて、どどっと左右の林の中へ転倒していった。
「あっ、お福さま」
　この時、お粂がうしろを振りかえって金切り声をあげた。
　それは国もとのやつらしく、二人の刺客が目をつりあげながら、二間ばかりうしろへきて、刀をかまえたままこっちをねらっている、というより、福姫の短筒にこれも愕然となって足をくぎづけにされていたのだろう。
「無礼者、おさがり」
　毅然たる福姫がさっとそっちへ短筒を向けてしかりつけると、あっと狼狽した二人はひとたまりもなく右手の林の中へ野良犬のようにがさがさと逃げこんでいった。
「二人のようですな」
　走りもどってきた茂太郎が、颯爽と二人を追おうとする。
「茂太郎、すてておきましょう。それより、前へ行くのですか、それとももどりますか」

福姫の落ち着いた声が響く。やっぱり平馬のことを心配しているのだ。
「前へ進みましょう」
気が立っている茂太郎には、福姫の気持ちは通じなかったらしい。
「お条、行きましょう」
さすがに福姫はいさぎよかった。この期になって未練がましいことは一言も口にしない。
「茂太郎さん、一足先へ行ってください。あたしは兄さんの様子を見てからすぐに追いつきます」
お条はきっぱりといって、もうさっさときびすをかえしていた。一瞬感謝するような福姫の熱いまなざしをまぶたにはっきりと焼きつけながら——。

夜更けの客

その夜——。
やがて四ツ（十時）をまわったと思われるころ、津山の大手門外にある側用人鎌田治部の屋敷の表門をひそかにたたく者があった。
門番が窓をあけてのぞいてみると、頭巾を目深にかぶった大兵の武士が一人、ちょうちん持ちの下郎をしたがえて、やみの中に立っている。
「どなたさまでございますな」
「わしは大坪兵太夫だ、火急の用でまいったと、治部どのに取り次いでくれ」
「はい、ただいま——」
門番はいそいで小屋を出て、まずくぐりをあけ、兵太夫主従を門内へ招じておいて、玄関のほうへ走った。
治部はいま寝所へ入ったばかりのところだった。
「そうか——。兵太夫では会わずばなるまい。書院へ通しておきなさい」
廊下の取り次ぎを去らしておいて、治部はむくりと起きあがった。

「お着替えになりますの」
もう寝まき姿になって、座敷の片すみで治部の脱ぎすてた衣類をたたみつけていた愛妾小枝が、白々とした顔をこっちへ向けながら聞く。まだ二十を出たばかりのみずみずしい肢体を持った女で、軽輩の若後家だったのを最近手に入れた愛妾である。
「着替えるよ。寝まきのままでは人に会えないからね」
治部はわらいながら立ちあがった。やがて五十に近い治部は、小利口な女はわずらわしくて好まない。たわいなくおっとりとしていて、性欲的な若い女が愛玩用にはいちばんいいと思っている。その点、小枝は治部の好みにぴったりあったいいおもちゃだった。
「小枝、惜しいことをしたな」
手早く着替えをしながら、治部はいった。
「なにがですの」
「おたのしみのじゃまが入った」
前にひざ立ちになって帯をささげている小枝のむっちりとした豊かな胸乳を指で小突いてやると、
「あんなことばかし——」
小枝は身をくねらせてうれしそうにわらいながら、
「早くお帰しなされぱいいのですわ」
と、平気でそんな熱ぼったいことを口にする。
「そうか——。では、小枝が待っているからといって、すぐに追いかえしてこよう」
治部はおもちゃの愛妾をからかいながら廊下へ出たが、そのとたん目にあふれていた淫蕩な色がきれいに消えて、いつもの冷たい目にかえっていた。
——兵太夫め、しくじったな。
事がうまく運んでいればいまごろはまだ勝又にいるはずの男だし、だいいち、こんな夜更けにこっそりここへたずねてくるはずはないのである。

しかし、今朝の連絡では、中橋のせがれ茂太郎、問題の浪人長谷部平馬、それに松平福姫の名代と称する怪しげな百姓娘、三人とも土居の関所でつかまえ、勝又へ連行中だといってきている。

それが一体、どこでどんな風にしくじったのか、治部にはちょっと見当がつかない。

ただ、治部がこんどの件ではじめから妙に不満でもあり気がかりでもあったのは、手塚ほどの男がまず江戸で失敗して、敵を道中へ出してしまったことだ。しかも、その長い道中でも再三手ちがいをくりかえして、とうとう彼らを津山領へ入れてしまっている。

逆にいえば、彼らはそれだけ手ごわい敵ということになるので、江戸の手塚からも、浪人長谷部平馬には特に注意するようにと、事情のあらましを告げて、くれぐれも念を押してきている。

だから、兵太夫がこんど勝又へ向かう時も、ともかく平馬だけは途中で始末してしまえ、口実は後でなんとでもつくといっておいたし、兵太夫もそのつもりだといって出かけているのだ。

そんなことを考えながら、治部が書院へきてみると、兵太夫は苦い顔をして一人でぽつねんとそこに座っていた。

「どうした、兵太夫」

「うむ、思いもかけない問題が突発してな」

「おかしなことをいうぞ。おぬしは敵を向こうにまわして戦をやっているんだ。思いがけないことが突発するのは戦の常で、だからこそ兵法の中に臨機応変という言葉があるんじゃないのか」

治部はわざとそんな冗談をいいながら、重苦しい兵太夫の顔を解きほぐしてやろうとする。

「そういわれると一言もないんだが、問題は当面の敵からではなく、三日月藩から横槍が入ってきたんだ」

「三日月藩からというと――」

「実は、彼らを津山領へ入れてからでは仕事がしにくいと思ったんで、昨夜、三日月の城下の彼らの宿舎林屋へひそかに火をかけて、彼らを外へ追い出したのだ」

「ふうむ」

まずいことをやったものだと、治部は内心さすがにおだやかでない。

「その結果、三人は今朝、土居の味方の網にかかったことになるんだが、重傷者が後へ残ることをついうっかりしていたんだ」

「つまり、その重傷者を三日月藩に収容されてしまったのか」

「うむ、三人だけな。三日月藩では、その三人をつり台にのせて、明日当家へ掛け合いにくるからという前触れが、夕刻土居の関所までとどいたというんだ」

「死骸はいくつぐらい残してきたんだ」

「当家の家来としては徒士組の者が三人、無論これは証拠になるようなものはなにも持っていない。それと、江戸から来た浪人組の渋川一心斎、山根、西野の三人だ」

「相当の犠牲者だな。死者はそれだけか」

「いや、今夜領内で堀内要蔵、江戸詰めの関谷十三郎、河田伝蔵、最上十内がやられている」

「すると、とりこは三人とも逃げたことになるのか」

「どうも赤面のほかはないが、茂太郎と平馬は、途中で人知れず関谷たちに切らせるために、日の暮れるのを待ってわざと逃がした。御名代と名乗る娘は、見張りに当て身をくれて、自分で逃げた。時刻がちょうどいっしょごろなので、要蔵に足軽組をつけてすぐに後を追わした。平馬だけはつかまえて帰ったが、御名代という娘が短筒を持っていたんで、その娘と茂太郎は逃げてしまった。これは今ごろ小森土佐の屋敷へ入っているはずだ」

「名代の娘ははじめから短筒を持っていたの

か」
「そうじゃないらしい、もう一人おなじ身なりをした百姓娘がいっしょだったというから、おそらく短筒はこれが持っていたんじゃないかと思う」
「その娘は名代の付け人と見ていいわけか」
「どうもそうらしい」
「敵には近習組が八人、浪人組が五人ついていたはずだが、これはどうした」
「一応、土居の関所でとめておいたが、仲間割れという口実を作るために、日が暮れてから解き放したはずだ」
「すると、これもおっつけ土佐の屋敷へ入るわけだな」
「申し訳ない」
兵太夫は心苦しそうに目を伏せてしまう。どうやら自決して責任をとるだけの覚悟はきめてきているようだ。

明日の勝負

「兵太夫、死ぬ時は三人いっしょだ」
治部はしばらく考えてからおだやかにいった。
「おそらく、江戸の勘解由もその覚悟で、いまごろこっちの吉左右を待っているだろう」
「そうか——」
兵太夫はなにかぽかんとしたような顔をあげる。
「我々は三佞臣、三人衆として、御老中にまで知られた悪名を持っているのだ。そのうちのだれが一人欠けても、三人衆はなり立たぬ。いいか、そのつもりで、明日もう一度彼らと御前で勝負をやってみよう」
「というと——」
「三日月藩のつり台が城下へ入るのは、たぶん明日の八ツ（二時）ごろだろう。これは丁重に迎えて、ひとまず別邸へ案内して休息してもら

うのだ。それと同時に、茂太郎と土佐を御前へ呼び出して、土井老中の書状を差しあげさせる。その席で茂太郎を詰問するのだ。かような大切な老中の書状を、なぜ前触れもなく微行で持参したのか。しかも、聞くところによれば長谷部平馬という浪人者を若殿亀之助さまの微行らしくこしらえ、松平福姫さまの御名代と称する怪しげな娘まで同道してきたそうで、そのために江戸から雇ってきた浪人どもにかえって疑いをおこさせ、反感を持たれて、二つに割れた浪人組の一方が三日月の城下の宿舎へ火をかけて争うに至った。こっちではそういうことのないように、と、徒士組の者をひそかに送って外から警固させておいたが、これまでに巻きぞえをくらって死者三名重傷者三名を出していると、責任を茂太郎に押しつけて詰め腹を切らせる。これなら三日月藩のほうでも納得するだろう。無論、林屋のほうは金で代償を支払うことにするのだ」
治部はすらすらといってのけるのである。
「なるほど——。それで御名代のほうは」
「それはな、茂太郎と土佐が登城した後へ、お加世の方さまの迎えの駕籠を出して、ひとまずわしのところへ軟禁する。たとえばそれが本当の福姫さまにもせよ、御名代にもせよ、そんな常識外れなまねをやっているんだから、こっちはあくまで偽者あつかいにして江戸へ送りかえす。これでいいだろう」
「なるほど。後は平馬だな」
「平馬のほうは勝又に間違いなく監禁してあるんだろうな」
「うむ、外蔵へ入れて厳重に見張りがつけてある」
「こいつがいちばんくせ者なんだ。茂太郎に詰め腹を切らせてから、これはひそかに一服盛るか、切ってしまうか、とにかく生かしておいてはいかん」
「それはわしも同感だ」

「とにかく、相手が茂太郎一人なら必ず詰め腹までこぎつけられる。ただ、土佐の屋敷に待機している近習どもを呼べということになると少しまずい」

「こうとわかっていれば、土居のほうへとめておくんだったな」

兵太夫はいまさらのようにしまったという顔をする。

「愚痴をいうな。その暇があったら、明日打つ手を考えたほうが早い」

「それはそうだ。――どうだろうな、いっそ御名代の駕籠につけて菩提寺へ送りこんでしまうのだ。ここで茂太郎はすでに詰め腹を切ったことにして、八人にも詰め腹を切らせてしまう」

「そうか――。いやだというようだったら、討っ手を向けて切ってしまうか。三日月の城下の焼きうちを聞いた血気の士が、激昂して八人を切ってしまった、申し訳はそれで立たないこともないな」

治部は不敵な目を兵太夫に向けながら、冷たい微笑をうかべる。

「治部、今夜のうちにわしのしておくことはなんだ。指図してくれ」

強情な兵太夫も、今夜はすっかり治部にかぶとをぬいだようである。

「そうよなあ。まず土居へ急使を走らせて、関の柵を取りこわさせるんだ。もう関所の必要はない」

「よし、そうさせよう」

「土居へはだれが行っているんだね」

「波川彦兵衛が行っている。足軽組がまだ十人残っているはずだ」

「それならちょうどいい。明日、三日月藩の使者が着いたら、ていねいに出迎えて、城内まで随行させるんだ。無論、使者の様子は早馬でこっちへ知らせること」

「さっそくそういってやろう。次にやっておくことは――」

「勝又には何人ぐらい残っているね」

「徒士組の小田作兵衛ほか二人、足軽組が十五人ほどいるはずだ」

「これは外蔵の平馬をしっかりと見張らせておくんだ。大将が留守だと、とかく士気がゆるむ。この外蔵がいちばん大切なんだ。食事も入れるには及ばぬといいつけておくがいい。どうせおそくとも明日の夜は始末してしまうやつなんだからな」

「わかった。さっそくそういってやる」

「しかし、平馬というやつは親玉にもせがれどのにもよく似ているそうだな」

「それは声までそっくりなんだ」

「他人の空似というやつなんだろう。まあ、そうしておけ」

治部の目はいよいよ冷たさを増してさえてくる。

「無論、そうしておくほかない。勘解由がいってきたとおり、これはいちばん恐ろしいやつだ。それになあ」

兵太夫は口をすべらせかけて、思わずいいしぶる。

「どうした、兵太夫」

「余計なことだが、わしの目には、御名代と名乗る百姓娘、どうも本物くさい。その福姫さまがどうしてあんな突飛なまねをしているのかちょいと疑問だったが、これは平馬に引っぱり出されたらしいとわかった」

「ふうむ。信じられない話だがなあ。しかし、本物がそんなまねをしているとすれば、無論もうただの仲じゃあるまい」

「たしかにただの仲じゃないようだ」

「同情は禁物だ。これも偽者にしておけ。――そうするほかはあるまい、兵太夫。大それた根性はおこすなよ。おぬしはいかもの食いの癖があるでな」

治部はにやりとわらった。

「まさか――。恐れ多すぎる」

「その言葉を信じておこう。最後にな、今夜中に決死の士を十五人ばかり屋敷へ集めておいてくれ。これが明日ものをいうんだ」
「心得た。いざとなればわしも明日は刀を抜く」
「その時がくれば、それは切り死にの時だ。いい忘れたが、土佐の屋敷へ見張りをつけて、人の出入りをよく見させておいてくれ」
「承知した。では、これで帰っていいな」
「うむ。明日が勝負だ。油断するなよ」
「わかっておる。じゃまをしたな」
　兵太夫はいくぶん生色を取りもどしたような顔をして、肩を怒らせながら帰っていった。
　治部はしばらく黙然とそこに座って、行燈の灯を見すえている。明日の吉凶を占うかのような鋭いまなざしだった。

大名気質

　翌三月四日――。
　三日月藩の掛け合いの使者黒川森右衛門が、副使山脇順之助と医師一人、供侍六人をしたがえ、小森家の重傷者三人をつり台にのせ、別に長持ち一棹をかつがせて、堂々と津山の城下へ到着したのは、予定のとおりやがて八ッ(二時)に近い時刻であった。
　土居でこの一行を迎えてずっと先導してきたのは波川彦兵衛で、治部と兵太夫は無論、波川の土居からの注進をうけ取っている。
「使者の一行は九人、それに長持ちまでかつがせているのは、小藩として少しおおげさのようだな」
　一切の責任は自分にあるだけに、兵太夫はまゆをひそめながら治部にいった。
「三日月藩は松平越前守、一万五千石の小大名なのである。なあに、小大名だからわざと金をかけてみえを張っているのだろう。長持ちの中はあの晩の証拠の品をいろいろ詰めているのかも知れんな」
　三日月藩のほうはどうせ金ですむとたかをく

くっている治部だった。
　使者の一行は、南の外門まで出迎えた番頭役青木惣左衛門の先導で侍屋敷の小路を通りぬけ、大手門前へ進んだ。
　そこには、数日前に出ていったきりいまだに家へもどらぬ徒士組の者の家族たちが、みんな心配して大勢つり台の着くのを待っている。つり台で送られてくる重傷者の氏名はすでにわかっているが、ここで待っていればなにかいまだに帰らぬ親、兄弟、夫の様子が聞けるだろうと心待ちにしている傷心の人たちばかりなのである。
　やがて、使者の一行が大手門前へあらわれると、それらの人々は騒然となり出して、警固のために出役した徒士組、足軽組の者たちに制止され、悲壮な気配が見る者の胸を打ってきた。
　門の前には家老西村又左衛門がそれぞれ掛の士十数人をしたがえて、三日月藩の使者を丁重に出迎え、その労を謝して、つり台の重傷者はここで受け取りたい、使者の一行はひとまず城の北にある御対面所衆楽園へ案内して休息を願い、改めて当方から重役どもが使者のおもむきをうけたまわりに参上したい旨を申し入れると、
「その儀しかと承知いたしました」
　もう年配の使者黒川森右衛門はものわかりよく納得して、つり台を津山家の士に引きわたしてくれた。
　重傷者の一人は左腕を切り落とされ、ほかの二人は股と腰に深手を負っているが、今のところ命にかかわるほどのことはあるまいということで、これらはただちにそれぞれの家へ送られ、目付役配下の者が事情聞き取りについていった。
　その受け渡しがすんだ後で、
「西村どの、御老職小森土佐どののお屋敷はどちらでしょうな」
　と、黒川が何気なく聞いた。

「土佐どのの屋敷はあれでござるが――」
西村がそこから見える左角の屋敷を指さしてみせると、
「ああ、あれでござるか。これは私用でござってな、重役どもから土佐どのに届け物をたのまれてまいったのです。ちょっと失礼」
黒川は長持ちのそばに立っている三十四、五とも見えるどこかあか抜けのした侍のそばへ行って、
「大草、土佐さまのお屋敷はあれだそうだ。ちょっとそれをお届けしてきてくれ」
と、気軽にいいつける。
「かしこまりました」
その侍は長持ちをかついでいる人足のほうへ目くばせして、西村のほうへ黙って会釈をすると、さっさと先に立って土佐の屋敷のほうへ引きかえしていく。
長持ちには上から唐草模様のついた上覆いがかけてあって、無論、中になにが入っているかわかるはずはない。その後から供侍が二人ついていくところを見ると、なにか相当大切なものが入っているようにも思える。
黒川ははじめから私用でたのまれた届け物だとことわっているので、いまさらあれはなんですと西村も聞くわけにはいかない。
そのうちに、長持ちは土佐の屋敷の門をあけさせて、中へ入っていった。
それと見た使者の黒川は、
「あの者たちは私用で同行したのですから、どうぞおかまいなく。それでは御対面所へ御案内いただきましょうか」
と、こっちをうながすのである。
結局、御対面所へ入ったのは、正使黒川森右衛門、副使山脇順之助、医師一人、供侍三人の六人と、これに従う小者たちということになる。
とにかく、使者出迎えの役目をすませて城へ帰った西村又左衛門から委細の報告をうけた治部と兵太夫は、

「一体、土佐の屋敷へ運びこんだその長持ちはなんだろう」
と、多少の疑問はあったが、いまはちゅうちょしている場合ではないので、ただちに土佐の屋敷へ使者を送り、
「江戸の中橋茂太郎同道の上、即刻登城いたすように――」
という主命を土佐に伝えさせた。
その一方、治部は主君佐渡守高久の前へ出て、はじめてこんどの騒動の顚末を主人の耳へ入れたのである。
「すると、治部、中橋茂右衛門は土井老中にすがって、国もとへは無断で亀之助と松平福姫との縁組みを取りきめ、せがれ茂太郎に御老中の書状を持参させて、わしの許しを請いに国もとへよこしたというのか」
佐渡守はなんとなくまゆをひそめている。
「はい、江戸の勘解由からの書状によりますと、そうのようでございます」
「茂右衛門はなぜさようなことを独断で取りきめたのであろうな」
「察するに、茂右衛門は私ども三人を三人衆と称して、ここ数年来、自分はのけ者にされていると一人できめ、来月の殿御出府には亀之助さまのお世つぎを廃し、国もとの千代五郎さまをお跡目になおされるのではないかと早合点をしたのでございましょう。そこで、私どもには内密に、松平福姫さまを若殿の夫人にむかえ、大御所のお名を借りて私どもを君側から遠ざける策に出たものと思われます」
「ふうむ、そちたち三人衆をなあ」
「しかし、とかくさような密事には手違いがおこりやすいものとみえまして、茂右衛門の計画では、はじめ亀之助さまに茂太郎をつけて微行で国入りを願うことにしていたようですが、出立まぎわに亀之助さまは急病を発せられたようでございまして、事をいそぐ茂右衛門は窮余の一策として、こんどは福姫さまのおそでにすが

り、姫君御名代の名を借りて腰元を一人名代に仕立て、なお亀之助さまによく似た浪人者を見つけてまいってこれを若殿御微行の変装と見せかけ、近習数人、浪人数人を警固の供につけて江戸を立つという強行手段を取ったようでございます」

「うむ、それで――」

「もともと私どもにははじめからなんの底意もございませんので、一体真意はどこにあるのか、真相はどうなのか、間違いの起こらないうちに早く話し合いをつけたがよかろうと兵太夫とも相談いたし、わざわざ兵太夫を領分境まで迎えに出しました。兵太夫はそこからまた念のために徒士組の者を三日月の城下まで様子を見にやりましたところ、その晩、茂太郎の一行は浪人組の中に、若殿ならびに福姫さま御名代に疑いを抱く者と、そうでない者との二派に仲間割れして争いを生じ、さきほども申し上げたように、三日月の城下の宿舎を焼くような不始末をおこしてしまったのでございます」

「話はよくわかったが、それでこの始末はどうつけようというのか」

生来剛腹であまり物事にこだわらぬ大名気質の佐渡守は、まゆこそひそめているようだが、騒動そのものには別に神経質な心配はしていないようである。

内々の不始末は内々で始末をつければよいぐらいにしか考えていないのだろう。

「ただいま、土佐どのと茂太郎にさっそく登城するようにと迎えを出してありますから、一応茂太郎の口からよく事情を聞きまして、さっそく善後策を講じ、改めて茂太郎を御前へつれてまいることにいたしたいと存じます」

「うむ、それでよい。なるべく仲間げんかはせぬことだ。他家へ聞こえてもおもしろくないでな」

この主君の寛容さに慣れきっている治部は、もうこれでこっちの勝ちだと、内心ひそかに得

得として御前をさがってきた。

が、兵太夫が待ちかねている御用部屋へ入ってくると、意外にも、すべての事情はまったく急変してしまっていたのである。

不吉な予感

「治部、いま呼びにやろうかと思っていたところだ」

兵太夫は目を血走らせて、蒼白な顔になっている。

「どうした、兵太夫」

「いま、松平福姫さまがな、土佐の案内で、おしのびのごきげんうかがいと称し、大手門へかかったそうだ」

「なにっ。――それはどういうわけだ」

さすがの治部も、一瞬わが耳を疑わずにはいられなかった。

「どうもな、さっきの長持ちがやっぱりくせ者だったようだ。姫君は土佐の家の乗り物を借りているそうだが、わざととびらをあけさせて、ちゃんと葵の紋散らしの打ち掛けを着ているそうだ。しかも、葵の金紋を打った長持ちを一棹かつがせている。駕籠わきについている男は、松平福姫さま付き用人大草源太郎と名乗ったそうで、先頭は土佐と茂太郎、これに江戸の近習組が八人、福姫さま付きの家来が四人、顔を見なければわからんが、あの田舎娘がどうやら福姫さまだったらしい」

「すると、その大草とかいう用人が、長持ちをかつがせて、あの翌日三日月の城下へ着いた。前夜のうわさを耳にして、三日月藩の重役をたずね、事情を訴えて今日の使者の一行に加わってきたということになるのか」

「たぶんそうだろう」

こうなっては、お加世の方の迎えの駕籠も、菩提寺の討っ手の計画も、すべてが水泡に帰してしまったことになる。

だいいち、福姫に主君佐渡守の前へ出られて

は、こっちのやったことが根こそぎばれてしまうだろうし、茂太郎の持っている土井老中の書状がこんどは大きくものをいってくる。
「兵太夫、いよいよ腹をきめる時がきたらしいな」
「おれは昨夜から腹はきまっている」
「そうか――。それならな、いちかばちか、玄関先で茂太郎を切ってしまえ」
「切るとどういうことになるかな」
「松平福姫さまを偽って連れ出した不遜の罪、許すべからずという趣意だ。無論、ついでに土佐も切る。突然の騒動だから、姫君は一応土佐の屋敷へ引きかえすほかはあるまい。姫君を殿にあわせさえしなければ、なんとかまたそこに手段が生じてくる」
治部にそういわれると、兵太夫はなにかまだ生きる道がありそうな気がしてくる。
「よし、やってみよう」
「上意討ちということにして、四、五人味方をこしらえるんだ」
「心得た」
津山城は平地へ山から石と土を運んできて高い丘を作り、その丘全体が城になっているのだ。だから、大手門を入ってから石段と坂道をいくつかあがって、表玄関前の庭へ出るのである。
福姫の行列の先頭は、兵太夫が聞いているとおり、もう六十を越した小森土佐と茂太郎で、次が福姫の駕籠である。駕籠わきについているのは、これも大手門から知らせてあるとおり大草源太郎だが、もう一人反対がわについている者の名を聞くのを、門番はうっかりしていたようだ。
それが、今朝、夜あけ前に勝又の大庄屋の外蔵からお粂に助け出された長谷部平馬で、平馬は今日昼まえに百姓に化けて、どろ大根を一束天秤棒に結わえつけたのをかついで、無事に土佐の屋敷へ入っていた。
いまはちゃんと裃をつけて、福姫の駕籠の左

わきについている。
福姫は平馬の裃姿ははじめてなので、大手門をくぐってからは人目のないのを幸い、さっきから平馬のほうばかり見とれている。
「平馬、立派ですよ」
しまいにはそんな言葉さえかけてくるのだ。
平馬はちらっと目でわらってみせただけで、返事はしなかった。
前には小森老人、右の駕籠わきには大草源太郎、うしろには小堀孫作の目がある。うっかり冗談口はきけないのだ。
いや、それより、今日はいよいよこんどの道中双六の上がりに近づこうとしている。上がりがすんだら、どこでどんな風に福姫をさらって逃げるか、これがなかなか難しい。
茂太郎の持っている老中の書状には、福姫と亀之助との縁組みがきめてあるのだから、まずこれをこわすのが一仕事なのだ。
その点、福姫は至極無造作で、
「だって、平馬、福のおなかの中にはもう平馬の赤ん坊がいるかも知れないのですもの、亀之助さまと縁組みなどできるはずはないではありませんか」
と、さっきも一人であっさりそうきめていた。
「しかし、それはまだ二人きりの秘密なんですからな、まさか殿さまの前でそんなこともいえないでしょう」
「いいえ、福ははっきりそういうつもりでいます。それでなければ、殿さまをだますことになって、余計苦しみますよ」
「お福さんにそれが本当にいえるかなあ」
「いえます。大丈夫ですのよ」
福姫は下腹のあたりへ手をやりながら、うれしそうにほおを赤らめていた。
が、いざとなればやっぱり女なのだから、いくらじゃじゃ姫でも、これだけはそうはいかないような気がする。
だいいち、へたをするとここまで心配をして

福姫の後を追ってきた大草源太郎の立場がなくなるんじゃないか、それも今となっては平馬の大きな悩みの種になっている。

　そんなことを考えて歩いているうちに、先頭は最後の石段をのぼりきって、行列はどうやら表玄関先の広い前庭へ出てきたようである。

　当然小森家の家来たちがそこへ出迎えているはずなのだが、そんな人影は少しも見えず、あたりはひっそりとしている。

　——はてな。

　平馬はふっと不吉な予感がした。

最後の血闘

「茂太郎、とまれ」

　先頭が表玄関へ五間ほどの距離へ迫った時、平馬がうしろからふいに低く叫んだ。

　出迎えのない非礼な玄関へ松平福姫の駕籠をつけてはならぬと思ったのと、出迎えのないのはなにかたくらみがあるからだと見て取ったからである。

　はたして、たすきはち巻きに身をかためた大兵の大坪兵太夫を先頭に、おなじ身ごしらえの若侍が三人、決死の血相すさまじく玄関の左右からばらばらっと式台へ飛びおりてきて、

「謀反人中橋茂太郎、覚悟」

　兵太夫は一喝（いっかつ）するなり抜刀して、茂太郎さえ謀反人にして切ってしまえば後はなんとかなるという気持ちなのだろう、わき目もふらず猛然と突進してきた。

「うぬっ」

　おそらく、もうほんの一間うっかり茂太郎が前へ出ていたら、とっさに抜きあわせている暇がなかったろう。幸い五間という距離があったのと、平馬の時ならぬ呼び声に思わずはっと玄関のほうへ目をみはった時だったから、必死に抜刀して、

「えいっ」

　兵太夫が笠（かさ）にかかって気魄（きはく）いっぱいに切りこんでくる烈剣を、

「とうっ」

　あやうく引っぱらいながら右に飛ぶ。

　戛然（かつぜん）と白刃が火花を散らして、勢いあまった茂太郎の足が不覚にもよろめくすき、

「おうっ」

　のがさじと兵太太が激しく二の太刀を振りかぶって追いうちをかけようとした。

　それと見た駕籠わきの平馬が、

「一同、姫君の駕籠を——」

　唖然（あぜん）としているうしろの供侍たちのほうへ声をかけておいて、

「兵太夫、乱心したか」

　叱咤（しった）しながら、すっと一刀をかまえて兵太夫の横合いへ出た。

「うぬっ、平馬」

　そのまま茂太郎のほうへ切りおろしていけば同時に自分も平馬に切られると見たから、兵太夫はとっさに一足さがって、平馬の青眼に備えるほかはない。

「えいっ」

「とうっ」

　兵太夫は相当な腕前の上に、無論この血闘に最後の生死をかけている。長びいては味方の不利だし、平馬を切ってしまえば後に怖い者のいないことははじめからよくわかっているから、今だと意を決したのだろう。

「おうっ」

　地をけって上段から決然と火のように切りこんできた。

「えいっ」

　冷静な平馬はそれを待っていたのだ。来るなと敵の目の色で直感して、兵太夫が仕掛けてくるより一瞬早く、疾風のもろ手突きを入れていく。

　兵太夫は振りおろす太刀であやうくそれを引っ払うよりほかはなく、白刃がふれあい鋭い音がした時には、双方さっと前へ飛びちがい、平

馬は玄関を背にしてくるりと立ちなおっていた。

　そのわきに茂太郎がすでに一刀を青眼につけて兵太夫のすきをうかがっているのだが、かなり腕がちがうようだから、どうにも手が出しきれない。

　一方では、小森土佐が三人の若侍を相手にしているが、こっちへは江戸の近習組が二人、老人の左右へ出てがっちりと剣陣を作っている。

　福姫は、血闘がはじまるとすぐ、自分から駕籠を出て大草源太郎のそばへ立っていた。

　そのうしろに近習組の六人が、いつでも切って出られるように身支度をして待機している。これは、戦列へ加わるより、最後まで福姫を守りぬくのが役目なのである。

　大草源太郎はさっきから玄関のほうばかり注意していた。城方の家来たちがこれ以上武装してくるようなら、一時城外へ引きあげなければならない。

「万一不祥の異変がおこっても、小森家の家来がみんな三人衆に加担しているとは思えない。むしろ、中から上の家来たちは中立という立場を取っている者のほうが多いはずだ」

　国もと組の忠義派は、土佐をはじめみんなそういう意見だったので、その点源太郎はさほど不安は持っていなかった。

「あっ、源太郎」

　絢爛(けんらん)たる葵(あおい)の紋散らしの打ち掛けのすそをそのまま地に敷いて勇ましく立っている福姫が、玄関のほうをふいに見て声をあげた。

　奥からまた、三、四人、身支度をした侍どもが走り出てきて、先頭の五十年配の立派な侍がじろりと戦場を見わたし、ついてきた侍どもになにか指図をするなり、きらりと抜刀した。

「おお、治部だ。鎌田だぞ」

　うしろの近習組がざわめき立った時、治部はゆうゆうと式台へおりて、いちばん手近なところに背を向けている平馬のほうへ進み出ようと

する。

　かっとなった福姫はもう我慢ができなかった。帯のうしろから短筒を取り出すなり、ばたばたと五、六歩前へ走り、

だあん。

ろくにねらいもせず、例によって無造作に一発ぶっ放したのである。

「う、うっ」

　まったく不意を食った治部は、たった一発で大きくのけぞり、いまにも玄関先へ走り出ようとしていた新手の侍どもはぎょっとそこへ立ちすくんでしまったようだ。

　銃声は兵太夫のすぐ背後でおこったのである。しかも、自分のところからまっすぐ前に見える治部が、たわいもなくのけぞっていく。

　あっと思わずそっちへ目が行ったとたん、

「えいっ」

　耳を打つ気合いもろとも、きらっと平馬の一刀が陽光にきらめいて、しまったと思った時には肩先へひやりとした不気味な衝撃を感じて、そのまま目の前が真っ暗になっていた。

「平馬——」

　福姫はもうなにも考えなかったし、なにも目に入らなかった。ただなつかしい平馬の胸の中へ、夢中になってすがりついていく。

「姫君、駕籠(かご)へ早く」

　片手でしっかりとその肩を抱いた平馬が素早く耳もとへささやく。

「どうしてです、平馬」

「いまのうちに逃げるのです」

「逃げる——」

　福姫はその意味がちょっとわからなかった。きょとんと男の顔を見あげていると、

「大草うじ、駕籠をこれへ——。姫君には一応土佐の屋敷へ引きあげられます」

と、平馬は落ち着いて源太郎にいった。

　——ああ、そうなのか。

　福姫はやっと納得がいったので、おとなしく

すぐに駕籠に乗った。
この時の平馬の指図はてきぱきとして、まことに鮮やかなものであった。
玄関先では激怒した小森土佐が城方の侍どもをしかりつけ、
「又左衛門を呼べ。西村をこれへと申せ。ここをどこだと心得ているのか、不埒者め。御城内のしかも表玄関先だぞ。かように血でけがして、御主君になんと申し訳をいたす気なのか」
と、大声にわめき立てている。
三人衆一味の者たちも、肝心の治部と兵太夫があっけなく死骸になってしまったのだから、今はどうしようもない。おたがいに口をぬぐって、その場で黙って忠義派へ変節してしまうのが、いちばん利口なやり方ということになるのである。
その間に平馬は、中橋茂太郎と大草源太郎、江戸の近習組のうちから四人、これに葵の紋のついた長持ち、この中には城主、ならびに千代五郎、お加世の方への福姫からの土産物がそれぞれおさめてあるのだ。これらを後へ残すことにして、
「血でけがれた玄関から松平福姫さまを御案内するわけにはいかぬ。姫君は一応土佐の屋敷へ引きあげることにするから」
といいおいて、姫君の駕籠を後の者で守って、さっさと大手門の外の土佐の屋敷へ引きかえしてしまったのである。

二人で行く道

城主佐渡守高久ははじめうろたえた取り次ぎの者から江戸の中橋茂太郎謀反と聞いて憤然と色をなしたが、これは取り次ぎがうろたえたのではなく、治部が打って出る時わざと取り次ぎにそういわせたので、まもなく国家老西村又左衛門が駆けつけて、事の真相がわかると、ただちに書院へ出座して、一門の老臣土佐、中橋茂太郎、ならびに福姫づきの用人大草源太郎と対

面して、茂太郎からこんどの騒動の顚末の一通りを聞きとることにした。
正直にいえば、佐渡守は側用人鎌田治部を信用しすぎていたので、亀之助縁組みのことは今日はじめて耳にしたのである。
しかも、国もとの千代五郎を跡目にと思ったことは、佐渡守にも全然なかったとはいえない。だから、江戸の勘解由、国もとの兵太夫、側用人治部のいわゆる三人衆が、跡目は千代五郎にと希望したことは、人それぞれの気持ちで必ずしも悪人呼ばわりはできない。
が、それを三人で相談して非常手段を行使したとなると、これは明らかに専横不法の罪はまぬがれないことになる。
「よく相わかった。後の裁き一切は土佐にまかせよう。三日月藩へもよくわびておくがよい。ただし、これはほんの内輪のことではあり、治部も兵太夫もすでに落命しているのだ、他の者はあまりあばき立てず、なるべく寛大の処置が望ましいな」
佐渡守はそう希望をのべ、
「確かに承知いたしました」
土佐がこれをうけて、一応この事件は落着の形がついた。
そこで、改めて城内から使者を送って、福姫ならびに長谷部平馬に対面ということになったのだが、その使者がまもなく引きかえしてきて、
「福姫さまにも平馬どのにも、すでに当城下をお立ちのきあそばされたようでございます」
と、意外な返事を持ってきたのである。
「それはまたどういう子細か」
佐渡守は思わず気色ばんだようである。
「その儀、手前から申し上げてみたいと存じます」
大草源太郎がおだやかにひざを進めた。
「そもそも、亀之助さまと福姫さまの縁組みが土井御老中のおすすめで取りあげられ、亀之助さまお遠乗りのついでに向島の屋敷へお立ち寄

りの話がきまり、下世話に申せばお見合いの日に当家へまいられましたのは、亀之助さま御発病のため、身がわりの平馬どのであったようでございます。先ほど茂太郎どのからお話がありましたから、平馬どのの御身分は佐渡守さまにもほぼおわかりのことかと存じますが、その節姫君には多少疑問を持たれて、築山にてしばらく身がわりの亀之助さまとお二人きりにてお話がありました。このお身がわりの件は、手前どもは後になってわかったのでございますが、姫君はその時すでに平馬どのから真相を打ちあけられ、なんと申しましょうか、世間に向島のじゃじゃ姫さまといううわさがあるほど闊達な御気性ですから、本家のために命をかけるという平馬どのと、意気がぴったり投合したのでございましょう」

　源太郎の顔が思わず微笑しているので、黙って聞いている佐渡守の顔からも堅い表情はいつかすっかり消えている。

「それとは知らずに、私どもは姫君が突然伊勢まいりを仰せ出されましたので、これは亀之助さまとなにかお話があったのだと存じ、土井さまのお力を借りて江戸を立ってまいったのでございまして、道中にてこれはしまったと気がつきました時はすでに手おくれでございました。お守り役塚越助左衛門さまも、姫君さまがその気ならいたし方あるまい、我らが土井さまにおしかりをうければそれですむことだと、もう一切あきらめております。かようなわけで、お二方ともその目的をほとんど達成いたしました今となって、当地にぐずぐずしていては面倒なことになる、またその必要もなくなったとお考えになって、思いつかれたことはさっさと実行したい、あまり物事にくよくよされないお方のことでございますから、手っ取り早く御当地を逃げ出されたものと思われます」

　当の責任者の源太郎が腹をすえて少しもあわてていないのだから、

「それでは、二人はほっておいたほうがよいのか」

「それでよろしいかと存じます」

と、それでこっちの話もついてしまった。

そのころ——。

　平馬は百姓娘に早変わりをしたお福さんといっしょに小堀孫作一人を供につれて、のんびりと勝又のほうへ歩いていた。

「平馬、これからどうするのです。このまま二人でどこかへ逃げてしまうのですか」

　お福さんがうれしそうな顔をして聞く。

「さあ、これからどうすればよいかは、そのうちに源太郎さんが知らせにきてくれるでしょう。こっちはもう二人は離れませんよと意思表示だけはこうしてちゃんとしているんだから」

「でも、源太郎がどうしても福だけは向島へつれて帰るといったらどうします」

「それは少し手おくれなんです。お福さんのおなかの中には、もう平馬の赤ん坊がいるかも知れないんだからな」

「まあ、そんな大きな声で——。孫作に聞こえるではありませんか」

　そのくせ、お福さんはさっきから平気で平馬の腕に腕をからんで歩いているのだ。

「ああ、そうか——。うしろに小堀さんがいたな。けれどねえ、お福さん、いくら声だけ小さくしても、おなかのほうはだんだん大きくなるばかりなんだからね」

「いやっ、そんなことばかり、恥ずかしい。——お粂たちはどうしましたかしら」

「お粂と右助は、津山の領内は遠慮して、上月あたりで待ちあわせることになっています。明日はたぶん会えるでしょう」

「じゃ、江戸までいっしょに帰れますね」

「そうですなあ。ことによると、桑名か宮に助左老人がかんかんに怒って待ちかまえているんじゃないかな」

「かまいません。駕籠にゆられるのはおなかに

悪いからといって、福は江戸までみんなといっしょに歩きます」
　無邪気なお福さんはたのしそうにそっと帯の下を手でおさえてみている。
「ごめんくださいまし」
　旅支度の若い中間が一人、うしろから声をかけて、まるで走るようにわきを通りぬけていった。
「平馬、左助のようですね」
　目ざとくお福さんはそう見て取っていたが、その左助が江戸へ着いた日がお粂の実父手塚勘解由の自決の日だとまでは気がつかなかったにちがいない。
　やがて夕方に近いのどかな春の青麦畑道で、お粂は明日どこでこの左助を見送ることになるだろうと、平馬はなにか心痛むものがある。

●わが師を語る

小さな自戒

中村豊秀

　昭和五十三年春三月十六日午後三時十一分、東京板橋の日大板橋病院において、恩師山手樹一郎先生は七十九年の天寿を全うされた。
　これよりさき三月十一日の夜、私は紀州から上京して、先生をお見舞いした。同人誌「新樹」の仲間から、「先生の病状篤し」という電話連絡を受けての上京だった。
　先生はすでに口をきく力を失われていたが、意識は確かで、「中村です」という私のことばにうなずかれていた。私は病室には一時間ばかりいたのだが、その間三回ほど、半分以上はご自分の力で寝返りも打たれていた。
　この夜、東京は春雨に煙っていて、病室の窓から俯瞰する街々には、赤い灯青い灯がうるんでいた。
　お別れするときに、私は先生の両の手を握ってきた。先生は酒席などで、よく私たち仲間の手に触れられることがあった。
「こうしてると、若いみんなの精気が吸収できるんだよ」
　真顔でそんなことをいわれて、それを信じていられるようであった。しかし、病室での先生の手には、まったく握力はなかった。肌のぬくもりは普通で、この感触をしっかり記憶するんだぞと、私は自分にいいきかせていた。
　手が触れているあいだ、先生はじっと私を見ておられた、時間にして十五秒くらいだったろうか。「もういちどお元気に……」私は胸ふさがるむなしさをおぼえながら、去りがたく病室を去ってきたのだが、それが最後のお別れになってしまった。

——思えば、万全の師であった。師事して二十余年、いつのときも私は「山手樹一郎門下です」ということばが誇らかにいえた。そして、そのことは不断に心の支えになっていた。いつの日かりっぱな作品を書いて、先生のおほめのことばをいただきたいと、ひそかな野心を抱きつづけてもいた。だが、私にかぎっていえば不肖の弟子だった。

先生のお人柄などについては、この〝わが師を語る〟シリーズのなかで、仲間たちがさまざまの角度から書いてきているが、なお加えることは多い。私もまた驥尾に付して、次のことを記してみたいと思う。

先生の口からこういうことばを何度かきいた。「人に金を貸したりするんじゃないよ。でも、もし貸してしまったら、返してもらおうと思ってはいけないよ」また、「自分の頭の蠅が追えない人間はだめな人間だよ」ともいわれた。

当然のこと、といってしまえばそれまでのことだが、ききながしてしまうにはあまりに重たい意味が含まれている——と、私は解した。そのことを説明する紙数はないが、とにかく私は先生のおことばを守るべく努めてきた。少なくともこの二十余年、他人に金を貸してくれと頼んだことはない。苦しいときは何度かあった。これからもあるかもしれないけれど、あとうかぎり自分の頭の蠅は自分で追ってゆきたいと思う。

苦しいといえば、私たち夫婦は結婚式がすんだその日、そろって交通事故に遭った。仲人役を引き受けてくださった先生のお宅からの帰路だった。妻は頭蓋底骨折と鎖骨骨折の重傷で意識もなく、私も顔面数ヵ所に受傷していた。そのとき、中野の病院まで奥さまのお見舞いをいただいたが、それから二十余年を経たいまも、奥さまを通じて伝えられた先生のおことばは昨日のことのようにおぼえている。「お金はまに合

うの？　こんなときなんだもの、恥ずかしいことじゃないのよ。足らなかったら、遠慮なくいいなさい。主人も心配しているのよ」

私はありがたくて涙がこぼれた。むろん、貧しくて、余分の金などなかった。しかし、ありがたいおことばはそのままそっとしておきたかった。それに甘えてゆくことはイージーに過ぎよう。自らを律するに厳しすぎるということはない——

入院一カ月におよんだが、とにかくあまり他人に迷惑をかけることもなく退院できた。

こういうことが私の人生のうえに何ほどのプラスになるか、あるいはなったか、それは知らない。例えば、借金も財産のうちさ、などといっている人にとっては、私の生きざまなど無価値以下のものかもしれないし、その狭量を嗤われるかもしれないけれど、私には私の生きかたがあっていいのだから、それはそれでいいと思う。

それにしても、大きな負債を負ってしまったものだ。小説を書くということについて、人間が生きてゆくということについて、先生から教えられてきたことは数かぎりなかった。不断に心の支えとなって存在されたことの貴重さは、計るべくもない力だった。そうして、そういうご恩に対して報ずべき人はいまや世に亡い——

試みに私は「新樹」の仲間たちの年齢のことを考えてみた。みんなおっつかっつの年齢だが、先生までの時間を生きるとしたら、平均してまだ二十五年の春秋が残されている。自慰からいうのではなくて、充分になすある時間だと思う。奇しくも先生から教えをうけた時間とほぼ合致する。時間はまだある。せめて、一編でも二編でも、全力を傾けた作品を生み出したい。それがご恩報じの道だし、もの書きとして生きてきた証ともなるだろう。

——謹んで、先生のご冥福をお祈りしたい。

合掌

山手樹一郎長編時代小説全集57

江戸へ百七十里

発行――一九七八年 六 月二五日初版第一刷
　　　一九七九年一一月二五日初版第二刷
著者――山手樹一郎©
装画――国貞（静嘉堂文庫提供）
装丁――玉井ヒロテル
発行者――和田欣之介
発行所――株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三―四―一六
〒一〇三　☎東京二七一―〇〇五一　振替東京〇―一六一七
印刷製本――城北印刷製本センター

樹

◆――定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします